

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 言語生活の実態：白河市および附近の農村における

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001347">https://doi.org/10.15084/00001347</a>

2  
1  
of  
9

— 白河市および附近の農村における —

1951

国立国語研究所報告 2

# 言語生活の実態

— 白河市および附近の農村における —

株式会社 秀英出版

1 9 5 1

## は し が き

われわれが営んでいる社会生活において、言語は、どのような働きをしているか。また、その社会生活を合理化し、能率化するためには、言語上、どのような課題があるか、このような課題に答える方法の一つとして、研究所では、全国から、いくつかの地点を選び、その地点における言語生活のありのままの姿を捕えようとしている。

その最初の試みとして、白河市（福島県）とその附近の農村を取り上げ、文部省の科学試験研究費補助金の交付を受け、統計数理研究所および民族学研究所と共同の調査を計画し、1949年に、3回にわたって現地調査を実施し、その成果を整理集計したのが、この報告である。

この調査は、言語社会における言語の外的条件をも明かにしようとしたので、調査の計画、実施から、整理集計に及ぶまで、一貫して統計数理の考えを用い、確実で、しかも詳細な科学的知識を求めようとした。統計数理学的方法は、われわれの学問分野では、まだじゅうぶん親しまれているとは言えないので、特に、巻末に「この報告のあらまし」を付け加えることにした。

この種の言語調査は、わが国としては、まだ他に着手せられたことを聞かない。研究所では、前年小規模ではあったが、第1研究室の手で、八丈島における言語調査（その結果は「八丈島の言語調査」と題してすでに刊行）を行っているので、その経験を生かし、特別に編成した調査班によつて調査を行つた。もちろん、この調査で、なお、残された問題も少なくないが、昭和25年度には鶴岡市（山形県）および飯田市（長野県）を中心とした地点において、こ



れと一連の調査を行つたし、今後も、要地を選んでこの種の調査を行つて、わが国における言語生活の実態を明らかにし、これが改善の方法を導き出そうとしている。

この調査は、前にも記したとおり、統計数理研究所および民俗学研究所と共同で行つたものであるが、本研究所としても、ほとんど全員をあげてこの仕事に従つた。特に本研究所第1部長岩淵悦太郎は調査班長として調査の企画運営に当り、本研究所員柴田武と統計数理研究所員林知己夫氏は、計画の立案・調査の実施・結果の分析、報告書の作成に終始その中心となつて力を尽した。

最後に、非常な好意をもって協力して下さった白河市および金山・五箇の両村の現地の方々に対して、心から感謝の意を表わしたい。いちいち氏名をあげないが、つつしんでお礼を申し上げる。

1951 年 4 月 18 日

国立国語研究所長      西 尾   実

## 凡 例

1, 巻末の「この報告のあらまし」は、本報告書全体を簡単に要約したものである。

2, この報告書を読むにさいして、まず「この報告のあらまし」から読み始め、続いて第1部または第2部へ進むのも一つの行き方であろう。

3, 数式はできるだけ脚注へ回して、本文が読みにくならないように心がけた。

4, この報告書の表記は、できるだけ「表記の基準」(文部省調査普及局国語課, 昭和25年9月刊)によるようにした。

5, 調査に従事した人, 報告書の作成に従事した人は次のとおりである。

企画・運営 岩淵悦太郎, 斎藤正

計画の立案 柴田武, 林知己夫(統計数理研究所)

計画の審議 西尾実, 岩淵悦太郎, 浅井恵倫, 草島時介, 興水実, 平井昌夫, 中村通夫, 高橋一夫, 林大, 柴田武; 林知己夫; 大間知篤三(民俗学研究所), 大藤時彦(同)

調査の実施 岩淵悦太郎, 柴田武, 北村甫, 宇野義方, 島崎稔, 山之内るり; 中村通夫, 林大, 上甲幹一, 森岡健二, 永野賢, 飯豊毅一, 斎賀秀夫; 青木千代吉(長野県派遣内地留学教官); 林知己夫, 石田正次(統計数理研究所), 丸山文行(同), 西平重喜(同); 大藤時彦, 大間知篤三

集計・分析 柴田武〔分析の計画・運営, 共通語の調査, 言語的背景の調査〕, 北村甫〔疎開児童・生徒の言語の調査〕, 島崎稔〔おもに社会的背景の調査〕, 宇野義方〔24時間調査〕, 山之内るり〔同〕; 林知己夫〔共通語の調査〕, 石田正次〔おもに共通語の調査〕; 高田正治, 浜田一己, 長橋紀江, 山崎英子, 岡部英子, 林公子, 田熊雅子, 村岡充子〔以上, 集計・整理〕

報告書の作成 柴田武, 林知己夫〔以上執筆〕, 大石初太郎, 野元菊雄, 友部浩〔以上校正〕, 関善二〔装訂〕

# 目 次

はしがき .....	i
凡 例 .....	iii
前 書 き .....	1
第1部 地域社会における方言と共通語 .....	5
1 共通語の問題 .....	6
2 調査の計画 .....	9
2.1 あらまし .....	9
2.2 調査票の作成 .....	15
2.3 被調査者の選定 .....	28
3 白河市および附近の農村の社会的・言語的背景 .....	49
3.1 社会的背景 .....	49
3.2 言語的背景 .....	82
4 共通語を話す度合を決定する要因 .....	91
4.1 共通語を話す度合を表わす指標 .....	91
4.2 「音韻の点数」から見た共通語を話す度合を決定する要因 .....	111
4.3 「文法の点数」から見た共通語を話す度合を決定する要因 .....	167
4.4 主観的判定から見た共通語を話す度合を決定する要因 .....	182
4.5 共通語を話す度合を決定する要因としての言語能力 .....	193
4.6 新語の理解度を決定する要因 .....	205
4.7 共通語を話す度合と一日の言語生活における実際の共通語行動 .....	223
4.8 アクセントの区別を保持する要因 .....	234
4.9 白河市および附近の農村の共通語を話す度合の相違 .....	240
4.10 結 論 .....	247
5 共通語を話す度合の高まる過程と共通語を話すようになる過程 .....	253
5.1 共通語を話す度合の高まるのはどのような場面からか .....	253
5.2 共通語を話す度合の高まるのはどのような集団からか .....	261

5.3	共通語を話すようになるのはどのような言語構造的特徴からか	262
5.4	共通語を話すようになる過程という点から見た言語構造的特徴 相互の関係	269
5.5	新語の普及度	272
6	結 び	274
第2部 個人の一日の言語生活		279
1	「24時間調査」の課題と方法	280
1.1	「24時間調査」とは何か	280
1.2	調査の方法	280
1.3	調査の経過	282
1.4	分析の課題	283
2	一日じゅうの言語量	284
2.1	話題の数、文の数、文節の数	284
2.2	言語量の時刻別分布	285
2.3	一日の異語数	235
3	よく使われることば	289
3.1	語と文節との使用度数	289
3.2	よく使われる語の個人的相違	299
4	一日のうちにどのくらい読み・書きするか	302
5	話しことばの文の長さ	305
6	よく使われる語の使用度数順一覧表	307
この報告のあらまし		333
索 引		351

# 前 書 き

国立国語研究所は統計数理研究所および民俗学研究所と共同で、文部省科学試験研究費補助金の交附を受けて、昭和24年（1949）の秋から冬にかけて、福島県白河市を中心とする言語生活の実態調査を実施した。

この調査の目的は、国民の社会生活の合理化、能率化をはばむ言語生活上の諸条件を明らかにすることである。

そこで、国民の言語生活の実態を知ること为目标として、そのために特定の地点を選び、そこに行われる言語生活全体の様子を、社会環境との関連において捕えることにした。

特定地点として選んだのは、福島県白河市とその附近の金山村、五箇村（いずれも西白河郡）である。白河市を選んだ理由は、第1に、わが国に最も普通に見られる、農村地帯の—中心をなす小都市であること、第2に、人口があまり多くも少なくもない適当な大きさであること、第3に、そこの方言が調査員にとって了解できないほど変<sup>カ</sup>ってないが、共通語とは容易に区別しうる言語であること、および、第4に、東京からの往復が比較的便利で、しかも、現地の特別の協力が期待されることなどである。

附近の村として金山村、五箇村を選んだのは次の理由による。あらかじめ白河市附近の八つの村を下検分したが、そのなかで、この二つの村は方言的特徴の濃さについて分けられたいいくつかの段階のうちの二つの段階の代表と認められることと、特に金山村がコミュニケーションの点で内部の部落間に差があることなどである。

調査は、国立国語研究所が中心となり、統計数理研究所第3部および民俗学研究所の共同のもとに、3研究所の関係研究員から成る調査委員会では計画を審議し、3研究所の職員をもって構成された調査班によって実施し、さらに、調査班のうちの特定の人が集計、整理および分析に当った。調査班に属する者約30人、現地で協力した者、約15人である。

昭和24年（1949）の結果は、昭和25年（1950）以後別の地点で同じ項目について同じ方法で調査される結果と比較されるであろう。また、白河市

において数年後同じ項目について同じ方法で調査されることによって、言語変化の実状が明らかにされるであろう。

調査は次の3回に分けて実施した。

第1回準備調査(下調査) 昭和24年10月3日—11日

第2回準備調査(前調査) 昭和24年11月4日—10日

本調査 昭和24年12月2日—11日

調査は便宜上、次の六つの仕事に分けて実施した。

#### (1) 共通語を話す度合と過程との調査

地域社会において共通語はどの程度用いられているか、共通語を話す度合を決定する要因は何か、および共通語を話す度合の高まるのは、どういう場面からか、どういう集団からか、また、共通語を話すようになるのはどういう言語構造的特徴からかというのがこの調査の課題である。被調査者は白河市全体(大沼を除いた約30,000人)から重ね抜き法(double sampling)によって得た15歳から69歳までの男女500人で、これらを戸別訪問し、面接調査した。調査項目は、個人の文化的(アメリカの文化人類学における culturalの意味で、日本語の「文化的」、「社会的」よりずっと広い意味に用いられる)条件、社会的態度、ほかの土地への行き来、言語構造上の特徴について共通語で反応する度合、面接の際の共通語を話す度合、新語の理解、共通語に対する意見および態度、場面による共通語と方言との使い分けなどである。

#### (2) 言語能力と言語生活との調査

読み、書き、聞く能力が、共通語を話す度合を決定する要因として、どれだけの重みを持っているか、新聞、ラジオ、手紙、電報、電話、ローマ字、雑誌、映画および告示板を生活上どれだけ利用しているか、その利用度と能力との関係はどうかなどを調べるのが課題である。上の(1)の調査における500人の被調査者からさらにランダムに抜いた100人について、集合調査によって調べた。この調査は白河市についてだけ行った。

#### (3) 言語生活の24時間調査

この調査では、一定の場面における個人の共通語行動を調べる（1）の調査を調整するために、その個人が一日（24時間）にどのような言語行動をするかを調べるのをおもな目的とし、あわせて、談話生活の諸問題を解決する資料を得ることを目指した。準備調査において、生徒・学生約250人に、その両親などの一日の言語生活を記録させた。本調査においては、白河市の農民、商家の主婦、美容院の店主および市役所吏員の4人について、一日じゅうつききりで、言語行動のいっさいを記録した。

#### （4）疎開児童・生徒の言語の調査

京浜地方から直接白河市に疎開して、そのまま住みついた約500人の児童・生徒（小学校1年生から高等学校3年生まで）について、かれらが京浜地方の言語をどのように保存し、また白河市の方言にどのように変りつつあるかを面接によって調べた。

#### （5）言語的背景の調査

おもに（1）の調査の調査票を作成するために、白河市および附近の八つの村の方言を、音韻、文法および語いの面から調べた。なお、白河市の方言の分布上の位置を明らかにするために、白河市を中心とする交通路線上の主要な42地点に、国立国語研究所昭和24年度地方調査員をにおいて、一定の調査語について調査することを委託した。

#### （6）社会的背景の調査

白河市および二つの村の背景を知るために、市役所、役場、地方裁判所、学校などに保存されている文書によって地理的・歴史的環境を調べ、旧家、古老、商店主からの聞き取りによって地域社会の構造を明らかにし、ついで、白河市と附近の村とのコミュニケーションおよび各地点の経済的・政治的・宗教的・慣習的機能を調べた。

さて、以上のように実施した調査の結果を、「地域社会における方言と共通語」（第1部）、「個人の一日の言語生活」（第2部）という二つの題目のもとにまとめることとする。



## 第1部 地域社会における方言と共通語

# 1 共通語の問題

国民が正常な社会生活を国民的な立場に立って営むのには、一応全国どこでも通ずるようなことばが必要である。そういうことばがなければ、初対面でどの地方の人とでも互に意志を通じ合うということとはできないはずである。

現在の日本の地域社会 (community) \*を見ると、このような日本全国どこでも通ずるようなことばが、全国どこでも通ずるとは言えない地域的と言って良いことばと一つの地域社会に同時に行われている。

全国どこでも通ずるようなことばは、東京語に近いが、しかし、東京で一般に使われていることばと、必ずしも一致はしない。ある地域社会に生れ、そこに育った人でも、職業の関係とか、東京とのたびたびの行き来とかのために、地域的とは言えないことばを話すことができる。そういう人のことばは、東京で一般に使われていることばとまったく同じではないにしても、しかし、どの地方の出身かわからないようなことばである場合がある。

いま、われわれはこのようなことばを「全国共通語」、略して「共通語」\*\*と呼び、地域社会においてこれと対立して行われていることばを「方言」と呼ぶことにする。つまり、地域社会には共通語と方言との2種類のこと

---

\*特殊の目的を達するために構成された社会、すなわち「特殊社会」(association) にも2種類のことばが行われていると考えることができる。たとえば、かつての軍隊には、軍隊以外には通じないようなことばと、軍隊以外にも通ずるようなことばとがあった。後者も一種の「共通語」であるが、ここでは、地域的に全国に通ずるようなことばだけを「共通語」と呼ぶことにする。

\*\*ただ「共通語」と言う場合には、二つ以上の言語社会に共通のことばと考えることができる。したがって、共通語には全国どこでも通ずるようなことばもあり、また、ある地域にしか通じないようなことばもある。関西地方の一種の共通語や北海道の特殊な共通語などがその例である。

また、二つ以上の国ないし民族に共通のことばも共通語の一つである。マレイ語や人工語エスペラントなどがその例である。

ばが行われているということになる\*。

地域社会に行われる2種類のことは、どちらも体系としてのことば(ラング)として、われわれの科学的研究のために仮定したものである。それは「実在」するものではなく、研究のために有効な仮設的概念として立てられたものである。

さて、においをかぐ感覚器官を「ハナ」と言うならば、これは全国どこでも通ずるようなことば(語)である。もし、ある地域社会の成員全部が、においをかぐ感覚器官を「ハナ」とだけしか言わないならば、「ハナ」は2種類のどちらのことば(ラング)にも属する。言ってみれば、「ハナ」は共通語の形でもあり、方言の形でもある\*\*。

しかし、同じ地域社会全体のなかで同じ感覚器官を言うのに、「ハナド」ということば(語)がある場合には、これは全国どこでも通ずるようなことば(語)ではない。したがって、一方を共通語の形と言い、一方を方言の形とすることができる。

ところで、これを地域社会の成員について見ると、いま一定の場面について考えるとして、まったく共通語の形ばかりで話す人と、まったく方言の形ばかりで話す人と、両方をまぜて話す人とがある。

さて、共通語はいわゆる「標準語」とどう違うか。標準語についてはいろいろな考え方がある。東京で一般に使われていることば、すなわち標準語と考える人もある。しかし、われわれは、ここでは、標準語はなんらかの方法で国として制定された規範的な言語と考えることにしたい。こうい

---

\* したがって、ある地域社会全体のことばを「方言」と呼ぶことはしない。ある地域社会全体のことばは、「東京語」、「白河語」、あるいは「東京の言語(ことば)」、「白河の言語(ことば)」のように呼ぶことにする。もちろん、われわれの研究の態度は、地域社会全体の言語の状態を調べようとしているのであって、特異な語についてだけ調べようとしているのではない。

\*\* したがって、われわれは、「ハナ」はどんな地域社会でも「方言」ではないと考える立場には立っていない。

う意味の標準語は日本ではまだ存在しない。したがって、「東京の山の手の教養層のことば」も共通語の一つであり、ラジオのアナウンサーのことばも洗練された共通語の一つである。

いま、一つの例について考えてみよう。無声の子音にはさまれる狭い母音が有聲であるか無声化しているかと言う場合、標準語ならそのどちらを規範として採るかということが問題になりうる。たとえば、kita (北) とか kutʃi (口) とか kuse (癖) とかいう語の第1音節の母音について有聲の [i], [u] を標準語音とするか、無声の [i̥], [u̥] を標準語音とするかが問題になりうる。しかし、共通語としては、kita でも k̥ita でも, kutʃi でも k̥utʃi でも, また, kuse でも k̥use でもさしつかえないと考えることができる。言ってみれば、共通語は標準語に対してかなり幅の広いことばである。

さて、少なくとも必要な場面において共通語を話せるような人がひとりでもふえることが、社会的にさしあたって必要なことである。少なくとも必要な場面において共通語を話せるような人をひとりでもふやそうという努力（いわゆる「標準語教育」など）は明治以来尽されているが、現状ではまだまだこの努力を続けなければならない。

ところで、この努力を妨げるものは個人の文化的 (cultural) 条件ではないかと思われる。では、何がいちばん妨げとなっているか。もし、妨げとなっている文化的条件が明らかになれば、われわれはこの条件に対して対症療法的に社会政策を施すことができるであろう。

さらに、共通語を話すようになるのに、どういう面から共通語が話されるようになり、また、どういう面が強く抵抗を受けるかということも問題になりうる。これが明らかになれば、国語教育、特に「標準語教育」に対する重要な指針が得られるであろう。

## 2. 調査の計画

### 2.1 あらまし

共通語の問題としてわれわれが取り上げたのは、

- 1) 共通語を話せる人をふやすためにはいかなる文化的条件をそなえさせたら良いか
- 2) 共通語を話すようになるのに、どういう面から共通語が話されるようになり、また、どういう面が強く抵抗を受けるか

の二つである(1. 参照)。われわれは、この問題を

- 1) 共通語を話す度合を決定する要因
- 2) 共通語を話す度合の高まる過程と共通語を話すようになる過程

という形で捕えることにした。

共通語を話す度合は、いろいろな文化的要因がそれぞれその重み(weight)をもって決定していると考えられるが、そのうち、最も重みのある、つまり、きいている要因は何であろうか。これがわかれば、この要因こそ、共通語を話せる人をふやすために備えさせるべき文化的条件である。たとえば、ラジオを聞いているということが最もきいている要因であるならば、ラジオを聞いていないということが、共通語を話せないようにしている条件となる。

では、共通語を話す度合というものをどういうふうにして測ったら良いであろうか。まず考えに浮ぶのは、一個人の共通語を話す度合は、その個人の総語数(different words)あるいは使用総語数(running words)に対する共通語の形の語の数の割合をもって表わすということである。しかし、これは一個人についてもきわめて困難な仕事であり、まして多数の人について調べることは不可能に近い。もっと簡単に共通語を話す度合を測る方法はないであろうか。

それには、第1に、場面(話し相手との関係、時間、話の内容など)を一定にして、その場面では、もっぱら共通語を使うか、あるいは、もっぱ

ら方言を使うか、さらに両方をまぜて使うかを測定することである。

第2に、方言の形と共通語の形と異なるような代表的ないくつかの語い素 (glosseme) を選んで、一定の刺激に対してどちらの形で反応するかを調べ、共通語の形で反応した語の数をもって共通語を話す度合を表わすという方法が考えられる\*。

われわれが調べるのは、こういうふうにして測られる共通語を話す度合を決定する文化的要因それ自身である。一つの地域社会にはいろいろな個人がいる。ことに、都市には、文化的条件のいろいろ違う個人がいると考えられる。したがって、共通語を話す度合を決定する文化的要因そのものを見つけ出すのには、ひとりふたりの個人ではなく、なるべく多数の個人について調べることが必要である。

さらに、このように多数の人を、しかも、決められた期間のうちに調べるのには、少数の調査員では間に合わない。

以上のように考えると、共通語を話す度合を決定する要因を調べるのには、一定の調査票が必要である。つまり、調べる事がら、調べ方 (刺激のことば、順序など) をあらかじめ決めておくことが必要である。調査票が決まっていれば、やや多数の調査員を調整 (あるいは訓練) することもできる。さらに、多数の被調査者を能率的に調べることもできる。

われわれにとって調査票が必要なことは、もう一つの問題、つまり、共通語を話す度合の高まる過程と共通語を話すようになる過程とについても同様に言いうることである。

共通語を話す度合の高まる過程として、まず考えられるのは、最も良く共通語が話されているのはどういう場面であり、共通語が話されるのに最も抵抗の強いのはどういう場面であるかということ、第2に、最も良く共

\* もちろん、その共通語の形で反応した語の数が、実際の言語生活における共通語を話す度合とどういう関係にあるか、つまり、妥当性 (validity) について考えておかねばならない。詳しくは、2.2 (1) を参照。

共通語が話されているのはどういう集団であり、共通語があまり話されていないのはどういう集団であるかということである。また、共通語が話されるようになる過程として考えられるのは、いちばん直っている方言的特徴は何であり、いちばん直っていない方言的特徴は何であるかということである。これらのどれを調べるのにも、被調査者が多ければ多いほど良いことは言うまでもない。共通語を話す度合の高まる過程と共通語が話されるようになる過程とは個人個人によってよほど変動がありそうに考えられる。とすれば、少数の人を調べただけでは満足な結果を得ることはできないであろう。また、そのためにも、あらかじめ一定の調査票が用意されることはぜひとも必要なことである。

さて、以上のように、われわれの二つの問題、すなわち、(1) 共通語を話す度合を決定する要因 と (2) 共通語を話す度合の高まる過程と共通語が話されるようになる過程 について調べるには、一定の調査票を使い、なるべく多数の被調査者について調べることが必要であるということになった。

一定の調査票を作るのには、どうしても文化的条件を分析し、ことばそのものを構造的に分析しなければならない。そのためには準備的調査をじゅうぶん行い、特に、試し調査 (pre-test) を慎重に試みる必要がある。今度の調査はこの点ではまず申し分なかったと言えよう\*。

なるべく多数の被調査者について調べると言っても、白河市民全員について調べることは不可能である。と言って、手当たり次第多数の人について調べるのも意味がない。われわれの知りたいのは、白河市という地域社会全体の模様である。それには、白河市をいろいろな点で良く表わすいわば一つの「ひながた」を作って、それについて調べ、その結果から白河市全体を推測するという方法が考えられる。われわれが統計数理の考えに基

\* 3回の調査(前書きを参照)を通じて、現地における実働日数は、延べ368人日に及ぶ。

くサンプリングの方法を採用したのは、まさに上の理由による。この方法によって、われわれは最も小さい労力で最も大きい結果を得ることができ  
るであろう。

そこで、われわれは、調査の計画のうち、こまごましたことはいっさい  
省いて、重要と考えられる

#### 調査票の作成 (2.2)

#### 被調査者の選定 (2.3)

の二つについて述べることにする。

上の二つについて詳しく述べる前に、われわれの調査が「ことばの調  
査」のうちでどういう意味を持っているかについて簡単に述べておこう。

まず、今までの方言の研究にかぎらず、一般にことばの研究では、こ  
とば(ラング)そのものの構造的分析がおもな仕事であった。われわれ  
は、こういうラング(英語で language)が言語(地域)社会(speech-  
community)においてどういうふうに使われているかということを調べよ  
うとした。簡単に言えば、われわれの調査は language ではなく speech-  
community を調べようとしているのである。つまり、今までのことばの  
研究と、調べることが一応違うわけである。

今までの language\* の研究は方法として、比較的少数の被調査者(infor-  
mants)を観察によって調べるのが普通である。たとえば、実際の自然  
のままの言語行動をわきから観察したり、一定の質問なり要求によって答  
えさせたり、やらせたりするのである\*\*。こういう観察的方法はそれ

---

\* ここでは、話しことば(spoken language)だけを考えている。書きことば(written language)については考えていない。

\*\* 「24時間調査」(前書き、第2部を参照)とわれわれが言っている調査は、  
方法としては、前者(これを「自然的観察」と言うことにする)に当る。また、  
調査票(2.2 参照)において、一つ一つの言語的特徴について、一定の刺激を用  
意して、その刺激に対する反応を見るというやり方は、方法としては、後者(こ  
れを「実験的観察」と言うことにする)に当る。



自身発展する。つまり、一定の期間内において、調べることも調べ方もだんだん変わっていくことがありうる。調べてみてうまく行かなければ、また別のことを調べるというやり方 (trial and error method) を採ることができる。それは、ことばの構造的研究の目標が language の体系的記述にあるからである。

以上に対して、われわれの調査は、一定の計画をあらかじめ立てておいて、最後までそれにしたがって行う調査である。計画を途中で変えないということがわれわれの調査では大事なことである。いま、このような調査を「計画的な方法」とかりに呼ぶことにする。観察的方法でもまったく無計画に行うことはありえないが、その計画は変えうるし、変えうるところに意味がある。したがって、予期しない結果の得られることがある。つまり、発見がある。しかし、一定の期間内には成功しないこともありうる。これに対して、計画的な方法はだいたい予期したことしか得られないが、それを客観的に証明するなんらかの結果は必ず期待できる。計画的な方法による調査を計画的調査と呼ぶならば、この計画的調査の結果に対してよく聞かれる批判は、「常識的な結果しか出ないじゃないか」ということである。これは、あらかじめ常識的なものしか予期しなかったためである。しかし、常識的なものにしろ、いくつか予期した場合に、それらのどれが結果として浮び出てくるかは、あらかじめ常識では決めかねるのが普通である。また、たとえ常識的な結果でも、常識を科学的に証明することそれ自身に大きな意味のあることを考えなければならない。

さて、観察的方法による language の研究では、一つの地域社会のことばは成員全部同じであるという仮説を立てて出発することがある。これも language の体系的記述には必要なことである。この場合は、つまり、成員相互の同一ないし類似ということが注目されているが、われわれの場合はむしろ地域社会における成員の間の相違、つまり、個人語 (idiolect) に注目するのである。その相違をひき起している原因が何であるかという

ことがわれわれの調べようとしていることである。

したがって、観察的方法による language の研究では少数の被調査者で一応足りるが、われわれの計画的方法は多数の被調査者を必要とする。つまり、われわれの調査では統計数理的方法を採用しなければならないのである。

以上のように、観察的方法と計画的 방법とはいろいろな点で違うけれども、両者は互にあいられないものではなく、むしろ、密接な関係にある。それは、計画的調査における一定の計画がどのようにして立てられるかというのを考えればただちに明らかになる。計画的調査における一定の計画はけっきょく現地における観察的調査によって立てられるからである。調査票に盛る文化的条件にしても方言的特徴にしても、現地であらかじめ行われる準備的調査（試し調査を含む）によって決められる。このような調査を注意深く、しかも念入りに行えば行うほど、結果の見通しはそれだけはっきりしてくる。場合によっては、準備的調査によって結果のおおよそ、つまり定性的傾向がわかり、本調査（計画的調査）はそういう結果を数値的に、すなわち定量的に証明するだけのことになるかもしれない。

このように、観察的方法による調査は計画的 방법による調査に先行する準備作業である。実際には、観察的方法で得られた結果を一定の調査票に盛って計画的に調査し、その結果を実際にためしてみる（観察的調査）。今度は、そういうふうに観察的調査によって修正された結果を、ふたたび一定の計画のもとに調べてみる（計画的調査）。このようなことがくり返されて、次第にわれわれの求める知識が確実になっていく。

したがって、二つの方法はあいられないどころか、相連関していると考えられる。

## 2.2 調査票の作成

### (1) 調査票の条件

われわれの調査は、一定の調査票を作って、それに基づいて行うことになった。そういう調査票はいろいろな条件にかなったものでなければならない。調査票はわれわれが調べようとしていることをまさにそのとおり調べることでできる道具であろうか。調査票は、調べようとしていることを測定する「安定した」ものさしであろうか。また、調査票はだれにでも同じように扱える道具になっているかどうか。最後に、調査票は、調査の実施、整理、集計などが能率的に行えるようにできているだろうか。

以上のようないろいろな条件をわれわれの調査票が十分満たしているかどうかについて、一つずつ詳しく考えてみよう。

その前に、われわれが作った調査票をかけることにする。

まず、調査票はこの調査の目的を十分達しうのような道具でなければならない。われわれの調査票では、一定の刺激に対して共通語で反応する（方言で反応しない）項目の数（項目22—29, 36—46）および面接の際に実際に使う言語がどの程度の共通語であるかを主観的に判定する（項目61）ことによって共通語を話す度合（課題1）を測定するようにした。また、共通語を話す度合を決定する要因（課題2）は、上にあげた項目22—29, 36—46, 61と項目1—16, その他との相関関係を調べることによって測定するようにした。さらに、音韻的特徴相互（項目22—26）について共通語で反応した程度を比較することによって共通語を話すようになる過程（課題3の一つ）を測定しようとした。

次に、われわれが共通語を話す度合を数量化した、その数字が、調べようとすることをまさにそのとおり調べているかどうかを明らかにしなければならない。項目22—29は項目の種類6、延べの項目数は27であって、共通

## 戸別調査による共通語化の調査

NO.	集合調査	調査者	1949 12- 調査日
-----	------	-----	--------------------

1	現住所	白河市 町 赤松	五箇 金山村字
2	ずっとここにお住い ですか？お生れは？ そこからすぐこちら にいらしたのですか。 (転住理由以下は こちらから、予想され ることを言い出して、 相手の答を待つよう にする。)	出生地 転居(期) 場所 転住理由	お仕事 お訪同居者
3	数 え 年	オ オ	
4	今のあなたのお仕事 は～ですわね。 ほかになにかやつて おいでですか？	仕事の名 仕事の場合 専業 兼業	*産業別 *職業別
5	うちのお仕事は？ それはとあなたが主に やつておいでですか。ほ かになにかやつておい でですか？	仕事の名 仕事の場合 専業 兼業	*産業別 *職業別
6	学校はどこまでおい でになりましたか？	0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ナ 小 高 中 中 高 高 専 大 その他 シ 学 小 学 学 校 校 門 学 他	1年 2週 3在
7	お父さんのおくには？ お母さんは？ (白河五箇金山は町字まで)	実父 実母	養父 養母
8	あなたの奥さん(～御主人) はどちらの御出身ですか？ (全 上)		(再)
9	あなたの本籍は？	0 知らない 1 現住所とおなじ	
10	*階層	上 中 下	備考

\* 記入に及ばない。□ はあらかじめ分っている項目を示す。  
8 の(再)は被調査者が「再婚」とみずから発表した時にだけ記入する。

12

13

14

75

16

ラジオのニュースは  
お聞きになりますか

1	2	3	31	32	33	34
ほとんど 毎日きく	きいたり きがなかったり	きか ない	ない	故障	きく	きく

五箇. 金山村だけ? 聞く項目  
15 はじふんで読む場合に限る。

17 ☐ こゝとは近頃のゴトバについて少しおたずねしたいと思いますが、「六三制」といふことはこの辺でもお聞きになりますか？  
1 正しく理解されている 2 正しく理解されていない 3 知らない

18 ☐ 東京では学生などの「アルバイト」(バイト、アルバイ)がざかんですが、この辺でもそういうゴトバをお聞きになったことがありますか？  
1 正しく理解されている 2 正しく理解されていない 3 知らない

19 ☐ 「鉄のカーテン」は？  
1 正しく理解されている 2 正しく理解されていない 3 知らない

20 ☐ 「コンクール」などと言いたのびらをお見かけになったことがありますか？  
1 正しく理解されている 2 正しく理解されていない 3 知らない

21 ☐ アクセント  
\* 自 京 其  
式 式 他  
ハシ(箸)、アメ(雨)、マツ(松)  
ハシ(橋)、アメ(船)、カワ(川)

22 ☐ イ ト (糸) 1 ito 2 ē- 3 e- 4 e- 5 その他( )  
☐ イ シ (石) 1 ifi 2 3 4 5  
☐ イ ト マ キ (糸巻) 1 itomaki 2 3 4 5  
☐ イ キ (息) 1 iki 2 3 4 5  
☐ エ キ (配) 1 eki 2 e- 3 ē- 4 i- 5 その他( )  
☐ エ タ (枝) 1 eda 2 3 4 5  
☐ エ ビ (蝦) 1 ebi 2 3 4 5  
☐ エ ホ ン (絵本) 1 ehon 2 3 4 5

23 ☐ ハ コ (箱) 1 hako 2 -k 3 -g- 4 その他( )  
☐ カ キ (柿) 1 kaki 2 3 4  
☐ ツ ク エ (机) 1 tsukue 2 3 4  
☐ ハ ト (鳩) 1 hato 2 -t- 3 -d- 4  
☐ ク チ (口) 1 kwtsi 2 3 4  
☐ タ タ ミ (畳) 1 tatami 2 3 4

△ 竹 雨 ひ  
油 煙 蛇

\* 記入に反はない。 △ 必要に応じて調査する。  
アクセントの型の記入方法は次のようにする: ○○, ○○, ○○  
22-29 は第1回の反応と第2回以後のそれとを区別して記入すること。

24	<input type="checkbox"/>	モミジ(紅葉)	<sup>1</sup> momi(d) <sup>2</sup> si <sup>2</sup> -d <sup>3</sup> <sup>3</sup> -j <sup>3</sup> <sup>4</sup> -tj <sup>5</sup> -f- <sup>6</sup> モミ
	<input type="checkbox"/>	ブドウ(葡萄)	<sup>1</sup> bwdo: <sup>2</sup> -d- <sup>3</sup> -t- <sup>4</sup> その他
	<input type="checkbox"/>	センベイ(煎餅)	<sup>1</sup> sebbe: <sup>2</sup> -b- <sup>3</sup> -p- <sup>4</sup>
25	<input type="checkbox"/>	ク　　リ　(栗)	<sup>1</sup> kwri <sup>2</sup> -j- <sup>3</sup> -j- <sup>4</sup>
	<input type="checkbox"/>	ハ　　リ　(針)	<sup>1</sup> hari <sup>2</sup> <sup>3</sup> <sup>4</sup>
	<input type="checkbox"/>	ニ　ワ　ト　リ(鶏)	<sup>1</sup> niwatori <sup>2</sup> <sup>3</sup> <sup>4</sup>
	<input type="checkbox"/>	トリゴヤ(鶏舎)	<sup>1</sup> torigoja <sup>2</sup> <sup>3</sup> <sup>4</sup>
26	<input type="checkbox"/>	ヒ　　モ　(紐)	<sup>1</sup> himo <sup>2</sup> ś- <sup>3</sup> f- <sup>4</sup>
	<input type="checkbox"/>	ヒ　タ　リ　(生)	<sup>1</sup> hidari: <sup>2</sup> <sup>3</sup> <sup>4</sup>
	<input type="checkbox"/>	ア　ヒ　ル(家鴨)	<sup>1</sup> ahiru <sup>2</sup> <sup>3</sup> <sup>4</sup>
27	<input type="checkbox"/>	ハゲアツマ(禿頭)	<sup>1</sup> hageatama <sup>2</sup> ameatama <sup>3</sup> <sup>1</sup> hageru <sup>2</sup> ameru
28	<input type="checkbox"/>	ハ　　ナ　(鼻)	<sup>1</sup> hana <sup>2</sup> hanado <sup>3</sup>
29	<input type="checkbox"/>	ホ　ウ　チ　ヨ(炬燵)	<sup>1</sup> ho:t[ɔ <sup>2</sup> hoet[ɔ hoet[ɔ <sup>2</sup> hoet[ɔ hoet[ɔ <sup>3</sup>
30	<input type="checkbox"/>	カ　メ　　ラ	<sup>1</sup> カメラ <sup>2</sup> 写真機 <sup>3</sup> 知らない <sup>4</sup>
31	<input type="checkbox"/>	バ　ッ　テ　リ　ー	<sup>1</sup> バッテリー <sup>2</sup> 蓄電池 <sup>3</sup> 知らない <sup>4</sup>
32	<input type="checkbox"/>	ス　タ　イ　ル・ブ　ッ　ク	<sup>1</sup> スタイル・ブック <sup>2</sup> 洋裁の本 <sup>3</sup> 知らない <sup>4</sup>
33	<input type="checkbox"/>	アメリカから来た。ノミやシラミを殺す強い薬。ふつう白い粉になつていますが、なんと言うか、ちよつと言つていただけませんか。	<sup>1</sup> -di:- <sup>2</sup> -de:- <sup>3</sup> -de:- <sup>4</sup> -de:- <sup>5</sup> -ji:- <sup>6</sup>
34	<input type="checkbox"/>	おかねの値打がどんどんきがつて物の値段がぐんぐんあがることをなんとか申しますが、ちよつと言つていただけませんか。	<sup>1</sup> ishwure <sup>2</sup> ē- <sup>3</sup> e- <sup>4</sup> e- <sup>5</sup>
35	<input type="checkbox"/>	むかしの父兄会のことを今なんと言いますか。	<sup>1</sup> pi:ti:e: <sup>2</sup> tē:- <sup>3</sup> e:- <sup>4</sup> e:- <sup>5</sup>

22-29は第1回の反応と第2回以後のそれとを区別して記入すること。

- 36 ☐ ことも(弟〜妹)にむかつて「ソナことするな」と言う時, *so:da koto fiade* *he:zo* などのように, *so:da koto* ということばをおっかいになりますか?  
 1 *so:na* 2 *so:da. so:da* 3 *so:tsiura* 4 *sotsiura* 5
- 37 ☐ 小さい子どもがおかあさんにアマエルことを別な言い方をなさいますか?  
 1 *amaerw* 2 *sobaerw*, *sobe:rw* 3
- 38 ☐ こともにこづかいをおだられて「イクラほしいんだ」などと答える場合に, *naebo hofi:nda* というように, *naebo* をお使いになりますか?  
 1 *ikura* 2 *naebo* 3
- 39 ☐ 「そんなこと どうでもイジヤナイカ」と言うのに対して「ソウカナア、そうじゃあるまい」と言いかえす時に *so:kaijita:so:de aame* のように *jita:* をお使いになりますか?  
 1 使わない 2 わからない 3 使う
- 40 ☐ 「そりやダメダロウヨ」と言う場合 *dame daabewe* と *we* (ないし *wai*) をおつけになりますか?  
 1 *damedaro:jo* 2 *dame daabewe (wai)* 3
- 41 ☐ 友だちに向つて「あなたは、昨日郡山へ行つただろう」と聞きこんでゆく場合に、ふつうどんなふうにおっしゃいますか?  
 1 *tadaro: , tadejo:* 2 *taebe* 3 *ta'pai, tape* 4
- 42 ☐ 友だちに向つて「郡山へ行くんだ、この手紙をもつていつてくれ」というように、「行クン *dara*」とおっしゃいますか。  
 1 使わない 2 わからない 3 使う
- 43 ☐ 近所の人に道で会つて「今日は寒いね」と話しかける時、ふつうどんな言い方をなさいますか?  
 1 *ne* 2 *na* 3 *nae* 4 *nae* 5
- 44 ☐ 近所の家を度々おる時、はいり口をどういふあいさつをなさいますか?  
 1 *korabaewa* 2 *oba-* (*obaa desii*, etc.) 3
- 45 ☐ 近所の親しい人がたずねて来たとき「おあがりなさい」という場合に *agara:ji* とか *agara:fe* とおっしゃいますか?  
 1 *oagari nasai* etc. 2 *agara:ji* 3 *agara:fe* 4 *oagaranasai* 5
- 46 ☐ 近所の商賣をしている人に「近頃賣れますか」などとおっしゃる時、どんなふうにおっしゃいますか?  
 1 *wre masiuka* 2 *wrejasuka* 3

方言形を出すようある程度誘導することはさしつかえない。もつともふつうにつかっている形をつかむこと。ことばは被調査者じしん(あなた)のことばであつて、市なり村なりにおける他人のことばではない。



41	白河(町内)のことはと在(ザイザイ)のことはとよはとちがいますか。	0 無関心 1 ちがう 2 わからない 3 たがわな
48	それについていいことばとかわるいことばとかお考えになったことがありますか。どちらがいいことばでしょうか。	0 無関心 1 白河の方 2 わからない 3 白河の方がいい 4 わるい
49	ラジオのアナウンサーがニュースなどでつかうことはや学校でならうことは標準語(〜コクゴ)と言いますが土地のことはと比べてちがつていとお感じになりますか。(どいうところがちがいますか)	0 無関心 1 感じる 2 わからない 3 感じない
50	そういう標準語(〜コクゴ)をつかう時がありますか。	1 標準語意識あり(A) 2 なし(B)
51	お家で家族の方たちといろいろ話をなさる時のことはA.土地のことはとですか。標準語ですか。いろいろまぎりますか。B.土地のふつうのことはとですか。よそゆきのていねいなことはとですか。いろいろですか。	17 標準語 31 方言 2 まぎる 12 よそゆき 32 ふつう
52	それでは、こんな場合はいかがでしょう。	
53	近所の人と話をするとき	11 2 31 12 2 32
54	在の人と話をするとき	11 2 31 12 2 32
55	白河の人と話をするとき	11 2 31 12 2 32
56	仕事仲間と話をするとき	11 2 31 12 2 32
57	買いつけの店で買物をする時	11 2 31 12 2 32
58	郵便局や役場などで	11 2 31 12 2 32
59	知らない人、旅行者などと	11 2 31 12 2 32
60	お子さんが人前で標準語を話せるようになることは、将来必要なことでしょうか。それともあまり必要のないことでしょうか。それはどういう理由ですか。	
61	0 無関心 1 必要 2 わからない 3 不必要	17 アクセント 2 有声化 3 無声化 4 ジイ音 5 イトネン 6 エとイ 7 特殊の語 8 い語法

○は白河でだけ聞く項目    ●は五箇、金山村でだけ聞く項目

集合調査談話者に、「言語生活調査票」を渡すことを忘れないように。

語を話す度合は0—27の点数で表わされる。そこで、この全体の点数（数字）が6種類の項目（音韻の特徴、ただし、27—29は語い）の構造を良く捕えているかどうかが問題になる。これについては、調査の結果、4.1で述べるように、scale analysisを施したところ、総点数（0—27）は六つの言語的特徴の構造を良く捕えていることが明らかになった。したがって、0—27の点数で共通語を話す度合を表わすのは妥当であったと言える。

さらに、われわれが共通語を話す度合を表わす数字として用いるのは項目61における主観的判定である。ところが、主観的判定は一定の場面において話す共通語の度合であって、その被調査者個人のあらゆる場面におけるそれではない。言語は場面によって変る。ことに日本語においてはそれが著しい。したがって、調査票における一定の場面で話す共通語の度合と言語生活のあらゆる場面で話すそれとの関係を知っておかなければならない。その関係がわかれば、主観的判定による共通語を話す度合および点数（0—27点）によって表わされる客観的な共通語を話す度合が何を意味しているかが明らかになるであろう。そこで、われわれは特定の個人について一日じゅうつききりで、その言語および言語生活をいっさい記録するという調査を試み、一日じゅうの言語生活における共通語を話す度合と、調査票における共通語で反応する語の数および主観的判定とを比較してみた（4.7を見よ）。なお、この調査をわれわれが「24時間調査」と呼ぶことについてはすでに「前書き」のところで述べた。

以上によって、われわれの調査票はかなり妥当性（validity）が高いと言えることができる。

次に、調査票は、課題のほんどうの実態を捕える道具でなければならない。課題について、ゆがみがなるべく少ないように測定できるよう調査票をくふうしなければならない。われわれは準備の段階において観察的調査を詳しく行い、それによって、音韻に関する方言的特徴をすべてとり出し、し

かも、それぞれの特徴について調べるのに適当な語を、特徴の著しさに応じて適当な数だけ選ぶことができた。このように、音韻についてはかなり適応性 (adequacy) の高い調査語を用意することができたけれども、文法についてはこれがきわめて困難である。文法的特徴を全部調べることはもちろん不可能であるから、いくつかの特徴を選び出して、文法的特徴全部の良い代表者であるようにしたいが、そういうことは今のところ非常にむずかしい。したがって、文法については適応性が高いとは言えないようである。そこで、われわれが集計、分析を進めるにあたって、音韻に関する反応をおもな指標とし、文法に関する指標は補助的な指標として用いることにした (4.1 を見よ)。なお、調査票に項目として選ばれた文法的特徴は、それぞれ文化的条件によって異なる反応が期待されるようなものである。

次に、調査票は共通語を話す度合を測定する「安定した」ものさしとして作られているだろうか。つまり、誤差が少なく測定できる道具となっているか。言語が場面によって変るために、この点で良い調査票 (信頼性 [reliability] の高い調査票) を作ることは困難である。そこで信頼性を高めるために同一項目に属する刺激語を多くした。しかし、文法については、同じ刺激に対して場面ごとに、つまり、言い直すたびに異なる反応を示すことは珍しくない。音韻についてもこの傾向が認められ、特に、現在動揺している形にはこの傾向が著しい。そこで、われわれは調査に際して次のような処置を採った。文法的特徴については、その反応が何回目であろうと、ともかく1回でも方言形を出せば、その項目は0点、つまり、「共通語形ではない」と認めることにした。音韻的特徴については、第1回の反応と第2回以後のそれとを区別して記録した。しかし、集計のときはひとまず第1回の反応を取り上げることにした。

また、調査票は、特殊な技術を有する特定の人にしか扱えないようでは役に立たない。だれにでも同じように扱える道具でなければならない。われわれの調査は、世論調査などと方法は似ているが、問題そのものが微妙

なために、調査員は専門家であって、しかも訓練されていなければならない。われわれはそのような調査員を準備するように努めたのであるが、実際には、このような理想的な調査員ばかりを集めることは困難であった。そこで、一定の素養があり、しかも、ある程度の訓練を受ければだれにでもできる調査票にしなければならない。そのために、刺激に使うことばを厳密に決めておいて、これに厳重に従うようにしたし、反応の記入は該当項をマルでかこめば良いようにしておいた。このような点でわれわれの調査票は十分客観性 (objectivity) のある道具とすることができる。

さらに、調査票は調査の実施および集計・整理ができるだけ能率的に行えるように作られていることが望ましい。そのために、反応として出て来そうなものを準備調査で確かめて、それを全部調査票にあげておいた。また、調査の時間、項目の順序についても試し調査 (pre-test) で検討しておいた。集計・整理の能率を良くするためには、調査票の左端に空白のわくを作って、これにコード (code) を入れるようにした。

ところで、調査の時間については、家を尋ねる時間を含めて1人60分以上にならないようにした。調査に要する正味の時間は20分—30分である。調査の時間は、普通の被調査者が心理的・肉体的に何分耐えられるかということと、調査全体のうちで調査の実施に何日使えるか（したがって、調査員を何人集められるか、費用はどれだけ使えるか）ということなどを考えあわせて決めなければならない。

項目の順序は被調査者の心理的態度に影響を及ぼすので、同じ話題の項目および同じ場面を設けて与える刺激はなるべく近づけるようにした。また、能力を調べられているという印象を与えそうな項目を続けて出さないようにくふうした。また、被調査者自身が意見を自由に発表できそうな項目を、「はい、いいえ」、あるいは、簡単に「なにに」とだけ答えれば足りるような項目の間にはさんでおいて、被調査者が退屈しないように気を配った。

項目の順序は、このように心理的態度に影響を及ぼすばかりではなく、調査の目的に関連するところもある。われわれの調査票では、経歴から始めて個人の文化的条件を先に聞き、ついで言語について聞いている。この順序は世論調査などと逆である。しかし、われわれの調査の目的を考えると、どうしてもこの順序を採らないわけにはいかない。被調査者が旅の見知らない人と話す時の共通語の度合を調査員が主観的に判定する(項目61)には、方言(言語)について先に聞くことがまずいことがある。と言うのは、方言について先に聞くと、被調査者によっては必要以上にうち解けて、つまり、旅の見知らない人と話すという場面を破壊するほどに、方言で会話をするおそれが大いにあるからである。

以上の点から、われわれの調査票は効率(administrability)についてかなり高い調査票と認めることができよう。

## (2) 調査票の説明

調査票についての細かいことは一部すでに述べたが、さらに二三説明を加えておくことにする。

まず、調査票の1ペについて述べよう。左端の番号は項目の通し番号であり、そのすぐ右の空白のわくは code を記入するところである。それ以外のわくのうち、二重のわくは、脚注にあるように、あらかじめ配給台帳などでわかっていて、調査の前に記入しておくところである。その他のわくは調査員が記入する。“No.”は被調査者の通し番号、“集合調査”は、言語能力と言語生活の調査の被調査者であるかどうか(前書きを見よ)を記すところである。なお、本籍(項目9)は、別の目的から調べたもので、共通語を話す度合を調べるための項目ではない。

次に、2ペについて述べよう。項目11は、いわゆる社会的態度について調べる項目であって、六つの小項目について質問して、満足(現状のままを望む)か、無関心か、不満(前進的な気持を持っている)かを調査員が判定した。

続いて、3 べについて述べよう。項目17—20は新語に関するものである。新語に関するものは、項目30—32、項目33—35 にもある。分けて設けたのは、前にも述べたように、能力を調べられているという印象を与えないための処置である。なお、項目17—20は、調査票にあるようなことば（刺激）で聞いて、新語の理解を調べたのであるが、項目30—32は、絵を見せて、はたして新語で反応するかどうかを調べたのである。さらに、項目33—35は、新語の特殊な音韻（[di:], [ti:]）がどのように受け入れられているか、および、新語が音韻の点で方言的に受け入れられているかどうか（項目34）について調べた。このように九つの新語は三つずつそれぞれを互に異なる方法で調べた。

さて、項目21—32は、絵を見せて、「これは何ですか」のように聞いた。

項目21は、六つの語を調べることによって、アクセントの体系が、「アクセントなし」（一型アクセント）のいわゆる「白河式」であるか、京浜地方のようにアクセントの型の区別があるか、それともその他（たとえば、関西式アクセント）であるかを調べた。

項目22は、いわゆる「イとエとの混同」と言われる現象で、白河市の音韻的特徴のうち最も目だつものの一つである。この特徴は、共通語における単独で音節を作る [i] および [e] に、同じ一つの音 [ɛ̃]（あるいは [ẽ]）が対応する方言的特徴である。なお、[ɛ̃] の性質については、3.2 を見よ。

この音韻的特徴を調べる語を次の基準によって八つ選んだ。イキ（息）とエキ（駅）とは、イとエ以外については同音であって、イとエが区別されているかどうかを確かめるのに便利であるので選んだ。イト（糸）、イシ（石）およびエダ（枝）、エビ（蛭）は、2音節語の例として、しかも、イトとエダは次に広い母音を持つ音節が来る場合の例として、イシとエビは次に狭い母音を持つ音節が来る場合の例として選んだ。イトマキ（糸巻）

とエホン（絵本）とは2音節以上の語の例として選んだ。イの例とエの例とが同じ数になるようにしてある。

なお、語頭以外の場合（たとえば、カイ〔貝〕、コエ〔声〕など）はある調査員たちにとって調べるのがやや困難のように見えたので、ここでは割愛した。

項目23はいわゆる「有声化」の現象である。共通語における語中の[k], [t]に有声化音[k̚], [t̚], 場合によっては有声音[g], [d]が対応する方言の特徴である。[k̚]あるいは[g]の例として、ハコ（箱）、カキ（柿）、ツクエ（机）を選び、[t̚]あるいは[d]の例としてハト（鳩）、クチ（口）、タタミ（畳）を選んだ。ハコ、カキおよびハト、クチは2音節語の例として、ツクエおよびタタミは3音節語の例として選んだ。さらに、ハコおよびハトは、広い母音と音節を作る場合、カキおよびクチは、狭い母音と音節を作る場合、それぞれの例として選んだ。

次に4つの説明に移ろう。項目24は、いわゆる「無声化」と言われる現象である。共通語における有声の破裂音あるいは破擦音に、無声化した、あるいは無声のそれが対応する方言的特徴である。三つの場合があり、それぞれ1語を選んだ。

項目25は、共通語の語頭以外における音節[ri]に特殊の摩擦音で始まる音節（これをかりに[ji]で表わした。詳しくは3.2を見よ）が対応する現象である。2音節語で、しかも、狭い母音を持つ音節から続く場合、広い母音を持つ音節から続く場合それぞれ1語ずつ選んだ。クリ（栗）とハリ（針）とがそれである。ニワトリ（鶏）、トリゴヤ（鶏舎）は2音節以上の語として選んだ。

項目26は、共通語の音節[hi]（厳密には[çi]と表記することができる）に[ji]あるいは[si]（[s]は[ʃ]に比べて口蓋化が少ない）が対応する方言的特徴で、普通、「ヒとシとの混同」と言われる。語頭で2音節語の例としてヒモ（紐）、語頭で2音節以上の語の例としてヒグリ（左）、語中

の例としてアヒル（家鴨）を選んだ。

続く項目27—29はいわゆる語いである。調べ方が同じであるので、ここに置いた。また、項目22—26までといっしょに、音韻に関する反応（これを「音韻の点数」と言うことにする。4.1, 4.2 などを見よ）として扱われることがある。

5 べは、いわゆる文法的特徴に関する項目であるが、なかには語いと認めるべきものもある。いずれも、調査票にあるとおりの指定された刺激によって反応を求めるようにした。各項目は、それぞれ、次のような文化的条件によって異なる反応を示すのではなからうかと考えて選んだ。

項目36: so'tsüra の出るのは教養の低い層か、年齢の高い層ではないか。so'ntsura, は若い層に多いのではないか。項目37: 年齢。項目38: 地域（特に市と村）。項目39: 階層, 地域差。項目40: 性（白河の婦人語らしい）。項目41: 教養。項目42: 教養。項目43: 年齢, 教養。項目44: 年齢, 性。項目45: 年齢, 教養。項目46: 階層。

最後に6べの説明に移ろう。項目47—50はいわゆる「言語意識」あるいは「共通語意識」について、項目51—58 は場面による共通語と方言との使い分けについて、項目59は共通語（標準語）に対する態度について調べるためのものである。項目60は、項目58と比較して、信頼性（reliability）を見るためのものである。最後に項目61は、被調査者がどの程度の共通語を話すかについて主観的に判定するところである。段階2と3とに矢印のあるのは、それぞれ、1寄りの2, 3寄りの2, 2寄りの3, 4寄りの3を示す。5段階をいっそう詳しく7段階に判定しようとしたが、集計の際には5段階にまとめることになった。

## 2.3 被調査者の選定

### (1) 被調査者のサンプリング

#### (i) 調査対象の決定と母集団の構成



白河市に昭和24年（1949）10月現在居住する人人の言語の実態をつかむのがこの調査の目的であるから、ひとまず調査対象（universe）は「昭和24年10月現在の白河市居住者」（約30,000）ということになる。

しかし、白河市から便宜的に大沼を除いた。それは、旧白河町が大沼村と合併して白河市になったのは半年前（昭和24年4月1日）にすぎないと、大沼が白河市の町からかなり離れていて調査の実施が困難であることによる。

また、われわれは、昭和24年10月現在の白河市居住者全員ではなく、15歳から69歳（数え年）までの者（男女）に調査対象を限った。それは、社会的活動を行っていない者およびわれわれの調査に応ずることの困難な年齢の者はことさら調べる必要がないと考えたからである。これが調査に応ずべき調査の対象である。

なお、これらの人人の言語ないし言語生活のすべての面にわたって調査することは不可能なので、言語ないし言語生活を反映しうるような調査項目を盛り込んだ一定の調査票を作り、これによって調べた。

われわれの調査はその性質上どうしても面接（interview）によらなければならない。さらに、内容が微妙であるから、調査員は一定の素養があり、かつ、ある程度訓練される必要がある。その他、予算、日時などの外的制約もある。

このように考えると、20,000に近い調査対象のすべてを調査することはまず不可能である。ここに当然サンプル調査が考えられなくてはならない。しかも、そのサンプル調査は、精度（サンプルから母集団を推定するときの精度）を科学的に保証しうるランダム・サンプリングの方法によらなければならない。したがって、われわれの母集団（population）は、「調査項目に対する反応を標識（label）とし、かつ、各個人のを抽出する確率が等しいように定められた、昭和24年10月現在、大沼を除く白河市に居住する数え年15歳から69歳までの男女」として調査対象から作られる。

## (ii) サンプル数の決定に関する準備的考察

調査の実施は純粹に理論だけではもちろん行えないが、一定の制約のもとで最も妥当な計画を立てるように理論的に考えていかなければならない。

この調査では面接のできる調査員は約25名（東京から出張する者約15名。現地での協力者約10名）と考えられた。本調査は予算などの関係で4日ぐらいに全部すまさなければならない。調査票の内容から見て、被調査者1名の調査時間（面接時間+訪問のための移動時間）は最大1時間程度と考えられる。したがって、調査員1名は1日に7名の被調査者について調査できるものと見て良い。こう考えると、4日間に約700人（ $25 \times 7 \times 4 = 700$ ）について調査できることになる。しかし、これは調査が順調に進む場合のことであって、実際には、いろいろの支障の起きることを考えておかなければならない。すなわち、被調査者がいつも在宅するとは限らないし、しかも、これをあくまで追及調査しなければならない。さらに、確実な調査結果を得るためにも、調査員に無理な負担量を課することを避けなければならない。以上、いろいろのことを考え合わせると、サンプル数はたかだか500名程度が限度であろうと考えられる。

では、約20,000名、詳しくは17,890名（これが厳密な意味の調査対象の大きさ）から500名をランダムにサンプルする場合の精度はどうであろうか。まず、調査項目の反応がパーセンテージで表わされるものとする。サンプルの%から母集団の%を推定する時の精度は近似的に次のように与えられる。

$$\pm 1.96 \sqrt{\frac{N-n}{N-1} \frac{p'(1-p')}{n}} \quad \text{信頼度 } 95\%$$

ただし、

$N$ ……母集団の大きさ

$n$ ……サンプル数

$p'$ ……サンプルにおける調査項目のある反応を示す比率

見当をつけるために信頼幅を示すことにしよう。いま、精度と母集団における比率 $p$ との関係を図示してみよう。ただし、われわれの調査では、

$N$  が  $n$  に比べて十分大きいから ( $N=17,890$ ,  $n=500$ ),

$$1.96\sqrt{\frac{p(1-p)}{n}}$$

を用いて図示した。その結果、左の図1が示すように、500のサンプルがあれば、まず統計理論的に満足すべき結果が得られるであろう。

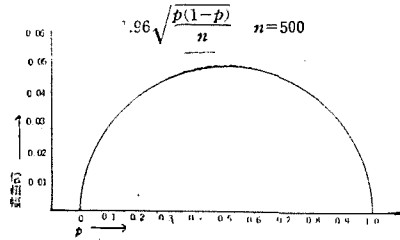


図 1

しかし、われわれはさらに精度をあげるために、層別を行うことを考えた。

### (iii) 層別とサンプルの第1次抽出

われわれの調査において、調査項目の反応に強い影響を与える要因としては、一応、性、年齢、職業、学歴、居住経歴（言語経歴）などが考えられる。母集団の層別にはこれらの標識を用いれば良いわけであるが、これらの要因すべてを知りうる客観的資料はないようである。われわれが用いる母集団のリストは物資配給台帳であるが、白河市では、これに記されているのは、性、年齢、職業および現住所にすぎない。そこで、実際にはこの四つの標識を用いて層別することにした。

母集団を表わすリストとして物資配給台帳は最も適当なものであるが、これにはわれわれの対象以外の者が含まれており、かつ、1世帯が同じページに記されて、ひとりひとり別になっていない。したがって、これによって層別を行うには、対象である17,890人をカードにとり、その上で層別するという手続になる。しかし、このようなことは実際には不可能に近い。そこで、われわれは「重ね抜き」(double sampling)の方法を用いることにした。つまり、母集団から第1次的にある人数だけランダムに抽出し、そののちその第1次サンプルについて層別を行い、それから、理論的に指定されたサンプル、つまり500人をランダムに抽出するという方法である。

まず、このような「重ね抜き」をしても精度が変わらないということを証

明しなければならぬ\*。

以上のことから次のような考えが導かれる。まず、母集団が  $R$  個の層に分けられたとする。 $N_i$  は第  $i$  層の母集団の大きさを示す。

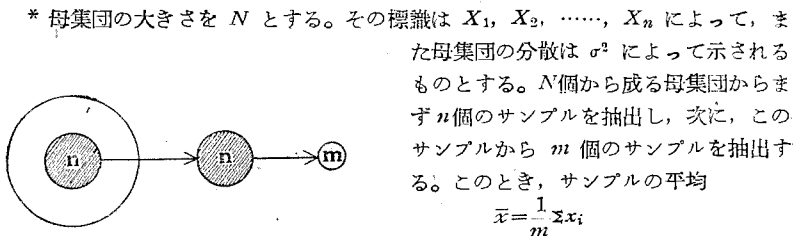


図 2

の精度を示す分散  $S^2$  は次のようである。

なお、この  $\bar{x}$  は母集団平均の片寄りのない推定量になっていることは言うまでもない。

$$S^2 = \frac{n-m}{n-1} \frac{\sigma_w^2}{m} + \sigma_b^2$$

ただし、 $\sigma_w^2$  は内分散、 $\sigma_b^2$  は外分散であって、次の関係を持つ。

$$\sigma^2 = \sigma_w^2 + \sigma_b^2$$

$$\sigma_b^2 = \frac{N-n}{N-1} \frac{\sigma^2}{n}$$

したがって、

$$\begin{aligned} S^2 &= \frac{n-m}{n-1} \frac{1}{m} (\sigma^2 - \sigma_b^2) + \sigma_b^2 \\ &= \frac{n-m}{n-1} \frac{1}{m} \sigma^2 + \sigma_b^2 \left( 1 - \frac{n-m}{n-1} \frac{1}{m} \right) \\ &= \sigma^2 \left( \frac{n-m}{n-1} \frac{1}{m} + \frac{N-n}{N-1} \frac{1}{n} \frac{n(m-1)}{n-1} \frac{1}{m} \right) \\ &= \frac{N-m}{N-1} \frac{\sigma^2}{m} \end{aligned}$$

これは  $N$  個から成る母集団から  $m$  個のサンプルを直接ランダムに抽出したときの分散である。すなわち、このような抽出のしかたをしても精度の変らないことが示される。ここで大切なのは、 $S^2$  が第一次抽出の個数にまったく依存しないということである。

次に、 $n$  が確率変数であるときはどうか (ただし  $n \geq m$ )。それにはまず  $n$  を固定して  $S^2$  を求めれば良いのである。 $S^2$  はまったく  $n$  に関係しないので、このときの分散もまた母集団から直接  $m$  個のサンプルを抽出するときと同じである。

いま、全体から  $n$  個のサンプルをランダムに抽出する場合に、第  $i$  層に属するサンプルを  $n_i$  だけ得る。この  $n_i$  はもちろん確率変数であるが、 $n_i$  の期待値は

$$E(n_i) = n \times \frac{N_i}{N}$$

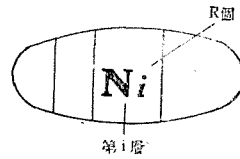


図 3

となる。 $n_i$  から理論的に決められたサンプル数  $m_i$  個を抽出し、これからサンプル平均を作るとき、その分散は  $n_i$  を無視して  $N_i$  から直接  $m_i$  のサンプルを抽出したときの分散に等しい。したがって、全体のサンプル数  $m$  を決め、第  $i$  層の割当数  $m_i$  を決めておいて、各層で上述のようなサンプリング方法（母集団全体を層別せず、全体からランダムに取った第1次サンプルを層別し、その中から、決められた  $m_i$  のサンプルをランダムに抽出する）を用いて、普通の場合のように片寄りのない推定値を作れば完全な層別抽出法の効果をあげることができる。言いかえれば、層別抽出法を行って効果をあげるのに、母集団を層別せず、比較的少数の第1次サンプルを層別し、その中からほしだけのサンプルを抽出し、ウェイトをかけて、片寄りのない推定値を作れば良いことになる。このようにして層別の手続は簡単になる。われわれの場合、各層へのサンプルの割合は人口比例割当法によることにする。なぜならば、この割当法は、複雑な分析を自由に、容易に行いうるという利点があるからである。したがって、

$$m_i = m p_i \quad \text{ただし,} \quad p_i = \frac{N_i}{N} \quad \text{とする}$$

$m$  をあらかじめ決めるためには、 $p_i$  がわかっていなければならない。しかし、白河市の場合は残念ながら層別に用いようとする要因は、次に示す性×年齢 以外についてはわかっていない。したがって、第1次層別は、性×年齢 についてだけ行うことにした。

年齢	15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69
男	9.52%	6.84	5.31	4.28	4.05	4.28	3.89	3.18	2.89	1.97	1.23
女	8.90	7.75	6.74	5.24	5.25	4.76	4.04	3.24	2.70	2.13	1.75

次に問題となるのは、第1次サンプルである  $n$  をどのように決めたら良いかということである。普通の層別サンプリングと同じ効果を持つサンプリングを行いうるためには、いつも

$$n_i \geq m_i = m p_i$$

でなくてはならない。これが成立するように  $n$  を決めなければならない。

$n_i$  は確率変数であり、 $E(n_i) = n p_i$  である。

$n_i$  の分散  $\sigma_{n_i}^2$  は

$$\sigma_{n_i}^2 = \frac{N-n}{N-1} \frac{p_i(1-p_i)}{n}$$

で与えられるから、99.7% (99.9%) の信頼度をもって、 $n_i \geq m p_i$  が成立するためには、

$$n \left\{ (p_i - 3(4) \sqrt{\frac{N-n}{N-1} \frac{p_i(1-p_i)}{n}} \right\} \geq m p_i$$

であるように  $n$  が決められなければならない。われわれの場合  $m=500$  である。一般に  $n$  と  $p$  との関係を図示してみると図4のようになる。これによって、いろいろな立場から考えてみるに、 $n$  としてまず 2,000程度抽出すれば良いことがわかる。

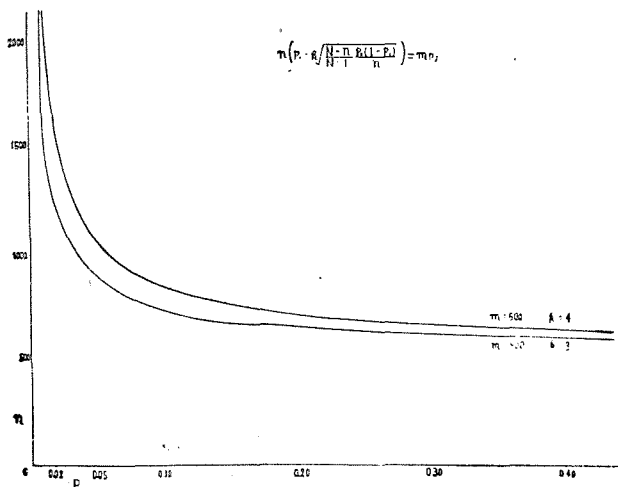


図4

さらに、次のようなことも考えておかなければならない。 $m_i = mp_i$  とするとき、 $p_i$  の小さな層の  $m_i$  は小さくなりすぎ、第  $i$  層そのものの精度があまり落ちすぎて他の層との比較が意味を持たなくなることもありうる。そこで、比例割当でなく、 $p$  の小さなところに  $mp$  の2倍のサンプルを割当てることにしたらどうか。2倍であるから、全体の結果を出す場合そう複雑にはならないであろう。

このような割当が可能であるために、 $n$  はどれほどであれば良いか。いま、 $k$  個のサンプルは前のとおり比例割当をするものとし、 $p$  の小さなところには  $kp$  のサンプルを割当ててのものとする。そうすると、前と同じように、

$$n \left\{ p - 3 \sqrt{\frac{N-n}{N-1} \frac{p(1-p)}{n}} \right\} \geq 2kp$$

でなくてはならない。 $k$  と  $p$  との関係を図示すれば、図5のとおりで

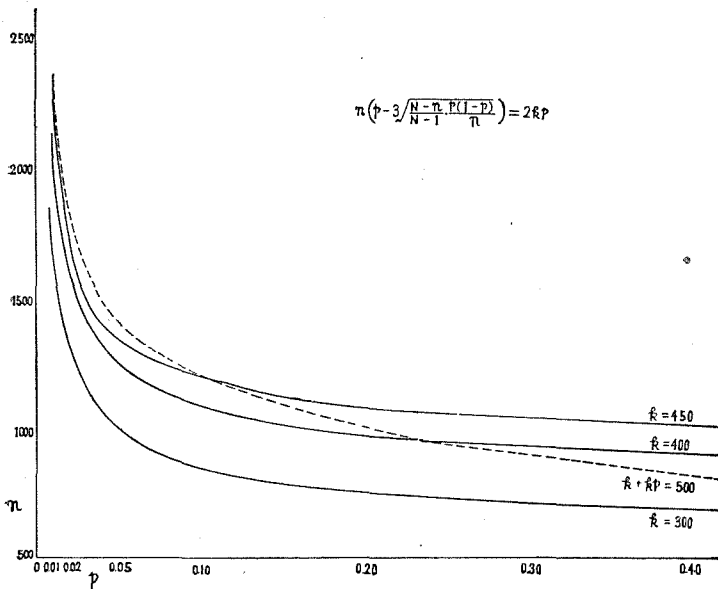


図5

ある。ここでも、 $n$  を 2,000 程度とれば良いことが明らかである。また、 $k+kp=500$  の関係があるとき、すなわち、全サンプルを 500 と決めたときの関係も同時に示しておいた。

以上を総合して、2,000 程度を第 1 次サンプルとして抽出すればまずじゅうぶんであるかと思われる。2,000 のサンプルを抽出し、これをカードに取り、層別を施すという操作は実際上困難なことではない。

さて、調査対象は 17,890 人である。これから 2,000 人を抽出するには、等間隔抽出 (systematic sampling) を行った。それは、この抽出の精度が良いこと (「読み書き能力調査」<sup>\*</sup> におけるサンプリングによって証明された) と、抽出に便利なこととによる。われわれは実際には出発番号をランダムに決め、抽出間隔 8 をもって、配給台帳に基いて抽出した。抽出には対象外の者も入れて数えて行き、当たった者が対象外ならばこれを捨て、また 8 の間隔をもって数えて行った。この方法は抽出の速度がきわめて大きいからである。なお、初めから対象外の者を除いて数えて行くことは煩雑であり、間違いも起しやすい。ちなみに、白河市の平均家族人数は 4.9 人であるから、抽出間隔 8 はこれと同調していない。つまり、たとえば一度世帯主に当たると、次々と世帯主に当たるといようなことがない。もし、同調すると、等間隔抽出法はひどい片寄りを生ずる。これでは、等間隔抽出法を、等しい抽出確率を与えて抽出するサンプリングの代用として使う意味がなくなってしまう。この点は注意しなくてはならない。

以上のようにして、第 1 次サンプル 2,184 を得た。第 1 次サンプルの構成を母集団 (population) と比較して示せば次のようである。次の表の population は、17,890 の調査対象を 2,184 とした場合の人数を示す。

\* 読み書き能力調査 (literacy test) は、1948 年の夏、日本全国 270 地点、被調査者 (サンプル) 21,008 人について行われた大規模な調査である。読み書き能力調査委員会が連合軍総司令部民間情報教育部の協力を得て行い、その目的は国語・国字問題の解決と国語教育の改革のための資料を得ることであった。その詳細は、読み書き能力調査委員会編「日本人の読み書き能力」東京大学出版部、1951 年 を参照。



性 年 齢	男		女	
	sample	population	sample	population
15—19	228	203	176	194
20—24	132	149	205	169
25—29	137	116	140	147
30—34	86	94	107	115
35—39	77	89	105	115
40—44	85	93	99	104
45—49	99	85	79	88
50—54	79	69	81	71
55—59	65	63	60	59
60—64	37	43	45	47
65—69	29	28	33	38
計	1054	1037	1130	1147

試みに、サンプルの構成と母集団のそれとについて  $\chi^2$  検定を行うと、

$$\chi^2=29.8 \quad \text{自由度 } 21$$

となる。これより大きい  $\chi^2$  を得る確率は 10% 程度である。2,184 のサンプル (1,054+1,130) は、母集団からのランダム・サンプルと考えられる程度のものであって、ひどい片寄りを与えていないものと思われる。

(iv) 第2次サンプルの抽出

上に示したような各層に属する第1次サンプルから、いよいよ第2次サンプルを抽出する段階になる。このような 性×年齢 という層へサンプルを割当ててのには比例割当法によるのであるから、各層へのサンプル数は、

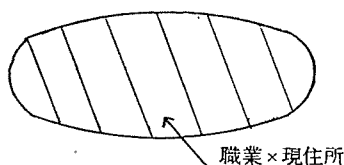
$$m_i = m p_i \quad m = 500$$

によって与えられる。 $m_i$  は次の表が示すとおりである。この表によって明らかに  $n p_i \geq m_i$  は満足されている。

年齢	15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	計
男	48	34	27	21	20	21	19	16	15	10	6	237
女	45	39	34	26	26	24	19	16	14	11	9	263
計	93	72	61	47	46	45	38	32	29	21	15	500

各層から  $m_i$  だけのサンプルを抽出するには、やはり等間隔抽出法によったが、このとき、各層を第2次的に層別した。つまり、各層の中を職業によって分け、さらに現住所の性格（町を単位として、町の性格により、

中心部商業地帯, 非中心部商業地帯, 住宅地帯, 農業地帯の4段階とした) によって分け, これを1列に配列し, このなかから等間隔にほしだけの



性×年齢は一定

図 6

サンプルを抽出することにした。このときの抽出は完全な層別抽出法ではない。なぜならば, 第2次層への割当数は母集団の比率によってなされるのではなく, 第1次サンプルの比率によってなされるからである。

このようにするとき, 精度を示す分散はどうなるであろうか\*. われわれの場合は, ほぼ, 次に示す式によって与えられる。

$$S^2 = \frac{\sigma^2}{m} - \frac{1}{m} \left( \sum p_i (\bar{x} - \bar{x}_i)^2 + \frac{3}{4} \sum \sigma_{bi}^2 p_i \right)$$

\* このサンプリング法による精度の計算

1) 層別抽出による分散 (比例割当)

$i$ 層の母集団の大きさ	$N_i$
" 分散	$\sigma_i^2$
" 平均	$\bar{x}_i$
" サンプルの大きさ	$m_i$
母集団の分散	$\sigma^2$
" 平均	$\bar{x}$
層の数	$R$

$$\sum_{i=1}^R N_i = N$$

$$\sum_{i=1}^R m_i = m$$

$$\frac{N_i}{N} = p_i$$

また,  $m_i = m p_i$  とする。このとき,

$$\bar{x} = \frac{1}{m} \sum_{i=1}^m x_i$$

$\bar{x}$  の分散  $S^2$  は近似的に,

$$S^2 = \frac{N-m}{N-1} \frac{\sigma^2}{m} - \frac{N-m}{N-1} \frac{1}{m} \sum p_i (\bar{x}_i - \bar{x})^2$$

によって与えられる。以上の第2項が層別の効果である。

われわれの場合、性×年齢の層別についてはこのような精度を得る。ただし、 $\bar{x}$ は推定比率（調査項目に対する反応形を示す比率）である。「重ね抜き」を行っても、普通の層別抽出法と同一の分散を示すことが証明されているからである。

## 2) 第2次層別による層別の効果

第1次サンプルを層別する。いま第 $i$ 層を固定して考えて行くことにする。第1次サンプルを層別したとき、この層の数を $R_i$ とし、第 $i$ 層中第 $j$ 層の母集団

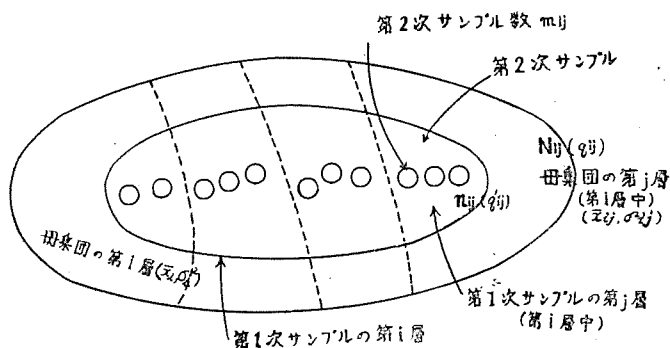


図 7

の大きさを $N_{ij}$ とする。 $\sum N_{ij} = N_i$ ,  $\frac{N_{ij}}{N_i} = q_{ij}$ とする。 $q_{ij}$ のサンプルの値（第1次サンプル）を $q'_{ij}$ とする。

$$q'_{ij} = \frac{n_{ij}}{n_i}$$

$n_i$ は第1次サンプルの第 $i$ 層に属しているものの数、 $n_{ij}$ は第 $i$ 層中の第 $j$ 層に属しているものの数である。もちろん、 $n_i = \sum_{j=1}^{R_i} n_{ij}$ である。 $q'_{ij}$ の分散は近似的に

$$\frac{N_i - n p_i}{N_i - 1} \cdot \frac{q_{ij}(1 - q_{ij})}{n p_i} = \frac{q_{ij}(1 - q_{ij})}{n p_i}$$

と見積ることができる。

さて、これから $m$ 個のサンプルを抽出するのに、層を1列に並べ、等間隔に抽出するので、 $j$ 層へのサンプルの割当はほぼ $m_i q'_{ij} = m_{ij}$ に等しくなる。

このようなサンプルから、推定値 $\bar{x}_i = \frac{1}{m_i} \sum_{j=1}^{R_i} x_{ij}$ を作ると、この分散はどうか。  $j$ 層の母集団の平均を $\bar{x}_{ij}$ 、分散を $\sigma_{ij}^2$ 、全体の母集団の平均を $\bar{x}_i$ 、分散を $\sigma_i^2$ とする。

$$\bar{x}_i = \frac{1}{m_i} \sum_{l=1}^{m_i} x_{il} = \sum q'_{ij}$$

$\bar{x}'_{ij}$  は  $j$  層のサンプル平均である。もちろん、 $E(\bar{x}_i) = \sum q_{ij} \bar{x}_{ij} = \bar{x}_i$  である (不偏推定値)。

次に  $\bar{x}_i$  の分散を考えてみよう。なお、以後、煩雑をさけるため、一応  $i$  の指標を落して考えて行くことにする。

$$\begin{aligned} & E(\bar{x} - \sum q_j \bar{x}_j)^2 \\ &= E(\sum q'_j \bar{x}'_j - \sum q_j \bar{x}_j)^2 \\ &= E(\sum q'_j \bar{x}'_j)^2 - (\sum q_j \bar{x}_j)^2 \\ &= E(q'_j \bar{x}'_j)^2 - (\sum q_j \bar{x}_j)^2 + E(\sum \sum_{k \neq j} q'_k q'_j \bar{x}'_k \bar{x}'_j) - \sum \sum_{k \neq j} q_k q_j \bar{x}_k \bar{x}_j \\ &= \sum E(q'_j \bar{x}'_j)^2 - q_j^2 \bar{x}_j^2 + E(\sum \sum_{k \neq j} (q'_j - q_k)(q'_j - q_j) \bar{x}'_k \bar{x}'_j) \\ &\quad + \sum \sum_{k \neq j} q_k q_j \bar{x}_k \bar{x}_j - \sum \sum_{k \neq j} q_k q_j \bar{x}_k \bar{x}_j \\ &= \sum_{j=1}^R E(q'_j \bar{x}'_j - q_j \bar{x}_j)^2 + E(\sum \sum_{k \neq j} (q'_k - q_k)(q'_j - q_j) \bar{x}'_k \bar{x}'_j) \end{aligned}$$

第1項の  $\sum$  のうち

$$\begin{aligned} & E(q'_j \bar{x}'_j - q_j \bar{x}_j)^2 \\ &= E(q'_j \bar{x}'_j - q'_j \bar{x}_j + q'_j \bar{x}_j - q_j \bar{x}_j)^2 \\ &= E(q'_j \bar{x}'_j - q'_j \bar{x}_j)^2 + \bar{x}_j^2 E(q'_j - q_j)^2 \end{aligned}$$

さて、ここでふたたび  $i$  の指標を入れ、(iii) の結果を用いれば (この場合と  $N_{ij}$  から直接  $m_{ij}$  を抽出した推定値を作る場合と分散が同一であるということを用いる)。

$$\begin{aligned} & E q'_{ij}{}^2 \frac{N_{ij} - m_{ij}}{N_{ij} - 1} \frac{\sigma_{ij}^2}{m_{ij}} + \bar{x}_j^2 \frac{N_i - n p_i}{N_i - 1} \frac{q_{ij}(1 - q_{ij})}{n p_i} \\ &= E q'_{ij} \frac{N_{ij} - m_{ij}}{N_{ij} - 1} \frac{\sigma_{ij}^2}{m_i} + \bar{x}_j^2 \frac{N_i - n p_i}{N_i - 1} \frac{q_{ij}(1 - q_{ij})}{n p_i} \\ & \frac{N_{ij} - m_{ij}}{N_{ij} - 1} \doteq 1 \text{ と考え、 } \frac{N_i - m_i}{N_i - 1} \text{ と近似すれば、上の式は} \\ & \doteq \frac{N_i - m_i}{N - 1} \frac{1}{m_i} q_{ij} \sigma_{ij}^2 + \bar{x}_j^2 \frac{N_i - n p_i}{N_i - 1} \frac{q_{ij}(1 - q_{ij})}{n p_i} \end{aligned}$$

となる。

次に、第2項について考えると、近似的に成立する

$$E(q'_{ij} - q_{ij})(q'_{ik} - q_{ik}) = - \frac{N_i - n p_i}{N_i - 1} \frac{q_{ij} - q_{ik}}{n p_i}$$

という関係を用いれば、第2項は

$$\begin{aligned} & - \frac{1}{n p_i} \frac{N_i - n p_i}{N_i - 1} \sum_k \sum_{j \neq k} q_{ik} q_{ij} \bar{x}_{ik} \bar{x}_{ij} \\ &= - \frac{1}{n p_i} \frac{N_i - n p_i}{N_i - 1} \sum_k q_{ik} \bar{x}_{ik} \sum_{j \neq k} q_{ij} \bar{x}_{ij} \end{aligned}$$

$$\sum_{j \neq i} q_{ij} \bar{x}_{ij} = \bar{x}_i$$

したがって、

$$\sum_{j \neq k}^R q_{tj} \bar{x}_{tj} = \bar{x}_i - q_{tk} \bar{x}_{tk}$$

を用いれば

$$\begin{aligned} &= \frac{N_i - np_i}{N_i - 1} \cdot \frac{1}{np_i} \left( -\bar{x}_i \sum_k q_{tk} \bar{x}_{tk} + \sum_k q_{tk}^2 \bar{x}_{tk}^2 \right) \\ &= \frac{N_i - np_i}{N_i - 1} \cdot \frac{1}{np_i} \left( -\bar{x}_i^2 + \sum_k q_{tk}^2 \bar{x}_{tk}^2 \right) \\ &= \frac{N_i - np_i}{N_i - 1} \cdot \frac{1}{np_i} \left( -\bar{x}_i^2 + \sum_k q_{tk} \bar{x}_{tk}^2 - \sum_k q_{tk} \bar{x}_{tk}^2 + \sum_k q_{tk}^2 \bar{x}_{tk}^2 \right) \\ &= \frac{N_i - np_i}{N_i - 1} \cdot \frac{1}{np_i} \left( \sigma_{bi}^2 - \sum_k q_{tk} (1 - q_{tk}) \bar{x}_{tk}^2 \right) \end{aligned}$$

ただし、 $\sigma_{bi}^2$  は  $i$  層中の各層間の外分散 (between の variance) である。

以上を総合すれば、 $\bar{x}_i$  の分散  $S_i^2$  は、近似的に

$$\begin{aligned} S_i^2 &= \sum_j \frac{N_i - m_i}{N_i - 1} \cdot \frac{1}{m_i} q_{ij} \sigma_{ij}^2 + \sum_j \bar{x}_{ij}^2 \frac{q_{ij}(1 - q_{ij})}{np_i} \cdot \frac{N_i - np_i}{N_i - 1} \\ &\quad + \frac{N_i - np_i}{N_i - 1} \cdot \frac{1}{np_i} \sigma_{bi}^2 - \frac{N_i - np_i}{N_i - 1} \sum_k \bar{x}_{tk}^2 \frac{q_{tk}(1 - q_{tk})}{np_i} \\ &\doteq \frac{\sigma_i^2}{m_i} - \sigma_{bi}^2 \left( \frac{1}{m_i} - \frac{1}{np_i} \right) \end{aligned}$$

となる。

つねに  $\frac{1}{m_i} > \frac{1}{np_i}$  であるから、この層別によって第2項の分だけ分散が小となる。

$$S_i^2 \doteq \frac{\sigma_i^2}{m_i} - \sigma_{bi}^2 \left( \frac{1}{m_i} - \frac{1}{np_i} \right) \text{ を考えてみると、もし } \sigma_{bi}^2 = 0 \text{ なら}$$

ば効果は0となる。また、 $m_i = np_i$  においても同様である。母集団の比率  $q_{ij}$  がわかっており、 $q'_{ij} = q_{ij}$  となしうるならば、

$$S_i^2 \doteq \frac{\sigma_i^2}{m_i} - \frac{\sigma_{bi}^2}{m_i}$$

となり、最も効果がある場合となる。 $-\frac{1}{np_i}$  の項は  $q'_{ij}$  が確率変数であるために起る損失である。

さて、それで全体の推定値  $\bar{x} = \sum p_i \bar{x}_i$  はどうなるか。これは、もちろん  $\bar{x}$  の片寄りのない推定値である。このときの分散  $S^2$  は、近似的に、

$$\begin{aligned} S^2 &= \sum_{i=1}^R p_i^2 S_i^2 \\ &= \sum_{i=1}^R \frac{N_i - m_i}{N_i - 1} \cdot \frac{1}{m_i} p_i^2 \sigma_i^2 - \frac{N - n}{N - 1} \sum \left( 1 - \frac{m_i}{np_i} \right) \frac{p_i^2 \sigma_{bi}^2}{m_i} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 &= \frac{\sigma^2}{m} - \frac{1}{m} \sum p_i (\bar{x} - \bar{x}_i)^2 - \sum \left(1 - \frac{m_i}{np_i}\right) \frac{\sigma_{bi}^2}{m} p_i \\
 &= \frac{\sigma^2}{m} - \frac{1}{m} \left( \sum p_i (\bar{x} - \bar{x}_i)^2 + \sum \left(1 - \frac{m_i}{np_i}\right) \sigma_{bi}^2 p_i \right)
 \end{aligned}$$

によって与えられる。層別の効果は第2項によって与えられている。すなわち、完全な層別抽出法でなくとも、一般に効果のあることが保証された。

われわれの場合は  $\frac{m_i}{np_i} = \frac{1}{4}$  であるから

$$S^2 = \frac{\sigma^2}{m} - \frac{1}{m} \left( \sum p_i (\bar{x} - \bar{x}_i)^2 + \frac{3}{4} \sum \sigma_{bi}^2 p_i \right)$$

と表わすことができる。

#### (v) 結 論

以上の理論的考察の結果、各層のなかをさらに層別し、そこからほしいだけのサンプルをランダムに抽出するという方法を採用ことにした。これによって、分散を相当小さくすることができ、500 のサンプルも、層別しないときに比べて、いっそう大きなサンプルに相当する精度を持たせることができるであろう。言いかえれば、(ii) で述べたよりもさらに良い精度を得ることになるであろう。

以上は白河市におけるサンプリングであるが、村については、五箇村は 80 人、金山村は 100 人を、それぞれ物資配給台帳から等間隔抽出法によって抽出した。

#### (2) 調査の結果から見たサンプリングの精度

以上述べたようなサンプリングの精度、つまり、サンプルから母集団の模倣をどの程度推定しうるかということについて、実際に調査した結果から考察してみると、次に述べるように、サンプリングの結果はまず満足すべきと思われる。

われわれの調査のおもな目的は共通語を話す度合について調べることであるから、この共通語を話す度合を表わす「音韻の点数」(4, 特に 4.1 を参照)、つまり、音韻の方言的特徴に関する 27 個の項目のうち何項目共通語の形で反応するか、その項目の数をもとにしてサンプリングの精度を計算してみた。もちろん、推定は母集団の平均、すなわち、サンプルの平

均の信頼幅についてなされる。

まず、層別の効果について考えよう。そのためには各層の分散を計算しなければならないが、重ね抜きの際に考えた層に属するサンプルは少なすぎるので、分散の推定は意味がないと考えられる。そこで、性×年齢の層別についてだけ考えることにする。

層別をしたときの分散は

$$\sigma_{st}^2 = \frac{N-n}{N-1} \frac{1}{n} \sum_{i=1}^R p_i \sigma_i^2$$

である。ただし、

$N$  母集団の大きさ

$n$  サンプルの大きさ

$\sigma^2$  層の分散

$$p_i = \frac{N_i}{\sum N_i}, \quad N_i \text{ } i \text{ 層に属する母集団の大きさ}$$

ところで、

$$N = 17,890$$

$$n = 476 \quad (500 \text{ 人のうち実際に調査できた者。47ページ参照})$$

であるから、

$$\sigma_{st}^2 = 0.03236$$

$$\sigma_{st} = 0.1799$$

となる。

さて、層別しないときの分散  $\left( \sigma_r^2 = \frac{N-n}{N-1} \frac{\sigma^2}{n} \right)$  は、

$$\sigma_r^2 = 0.03854$$

$$\sigma_r = 0.1963$$

となる。

そこで、層別の効果は、標準偏差の意味で、

$$\frac{\sigma_r - \sigma_{st}}{\sigma_r} = 0.03$$

となる。つまり、層別の効果は 8% あったことになる。共通語を話す度合に関して層別の効果が比較的少なかったのは意外である。

さて、このときサンプルの平均の変異係数は

$$\frac{\sigma_{st}}{\bar{x}} = \frac{0.1799}{19.6} = 0.01$$

ただし、 $\bar{x}$  は母集団の平均の推定値

となり、サンプリングの精度は相当高いと言えるであろう。なぜならば、信頼幅を示す相対精度が 2% 以下となるからである。

$$k \frac{\sigma_{st}}{\bar{x}} = 1.96 \times \frac{0.1799}{19.6} = 0.01799$$

ただし、 $k$  は信頼幅 95% で、1.96 と考えて良い。

以上により、サンプリングの結果はまず満足すべきものと思われる。

次に、新語の理解度について層別の効果を調べてみると、次に述べるように、かなり効果のあったことが知られる。この場合、正しく理解していると認められたものを「正しい反応」とし、その正しい反応の数をもって新語の理解度と考える。

まず、カメラ、バッテリー、スタイル・ブックという 1 組の新語については、

$$\sigma_r^2 = 0.937, \quad \sigma_{st}^2 = 0.213$$

したがって、

$$\frac{\sigma_r - \sigma_{st}}{\sigma_r} = 0.48$$

となる。

次に、DDT、インフレ、PTA という一組の新語については、

$$\sigma_r^2 = 0.273, \quad \sigma_{st}^2 = 0.011$$

したがって、

$$\frac{\sigma_r - \sigma_{st}}{\sigma_r} = 0.20$$

となる。層別の効果はそれぞれ 48%、20% となって、それはかなり大きいと認められる。

以上のような数値的な事からを離れても、われわれの採った層別の方法は要因分析の点で大いに効果があったと思われる。たとえば、年齢によって層別したことは、年齢の高いところで居住経歴——それは共通語を話す度合に対して強い影響力を持っている——が複雑になっていることから、意味があったと言いうる。年齢に限らず、その他の文化的条件についても同様なことが言いうる。

しかし、実際の調査では調査不能者が全体で約 5% あったので、得られ



た結果は近似的なものと考えられる。つまり、わずかではあるが、サンプルからの推定値に片寄りが生じているからである。しかし、これも 0.1% - 0.2% の大きさで見積られるので、上に得た結論はまず妥当なものと思われる。

### (3) 調査の際の在宅率

本調査実施の際に1日7名の被調査者を訪問すること（上のiiを参照）が調査員にとって可能かどうかを知るために、在宅者率を見積ってみた。すなわち、前調査の時（1949年10月6日）に次のような在宅率の調査を試みたところ、予告なしに訪問するときは、約30%の不在者が見込まれるということになった。

この調査は、まず、白河市を、A. 主として商業を営んでいる町、B. 住宅の多い町、C. 農業の盛んな町の三つの層に分け、それぞれの層に属する合計44の町からランダムに抽出したサンプル99名について行った。いま、ひとり当りの在宅率を在宅者数と家族人数との比をもって表わすことにして、まず、家族人数と調査時の在宅者数との相関関係を見れば図8のとおりである。

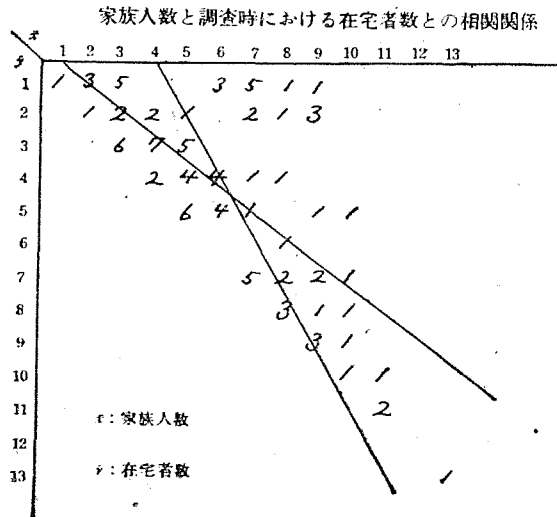


図8

在宅者数に対する推定の分散を求めれば

$$V(\tilde{y}) = \frac{\sigma_v^2(1-\rho^2)}{n} = \frac{7.78(1-0.684^2)}{99} = 0.042$$

となる。次に、 $x$  から  $y$  への回帰直線は

$$\tilde{y} = 0.763x - 0.435$$

となる。さて、在宅率は、在宅者数と家族人数との比をもって表わされるから、上の回帰関係を用いて推定すると、在宅者率 ( $A$ ) は、

$$A = \frac{3.3 \pm 0.4}{4.9} = 0.67 \pm 0.08 \text{ (信頼度95\%)}$$

となる。ただし、

4.9……母集団の平均家族人数

3.3……回帰推定値

0.4…… $2\sqrt{V(\tilde{y})}$

これにより、一応、本調査の場合には 30% の不在者が予想された。

では、本調査でこれだけの不在者を見込まなければならないだろうか。本調査では、あらかじめ通知を出しておくし、しかも、本調査を行う12月は農閑期に入っており、さらに、不在者は時を改め日を改めて何度も追及されるので、実際には、不在のために調査の行えない者を30%も出すことは考えられない。

#### (4) 調査不能者の分析

2.3 の (1) で述べたように、細かく組んだサンプルであるだけに、調査不能者をなるべく少なくしなければならない。しかし、実際には、移転、死亡、重症、看病、精神的・肉体的不具、長期旅行などの不在ために、どうしても調査できないサンプルがかなり出る。それを考えて、われわれは予備のサンプルを用意することにした。実際に用意することのできた予備サンプルは116であった。

さて、実際には、調査前にやむをえない理由で調査不能と認められた者が30名(6%)あった。そこで30名だけは予備のサンプルを使ったが、調査が始まってからこの30名以外にも調査不能者が出てきて、それに対するサンプルの補充は実際上困難となり、けっきょく500名中24名(4.8%)

の調査不能者が出た。これは、不在者だけで約 30% と見込まれたのに比べてきわめて少ないと言わなければならない。

ところで、サンプルの補充には、性、年齢、職業、現住所の四つの標識について同一の層に属している者を抽出するようにした。

なお、24名の調査不能者とは、集計、整理、分析の対象になりえない者をさす。つまり、調査不能者には、転住などのために訪問することのできなかった者から、訪問しても面接のできなかった者、さらに面接に成功しても質問を拒否して集計、整理、分析の対象になしえなかった者までが含まれる。

五箇村、金山村では調査日が1日と限られたりしたために、補充をじゅうぶん行うことができなかった。したがって、白河市に比べて比較的多くの調査不能者を出した。

#### 調査不能者

白 河 市	24名 (4.8%)
五 箇 村	6名 (7.1%)
金 山 村	15名 (15.6%)

#### 白河市において調査前から調査不能であった者の構成

性	年 齢												計
	15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69		
男	1	5	2	1	2		1	1			1	14	
女	1	4	2	2	1		1	1	3		1	16	
計	<u>2</u> 11	<u>9</u>	<u>4</u> 7	<u>3</u>	<u>3</u> 3	<u>0</u>	<u>2</u> 4	<u>2</u>	<u>3</u> 5	<u>0</u>	<u>2</u>	30	

理由 性	理由										計
	拒否	住不 居明	転出	病氣	入学「幽霊」	出せ かぎ	死亡	不具	出張	行不 く明 え	
男		2	4	1	1	1		1	2	1	14
女	1	3	5	4			1		2		16
計	1	5	9	5	1	1	1	1	4	1	30

# 本調査における調査不能者の構成（白河市）

性	年 齢										計
	15～19	～24	～29	～34	～39	～44	～49	～54	～59	～64	～69
男		1	1	1	2			2	1	3	
女	2	4	3	1				2	1		
計	2	5	4	2	2	0	0	4	2	3	0

性	理 由									計
	不具 ※1	出張	拒否	手落ち ※2	不在	転出	病者 看護 人護	病気		
男	4	4	1		2					11
女	1	1	2	1	3	3	1	1		13
計	5	5	3	1	5	3	1	1		24

※1 低能、めくら、つんぼ

※2 通知が届いていなかったため

## 五箇村における調査不能者の構成

年 齢	15—19	29—29	30—39	40—49	50—59	60—69	計
人 数	0	3	0	1	2	0	6
理 由	病気	住所不明	転出	入植	不具		計
人 数	2	1	1	1	1		6

## 金山村における調査不能者の構成

年 齢	15～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	計		
人 数	3	3	2	1	4	2	15		
理 由	出勤	出張	出せ かき	芝 りか	不病 具気	不在	拒否	其他 の	計
人 数	3	2	2	2	1	1	1	15	

### 3. 白河市および附近の農村の社会的・言語的背景

#### 3.1 社会的景背

##### (1) 白河市および附近の農村の地理的背景

まず、西白河郡全体の地理的環境を概観することになろう。

西白河郡は福島県の西南にあって、東は東白川郡および石川郡、西は南会津郡、北は岩瀬郡に隣接し、南は栃木県に接している。

西白河郡の総面積は 560.29 平方キロ、そのほとんどの地域が阿武隈山系の山によって占められている。川はその山間の台地を東へ流れている。阿武隈川は郡の西部山地から出る谷津田川その他の支流を合わせながら、郡の中央部から東北部を流れている。そのほか、北部に泉川、南部に杜川が平行して東へ流れ、阿武隈川に合流する。この阿武隈川および杜川に接する地域は狭い盆地をなし、わずかに田畑が開かれ、米作が行われている。

このような位置にある西白河郡のほぼ中央、阿武隈本流と谷津田川とが合する地帯に集落をなしているのが白河市である。白河市はわれわれが調査をした年（昭和24年）に隣の大沼村を合併して市制をしいたばかりである。

西白河郡には、行政的に次のように1町16か村がある。次のページの図9を参照。

矢吹町；西郷村、白坂村、古関村、五箇村、社村、金山村、釜子村  
小野田村、川崎村、吉子川村、滑津村、関平村、中畑村、三神村  
小田川村、信夫村。

もともと西白河郡は東白川郡とともに白河郡（白川郡）として行政的に一つであったが、明治12年（1888）分離して成立したものである。今の西白河郡は大部分旧幕時代の白河領に属する。松平定信（宝暦8年〔1758〕



～文政12年〔1829〕が儒臣広瀬典をして編集せしめた「白河風土記」によって、当時の白河藩の領域と現在の西白河郡のそれとの関係を地図で示せば図 10 のとおりである。なお、五箇村<sup>ボソフ</sup>の細倉<sup>ホコクラ</sup>は高田領に属し、小田川村、川崎村の一部<sup>オオクダガワ</sup>（大田川<sup>オオタガハ</sup>、踏瀬<sup>フミセ</sup>）などは天領花輪代官領に属する。



この郡内1町16か村のうち、白河市（大沼を含む）に隣接する村は、五箇、川崎、関平、小田川、古関、白坂、西郷の7か村である。われわれは、これら7か村に金山村を加えた8か村を下調査の時に見て回ることができた。

いま、そのとき得た資料によって各村の関係を記せば図11の示すようである。まず、人口と戸数とを示す。を参照。

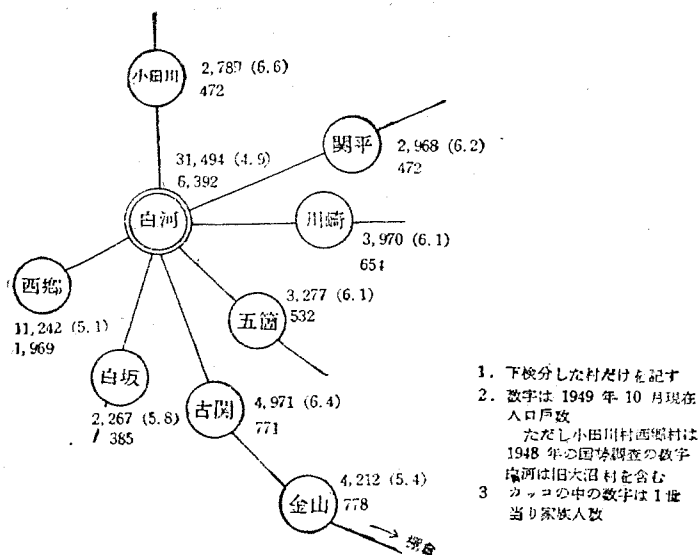


図 11

これらの村村は、明確な一線によっていくつかのグループに分けられるほどの違いは、社会構造の上でも、習俗の上でも、言語の上でも示していない。ただ、次の点が注目される。



1. 五箇、関平の2か村は郡内第一の穀倉で、集落構造の点で山間部の農村と異なる。

2. 古関、金山、社の3か村は相互に村民の交流があり、一つのグループをなす。

3. 白坂、古関、金山の3か村は、関東地方と、地理的にも直接接し、密接な関係を持っている。

4. これらの村は、旧白河領と領外との二つのグループに分けられる。

旧白河領——五箇、関平、川崎の一部、小田川、西郷、白坂、古関の一部

旧白河領以外——金山、川崎の大部分、古関の一部

5. 川崎、小田川、西郷の一部、旧大沼は家屋の建築様式および生活様式一般が、白河市およびそれより南の村と異なる（佐久間鼎氏、須釜善勝氏の談話による）。

## （2）白河市の社会的背景

### （i）白河市の歴史

「白川」の地名が史上に現れるのはきわめて古いようである。成務天皇のころ（西暦131—190）この地域一帯に白川国が設けられ、蝦夷防衛のとりで置かれたと言う。白川国の中心地は現在の白河市とも、あるいは白河関跡とも、今のところ論証しえない。大化の改新後は陸奥国に入り、白河郡となった。神亀5年（724）に白河軍団が置かれたのは白河市附近らしい。平安時代には白河領として藤原信頼の知行地となり、また平重盛が領したこともあった。このように、古くから白河は関東から東北への玄関口として、東北支配の重要な政治上、軍事上の拠点であった。

白河に城が築かれたのは、南北朝のことと思われる。すなわち「白河風土記」に、南北朝時代に結城親朝が「今ノ地へ城ヲ築キ小峰城ト名」づけた、とある。小峰城は白河駅裏にその跡をとどめている。普通白河城と言われているのはこの小峰城のことである。

白河には小峰のほかに旧白河城がある。旧白河城は、鎌倉時代に地頭職に任ぜられた結城朝光の孫祐広が、大沼村字<sup>ナガノ</sup>堀目山（白河市の東方2キロ）に構えたものである。

小峰城は、結城氏が秀吉に追われて空城になったり、会津を領した蒲生氏郷、上杉景勝、蒲生秀行の所屬となったりして、その城主はしばしば変った。江戸時代にも、丹羽氏、松平氏、阿部氏、本多氏がかわるがわる封ぜられている。白河が城下町として発展し始めたのは寛永6年（1629）丹羽長重が徳川氏に封ぜられ、この地に城を構えたころかららしい。楽翁公松平定信が寛保2年（1742）越後の高田領から移って来て、町を整備してからは著しい発展を見せた。「白河風土記」には、

郭内南北ノ街ハ北ヲ首トシ南ヲ尾トス西東ノ街ハ地ニヨリテ首尾齊シカラス総シテ本城ノ四方ハ西ヲ会津町トシ北ヲ尾回ト云東ヲ横町ロトシ南ヲ大手ロトス曲輪ノ四方凡六間ヲ開キ市塵ニ通スト町の規模を示している。

松平氏ののち、文化6年（1809）に阿部氏が封ぜられたが、慶応3年（1867）<sup>ナガツ</sup>棚倉へ移封を命ぜられ、白河城は空城となった。

明治以後は、明治元年（1868）に白河県が置かれ、明治4年（1871）二本松県治となり、さらに、福島県治となった。明治12年（1879）には郡制がしかれ、西白河郡となり、白河に郡役所が置かれた。明治22年（1889）町制をしき、昭和24年（1949）に至って、大沼村を合併して白河市となった。

## (ii) 白河市の集落構造

白河市の集落は奥州街道に沿って形成された。この街道をはさんだ<sup>テンジン</sup>天神町、<sup>ナカマチ</sup>中町、<sup>モトマチ</sup>本町、<sup>ヨコマチ</sup>横町、<sup>タナマチ</sup>田町が最も発達している。これらの町は「表五町」あるいは「通五町」と称せられる。表五町のうち天神町は商業が最も盛んで、他の藩、他の都市との経済的な連絡に当たっていた。本町には、参勤交替の際の本陣、脇本陣が置かれ、さらに、<sup>はたご</sup>旅籠、女郎屋などもあった。現

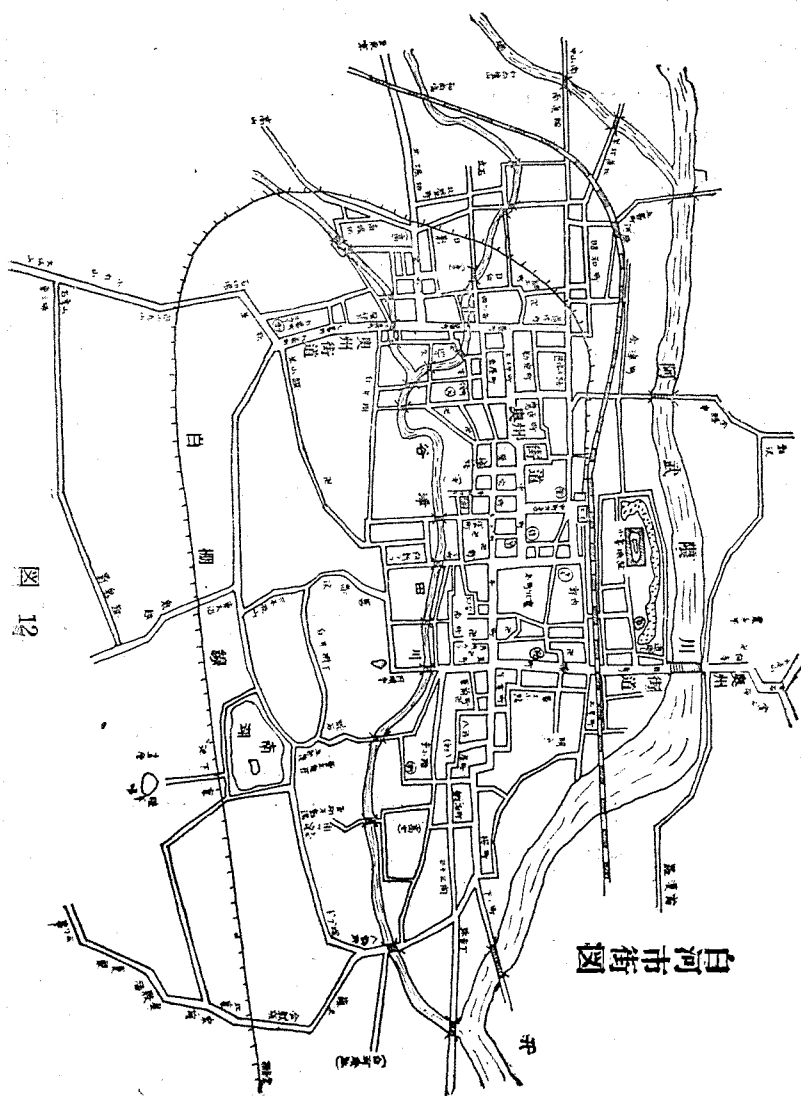


圖 12

在、駅前<sup>サクラマチ・ヘンダマツ</sup>の最も繁華な町になっている中町は、天神町と本町とにはさまれ、商家も活発でなく、「中町中だるみ」と称せられるほどであった。しかし、鉄道の開通後は天神町と中町とはその地位が逆になった。

現在の県道に沿っている櫻町<sup>ムカイシンゾウ</sup>、年貢町は、おもに郡部との連絡地の役割を果たしていた。この二つの町には昔馬市が立った。谷津田川を越えて町が広がったのはまだ新しい。向新蔵に本町の旅館遊郭が移ったのは明治20年ころの火災ののちである。

今日の町の組織および規模は次に示すもの—「白河風土記」による—とほぼ同一で、たいした変化を見せていない。

門 口 名	町 名	方 向	町の規模(通り)	家屋・戸数
会津門口	会津町	表町	東ヨリ	侍屋敷
		南六条	小一番町 <sup>間 間 尺</sup> 124×(3.4~3.3)	
			一番町 250×5	
			二番町 229.3×5.1	
			三番町 207.3×(6~5)	
			四番町 197×(5.1~6.5)	
			五番町 174×(5.3~5.2)	
		堅町東西	301×(5.1~4.2)	侍屋敷
	尾廻	一条		今へ人家ナシ
道場門口	道場小路	東西一条	673×(2.1~4)	侍屋敷
	袋町	"	368×5.2	白河七小路ノ一
			155.3×4.1	侍屋敷
	鷹匠町	"	138×1.5	今袋町トハ云ハ
	勘定町	"	123.2×1.5	家人屋敷
	仁井町	表町南北	東ヨリ	
		三	一番丁 164.1×(4~2)	"
			二番丁 253×(5.5~5.4)	"
			三番丁 253×(4.4~4.5)	"
		堅町東西	152.5×(4~4.5)	"
		一条		
	眞船新町	東西一条	78×1.3	"
	北新町	南北一条	98×1.3	"
	細工町	東西一条	134.5×3	侍屋敷
		南北一条	76.4×4.2	"
	日向新町	東西一条	115×2	"

門 口 名	町 名	方 向	町の規模(通り)	家屋・戸数
	日陰新町 片登町	東西一条 "	103×1.5 40×2	侍屋敷 家人屋敷 片岡四郎カッ云
追手口 西南ノ町 表一 裏二條	表町 中町	東 西	178×6	118戸 町役人 5軒 高札物 駅亭アリ 132戸 町役人 3軒
	天神町	"	225×5.2	40戸 町役人 2軒 72戸 家人屋敷 "
	新町	南 北	一番丁 70×6 二番丁 98×6 四ツ谷 80×2 登り町 56×3.1 高山 64×2 三番丁 132×6 七番丁 105×6 九番丁 138×6	24戸 足輕堂御殿 居ス 21戸 45戸
	裏町 大工町	東 西	160×4.3	61戸 久保町ト云フ。 以前七小路ノ一 久保小路デアル
			東蓮寺横町 43.3×2	28戸 大工町 露町
	愛宕町 金屋町	" "	158×4.2 117×5	78戸 28戸 町役人 1軒
	道場町	南 北	53.3×2.5 金勝寺町 飯沢村 東西3丁ニ互ル	30戸 2戸 數十軒
	手代町	東西二条	北 41×1.5 南 48×1.5	家人屋敷 "
	八幡小路	南北東 西二条	44×3 北 39×2 南 32×1.5	" 木多氏屋敷跡 白河七小路ノ一
	才領町	東西南北 三 条	46×1 東 70×2.3 76×1.3 西 76×1.3	家人屋敷 " " "
追手口 東南ノ町 表一 裏三條	表町 本町	南 北 東 西	十軒店 12.3×6 172×5.3	10戸 96戸 町役人 4軒 大幸逆旅ノ家多シ
	年貢町	東 西	132×4.4	67戸 町役人 1軒
	桜町	"	202×6	? 町役人 1軒 年貢ト交代ニ属市立ツ
			三十三間堂	在所今ハソノ跡モナシ

門 口 名	町 名	方 向	町の規模(通り)	家屋・戸数
	裏 町			
	新蔵町	南 北	118.3×2.5	58戸
	袋 町	東 西	向新蔵	家人屋敷ノ在所
	南 町	"	83×2.5	31戸
			144×2.4	85戸
			東前町 81×2.1	家人屋敷
			長柄町 108×1.4	"
	八百屋町	"	120×2.5	31戸
	鍛冶町	"	126×2.4	48戸
横町門口	表 町	南 北	182×5.4	112戸
南北ノ町 表二條 裏二條	横 町	"	84×4	町役人2軒 35戸
	馬 町	"		
	裡(裏)町	東 西	129×3	士 屋 敷
	番士小路			白河七小路ノ一
田町門口	表 町	南 北	243×5.1	131戸
南北ノ町 表一條 裏二條	田 町			町役人3軒 仙台津街道ヨ リ入口
			川原町 46.3×(不定)	洪水ヲ流失、町 名ノミ
	向寺町		204×3.2	131戸 農産雑居シ、家 人足輕屋敷ニツ ヅク
	裏 町			
	田新町		34×1	北側町 家並モ夥バカリ
		南 北	下町 208×8.3	家人屋敷

町の自治組織は、現在、方部、町の単位集団から構成されているが、戦争中に隣組が作られるまでの長い間、慣習的に、区、町および組の三つの単位集団から構成されていた。細かく分れた多くの町は、上位集団としての 13 区に行政的に所属していた。

#### 旧 白 河 町 行 政 区 分

- 第 1 区 九番町、松並、三本松、石切場、小丸山、東小丸山、米山越、七番町、三番町、風神下、和尚壇、塩路山、北登町、南登町、日影、南堀切、登町、二番町、巡り矢、一番町、四ツ谷、日向、高山、中の山、西三坂、三ツ峯。
- 第 2 区 天神町、道場町、道場小路、細工町、勘定町、鷹匠町、会津町、仁井町、五番町、河原、北眞船、眞船、南眞船、立石、米村道北、中山南。
- 第 3 区 金屋町、宰領町、愛宕町、八幡小路。
- 第 4 区 中町、郭内、道場小路。

- 第 5 区 大工町、袋町、手代町、新蔵町、向新蔵、白井掛、菫蒲沢。
- 第 6 区 本町、郭内、上ノ台、本町北裏、馬町裏、南町、円明寺、馬町、東前町、馬町下。
- 第 7 区 横町、土多町、旧郭内、明戸。
- 第 8 区 田町、羅漢前、追廻し、向寺、木葉平。
- 第 9 区 年貢町、番士小路、八百屋町。
- 第 10 区 桜町、三十三間、寺小路、蛇石、鍛冶町、下ノ町、彌吉下、藤沢。
- 第 11 区 池下、五郎窪、南湖、土武塚、鬼越、東大沼。
- 第 12 区 飯沢、金勝寺。
- 第 13 区 夏梨、屋敷添、十字字、家ノ前、北裏、上ノ原、瀬戸原、合戦塚。

それぞれの区には区長がいて区内の自治に当った。区長は明治初年までは住長と呼ばれていた。佐川兵吉氏の談によると、区長と町民との間はずいぶん親密で、町民は区長を“おとっつあん”と呼び、区長は町民をわが子のように世話をした。区長の下にはそれぞれの町の代表者、すなわち世話役がいる。世話役には各段階があり、大世話と区長とで実際の自治に当った。世話役は自治の仕事にも当ったが、おもな仕事は祭礼にあった。区長も世話役（大世話）の話し合いで決まった。

町はさらに組に分けられる。組は昔の五人組の組織が基礎になって、通りに沿った 5 軒ないし 8 軒によってできていた。通りの片側の 5 軒と向い側の 3 軒で作られることが普通のようなのである。組は、五人組の形式的組織が廃止されてからは、「組合」と呼ばれたこともあるという。組の自治的機能は大きく、組内（クミウチ）の結合は堅かった。このような組は天神町のような大きな町では 20 組ぐらい、新蔵町、八百屋町、横町のような小さな町では 5 組ないし 3 組ぐらいであった。組の機能としては、家屋の売買の立合い、冠婚葬祭の際の協同はもちろん、農家では、田植の際の労力の交換（ゆい返し）が行われた。

このような組とは別に、純然たる葬儀共同体としての「欽柄講」（クワガラキコウ）が組織されていた。だいたい 8 軒を単位としている。クワガラキは天神町、中町、本町では知られていないが、八百屋町、新蔵町で

は最近まで存在していた。白河の附近の農村では、今日もなお大きな機能を發揮している点から考えると、もともと農村に特有な組織が市内に持ちこまれたのか、あるいは繁華町で早くなくなったかであろう。あるいは、8軒ぐらいを単位として、藩から認められた組（五人組）より交際が親しかったという（澁木弥平氏談）点から見て、中心繁華町の五人組に向う3軒を加えた実質上の組（内）と同一のものかもしれない。

以上述べた、区、町、組の関係を図示すれば次のようになる。

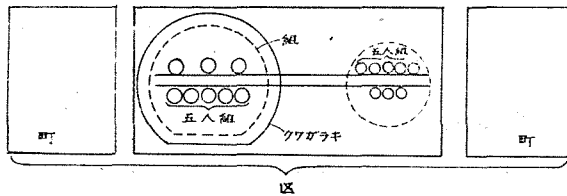


図 13

この区制は戦争中に改められたらしく、われわれの調査の際には、町は次のような方部別になっていた。

#### 現在の白河市別方部区分（所属町名省略）

登町方部、大工町方部、向寺方部、大町方部、新蔵町方部、年貢町方部、新町方部、中町方部、南町方部、昭和町方部、本町方部、馬町方部、天神町方部、本町郭内方部、夏梨方部、道場町方部、丸ノ内方部、桜町方部、道場小路方部、飯沢方部、鍛冶町方部、金屋町方部、横町方部、三十三間方部、愛宕町方部、田町方部。

次に、祭礼組織について、簡単に触れておこう。

さきに述べたように、各区の区長は祭礼の際の世話役、すなわち大世話たちの話し合いによって選ばれ、そして町の自治は大世話と区長との相談のもとに行われたのであるから、町・区の自治組織は祭礼組織を母体にして形成されたとも言える。

本町と中町とを除いて各町は氏神を持っていた。本町はのちに観音様を、



中町は天神町から市神様の本体を移したと言う。各町はそれぞれの氏神のほかには白河市全体の氏神として、鹿島神社カシマを持っている。祭礼の世話役は両方とも同一人であることが多い。鹿島神社の祭礼のほうが重要であり、また盛大である。

町の青年は満 20 歳になると壯者（若衆）に編入され、40歳までの男子全員が壯者となる。壯者のなかから大世話によって壯長が選ばれる。壯長は壯者の統一と祭礼の際の余興の決定とをする。町内で 15 ないし 20 名である。また、祭礼の際、町内に飾るちやうちんの世話や決定事項の実施に当る世話衆（提灯世話）が、大世話、中世話によって、各町 10 名選ばれる。さらに、各町から 4—5 名の大世話と、各町 10 名の中世話（若世話）とが、町の有力者、家柄の者から互選で決められる。大世話と中世話とからの互選によって、祭礼の最高責任者である元方（今の氏子総代）が行政的区分と無関係に区切られた 13 の区から 1 名ずつ選ばれる。13 名の元方が集まって祭礼の予算および運営方法を決定する。昔は、大世話と中世話とは藩から指命されるという形をとっていた。

祭礼は隔年に 9 月 13 日から行われるが、その前に、9 月 1 日には総町参会が 13 名の元方（氏子総代）によって開かれ、祭礼の一般的事項が決められる。祭礼のない年（かげまつり）には、居住礼と称して参拜だけで済まされる。

祭礼の際には各町が一定の順序で行列を作って白河の町をねる。白河でいちばん古いと伝えられる愛宕町が先達となり、鹿島神社に最も近い桜町が宮元として最後につく。中間の順序は総町参会で決定されるらしい。しかし、その場合、小さい町はいくつかがいっしょになって参加する。すなわち、一番町、二番町、三番町、七番町および九番町は町として、袋町イサバンチヨカ、手代町ニバンチヨカは大工町と合併し、向新蔵町は新蔵町と合併して参加する。このような町の合同は祭礼のときだけである。

### (3) 白河市の利害共同圏



芦野以南は黒羽<sup>フクロバ</sup>、宇都宮に通ずるが、途中で太田原<sup>オホタハラ</sup>へ分れる街道もあり、那須郡各地へ通じている。陸羽街道がこの道順をとる前、つまり藤原、鎌倉時代は現在の白河の関の跡から古関村を通り、十文字<sup>ジュウモンジ</sup>から白河町へ入る街道が利用されたい。源義家・義経の奥州下降、金売吉次の京への往復にはこの街道が使われたと言う。

会津へ至る会津街道（茨城街道の一部）は大谷地から上小屋を経て通じていた。熊倉<sup>クマクラ</sup>、柏野<sup>カシノ</sup>、羽太<sup>ハフト</sup>、眞名子<sup>マナコ</sup>、羽鳥<sup>ハトリ</sup>を通る街道よりもこの街道のほうがよく利用されていた。水戸方面へは、金山、棚倉町、袋田町を経て茨城街道に出て水戸に至った。また、白河から搦目<sup>カサメ</sup>、双石<sup>フタシタ</sup>、田島<sup>タジマ</sup>、細倉<sup>ホソクラ</sup>、深仁井田<sup>ニイギ</sup>を経て浅川<sup>アサカハ</sup>に至る浅川街道があった。さらに、東海岸へは、浅川街

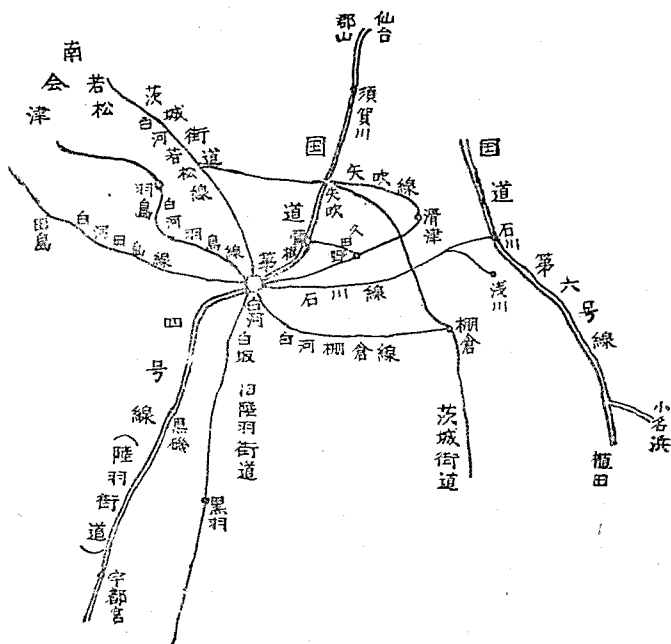


図 15





米 ③は100枚以上を示す  
米 棚倉800枚は、白河から  
棚倉までの国営バス各駅  
の総売上枚数を示し、いち  
枚を1枚である。  
米 社線では枚数の少ない駅  
は省略した。

が国鉄白河駅前から棚倉町に至り、棚倉で水郡線に接続する。南湖、登町、<sup>ノボリマチ</sup>関山口、金山などに駅がある。大正5年(1916)開通したが、現在は運休している。

バスは白河市を起点として、放射線状に走っていて、県内のほかの町町や村村との連絡に重要な役割を果たしている。すなわち、

国鉄バス	棚倉行(棚倉行1日8回、金山止り1日4回)
県南バス	石川行(1日4回)、郡山行(郡山行1日5回、須賀川止り1日1回)、東館棚倉行(棚倉行1日3回、東館行1日3回、釜子止り1日1回)、川谷行(川谷行1日2回、折口原止り1日1回)、滑津行(1日4回)、矢吹行(1日4回)

なお、交通状況を白河駅からの国鉄の着駅別切符売上枚数によって調べてみた。その結果は図 17 が示すとおりであるが、特に注目されるのは、白河駅から福島駅までの各駅への総売上枚数と白河駅から宇都宮駅までの各駅への総売上枚数とを比較すると、

駅の数	売上枚数
福島駅まで 16	13,539
宇都宮駅まで 14	8,053

のように、前者が著しく多いことである。これに対して、郡山駅までと西那須野駅までとを比較すると、

駅の数	売上枚数
郡山駅まで 7	3,883
西那須野駅まで 6	7,018

のように、逆に後者のほうが多い。白河市民から、白河との行き来は北とよりも南(栃木県)とのほうが激しいということをよく耳にしたが、この印象は上の調べのうち後のほう(狭い交通圏)の結果によって裏づけられる。

なお、東京行の切符の売上げがどの駅行よりも多いことは注目される。これによって見ると、東京との行き来のひんばんさは白河市の共通語を話す度合を高める有力な要因の一つになっているのではないかと考えられ

る。なお、この図には定期券の枚数やバスによる行き来（棚倉線、国鉄バスを除く）については示されていない。

この着駅別切符売上枚数の分布は、また白河市と利害を共にする地域の範囲を知る一つの手がかりにもなる。

## (ii) 白河市の経済圏

白河市が商工業活動を営むために、どこから原料を持って来て、どこへ製品を移出するか、また、どこから製品を仕入れて来て、どこへ卸すかという白河市の trade area（取引圏、すなわち経済圏）の面から、利害共同圏を考えてみよう。

その前に、まず、白河市の商工業が白河市の産業のうちで占める位置や白河市の商工業そのものの性格を明らかにしておこう。これは、白河市が城下町でなくなった明治以後、この町の都市としての社会的機能が何であるか、という問題に対する解答であり、白河市の都市的性格を決定する。

昭和 23 年度 (1948) の産業別人口構成は次の表が示すように、商業・工業人口の多いのが注目される。この統計は大沼を合併したのちのものであるから、白河町だけでは農業人口の比率がこれより低くなり、したがって、商業・工業人口の比率はさらに高くなるわけである。つまり、白河市の都市としての営みがおもに商工業によって行われていることになる。ところで、商業、工業のどちらに重点が置かれているか、工業はどのような性格のものを調べてみよう。これは、白河市の社会的機能、都市としての性格を決定するものとして重要である。

		戸 数		人 口	
農 工 商 販	業	937	14.5%	6,573	20.7%
	業	1,898	29.3	8,865	27.9
	業	1,969	30.5	9,882	31.1
	業	28	0.4	97	0.3
交 通 公 務 無 職 其 他	業	530	8.2	2,394	7.5
	業	832	12.9	2,685	8.4
	業	211	3.3	1,041	3.3
	業	52	0.8	266	0.8
計		6,457	100%	31,803	100%



白河市の工業生産額（昭和 24 年度）は次のとおりである。

	戸数	生産 価 格		1戸当りの平均生産高	平均月産
酒 類	3	57,904,512円	20.3%	19,301,504円	1,608,459円
し ょ う ゆ	13	3,277,031	1.1	252,079	21,006
織 維	15	4,475,623	1.6	298,375	24,865
織 維 品	8	2,030,581	0.7	253,823	21,152
ガラス製品	2	45,492,560	16.0	22,746,280	1,895,523
木 製 品	23	12,872,551	4.5	559,673	46,639
げ 和	7	6,239,679	2.2	891,382	74,282
紙	1	33,616,504	11.8	33,616,504	2,801,375
か さ(傘)	5	1,109,358	0.4	221,871	18,489
こうじ類	12	9,302,811	3.3	775,234	64,603
印 刷	8	9,572,500	3.4	1,196,562	997,135
わ ら 製 品	4	1,610,720	0.5	402,680	33,557
製 材	10	25,157,423	8.8	2,515,742	209,645
紡 糸	1	2,845,061	1.0	2,845,061	237,088
飲 食	8	11,309,318	4.0	1,413,665	117,805
機 械 器 具	28	53,197,623	18.7	1,885,629	988,024
寒 天	2	2,239,410	0.8	1,119,705	933,088
石 材	4	2,824,820	1.0	705,205	58,850
計		285,078,085	100.0		

上の表を見ると、生産額の点からは酒類、ガラス製品および和紙を除いてはほとんど見るべきものはない。白河市の大部分の工業は家内工業である。それは大部分が一家の生計をささえる程度のものか、せいぜいわずかな数人の従業員を持つ小企業である。ただし、酒類の製造には近代的な組織を持った工場がある。ガラス製造も、やや多数の従業員を有し、生産品を中央へ出すほどの株式会社で行われている。

生産品の点から見ると、多くのものが附近の農村で生産されたものの加工品である。みそ・しょうゆ、木製品、げたなどがそれである。しかも、その加工品の販売先は大部分、白河市を中心とした地域であって、中央市場ではない。

このように、現在の白河市の工業は中央市場と密接な関係を持っていない。これは過去についてもあてはまるようである。すなわち、明治以来の人口増加に急激な変化が見られないことは、多数の従業員を必要とする大規模な商工業の発展がなかったことを物語る。

	人 口	男	女	戸数
1905(明治38)	16,612	8,633	7,979	2,314
1915(大正 4)	16,696	7,971	8,725	2,578
1925(大正14)	20,556	9,984	10,572	3,922
1935(昭和10)	23,230	11,790	11,440	4,162
1945(昭和20)	28,707	13,473	15,234	5,506
1946(昭和21)	27,845	13,211	14,634	5,805
1947(昭和22)	27,919	13,439	14,480	5,948
1948(昭和23)	28,025	13,512	14,513	5,772
1949(昭和24)	31,494	15,224	16,270	6,392 (大沼村合併)

さて、白河市の商業は、上に述べたように、附近の農村で生産されたものを加工し、それをふたたび販売することに一つの機能があるが、このほかに、京浜地方や関西方面の製品を仕入れてそれを附近の農村へ供給するという中継所の役目も果している。

ところで、白河市のこのような商工業の機能の地盤をなす地域的範囲、すなわち trade area はどの辺までであろうか。白河市の商工業は大部分が個人経営ないし家族経営の小規模なものである。それはいわゆる「しにせ」によって支配されている場合が多い。いま、隠居富川屋染物店(新蔵町) 亀屋金物店(本町) および須釜家の三つのしにせの経営(仕入・販売先)を例にとって、白河市の trade area を知る一つの手がかりとしよう。

隠居富川屋染物店は宝暦ないし享保(1751—1844)のころからの営業で、旧幕時代は藩の御用達を勤めていたが、明治以後は、白河町内、郡山、石川、棚倉、那須、越後をはじめ附近の農村から注文を受けることが多かった。染料の「アイ玉」は昔は徳島へ買いに行くか、徳島の行商人から買いかしたが、大阪、江戸の間屋から仕入れることも多かった。20年ほど前から化学染料を使い始め、東京の浅草あるいは、本所あたりの店、または京都の店などから仕入れた。しかし、現在は組合の配給によっている。

亀屋金物店は金物、農機具およびはかりの専門店である。金物は以前は、南部産の鉄鉱が東白川郡あるいは栃木県的那須で精錬され、その地鉄を一度亀屋が買い取り、それを白河町内の鍛冶屋に打たせて、その製品を販売

していた。はがね類は伯州、雲州から産したものを大阪で精錬し、それを亀屋が買い取って鍛冶屋に打たせていたという。刃物は越後から直接製品を仕入れるか、江戸の製品を買い取るかした。現在は、ほとんど東京の製品を買い取っている。以上の金物類の販売先はもちろん白河市内、附近の村および郡内の諸町村である。

亀屋金物店は昔はたばこと油との製造・販売も兼ねていた。たばこの製造・販売は文化年間(1804—1818)、4代目の祖先が水戸から養子に來たのを縁として始められた。水戸葉を仕入れ、江戸に出した。油は燈用のえご油と種油とである。前者は郡内の原産地から、後者は附近の農村から買い入れて販売していた。

須釜家の総本家は、銀行を営み、のち、油屋に変わり、現在は質屋をやっている。白河市内に多くの新宅(分家のこと)があり、営業の種類によって、「足袋須釜」、「生糸須釜」、「お茶須釜」などと称せられている。その trade area は、白河市内、郡内各村をはじめ、県内では棚倉、石川、矢吹、県外では栃木県芦野、那須、黒磯、黒田原に及んでいた。

以上3軒のしにせおよび白河市の全般的な商工業の考察によって、白河市における商工業の trade area は、郡内を主要な地盤とし、東白川郡の石川町、浅川町、棚倉町、栃木県の芦野町、西那須町、黒磯町を結ぶ範囲内に及んでいると言えよう。

さて、白河市の特殊商業として馬の売買がある。白河の馬市の歴史は相当古いようである。市は春秋2回立ち、せりが1週間ぐらい続く。白河市の発展は馬市に負うところが少なくない。

売方・買方は郡内はもちろん近県からも集まり、鉄道が開通してからは北海道、九州からも集まる。いま、白河市役所の本間昇氏から提供された資料によって、昭和24年(1949)10月の馬市の売方・買方の地方を見ると次のようである。ちなみに、この時の馬市は非常に盛んであったとは言えないそうである。

売 方				買 方			
在 住 県	人数	%		在 住 県	人数	%	
福島	29	60		栃木	72	49	
栃木	5	10		茨城	28	19	
北 海	4	8		埼玉	18	12	
青 森	3	6		福島	12	8	
岩 手	2	4		馬 場	9	6	
山 形	2	4		山 梨	5	3	
茨 城	2	4		群 衆	2	1	
秋 田	1	2		宮 城	2	1	
福 島	1	2			1	1	
計	49	100		計	149	100	

売方では福島県が圧倒的であって、その他も東北地方が多いが、これに  
対して、買方は 8%にしかすぎず、大部分は関東地方である。すなわち、  
郡内、県内で飼育された馬は白河に集められ、関東地方へ売りさばかれて  
いる、と言うことができる。白河は馬の取引について関東と東北との接合  
点である。

#### (4) 白河市と附近の農村との関係

白河市が附近の農村ときわめて密接な関係にあり、相互依存の形で都市

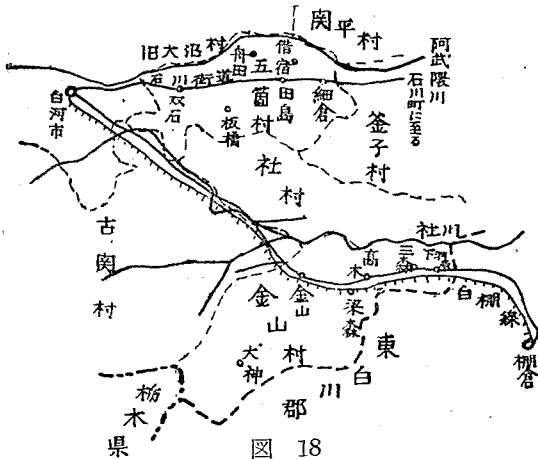


図 18

としての存在を維持して  
いることは、上に述べた  
白河市の利害共同圏から  
も明らかであるが、五箇  
村と金山村とを例にとっ  
て、白河市と附近の農村  
との関係をいっそう具体  
的に調べることにした。

#### (i) 五箇村、金山村 の村落の性格

まず、二つの村の村落の性格を簡単に述べよう。

五箇村は西白河郡の中央部にあって、白河市街から東1キロ、附近の

村のなかで最も白河市に近い村である。東は釜子村、南は社村、古関村に接し、北は阿武隈川をへだてて関平村、旧大沼村に相對している。村の南半分は山地であるが、北半分は阿武隈川の流域で、地味が肥え、郡内第一の水田地帯をなしている。村は、村役場のある田島をはじめ借宿、舟田、<sup>イタハン</sup>板橋、双石の五つの大字から成る。現在の村は大部分もとの白河領である。白河風土記卷8、双石村のところに次のようにある。

当村並ニ下ニ載タル板橋、田島、舟田、借宿ヲ合シテ五ヶ村ト唱ヘ土地肥膏ニシテ多ク米穀ヲ生シ味又甘美ナルコト当郡第一ナリト称ス

村の南部の山地のふもとを東西に県道（石川街道）が通っていて、この街道を白河市と石川町とをつなぐバスが走っている。双石、田島、細倉（借宿に属する小字）がこの県道沿いに集落を作っている。

昭和24年（1949）10月現在、村の字別の人口および戸数は次に示すようである。

五箇村 532戸(3,277人)	大字双石	123 ( 794)		
	大字板橋	75 ( 486)		
	大字舟田	82 ( 465)		
	大字田島	165 (1,004)	—	田島 111 ( 697) 人方 45 ( 337)
	大字借宿	87 ( 528)	—	借宿 57 ( 334) 細倉 30 ( 194)

金山村は西白河郡の東南隅にある。白河市とは直接接していない。北は社村、東南は東白川郡、西は古関村、西南は栃木県に接している。白河市街からは10キロ隔たり、村の東部はむしろ棚倉町に近い。村の中央部から南部にかけて大部分が山地で、社村との境を流れる社川と白河市から棚倉町に至る街道との間にわずかな平地が開けている。

白河市と棚倉町とを結ぶ街道は、金山村と古関村との村境のところで二つに分れて、一つは古関村にはいる。白河市と棚倉町との間にはかつて鉄道（白棚線）が通っていたが、今は国鉄バスがこれに代っている。

村役場は大字金山にある。村は、大字金山のほか、<sup>ヤナホリ</sup>梁森、<sup>タカキ</sup>高木、<sup>ミモリ</sup>三森、<sup>シモハ</sup>下羽原<sup>ハラ</sup>の五つの大字（旧村）から成る。われわれの調査では、五つの大字

全部を扱うことは不可能ばかりか無意味でもあるので、街道に沿って集落をなしている大字金山（小字犬神を除く）および三森、下羽原を対象とし、他の大字を省いた。この三つの大字をかりに金山村A（大字金山）、金山村B（大字三森・下羽原）として扱うことにした（図18を参照）。なお、現在の金山村に属する旧村はすべて旧白河領には属していなかった。

昭和24年（1949年）10月現在、村の字別の戸数および人口は次に示すようである。

金山村 778戸(4,212人)	大字金山	438(2,323)	小字	竹之内	100(551)	金山村A
			"	越堀	189(966)	
			"	菅計	101(531)	
			"	犬神	48(275)	
	大字梁森	134(709)	小字	榎内	53(324)	金山村B
			"	栗口	10(58)	
			"	水口	8(56)	
			"	井の花	3(15)	
			"	石崎	10(53)	
			"	中神	40(160)	
			"	池ノ入	10(43)	
	大字高木	84(476)	小字	上宿	54(295)	
			"	六斗時	30(181)	
	大字三森	65(389)	小字	月櫻	53(330)	
			"	下道下	12(59)	
	大字下羽原	57(315)	小字	吉田	37(197)	
			"	五輪引	20(118)	

この二つの村は、立地条件が異なるために、生活の基盤がまったく異なる。その相違は村落の性格に反映し、白河市との結合の程度、相互依存の関係にも影響を及ぼしている。五箇村は耕地に恵まれ、郡内第1の米作地帯であって、典型的な東北の米作農村の形態を示しているが、金山村は、鉱業（現在あまり振わない）や林業を生業とする者もあり、農家も農産物による収入の不足を林業によって補っている。

農業人口が二つの村とも圧倒的に多いことは言うまでもないが、鉱業、林業のほかには商工業の比率の相違が注目される。金山村の人口構成は、この村が比較的他に依存していないことを物語る。これは、つまり、金山村の村民が、自分たちの需要を、白河市まで行かないで自村内で満たしている

ことを意味する。これによって金山村は五箇村よりも独立性が強いと言えるであろう。このことはのちに詳しく述べる。

			五 箇 村		金 山 村	
農 商 鉾 林	工	業	2,538人	74%	2,742人	61%
		業	292	9	622	14
		業	0	0	414	9
		業	0	0	123	3
交通・自由公務		178	5	184	4	
無 職 そ の 他		372	11	438	9	
計			3,380	100	4,523	100

昭和23年(1947年)6月1日現在

なお、金山村の鉾山業は相当古いうで、鎌倉幕府創設のころ活躍したと伝えられる「金売吉次」の伝承も残っている(仁平次敏氏談)。金鉾山は明治の末ごろからほとんど廃坑になったが、亜炭は今もかなり出ている。この鉾山に働く労働者の生活意識は金山村の性格の一部を形成している。村民の荒荒しい気質や人情の薄さをなげく声を村民みずからの口から聞くことができた。しかし、一面、金がとれたため、こんなへんぴな山奥の村でありながら、明治初年すでに西洋風のハイカラな服装にも見なれ、電燈も大正7年(1918)につき、農村の因習も早くからなくなったと言う(鈴木好太郎氏談)。

二つの村のこのような社会的相違は、村民のよそへ出かけた模様によっても明らかである。それは、戸別調査の際、調査票の項目14で、「11月[1949年11月、つまり被調査者にとって先月]の間によそへ行ったことがありますか?」と聞いて、出かけた場所、その用件、そこに滞在した日数、および、出かけるのが定期か不定期かについて調べたものである。調べることでできた者は、五箇村77人、金山村A 43人、金山村B 42人である。

さて、項目14の結果について述べると、五箇村はほとんど白河市へ出かける場合であるが、そのほかに、人数から言って、

福島市	3人
郡山市	1
栃木県	1
沼尻(温泉旅行)	1
附近の村	8

となる。今、以上のうち附近の村を除いた外出先の滞在日数の分布を見ると、

滞在日数	0	1	2	3	4	5	6	7	その他
人数	48	16	0	6	1	1	2	1	2
注	附近の村へ 外出した者 を含む	うち2人 福島市				栃木 県		沼尻	うち1人は 福島市、郡 山市、白河 市へ外出し た

のようになる。よそへ1度も出なかった者は約60%ある。出た者もほとんどが白河市である。

以上の結果と、用足し先の模様とを合わせ考えれば、五箇村の日常生活空間の広さとその強さを予想することができる。つまり、ほとんどが白河市との関係であって、その他、附近の村、少し遠い所(福島市など)がわずかに見られる程度であり、しかも、その強さ、すなわち度数はさして大ではない。

次に、金山村について見よう。金山村は先に述べたように、AとBとの二つに分けた。金山村Aは、小字犬神を除く大字金山であり、金山村Bは大字三森および大字下羽原である。図18を参照。金山村Aは村の北西部にあって、村内の部落のうちでは白河市にいちばん近い位置にある。金山村Bの三森と下羽原とは互に近く、村の北東部にあって、地理的には白河市よりむしろ棚倉町に近い。金山、三森、下羽原の部落は白河市と棚倉町とを結ぶ街道上に並び、その街道を国鉄バスが走っている。金山村Aと金山村Bとでは部落の性格がだいぶ異なる。前者がかなり都市化しているのに対し、Bは純然たる農耕地帯で、五箇村と似たところがある。先に述べた



ような鉱山労働者によって影響された性格は、金山村Bよりも金山村Aに強く出ている。

さて、五箇村と同じように、11月ちゅうに出かけた場所をあげると次のようになる。この表は滞在日数を無視して、11月ちゅうに出かけたと答えた場所の名が何回現れたかを調べたものである。同じ個人で異なる二つの場所へ出かけたと答えた場合は2か所と数えた。

	白河	棚倉	福島	栃木	京浜	飯坂	附近の農村
金山村A	11	0	3	1	3	1	2
金山村B	6	7	6	0	2	0	8

これを見ると、五箇村の模様とはかなりの差が認められる。その上、金山村A、B両者の間にも差が認められる。この結果は、用足しの模様を裏書きするものである。

次に、これらの場所における滞在の日数を示せば次のようである。

	白河	棚倉	福島	栃木	京浜	飯坂	附近の農村	備考
金山村A	55	0	3	1	7	1	8	白河のうち31は通勤である
金山村B	10	39	8	0	9	0	11	棚倉のうち30は通勤である

次に、滞在日数別の分布を見てみよう。なお、この時は附近の村は除いた。

滞在日数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9以上
金山村A	29	5	5	0	1	1	0	0	0	2
金山村B	28	5	4	1	0	1	0	0	1	2

上の表からは金山村AとBとの差は出てこない。全然外出しない者は60%程度あって、五箇村と変らない。しかし、外出先の広さおよびその模様は違っていて、金山村のほうが五箇村より日常生活空間がやや広いように思われる。この結果は、次に述べる両村の白河市への依存度と合わせ考えると興味深い。

## (ii) 五箇村、金山村と白河市との関係

ところで、白河市からの距離も違い、それぞれ性格も異なる五箇村、金

山村の二つの村は、日常生活の各面でどの程度白河市に依存しているか、について、戸別調査の調査票（項目13）の結果から考えてみた（16ページ参照）。

13	この部落で用の足りないことはありますか？ その時はどこへ重い病気や大きなけがのときはどこへ行きますか？ そして……	用件 場所						
		病気が	魚	肉	薬	衣類	農具	トコヤ

調べることのできた者はやはり、五箇村77人、金山村A43人、金山村B42人である。なお、金山村では特に「仕入れ」についても調べた。

#### 五 箇 村

	病気	魚	肉	薬	衣類	農具	理髪	映画
白河市	57	19	48	37	60	41	12	48
五箇村	15	42	7	4	12	27	41	5
五箇村	1							
五箇村		11	1	30*	2			
五箇村		1	11	1		1	9	7
五箇村	5	4	10	5	3	8	15	17

\* 全部「富山の薬売り」から

#### 金 山 村 A

	病気	魚	肉	薬	衣類	農具	理髪	映画	仕入れ
白河市	31	1	9	5	6	4	1	6	4
金山村A	8	30	19	18	21	20	28	24	1
金山村A		1	3	1	2				
金山村A			2	6*	4				1
金山村A	1			2	1	2	1	1	
金山村A	3	11	10	11	9	17	13	12	

\* うち2は「富山の薬売り」から

#### 金 山 村 B

	病気	魚	肉	薬	衣類	農具	理髪	映画	仕入れ
白河市	18			1	15	5		6	3
金山村B	7	28	15	16	4	23	5	15	
金山村B						2	29	2	
金山村B	15	3	7	4	9	3	2	6	
金山村B		9		19*	3	1			
金山村B	2	1	8	1	2	1		2	
金山村B		1	12	1	9	7	6	11	

\* うち16は「富山の薬売り」から

五箇村は全面的に白河市に依存していることが明らかである。日常生活

における五箇村と白河市との関係はきわめて密接であることがわかる。細かく見ると、魚、理髪については自分の村で用足することが多く、薬は富山の薬売りに頼る者が相当あることが注目される。

金山村Aは、白河市に依存するところもかなりあるが、五箇村にははるかに及ばない。金山村Aは自分の村（大字）でかなり用足しをしていることが注目される。これは金山村Aが相当都市化していることを示している。細かく見ると、病気のときは白河市にかなり依存している。薬についても富山の薬売りにあまり依存していないことは興味深い。

金山村Bは金山村Aと違って棚倉町との交流が目だっている。白河市への依存と棚倉町へのそれとがほぼ同じ程度である。ここでも、村内で用足している者が五箇村に比べて多いのは興味深い。ただし、この場合は大部分が、金山村Aのほうへ出かけて用を足しているのであり、金山村Bの部落内でないことを注意しなければならない。また、富山の薬売りに依存する程度が五箇村とほぼ同じになって純然たる農耕集落であることを物語っている。病気のときは、白河市と棚倉町とに同じ程度に依存している。

ここで、五箇村と金山村A

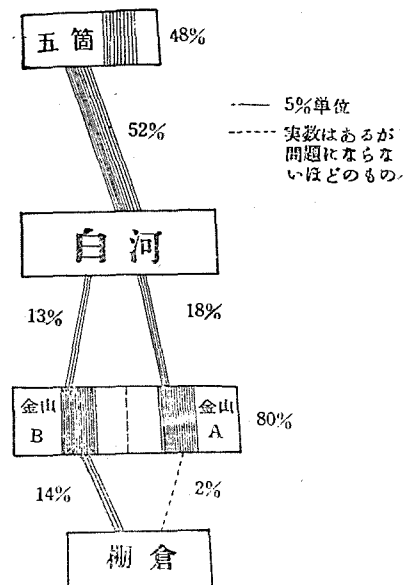


図 19

と金山村Bとの日常生活空間の広さを図式化して見よう。まず、第1に、白河市、棚倉町、自村（必要なし、売りに来る、富山の薬売り、記入なし）の三つの地区に分類して、これにより、自村とほかの地区との交流を見ることにす

る。ちなみに、この三つの村の日常生活空間の広さは、一二の例外を除いて上の三つの地区に限られている。それぞれの用足しの回数の総数に対する比率を目盛ると図 19 のようになる。

これによって見ると、五箇村は白河市に依存することが大きく、金山村は五箇村より独立性が強く、金山村 B では棚倉町との関係が出てくる。

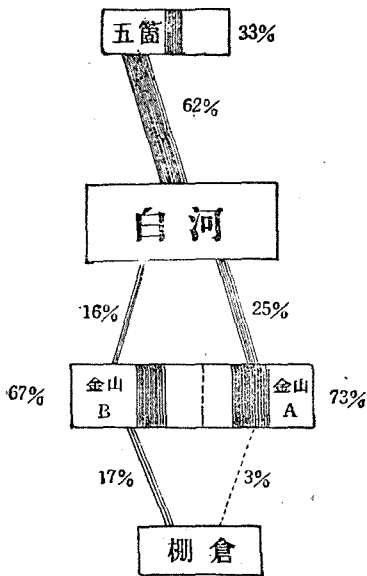


図 20

今度は、自村で用足しする割合を特に浮び出させるために、「必要なし」「記入なし」を除いて集計したら、図 20 のような図式を得た。

これによって見ると、自村で用足しする程度は、五箇村と金山村とでは大いに異なることがますます明らかである。先に述べた二つの村の産業別人口構成の相違、したがってまた、村落としての性格の相違が、このようにはっきりと白河市への依存関係の上に現れている。

#### (5) 結び

以上、考察の焦点を白河市に置いていろいろの角度から見てきたが、白河市の都市としての性格そのもののなかから、附近の農村との関連という問題が必然的に浮び出てきた。ここでは、白河市の都市としての性格についてまとめて述べることにする。

まず、白河市は地理的位置に恵まれて古くから政治的、軍事的要地であり、ことに近世の初めから城下町として都市を形成してきたことは第 1 に注

目されることである。城下町としての生活様式は現在でも多分に残っている。すなわち、町の集落構造は旧幕時代にほぼ完成し、その後見るべき変化を示していない。また、現在、「しにせ」とか「旧家」として白河市の商工業を支配している者はすでに旧幕時代に大をなしたのであって、時代に伴う新旧の社会的階層の入れかわりはあまりなかった。近代的な大企業の経営組織を持つ二三の工場、あるいは会社もごく最近移転したものか、中央の出店にすぎず、一般市民の生活に大した影響を及ぼしていない。商工業の多くは、附近の村から出る天然資源や農作物を、そのまま出荷するか、家内工業的に工業化するにすぎない。

白河市民のうちには今も「松平様」「阿部様」の領民であったことを誇りに思っている者がある。寛政年間（1789—1800）に白河藩のために善攻をしいた松平定信は今も多くの市民の信仰の対象である。白河市民の生活感情は過去の輝かしい歴史に深く根ざしている。

しかし、白河市がたびたび空城になりながらも都市としての体裁を続けた一つの理由は、白河市が附近の農村の経済的中心として存在することができたからである。白河市は城下町として政治的要地であり、奥州街道の宿駅ならびに多くの街道の起点として交通上の要地でもあるので、おのずから、附近の村との物資の交流がひんばんに行われるようになった。すなわち、他の大都市から移入された物資は白河市を中継して附近の村の小売店に卸され、また、逆に、附近の村から出る農産物や工業の原料品は白河市を取次地として他の都市へ送り出される。あるいは、附近の村からの物資は白河市で製品になってふたたび附近の村へ逆移出される。こうして、附近の農村は日常生活の上で白河市に依存している。

このような物資の交流の行われる地域は、西白河郡をはじめ、石川町、榎倉町、栃木県の芦野町、黒磯町あたりを結ぶ範囲内である。

最後に、白河市が関東と東北との接合点であることが注目される。それは、一つには交通の点から、また一つには利害共同圏の点から言える。

すなわち、白河市は、昔の宿駅についても、みちのくへの入口と言える。すなわち、白河の一つ手前の白坂驛（今の西白河郡白坂村白坂）までは、「宇都宮以北関東八ヶ宿」などと呼ばれていた。現在の交通について見ても、街道、バスは、一方、北の方面（県南バスには石川行、滑津行、郡山行、矢吹行がある）と連絡し、他方、棚倉町を経て（国鉄バス棚倉行、県南バス東館・棚倉行）水戸方面と結ばれている。鉄道は、言うまでもなく東北本線によって東京と郡山、福島方面とを結んでいる。切符売上枚数によると、東京との行き来がほかのどこよりもひんばんなのが注目される。

また、白河市の商工業者の経済圏が、先に述べたように、白河市のまわりおよび以北の地域と栃木県北部とにまたがっていることも注目される。白河市のある呉服店の話では、戦争中に配給組織ができてから福島市へよく行き来するようになったが、それ以前は、また最近も、むしろ栃木県北部との取引のほうが盛んであるとのことであった。先に述べた馬市における売手、買手の地域は白河市のこのような性格を最もよく反映している。白河市の附近の村、あるいは県内から集まる馬は関東各地、さらに中部地方へ引きとられて行く。

最後に触れておきたいことは、おもに藩主の関係から白河市には越後からかなり大量な移民があり、かれらは九番町、七番町、三番町に住みついたと言われることである。これらの町の現在の住民も数代前に移住したことを記憶している。町の人たちはこれらの町がほかの町と風俗習慣および言語について違っていることを強調するが、これらの町が地域的に町はずれであり、ほとんどが農民であるほかは、第三者の短かい期間の観察ではついにその特色をつかみえなかった。しかし、歴史的に見ると、白河市が都市として現在のように完成したのは越後高田領の藩主が来たときであるから、白河市に越後の要素がなんらかの形で入りこんでいることは間違いないであろう。越後の要素が、白河市の都市としての性格の形成にどれだけ寄

与し、また、現在どれだけ残っているかということは今後の課題である。

### 3.2 言語的背景

ここでは、白河市の方言の音韻的特徴と、それが文字言語にどのように反映しているかということと、白河市、五箇村、金山村の言語的相違とについて述べることにする。

#### (1) 白河市の方言の音韻的特徴

白河市の方言は、音韻の点から見ると北関東の方言ときわめて類似した方言であると、おおざっぱに言うことができる。

さて、白河市の方言の音韻的特徴の二三について述べることにしよう。まず、アクセントはない。つまり、アクセントの型の区別を持たない方言である。

母音については、普通「イとエとの混同」と言われる有名な現象が見られる。これは、東京方言において単独で音節を作る [i] および [e] が白河市方言においてともに [ê] で対応する現象である。したがって、東京方言の eki「駅」と iki「息」とが白河市方言においてはともに êki で対応する。言いかえれば、白河市方言においては「駅」と「息」とがホモニムである。

いま、上に [ê] で表記した音が発音されるときは、舌さきおよび前舌が高まり、硬い口蓋のきわめて前の部分ないし歯茎の部分と舌との間に狭いせばまりができています。試みに白河市役所の本間昇氏(42歳、男、18歳—37歳の間東京に住む、それ以外は白河市、大学卒業、両親とも白河市、昇氏で3代目)について、「枝」の最初の母音が調音される際の上歯の前のへりから舌裏に接するまでの距離を測ったら 1.1cm であった。観察者の柴田武(31歳、男、19歳まで名古屋市に育ち、以後東京に住む、大学卒業、父 名古屋市、母 愛知県愛知郡出身)について同じように測ったら 3.4cm であった。このように白河市方言の [ê] は著しく前寄りである。

次に、本間昇氏について観察した例をあげよう。

étô「糸」, éʃi「石」, étomaki「糸巻」, éʃi「息」, èsɯtɰ「いす(こしかける)」, éŋa「いが(くりの)」。

éʃi「駅」, éda「枝」, éʃi「えび」, éhon「絵本」。

ièn~ièn「委員」, kaé「貝」, kwé「くい(打ちこむ)」。méere:「命令」, jo:é「用意」, ke:é「敬意」。

〔「命令」の第2音節「敬意」の第1音節は東京方言のeと同じくらい高い。〕

naé「苗」, tsɯé「つえ」, koé「声」。

é:「家」。

なお、この音<sup>①</sup>が、同じ個人でも、場面(時と所)により、語によって、必ずしも現れないことがある。本間昇氏についても、改まった場面では東京方言と同じような「イ」と「エ」との使い分けが可能であり、また、「映画」という語においては、期待される [é:ŋa] のような形は現れず、[eŋa] のような形で現れた。

なお、[é] の調音には、おもに個人によってかなり幅があると認められる。つまり、硬い口蓋の、[é] に比べてそれほど前ではない部分と舌との間のやや狭いせばまりで調音されることがある。これは前寄りの e と言いうる音で、[e] のように表記することができる。

ついで、東京方言などと同じように、無声の子音にはさまれて現れる無声化母音 (ɰ, ɸ) が注目される。

kɰkw「菊」, kɰki「茎」, ɸsɰʃi「すし」, tɰʃtɰʃi「乳」, tsɰtɰʃi「土」, kɰʃi「岸」, kɰʃi「くし(髪をすく)」, ɰika「しか(動物)」, sɰki「好き」, kɰtɰʃi「口」, tɰʃikai「近い」, ɰita「舌」, sɰteru「捨てる」, tɰiso「地租」。

子音については、まず、東京方言における有声の母音にはさまれた無声の破裂音 ([p] を除く) および破擦音が白河市方言において有声化音で対応する現象が注目される。このような有声化音は「中濁音」と言われることがあるが、われわれは便宜上「有声化の現象」と呼ぶことにした。たと



えば、東京方言の hako「箱」は白河市方言において ha<sup>h</sup>ko のような形で対応する。

この有声化音はかなり微妙で、同じ個人でも、場面により、語によって hako, ha<sup>h</sup>ko, ときに hago (ha<sup>h</sup>go ではない。cf, ha<sup>h</sup>goêta「羽子板」) のような形の間を動揺する。hago のような形は白河市の附近の村村でよく聞かれる。これは、有声化音でなく完全な有声音と認めるのが適当である。

次に、本間昇氏について観察した例をあげよう。

ha<sup>h</sup>ko「箱」, ka<sup>h</sup>çi「柿」[cf, kaçi かぎ(戸じまりの<sup>o</sup>)], oke「おけ  
(水をくむ)」, sa<sup>h</sup>ka「坂」; ts<sup>h</sup>ikwê「机」, k<sup>h</sup>kw「菊」,  
ha<sup>h</sup>o「はと(お寺の)」, ta<sup>h</sup>ami「畳」, ma<sup>h</sup>o「的」, ka<sup>h</sup>a「肩」,  
ma<sup>h</sup>ts<sup>h</sup>i「松」; k<sup>h</sup>ts<sup>h</sup>i「口」。

以上のように、無声化母音の次では有声化していない。しかし、これは本間昇氏についてであって、無声化母音の次でも有声化音の現れる個人がいる。

さて、白河市方言における語中の破裂音および破擦音はいったいに東京方言に比べて閉鎖が弱く、無気である。たとえば、「坂」の第2の子音は、白河市方言では [k] のように表記すべき音声であるとすれば、観察者の言語および東京方言では [k<sup>h</sup>] のように表記する音声と認められる。これは、「満開」、「参拜」、「国旗」、「四つ」のそれぞれの k, p; k, ts についても同じように言える。なお、語頭の破裂音および破擦音は必ずしも閉鎖が弱く、無気であるとは認められない。

次に、東京方言における母音にはさまれた有声の破裂音および破擦音が白河市方言において無声化音で対応する現象が取り上げられる。本間昇氏を観察した例によれば、

momi<sup>h</sup>gi「もみじ」, bu<sup>h</sup>do:「ぶどう」, sen<sup>h</sup>pe:「せんべい」

のようなものがある。しかし、この現象(われわれはこれを便宜上「無声

化の現象」と呼ぶ)は先にあげた「有声化の現象」よりも著しくない。なお、「もみじ」の「じ」の子音は本間昇氏のように無声の摩擦音であることもあるが、個人によっては無声の摩擦音 (momizi) であることもある。

さて、一方に「有声化」の傾向があり、他方「無声化」の傾向があるために、

haɕa「旗」

haɕa「腐」

のように、新しい類音語を作り出している。アクセントによる型の区別のないことは、これにいっそうの拍車をかけている。

次に、硬い口蓋の特殊な摩擦音について述べておこう。この音は、普通東京方言における語頭以外の「リ」の子音に対応する。これは、東京方言の「リ」の子音に比べて、舌さきの調音がなく、硬い口蓋と前舌面との狭いせばまりとによって調音される摩擦音である。試みに人工口蓋図をとれば次のようである。

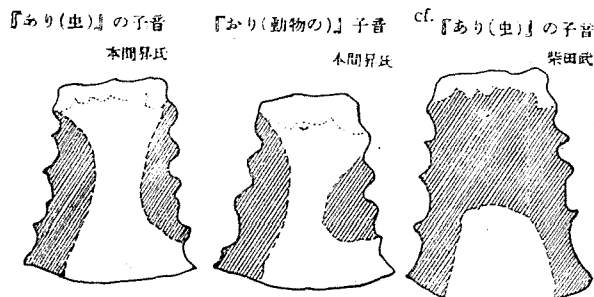


図 21

この音は発音記号 [j] で表わすのも不適當ではなからうが、いわゆるヤ行の子音を表わすのに [j] を使ったため、ここに新しい記号 [ɕ] を使うことにした。

この音は粗雑に聞くと、[ɕ] で表わしたいような摩擦音に聞えることもあるが、実際は、歯茎・硬い口蓋の位置よりもっと奥にせばまりができて

いることは人工口蓋によっても明らかである。なお、東京方言の「ジ」の子音に対応する白河市方言の音は、無声化しないかぎり、はっきりした破擦音〔dʒ〕であって、摩擦音ではない。

本間昇氏について観察した例をあげれば次のようである。

kũji「くり(いがのある)」, (cf, kuŋi「釘」), haŋi「針」, niwatoŋi「鶏」, toŋioja「鶏小屋」, aŋi「あり(虫)」, oŋi「おり(動物の)」, uŋi「うり(野菜)」, (cf, adgi「味」), ẽtʃiŋw:「一流」, do:jo:「同僚」, ʃo:ŋjakw「省略」。

なお、まれに、ある語では語頭にも現れる。たとえば、

ŋiŋgo「りんご」, cf, ruŋŋ「留守」。

また、「略画」の語頭音は〔j〕よりむしろ〔j̥〕, つまり、ヤの子音とほぼ同じ音声が聞かれた。

最後に、東京方言において語頭およびいわゆる「つまる音」の次に来る「キ」の子音が、白河市方言では、東京方言に比べて前寄り、しかも摩擦を伴った音で対応する傾向がある。本間昇氏について言えば、「汽車」, 「国旗」は精密には次のように表わすべきであろう。

ɸ̥ɕiɸa「汽車」

ko'k̥ɕi「国旗」

以上は本間昇氏について観察した結果のおもなものであるが、白河市方言には、なお、書きことばの「ヒ」に対応するところに〔ʃi〕の現れるところがある。

ʃimo「ひも」, ʃidaŋi「左」, aʃ ru「あひる」。

(2) 白河市の方言の音韻的特徴を反映している文字言語  
昭和24年(1949)9月, 10月に白河市内で見かけた掲示あるいはビラなどで、方言音を反映していると思われるものを集めてみた。該当するものは予想以上に多かった。

まず、いわゆる「イとエとの混同」を反映するものには次のようなもの

がある。

Edoushiki baetin (駅前、くだものなどを売っている、屋台同然の小さな店の看板)

これは、「移動式売店」をつづったものと考えられる。その他、

返シ逢へ 自由自在(白河駅待合室の広告)

事務所で用える文書に(市内各所の掲示板にはられた、市役所からの講演会の知らせのプリント)

白河市産業復興委員会開催について……御協力御願へ致す事となりました……御参集を得度御願へ致します(市内各所の掲示板にはられた市役所からの通達のプリント)

ゼヒ外食券をお願い致します(駅前のある食堂内の黒板にチョークで)

パエブ(天神町のあるたばこ屋の掲示板)

赤イビ(桜町の魚屋の黒板にチョークで)

イントツソージ ¥35.(中町のある箇所にはられたビラ)

いろいろ考えてみましょう……いろいろ改めて考え直してみる(市内各所の掲示板にはられた、市役所からの講演会の知らせのプリント)

酒、肴、うどん、そば おかずも取揃いてあります(横町のある食堂の看板)

スフモス(イビ茶) ヤール 148 円(本町のごふく屋の看板)

ラオ竹アリ ラオノスゲカイイタシマス(手代町のある雑貨屋の看板)

次に、「有声化の現象」を反映しているものには、

カギ〔くだものの“かき”のこと〕(金屋町のあるやお屋の正札)

のようなものがあった。

「無声化の現象」を反映しているものには次のようなものがあった。

一バツせんべい加工所〔看板の裏側は“せんべい”とある〕(大工町のせんべい屋の看板、次のページの写真参照)



キスモノ〔傷物〕一東5ケ十円（本町の瀬戸物屋の正札）

クリーム ポマート（桜町の小間物屋の看板）

### \*(3) 白河市、五箇村、金山村の言語的相違

まず、音韻について述べよう。調査票に盛った五つの特徴(項目22—26)は、項目 26 を除いてすべて、白河市よりも五箇村と金山村とのほうに著しく現れる。東京方言の無声破裂音あるいは無声破擦音に有声のそれが対応する音韻の特徴は白河市ではそれほど著しくないが、村ではかなり著しい。つまり、白河市には、改まった場面では無声ばかりで発音する人や、無声で発音し直す人がかなり多いが、村にはいつも有声で発音する人が少なくない。この傾向は項目24(東京方言の有声破裂音あるいは有声破擦音に無声のそれが対応する)において特に著しい。白河市では無声で発音する人はそう多くないが、村ではかなり目だっている。

白河市と五箇村、金山村との間にはこのように程度の差が見受けられる

が、五箇村と金山村との間にはたいした違いはない。五箇村と金山村との間に限らず、われわれが実際に下検分した八つの村(3.3の(1))を見よ)の間にもたいした違いは見られない。

次に、文法について述べよう。調査票の項目39にある *so:kaiſita: so:de zume* 「そうかなあ、そうじゃあるまい」の *ſita:* は白河市および金山村にはないようであるが、五箇村(および関平村、川崎村)では盛んに用いられる。項目40にある *dame danbewe* 「だめだろうよ」の *-we* は白河市(および古関村)で使われることがあるが、五箇村や金山村では使われないようである。その他、次のような言い方は白河市だけで用いられるものようである。

*ſinasanna* 「しなさるな」

*ſinna* 「するな」

*gowansûi* 「ございます」

また、*jukaſe:ma* 「行きなさい」の *ſe:ma*,

*tabenanſi, taberanſi* 「食べなさい」の *-nanſi~-ranſi*,

*ki:ta ko'tara* 「聞いたら」の *ko'tara*

は、いずれも五箇村にあって、金山村にはないようである。これに対して、*êkitagere* 「行きたいけれども」の *-gere, êkahe nanne* 「行かなければならない」という言い方は金山村にあって五箇村にないようである。

語いについては、項目 28 の *hanado* 「鼻」は白河市ではあまり用いられないようであるが、村では用いられる。

この他、語いについては次のような調べを試みてみた。すなわち、兒玉卯一郎著「福島県方言辞典」(東京西沢書店、昭10)から、福島県南部でも使われていそうな語いを適宜に811語選び出して、七つの村(西郷村は未調査)それぞれの40~50歳代の人ひとり、60歳以上の人ひとり、合計ふたりに、いま使っているかどうかを記入してもらった。その結果から、そのままの形と意味とで使われている語、少し形は変っても意味は同じ語、

形は同じであるが意味が少し変った語の割合を求めると次のようになる。

川 崎 村	59.1% (479語)
五 箇 村	55.1% (447語)
小 田 川 村	54.7% (443.5語)
古 関 村	46.3% (375.5語)
金 山 村	43.7% (354.5語)
白 坂 村	42.1% (341語)
関 平 村	41.1% (333.5語)
白 河 市	26.7% (216.5語)〔4人について調査〕

これによると、白河市と村との差はきわめて著しい。白河市より村のほうがいっそう方言的であると見られるのである。五箇村と金山村との間にも差が認められる。ここでは詳しい語いの比較表は省略する。また、この調べでは、被調査者がその市・村の良い代表であるかどうかを保証することができないので、そのつもりで数字を見なければならない。

## 4. 共通語を話す度合を決定する要因

### 4.1 共通語を話す度合を表わす指標

共通語を話す度合を表わす指標としてあらかじめわれわれが用意した項目は、

1. 客観的反應
  - 1.1 音韻の反應（項目22—29）
  - 1.2 文法の反應（項目36—46）
2. 主観的判定

である。

#### (1) 客観的反應

まず、客観的反應は音韻の反應と文法の反應とに分けて扱わなければならない。それは両者が互に性質と調査の方法とについて異なるからである。

##### (i) 音韻の反應と文法の反應

音韻の反應、すなわち項目 22—29 については、絵を示して、「これはなんですか。」と質問し、その反應を記録するという方法で調べたが、文法の反應、すなわち項目 36—46 は「これこれのことばをお使いになりますか。」とか「このような場合になんとおっしゃいますか。」のように質問し、その答を求めた。しかも、項目 22—29 は、項目 27—29 を除いて、体系的事実（音韻）について調べているのであるが、項目 36—46（おもに文法的語い）は個別的事実に関する調査である。このように、項目 22—29 と項目 36—46 とは、項目自身の性質および調査の方法について同一ではない。

いま、それぞれについて共通語形で反應した数（「音韻の点数」、「文法の点数」と言うことにする）の相關表を作ってみた。試みに、項目 12 によって、「ことしになって福島市ないし宇都宮市より遠くへ行った回数」が 0 の集団と 1 以上の集団とに分けて作ってみた相關表は次のようである。



行き来

0

文法 音韻	1点	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
8点					1							1
9	1				1							2
10			1	1		1						3
11		1	1		2							4
12	1	1	2	2		2	2	1	1			12
13				1	1	1	3	1				7
14		2	1	1	2	2						8
15		1	2	2		2	1	3	1	1		13
16		3	7	3	5	3	4			3		28
17	1	3	1	4	5	1	1	2	3	2		23
18			2	2	6	3	1		1			15
19		1	3	2	4	5	5	2	4	2	2	30
20			2	5	4	4	3	4	4	2		28
21				4	5	4	3	2	3	2	1	24
22			1	1	1	3	3	2	6	1		18
23			1	2		1	1					5
24				1		2	3	6	2	2		16
25					1	2	4	1	3	1	1	13
26						1	1	2	1		2	7
27					1	1	1	2	1	2	2	10
計	3	12	24	31	39	38	36	28	30	18	8	267

行き来

1 以上

文法 音韻	1点	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
6点									1			1
7												
8												
9				1		1						2
10							1	1				2
11		1			1							2
12			1				2					3
13				1			1					2
14	1		2	1	2		1	1				8
15			1		1	1		1				4
16												
17				2		1		3	1			7
18			1	4	2		3	5	2	1	1	19
19		1	1	2	1	4	2	2	2	2	1	22
20	1		1	2	1	8	5	2	3	1		24
21				2		1	2	7	5			17
22			1	1	1	5	1	1	2	2		14
23				1		1	1	1		1	1	6
24	1				3		2	1	4			12
25		1		2	3	2	4	2	4	1		19
26					4	1		1	2	2	1	11

26				1	2	3	4		2		12
27	1	1		4	2	1	3	5	5		22
計	3	4	8	20	20	31	34	33	29	17	209

これによると、二つの集団の相関係数は次のとおりである。

行き来（よそ行き）0 0.42

行き来（よそ行き）1以上 0.29

いま、試みに、Z変換を施し有意差を検定すると、二つの集団の間に有意な差は見られなかった。すなわち、二つの集団の間に、音韻の点数と文法の点数との関係について著しい差は認められないと言える。

さて、二つの集団を合わせた全体のものについての相関表を作ってみると次のようである。

文法 音韻	1点	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
6									1			1
7												
8					1							1
9	1			1	1	1						4
10			1	1		1	1	1				5
11		2	1		3							6
12	1	1	3	2		2	4	1	1			15
13				2	1	1	4	1				9
14	1	2	3	2	4	2	1	1				16
15		1	3	2	1	3	1	4	1	1		17
16		3	7	5	5	4	4	3	1	3		35
17	1	3	2	8	7	1	4	7	5	3	1	42
18		1	3	4	7	7	7	2	3	2	1	37
19	1	1	4	4	5	13	10	4	7	3	2	54
20			2	7	4	5	5	11	5	2		45
21			1	5	6	9	4	3	5	4	1	38
22			2	2	1	4	4	3	6	2	1	24
23	1		1	2	3	1	3	1	4		1	17
24		1		3	3	4	7	8	6	3		35
25					5	3	4	2	5	3	2	24
26					1	3	4	6	1	2	2	19
27		1		1	1	5	3	3	4	7	7	32
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476

これによると相関係数は 0.36 となり、相関関係はほぼ直線をなすと見

なされる。ちなみに、文法の点数の音韻の点数への相関比は0.42である。

音韻の点数と文法の点数との関係をのちに述べる主観的判定の各段階ごとに見ると、図 22 が示すようである。これは模型的に図 23 のように誇張することができるであろう。

これによれば、両者の関係は正比例的關係と見なされる。つまり、音韻の点数の高い者は文法の点数も高く、音韻の点数の低い者は文法の点数も低いという関係である。

これは、さきに「行き来」という特徴の度合によって分

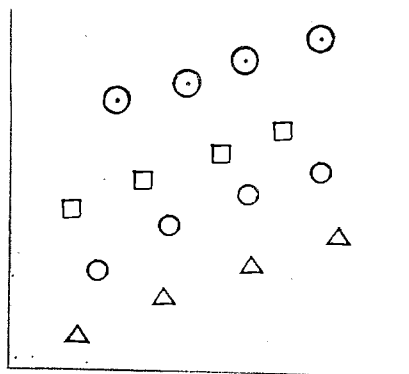


図 22

けた集団について見た場合の、両者の直線的関係と同じ傾向である。

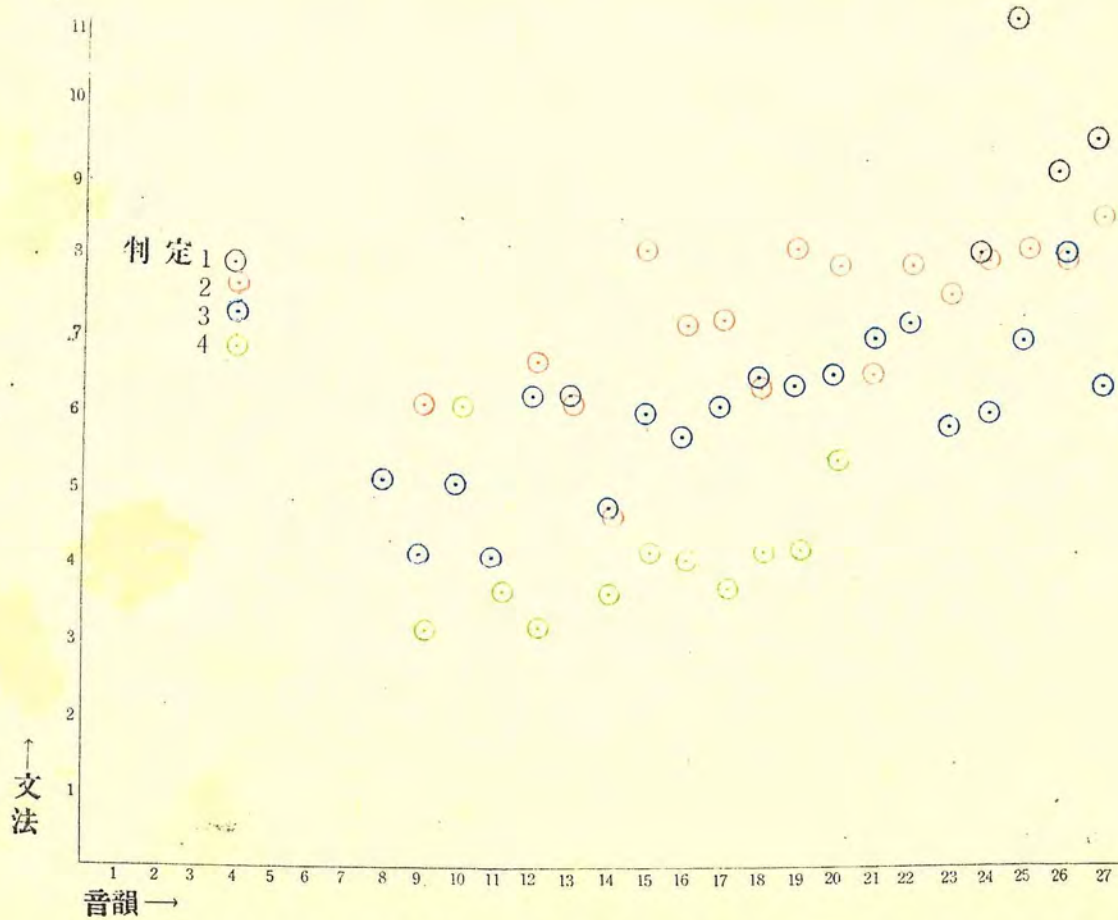
以上により、音韻の点数（項目22—29）と文法の点数（項目36—46）との間にはある程度の正比例的關係が見られるが、両者を同質のものとしてまとめることが許されるほどの積極的關係は見られない。したがって、われわれは両者を別別に扱うことにする。

## (ii) 音韻の点数の妥当性

さて、音韻の点数が共通語を話す度合を測定する時の妥当性 (validity) を示しているかどうかを見るために、音韻の点数と判定、「信頼性の検定」(項目60)との関係を調べてみよう。

まず、判定との関係を見ると、

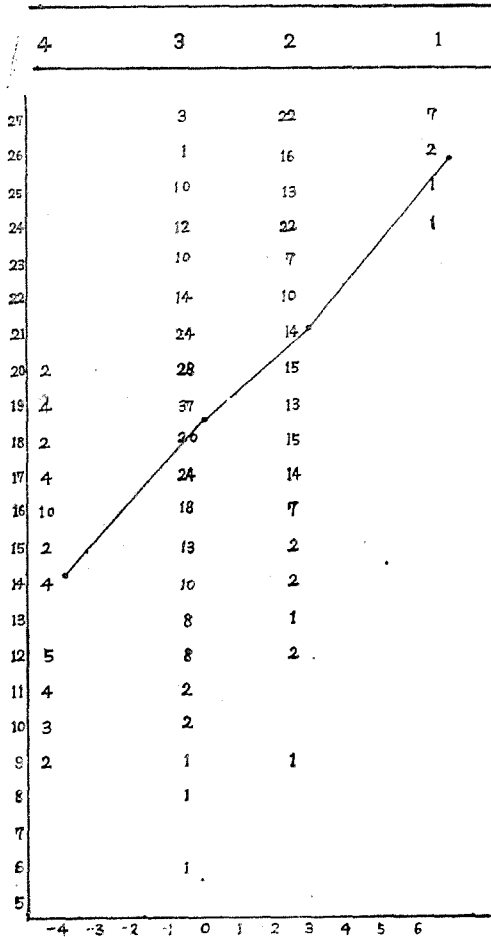
判定 \ 音韻																			
	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19					
1. 正しい共通語																			
2. えせ共通語				1			2	1	2	2	7	14	15	13					
3. 変ざり	1		1	1	2	2	8	8	10	13	18	24	20	37					
4. 方言				2	3	4	5		4	2	10	4	2	4					
計	1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54					



文法	普通	20	21	22	23	24	25	26	27	計	平均(m)	分散( $\sigma^2$ )
1. 正しい共通語						1	1	2	7	11	26.4	0.95
2. えせ共通語		15	14	10	7	22	13	16	22	176	21.6	15.37
3. まざり		28	24	14	10	12	10	1	3	247	19.0	13.67
4. 方言		2								42	14.7	9.87
計		45	38	24	17	35	24	19	32	476		

のようになり、判定の 1, 2, 3, 4 の間に有意差が見られる。ことに 4 が

### 判定



著しく低く、判定の高い者の分散が小さいことは注目される。

次に、「信頼性の検定」の項目との関係を見ると、

音韻		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
項目 60															
1. 2	共通語				1			4	2	6	3	10	12	15	14
3.	方言	1			2	2	1	6	4	7	5	14	19	15	23
4.	方言不明			1	1	2	5	5	2	3	7	10	8	5	6
						1			1		2	1	3	2	6
計		1		1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54

音韻		20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$
項目 60												
1. 2	共通語	18	15	11	8	15	11	9	27	181	21.1	17.68
3.	方言	14	17	6	8	18	12	7	4	190	19.3	16.99
4.	方言不明	8	5	6			1			75	16.6	13.73
		5	1	1	1	2		3	1	30		
計		45	38	24	17	35	24	19	32	476		

のようになり、各段階の間に有意な差があり、ことに「方言」の段階で低いことが注目される。

以上のことは、音韻の点数を指標とすることが共通語を話す度合の測定に、なんらかの意味で「妥当」であることを示していると言えよう。

### (iii) 文法の点数の妥当性

今度は、文法の点数についてその妥当性を見ることにする。まず、判定との関係は、次のようであって、各段階の間に有意な差が見受けられる。

文法		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$
判定															
1. 正しい	共通語						1	1	1	1	4	3	11	9.42	5.9
2. えせ	共通語		2	7	11	14	24	26	25	33	21	13	176	7.55	8.6
3. ま	方言	3	8	11	38	36	39	42	33	25	10	2	247	6.24	4.2
4. 方	方言不明	3	6	14	2	9	5	1	2				42	3.93	2.0
計		6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476		

次に、「信頼性の検定」(項目60)との関係を見ると、次のように、それぞれの間に有意な差が見受けられる。

項目 60	文法											計	m	$\sigma^2$
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11			
1. 正しい共通語	1	3	10	15	13	21	25	28	29	21	15	181	7.3	5.72
2. えせ共通語	2	6	11	22	25	31	30	25	24	11	3	190	6.4	4.87
3. まざり	2	6	7	12	16	11	10	7	3	1		75	5.2	4.12
4. 方言	1	1	4	2	5	6	5	1	3	2		30	5.7	5.32
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476		

以上によって、文法の点数の度合は共通語を話す度合を一応良く表わしていると言えよう。つまり、これは妥当性 (validity) のある一つの指標とすることができよう。

## (2) 主観的判定

次に主観的判定について述べよう。ここでは、共通語を話す度合を、初対面の調査員と会話する際の被調査者の言語を、調査員が主観的 (印象的) に判定することによって測定した。このような方法には当然、個人によるくせ (変動) が予想される。それでは、このような項目を共通語を話す度合の指標とすることは無意味ではないか、という疑問が起る。

しかし、日常生活において、共通語か方言かということ、つまり、ことばが (地域的に) 変っているかいないかということは多分に心理的 (主観的) なものを含んでいる。この意味において、主観的判定も一つの重要な方法である。しかも、実際に、八丈島の調査 (国立国語研究所「八丈島の言語調査」1950年、96 ペ) では調査員による変動は思ったより少ないことが明らかになっている。

もし、主観的な判定が客観的な反応と一致するならば、両者は同じ次元のもので考えられ、今後のこの種の調査においては主観的判定だけでじゅうぶんということになるかも知れない。しかし、もし、主観的判定と客観的反応とが一致せず、それが調査員の個人的変動によるものであることが明らかになれば、われわれはこのような印象的調査だけによる場合の危険について教えられ、さらに、次の調査に際して調査員の判定尺度を調整する資料を得ることができよう。

要するに、判定は、共通語を話す度合を測定する方法の一つであって、客観的反応による測定に対して一種の妥当性 (validity) の調査ないし補助の調査とすることができる。

このように考えて、今度の調査でもこの方法を採用することにした。八丈島の言語調査における経験を生かして、反応の段階を今度は次のように設けた (「八丈島の言語調査」44 ペ)。

- 1 正しい共通語
- 2 共通語だが、どことなく違う (えせ共通語)
- 3 共通語がまざる (まざり)
- 4 共通語を話さない (方言)
- 5 共通語が通じない

実際には、2と3との段階をさらに二つに分け、1寄りの2、3寄りの2、2寄りの3、4寄りの3 のように判定した。

また、判定がなるべく一様に行われるように、現地でそれぞれの段階に属するモデル個人を指定して、調査員全員がその言語を観察した。

なお、次のような「共通語を話す度合を判定する基準」を調査員に配って、判定の際の参考になるようにした。もちろん、厳密にこの基準によって判定することは、この方法の趣旨に反する。つまり、このような基準は調査票の項目 22—29, 36—46 で客観的に調査されるからである。項目61は主観的に判定するところに意味がある。したがって、この「基準」はあくまで参考とするにとどめるよう指示された。

目じるしに対して {  $\begin{matrix} \text{yes} \cdots \cdots \cdots \bigcirc \\ \text{no} \cdots \cdots \cdots \times \\ \text{yes or no} \cdots \Delta \end{matrix}$

分類項目	1	2	3	4	5	6	備考
目じるし	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	
1, 正しい共通語	○	○	○	○	○	○	白河市および附近の農村の生えぬきの人にはないだろう
2, 共通語だがどことなく違う	×	×	△	○	○	○	教養層にあるか
3, 共通語がまざる	×	×	×	×	△	○	
4, 共通語を話さない	×	×	×	×	×	○	
5, 共通語が通じない	×	×	×	×	×	×	おそらく該当層はないだろう



このようにして調べた結果は、大づかみに言えば、著しい影響を与えるほどの個人的変動は見られないと言うことができる。以下に詳しく述べよう。

### (i) 客観的反応との関係

客観的反応を音韻の反応（項目22—29）と文法の反応（項目36—46）とに分け、それぞれと主観的反応との関係を見ることにする。

まず、判定ごとに客観的反応それぞれの平均点数および分散（標準偏差）を求めると次のようである。

判 定	サンプル数	平均点数 (m)		分 散 ( $\sigma^2$ )	
		音 韻	文 法	音 韻	文 法
1	11	26.36	9.36	0.958	2.595
2	176	22.70	7.47	15.367	4.863
3	247	18.65	6.17	13.670	4.421
4	42	14.71	3.88	9.873	3.200

音韻と文法とについて、各判定の平均点の分布を見れば、図 25 のとおりである。

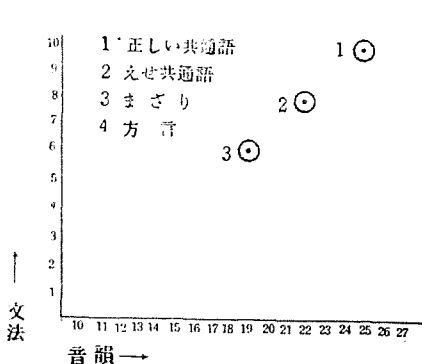


図 25

平均点については客観的反応のいずれも傾向性をもって (systematic に) 減少しており、かつ、その減少の関係が直線的であることが注目される。

音韻の平均点数の各判定間の差は有意と認められる。同様に文法の平均点数の各判定間の差も有意と認められる。

このことは、判定が客観的反応をうまく反映していることを物語る。

次に、各判定内部の分散を見ると、音韻の点数については、判定1とその他との間に有意な差が認められるが、その他（三者）のそれぞれの間には有意な差は認められない。文法の点数については、四つの判定それぞれ

の間に有意な差が認められない。以上のことは、判定1を除いて、判定内部の分散は互に著しく違わないということを意味する。

## (ii) 調査員個人の変動

調査員個人について各判定と音韻の点数、文法の点数との関係を見ることによって、調査員個人個人の判定の変動を調べてみた。図26、図27参照。

各判定について、調査員相互の変動は多少見受けられるが、調査員個人内部では、判定の下る(1→4)にしたがって、客観的反応の点数が下る傾向が一様に見られるのは注目される。つまり、これは判定がでたらめになされていないことを意味する。\*

\*これらのことを認めるのには次の検定法を用いた。

$$S_1^2 = \frac{1}{n_1 - 1} \sum_{i=1}^{n_1} (x_i - \bar{x})^2$$

$$S_2^2 = \frac{1}{n_2 - 1} \sum_{i=1}^{n_2} (y_i - \bar{y})^2$$

この有意差を見ると、

$$E(S_1^2) = \sigma_1^2, \quad E(S_2^2) = \sigma_2^2$$

$$\sigma_{S_1^2 - S_2^2}^2 = E(S_1^2 - S_2^2 - \sigma_1^2 + \sigma_2^2)^2 = \sigma_1^2 + \sigma_2^2 - 2\rho\sigma_1\sigma_2$$

となる。 $\rho$ は $S_1^2$ と $S_2^2$ の間の相関係数である。相関があるとする場合、 $\rho$ の値がわからなくても $\sigma_{S_1^2 - S_2^2}^2$ を大き目に取りのが検定の立場では安全であるから、 $\rho = -1$ と考えて検定をすれば良いのである。われわれの場合、明らかに $\rho = 0$ であるから、

$$\sigma_{S_1^2 - S_2^2}^2 = \sigma_{S_1^2}^2 + \sigma_{S_2^2}^2 \text{ となる。}$$

さて、ここでチェビシェフ(Tchebycheff)の定理を高性能化した検定法を用いることにする。

$$\Pr\{|\bar{x} - \bar{y}| > k\sigma\} \leq f(k)$$

[101へ続く]

# 文法の点数

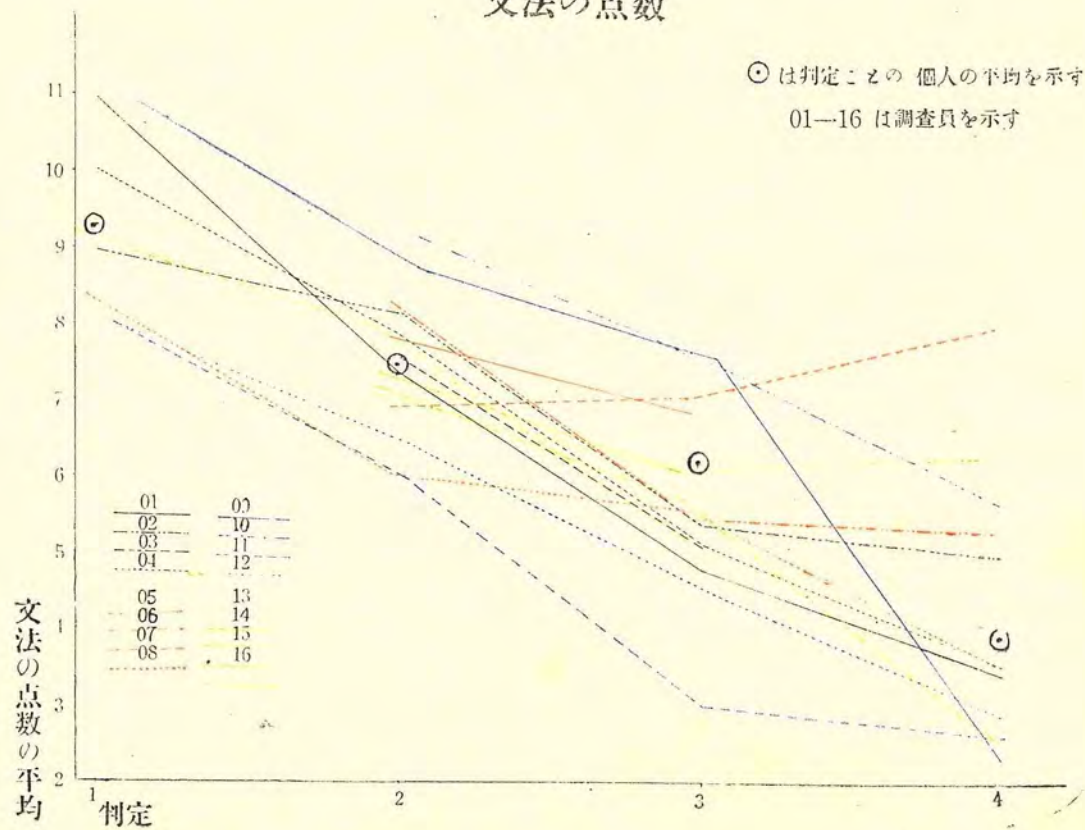
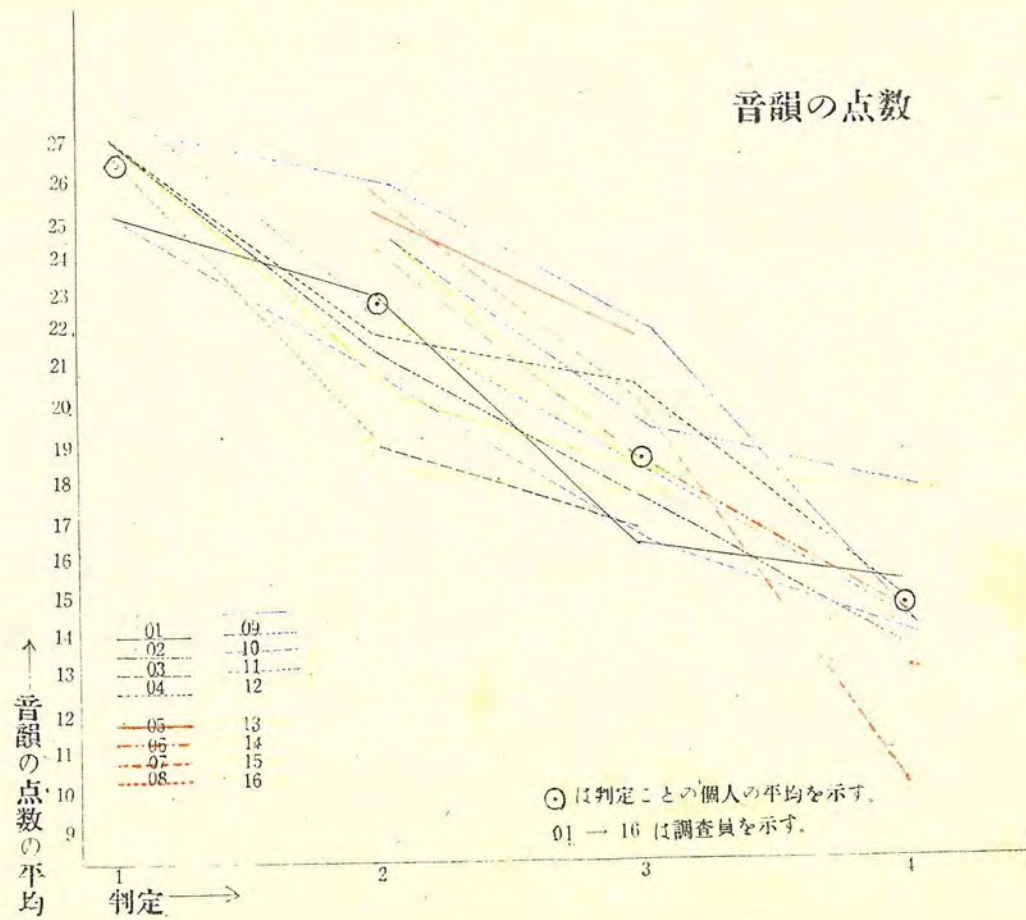


図 26

# 音韻の点数



さて、図 26，図 27 において、上のほうにある調査員個人は判定が比較的辛く（つまり、客観的反応の点数が高いものでないと、上位の判定を与えない）、下のほうにある調査員個人は比較的甘いと言うことができる。今後の調査では、前者は、場合に依じて判定を 1 段階だけ甘くつけ、後者は、同様に辛くつけるように調整するならば、各調査員の主観的判定はこの調査員グループについてかなり一致する結果が得られるであろう。

調査員個人内部の変動をさらに詳しく見るために、各個人の判定ごとの広がり（range）——ある調査員によってある特定の判定が与えられた被調査者集団の、客観的反応の点数の最高値と最低値との差——を音韻の点数について見ると図 28 のようである。

これによって、ほかの調査員と異なる判定を与える調査員、広がり of 広い調査員を見ることができる。

広がり that 各判定で重なり合っている程度が高い調査員は判定の方法に一貫性がない。つまり、変動が著しいと言えないであろうか。

[100 べから続く]  $\bar{X} = E(X)$   $\sigma^2 = E(X - \bar{X})^2$

$f(k)$  は  $k$  の  $\text{かん}$  函数。

$k=3$  のとき一般に  $f(k)$  は 95% を越えるのであるが、この考えを用いることにする。

われわれの場合、

$$\sigma_{S_1}^2 = \frac{\mu_4(1)}{n_1} - \frac{n_1 - 3}{n_1(n_1 - 1)} \sigma_1^4$$

$$\sigma_{S_2}^2 = \frac{\mu_4(2)}{n_2} - \frac{n_2 - 3}{n_2(n_2 - 1)} \sigma_2^4$$

このようにして、

$$D = \frac{|S_1^2 - S_2^2|}{\sqrt{\sigma_{S_1}^2 + \sigma_{S_2}^2}}$$

を作るとき、 $D > 3$  ならば有意な差があると考えて良いのである。

# 各調査員個人の判定ごとの広がり (音韻の点数)

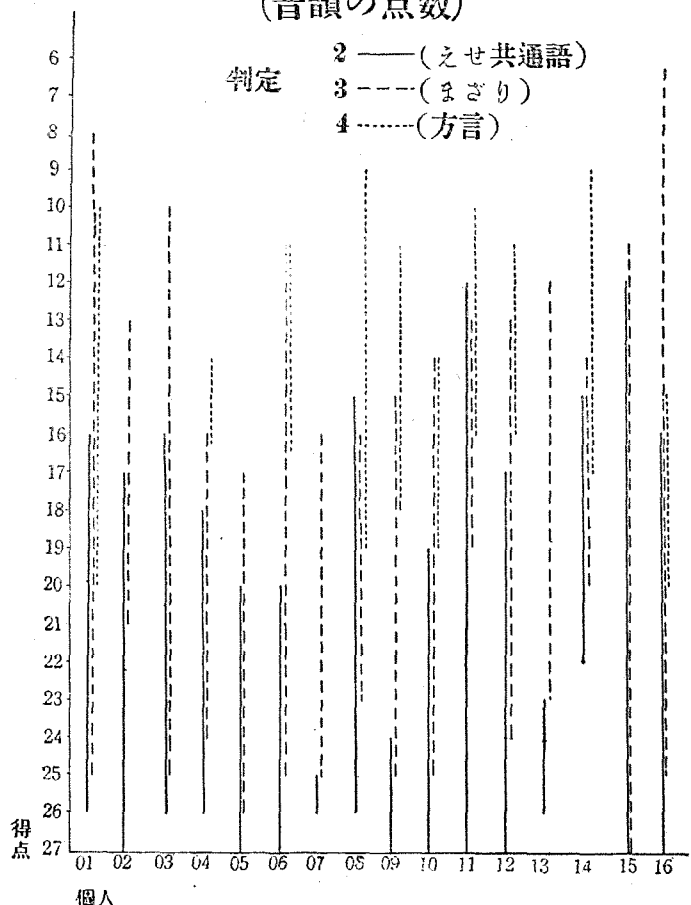


図 28

このような観点から見ると、調査員09は最も理想的な判定をしていると  
言うことができる。02もそれについて判定の一貫性を示している。これら  
に対して、01, 08, 11, 13, 15, 16 の調査員は判定の一貫性を欠くよう  
に見受けられる。全般的に見ると、各調査員における判定の一貫性は予期  
したほどのものは求められなかった。主観的な方法としてはこの程度で満

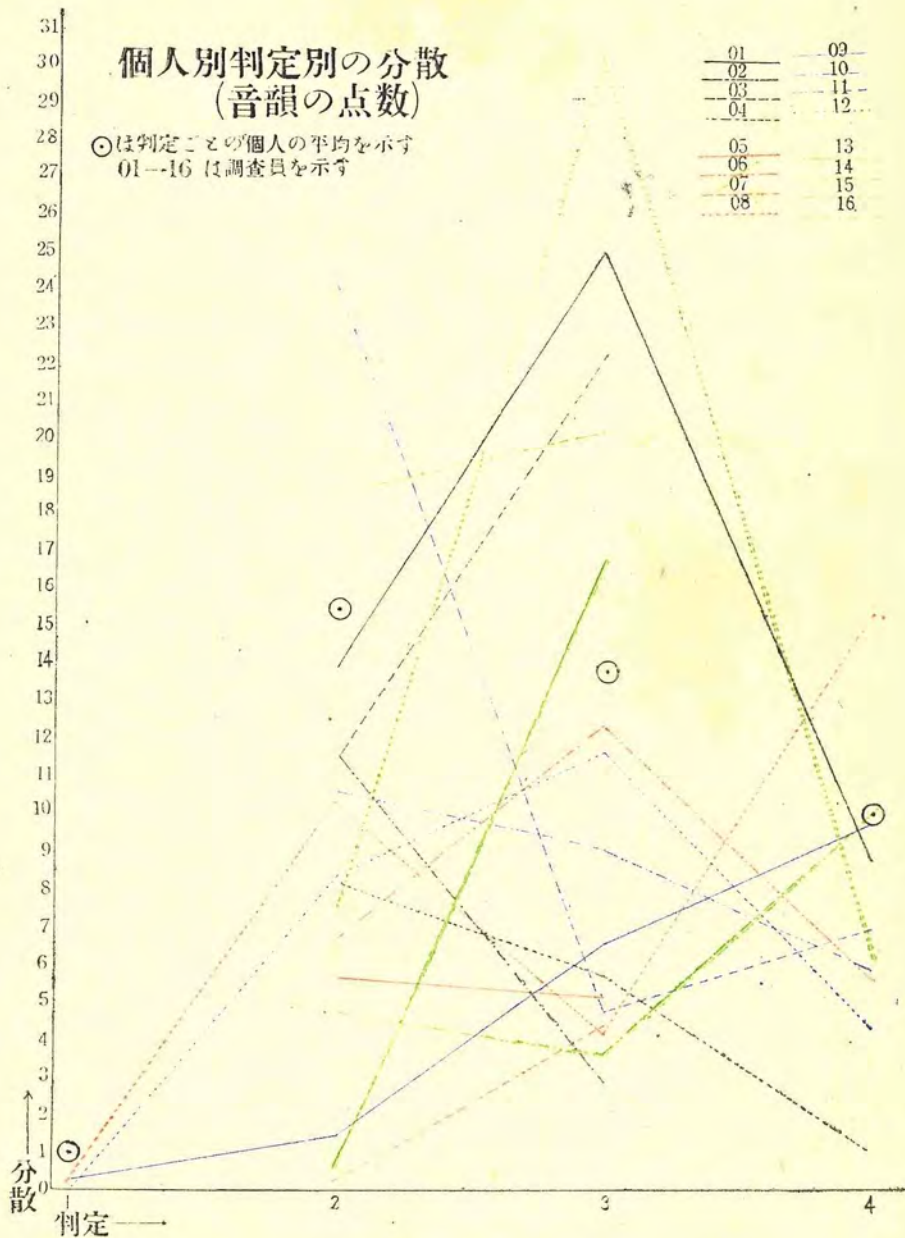


図 29

# 個人別判定別の分散 (文法の点数)

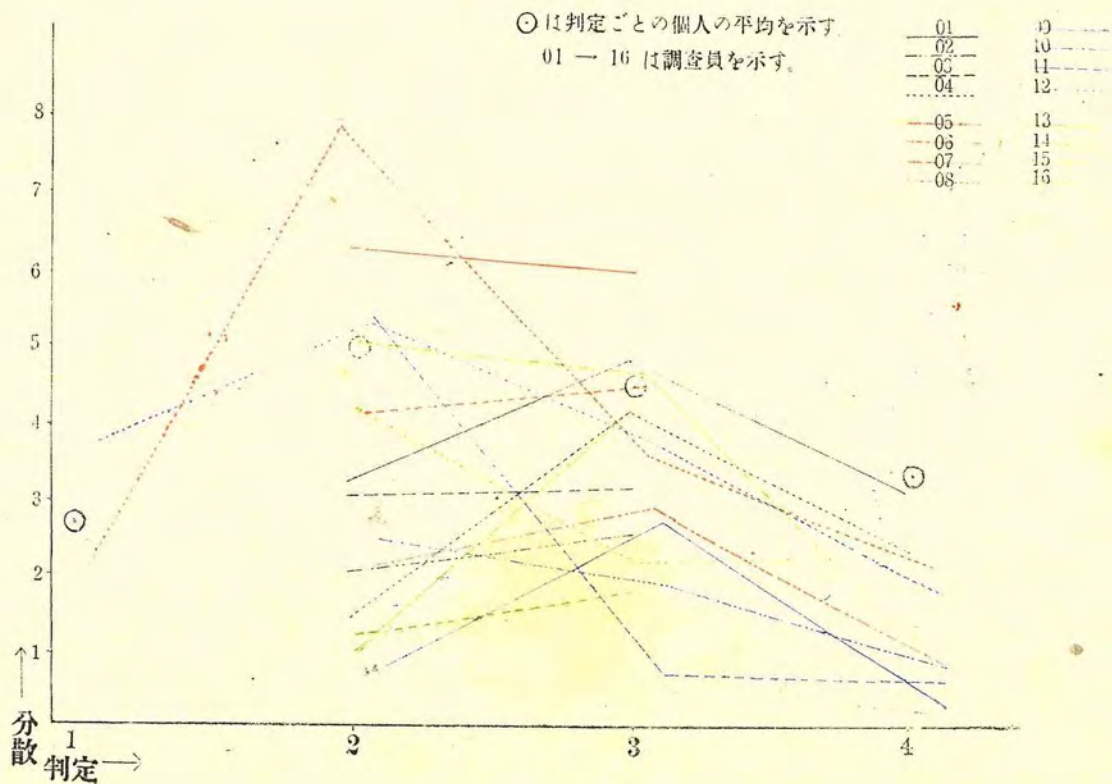


図 30



足すべきであろうか。

次に、調査員個人の変動の程度を音韻の点数の散らばり（分散および標準偏差）によって見ると次のようである。

調査員	判 分 定 散	$(\sigma^2)$	標 差 準 偏	$(\sigma)$	変 異 係	サ ル ン 数 ブ	(n)	調査員	判 分 定 散	$(\sigma^2)$	標 差 準 偏	$(\sigma)$	変 異 係	サ ル ン 数 ブ	(n)
01	1					1		03	1	0.250	0.500	0.0190		2	
	2	13.750	3.708	0.1628		8			2	1.359	1.166	0.0512		8	
	3	24.886	4.989	0.2675		9			3	6.495	2.549	0.1367		16	
	4	8.564	2.926	0.1989		11			4	9.560	3.092	0.2102		3	
02	1					1		10	1					0	
	2	11.356	3.370	0.1479		11			2	10.553	3.248	0.1426		6	
	3	2.788	1.670	0.0895		19			3	8.934	2.989	0.1603		25	
	4					1			4	5.554	2.354	0.1600		3	
03	1					0		11	1					1	
	2	11.400	3.376	0.1482		10			2	24.149	4.914	0.2157		21	
	3	22.160	4.707	0.2524		10			3	4.687	2.165	0.1161		4	
	4					0			4	6.750	2.598	0.1736		4	
04	1					1		12	1					2	
	2	8.109	2.848	0.1250		8			2	8.410	2.900	0.1273		25	
	3	5.580	2.362	0.1266		9			3	11.583	3.403	0.1825		9	
	4	1.000	1.000	0.0680		2			4	4.226	2.056	0.1398		3	
05	1					0		13	1					0	
	2	5.776	2.403	0.1055		14			2	0.687	0.829	0.0364		8	
	3	5.233	2.288	0.1227		22			3	16.911	4.112	0.2205		24	
	4					0			4					0	
06	1					0		14	1					0	
	2	6.800	2.608	0.1145		10			2	4.864	2.205	0.0968		13	
	3	12.440	5.527	0.1891		20			3	3.774	1.943	0.1042		13	
	4	5.552	2.356	0.1602		3			4	10.250	3.202	0.2177		4	
07	1					0		15	1					1	
	2	0.250	0.500	0.0219		2			2	18.734	4.328	0.1900		8	
	3	4.454	2.110	0.1131		14			3	20.276	4.503	0.2414		21	
	4					1			4					0	
08	1	0.250	0.500	0.0190		2		16	1					0	
	2	10.500	3.241	0.1423		12			2	7.651	2.766	0.1214		11	
	3	4.312	2.077	0.1114		16			3	30.769	5.547	0.2974		13	
	4	15.440	3.930	0.2672		5			4	6.250	2.500	0.1700		2	

これによると、調査員07、05、04、09などは散らばりが小さく、調査員01、11、15、16などは散らばりが大きい。図 29、図 30 を参照。

今後の調査においては、調査員 09 あたりが基準となり、特に、調査員

01, 11, 15, 16 は調査員 09 にならうように努力するならば、この調査員グループについてかなり一致した結果が得られるであろう。

### (iii) 共通語に対する意識との関係

次に、特に、主観的判定と共通語に対する意識との関係を見ることにする。もし、この関係がきわめて密接ならば、われわれは、個人的に変動のおそれがあり、したがって調査員グループが一致した測定をするにはあらかじめ訓練を要する主観的判定のかわりに、質問だけで足りる共通語に対する意識の結果を分析基準に採用することもできるであろう。

「白河のことは」に対する自覚(項目47) [白河(町内)のことはと在のことはとはよほど違いますか。] と判定との関係を見ると次のようである。

判 定			正共 し通 い語	え共 せ通 語	ま ざ り	方 雷	計	各判定の間に著しい 差あるいは傾向は見ら れない。
項目47								
無	関	心	0	0	2	0	2	「白河のことは」の 価値づけ(項目48) [白 河のことはと在のこと ばとどちらがいいこと ばでしょうか。]と判定 との関係を見ると、左 のように、各判定の間 に著しい差あるいは傾 向は見られない。
遠	か	う	11	154	217	38	420	
わ	ら	い	0	10	7	1	18	
遠	わ	な	0	12	21	3	36	
計			11	176	247	42	476	

判 定			正共 し通 い語	え共 せ通 語	ま ざ り	方 雷	計	各判定の間に著しい 差あるいは傾向は見ら れない。
項目48								
無	関	心	0	6	19	0	25	「白河のことは」の 価値づけ(項目48) [白 河のことはと在のこと ばとどちらがいいこと ばでしょうか。]と判定 との関係を見ると、左 のように、各判定の間 に著しい差あるいは傾 向は見られない。
白河のほうが良い			11	146	200	37	394	
わからない			0	7	12	3	22	
白河のほうが悪い			0	2	4	1	7	
不明			0	15	12	1	28	
計			0	176	247	42	476	

向は見られない。

「白河のことは」と共通語との比較(項目49) [標準語は土地のことはと比べて違っていると感じになりますか。]と判定との関係を見ると、次のように、項目49における『「白河のことは」』と共通語と比べて違っていると「感じない」という反応が判定 1, 2, 3, 4 と進むにしたがって増加する傾向

が見受けられるのは興味ある結果である。

判 定			1. 正 共 し 通 い 語	2. え 共 せ 通 語	3. ま ざ り	4. 方 言	計
項目49							
無 感 わ 感 不	関 じ ら な い	心 る い 明		2	3	1	6
			10	164	183	24	363
				3	8	3	14
			1	25	53	13	92
						1	1
計			11	176	247	42	476
「感じない」の割合			%	%	%	%	%
			9.1	14.2	21.5	31.0	19.3

「共通語を使うことがない」という反応が増加する傾向が見られる。そして、判定4においてはこの反応が57%の比率を示していることは、判定とこのような質問に対する反応との間に一応の妥当性 (validity) のあることを示していると言えよう。

判 定			1. 正 共 し 通 い 語	2. え 共 せ 通 語	3. ま ざ り	4. 方 言	計
項目50a							
不 標 準 語 を 知 ら な い 使 う こ と が あ る わ か ら な い 使 い た い が 使 え な い 使 う こ と が な い	明		1	26	41	8	76
			10	131	139	5	285
				6	8	5	19
				2	5		7
				10	54	24	88
計			11	176	247	42	476
「使うことがない」の割合			%	%	%	%	%
			0	5.7	17.8	57.1	18.5

判 定			正 共 し 通 い 語	え 共 せ 通 語	ま ざ り	方 言	計
項目50b							
不 あ な	明 る い		1	12	12	1	26
			10	144	165	10	329
				20	70	31	121
計			11	176	247	42	476
「ない」の割合			%	%	%	%	%
			0	11.4	28.3	73.8	25.4

る。たとえば、0点は七つの場面すべてにおいて共通語を使わないと答え

共通語の使用(項目50a)〔標準語を使う時がありますか。〕と判定との関係を見ると、次のように、判定が1, 2, 3, 4と進むにつれて、項目50aにおける

共通語意識のあるなし(項目50b)と判定との関係を見ると、項目50aの場合とまったく同一の結果が示される。

場面による共通語と方言との使い分け(項目51—58)と判定との関係を見ると次のページに示すようである。

場面の数字は、共通語を使うと答えた場合に1点を与えることによって計算した点数であ

た者である。

判定 場面(51-58)	1. 正し 共通 語	2. えせ 共通 語	3. ま さ り	4. 方 言	計
0点		29	83	28	140
1		18	37	6	61
2	3	35	65	3	106
3	1	29	27	4	61
4	1	19	8	1	29
5	1	20	9		30
6	3	10	9		22
7	2	16	9		27
計	11	176	247	42	476

判定が 1, 2, 3, 4  
と進むにつれて、場面  
の点数が傾向的に減少  
してくることが見受け  
られる。試みに、6 点、  
7 点の者の判定による  
減少の模様を示せば次

のようである。

判定	1	2	3	4
6 点 + 7 点	人数 5	26	18	0
	割合 45.5%	14.8%	7.3%	0%

平均点について見てもこの傾向が明らかなである。

判定	1	2	3	4	計
m	4.6	3.0	1.8	0.7	2.2
$\sigma^2$	1.92	2.15	1.87	1.11	2.09

共通語に対する態度（項目59）〔お子さんが人前で標準語を話せるよう

判定 項目 59	正し 共通 語	えせ 共通 語	ま さ り	方 言	計
無 関 心 な ら ば 不 可 必 要 な 明 示	10	5 163 3 4 1	4 213 8 15 7	2 30 4 6	11 416 15 26 8
計	11	176	247	42	476

になることは将来必要  
なことでしょうか。〕と  
判定との関係を見る  
と、左のように、各判  
定の間に著しい差ある  
いは傾向は見受けられ

ない。

以上により、主観的判定と共通語に対する意識との関係はやや密接な場合もあるが、この程度の関係では、主観的判定のかわりに、共通語に対する意識を共通語を話す度合の指標として用いることはできないと思われる。

### (3) 音韻の点数

以上述べたように、

#### 1.1 音韻の反応

#### 1.2 文法の反応

#### 2 主観的判定

の三つとも共通語を話す度合を表わす指標として用いることができ、しかも、指標それぞれがなんらかの意味の妥当性を持っていることが明らかになった。

#### (i) おもな指標とする理由

そこで、われわれは共通語を話す度合を三つの指標のそれぞれによって分析あるいは測定し、そしてそれらを比較しようと思う。しかし、そのうち、細かい分析を施す際の指標としては、音韻の反応を採りたいと思う。つまり、共通語を話す度合を分析、測定するおもな指標として音韻の点数を採りたいと思う。その理由をあげれば次のようである。

1) 上の指標1のほうがいっそう妥当性 (validity) と信頼性 (reliability) とを有するのみならず、主観性を避ける (objectivity がある) 点で有利である。

2) 上の 1.1 と 1.2 とを比較すれば、前者は法則的事実であって、これによって他の多くの事実を推測することができる。

3) 六つの言語的構造 (おもに音韻的構造) の特徴を代表する事実を含んでいるので、言語構造的に共通語を話すようになる過程についても見ることができる。

4) 0 から 27 までの点数で表わしうるので、統計的分析が容易である。

このように考えて、共通語を話す度合を表わす指標のおもなものとして音韻の点数を用いることにする。

#### (ii) 音韻の点数の分布

まず、全体の分布について見れば図 31, 図 32 のようである。図 31

は1点ごとの分布、図32は点数をいくつかにまとめた場合の分布を示す。  
 なお、これらは白河市についてだけ考えていることを断っておかなければ  
 ならない。

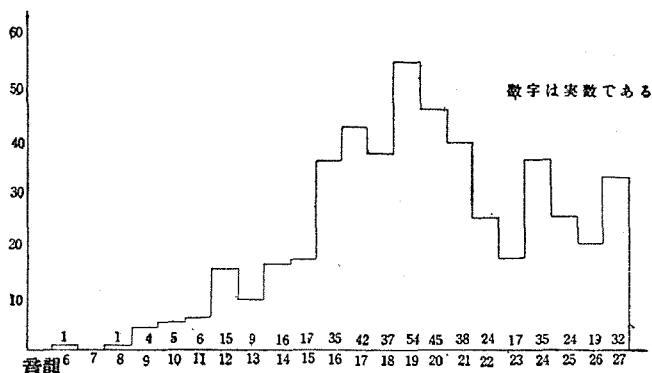


図 31

これらの図から知  
 られることは、まず、  
 山が一つしかないよ  
 うな (unimodal) 分  
 布ではないことであ  
 る。すなわち、19点  
 を境に分れる二つの  
 グループの山が見ら  
 れることである。図

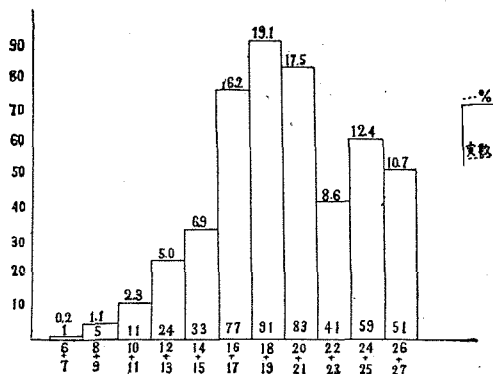


図 32

32 参照。この二つ

のグループは大ざっぱに、

1. 「イとエの混同」を見せるグループ
2. 「イとエの混同」を見せないグループ

と考えることができるように思われる (5.3 参照)。すなわち、 $19=27$  (総点)  $-8$  (「イとエとの混同」についての総点数) であるからである。

さて、この分布の各数値をあげれば、

平均 ( $m$ )	19.6
分散 ( $\sigma^2$ )	18.85
歪度 ( $\beta_1$ )	0.033
尖度 ( $\beta_2$ )	2.621
中央値 (median)	19.9
変異係数 ( $\frac{\sigma}{m}$ )	0.22

である。

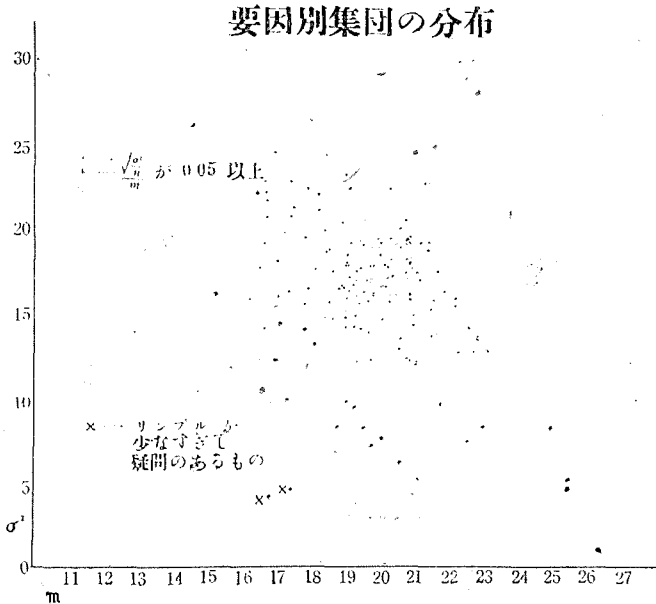


図 33

次に各要因によっていろいろに分類した集団の分布を  $m$  と  $\sigma^2$  について見ると図 33 のとおりである。

これで見ると、平均点 ( $m$ ) が大きくなると分散 ( $\sigma^2$ ) が小さくなるという関係が一応見

受けられるが、集団が一定のはっきりした体系をもって分布していると言ふことはできないであろう。

## (iii) 音韻の点数の構造

さて、共通語を話す度合を決定する要因を表わす指標として音韻の点数（項目22—29）を採用するに当って、音韻の点数に含まれる各事項（「イとエとの混同」、有声化、無声化、ji の音、「ヒとシとの混同」、語い）が同質のものかどうかを調べておく必要がある。もし、事項のうちに次元の異なるものがあるならば、その和（総点数）はまったく無意味となるからである。

ここで同質ということは、総点数によって各事項の様子が決定されるということ、つまり、総点数が各事項の構造を良く表わしているということである。

はたして、われわれの場合はどうであろうか。これを見るために、いわゆる L. Guttman の cornell technique による scale analysis (尺度解析法) を応用してみよう。

まず、被

## 白 河 市

調査者を点数の高い順に並べ、次に被調査者それぞれが各事項についてどのような点数をとっているかを調べ、この点をブ

被 験 者 番 号	音 韻 得 点	イ と エ								有 声					無 声			j i				ヒ と シ			語 い				
		0	1	2	3	4	5	6	7	8	0	1	2	3	4	5	6	0	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	3
32	27																												
19	26																												
24	25																												
35	24																												
17	23																												
14	22																												
38	21																												
44	20																												
54	19																												
37	18																												
42	17																												
35	16																												
17	15																												
16	14																												
9	13																												
15	12																												
6	11																												
5	10																												
4	9																												
1	8																												
	7																												
1	6																												

ロットする。

図 34

このようにして得られた表において、もし、・の動き (behavior) が総



点数の高いものから低いものへ向って、事項相互に入りまじることなく、各事項内部において左右に揺れることがなければ、総点数は共通語を話す度合の構造を良く表わしていると言うことができる。われわれの場合、細かく見ると、・の動きは入りまじることもあり、左右に揺れることもあって、総点数が各被調査者の共通語を話す度合の構造を良く表わしているとは言えない。つまり、共通語を話す度合の構造はそう簡単なものではないようである。しかし、大づかみにながめるならば、総点数は共通語を話す度合の構造を良く表わしていると言ってさしつかえないであろう。

いま、以上の模様をさらに大づかみに見るために、総点数の同じものを集め、それについて各事項別に示される点数の平均をプロットした表を示せば図 34 のとおりである。

これによれば、まず、各事項の構造が総点数によって良く表わされていることが了解せられるであろう。

## 4.2 「音韻の点数」から見た共通語を話す度合を決定する要因

共通語を話す度合を決定する要因を分析するのに、われわれは統計学で言うところの相関関係の考えを用いた。

まず、白河市民（サンプル）なる集団を要因一つ一つを基準にしていくつかの部分集団に分類し、それぞれの部分集団の示す音韻の平均点数を比較して、その差が有意であるかどうかを検定した。この場合、有意な差が見られればその要因は共通語を話す度合に影響を与えていると考えるのである。たとえば、白河市民を男と女とに分けて、男の集団の音韻の平均点数と女の集団のそれとを比べたとき、二つの集団の間に、音韻の点数に関して、母集団においてもそのようであろうと推測されるほどの著しい差（有意な差）が見られるならば、性（男・女）という要因が共通語を話す度合（音韻の点数で表わされている）に影響を与えていると考えるのである。

これは単純な相関の考えを用いた分析である。

ところが、このような要因にはほかの要因がからみ合っている。前の例で言えば、性という要因には学歴、職業などの要因がからみ合っている。そこで、要因をもっと純粹に取り出すために、他の要因を一定にしておいて、基準となる要因によって分類された集団の平均点数を比較することが必要である。たとえば、高等小学卒業の者だけを取り出し、それを男と女とに分けて、高等小学卒業の男の平均点数と高等小学卒業の女のそれとを比較して、性という要因がきいているかどうかを調べるわけである。これは偏相関の考えを用いた分析である。

さらに、二つ以上の要因相互の関係を調べて、共通語を話す度合にどの要因がより強く影響しているかを見ることにする。たとえば、性、学歴、職業はそれぞれどの程度に共通語を話す度合（音韻の点数で表わされる）を決定するのにあずかって力があるかを見るわけである。これは重相関の考えを用いた分析である。

偏相関の考えも重相関の考えも、ともに、諸要因から現象を予測するという立場で用いられている。つまり、各要因が共通語を話す度合にどのように寄与（contribute）しているかということを知って、これこれの諸要因があれば、その集団の共通語を話す度合はこの程度であるということが、ある確率をもって言えるのである。

なお、最後に、共通語を話す度合の高い者、つまり、音韻の点数の高い者の集団を特に取り出して分析することによっても、強い要因を探し出すとした。

さて、われわれの調査項目のうちには、要因でないものがある。たとえば、主観的判定（項目61）や信頼性の検定（項目60）、さらに、音韻の点数（項目22—29）、文法の点数（項目36—46）は共通語を話す度合を知るための「手がかり」ではあっても、要因ではない。これらは同じ共通語を話す度合をそれぞれの面から捕えたものであって、これら相互の関係は妥

当性を示すものではあっても、一つが他のものを決定する要因とするわけにはいかない。

このように考えて、われわれが分析のために設けた要因は次の 12 である。

- 1 性
- 2 年齢
- 3 学歴
- 4 職業
- 5 階層
- 6 現住所
- 7 父母の出身地
- 8 生育地（言語形成期におけるおもな居住地）
- 9 生育地とその後の居住地
- 10 行き来（よそ行き）
- 11 新聞・ラジオの利用度
- 12 社会的態度、共通語に対する態度・意識\*

これらはさらにまとめられて、

- I 自然的要因（1, 2）
- II 経歴的要因（3, 4）
- III 社会的・地域的環境の要因（5, 6）
- IV 生育・居住環境の要因（7, 8, 9）
- V コミュニケーション（10, 11）
- VI 社会的態度、共通語に対する態度・意識（12）

のように六つの要因群となる。

なお、さきに述べたように、共通語を話す度合を音韻の点数によって表わすこととし、しかも、音韻の総点数によって分析することにした。すでに述べたように、音韻の総点数が各事項の構造を良く表わしていることが

\* この要因は、さらに次の 6 項に分けて分析された。

- (i) 社会的態度
- (ii) 白河のことばに対する自覚と価値づけ（項目47, 48）
- (iii) 共通語と白河のことばとの比較と共通語の使用（項目49, 50a）
- (iv) 共通語意識（項目50b）
- (v) 場面による共通語と方言との使い分け（項目51—58）
- (vi) 共通語に対する態度（項目59）

明らかであるからである。

(1) 要因別分析

以下,

m 音韻の点数の平均点

n その集団に入るサンプル数

$\sigma^2$  分散

$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$  サンプリングの精度を示す一種の目やす (変異係数)

のような記号を用いる。平均点は集団の傾向を示す一つの目やすになりうる。サンプル数は以下, 「計」として示すことがある。分散は平均点の分布を示すものである。分散が小さいときほど平均点は集団の傾向を示す良い目やすであるといえる。いくつかの集団の分散およびサンプル数がひどく違う場合には, 互に比較できないので, その際の目やすとして変異係数も出しておいた。

(i) 性

性 \ 音韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
男	1			2	2	2	9	4	7	10	18	26	18	25
女	1		1	2	3	4	6	5	9	7	17	16	19	29
計	1		1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54

性 \ 音韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
男	21	18	13	9	15	6	6	11	124	19.0	17.35	0.3
女	24	20	11	8	20	18	13	21	252	20.1	17.43	0.3
計	45	38	24	17	35	24	19	32	476			

男女の間に分布構造上の差があるかどうかを見るために, 試みに  $\chi^2$  検定を行うと,

$$\chi^2 = 15.092 \quad (\text{自由度 } 15)$$

となり, 有意な差は認められない。ところが, 平均点の差——すなわち, 男 19.0, 女 20.1 の差——は有意と認められる。分散についてはほぼ

同じ程度である。

以上により、男女の差は目だつほどのものではないと考えられる。

(ii) 年齢

年齢別分布は次に示す表のようである。平均点についてグラフを目盛り  
ば図 35 のようである。

年齢 \ 音韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
15 — 19				1			1	1	2	2	4	9	6	11
20 — 24								1	1	1	4	4	3	6
25 — 29						1	2	1	3	1	4	2	5	5
30 — 34							3	1			2	4	6	8
35 — 39						2	1	1	2	1	4	6	2	2
40 — 44						1	3			1	2	5	7	8
45 — 49					1			2	1	3	4	5	3	3
50 — 54	1			1	1	1	1		2	5	3	2	2	4
55 — 59				1	1		2	1	5	1	6	2	1	1
60 — 69			1	1	2	1	2	1		2	2	3	2	6
計	1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54

年齢 \ 音韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
15 — 19	4	8	7	4	11	10	3	7	91	20.9	15.53	0.4
20 — 24	10	6	3	2	8	5	9	4	67	21.5	13.29	0.4
25 — 29	7	5	1	4	8	2	2	4	57	20.2	17.33	0.6
30 — 34	7	2	3		2	1	1	6	46	20.0	16.13	0.6
35 — 39	5	5	4	3	2	1		2	43	19.0	15.44	0.6
40 — 44	3	4	1	3	3	2			45	19.3	13.76	0.6
45 — 49	6	2	2	1		1	1	3	38	18.8	16.03	0.6
50 — 54	1		1		1		2	1	29	16.9	24.09	0.9
55 — 59		3				1		2	27	16.7	20.30	0.9
60 — 69	2	3	2			1	1	1	33	17.4	22.36	0.8
計	45	38	24	17	35	24	19	32	476			

これらによると、各段階の間に有意な差は認められないが、離れた段階の間には有意な差が認められる。10段階の年齢は、大きく、

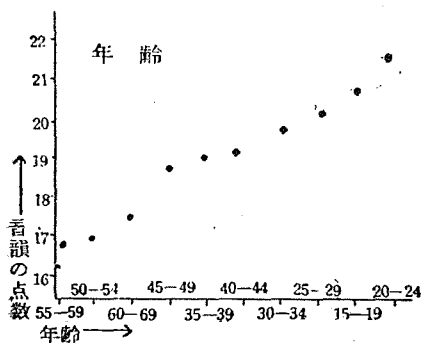
15—34

35—49

50—69

の三つの集団に分けることができ、第1の集団と第3の集団との間の差は

明らかに有意である。しかも、三つの集団の分布は相当定まった傾向を見せている。なお、分散が若い者より老人において大きいと言う傾向を示すの



が注目されるが、これは老人の生活経歴の多様性によるためであるうか。

次に、性と年齢とをクロスさせたものについて見ると、次のようである。いま、平均点の順に集団を並べると、

図 35

女	15—19歳	23.0点
女	20—24	22.3
男	20—24	20.6
女	25—34	20.4
男	25—34	19.6
女	35—44	19.3
男	35—44	19.0
男	15—19	19.0
男	45—54	18.2
女	45—54	17.8
男	55—69	17.5
女	55—69	16.7

のようになり、これらのうち差の少ないものを集めて集団を作り、その分布を見れば次のようである。

男

年齢 \ 音韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
15—19				1			1	1	2	2	4	8	5	5
20—24								1	1	1	2	4	2	3
25—34						1	3	1	1		3	4	3	6
35—44					1	1	4			1	1	5	5	3
45—54	1			1			1	1	1	4	4	3	2	3
55—69					3			1	2	2	4	2	1	5
計	1	0	0	2	3	2	9	4	7	10	18	26	18	25

年齢 \ 音韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
15 — 19	1	6	3	2	4	1		2	48	19.0	14.33	0.5
20 — 24	5	2	1	1	4	2	3	1	32	20.6	13.10	0.6
25 — 34	7	5	2	1	5		2	3	47	19.6	16.49	0.6
35 — 44	3	2	4	4	2	2			37	19.0	14.68	0.6
45 — 54	3	2	3	1		1	1	2	34	18.2	21.67	0.8
55 — 69	2	1						3	26	17.5	20.87	0.9
計	21	18	13	9	15	6	6	11	224			

## 女

年齢 \ 音韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
15 — 19												1	1	6
20 — 24								1			2		1	3
25 — 34							2	1	2	1	3	2	8	7
35 — 44						2		1	2	1	5	6	4	7
45 — 54					2	1		1	2	4	3	4	3	4
55 — 55			1	2		1	4	1	3	1	4	3	2	2
計	0	0	1	2	2	4	6	5	9	7	17	16	19	29

年齢 \ 音韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
15 — 19	3	2	4	2	7	9	3	5	43	23.0	8.04	0.4
20 — 24	5	4	2	1	4	3	6	3	35	22.3	12.36	0.6
25 — 34	7	2	2	3	5	3	1	7	56	20.4	16.78	0.5
35 — 44	5	7	1	2	3	1		4	51	19.3	14.49	0.5
45 — 54	4				1		2	2	33	17.8	19.12	0.8
55 — 69		5	2			2	1		34	16.7	21.84	2.5
計	24	20	11	8	20	18	13	21	252			

15—19歳の男女の間に有意な差が認められる。そのほかの年齢層においては認められない。若い年齢の女に分散の小さいのが目だつとともに、老年になるにつれて分散が大きくなる傾向を見のがしえない。

いま、男女の差（平均点の差で表わす）を年齢別に目盛ってみると、図36のように、男女の差が年齢とともに縮まり、高い年齢では逆転する傾向が見受けられる。

以上により、自然的要因については、

## 性 × 年齢

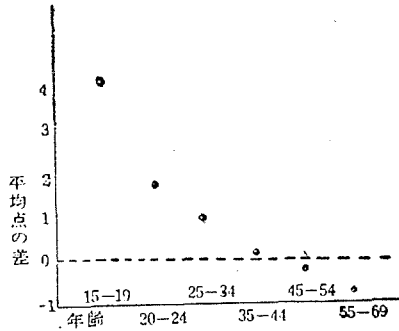
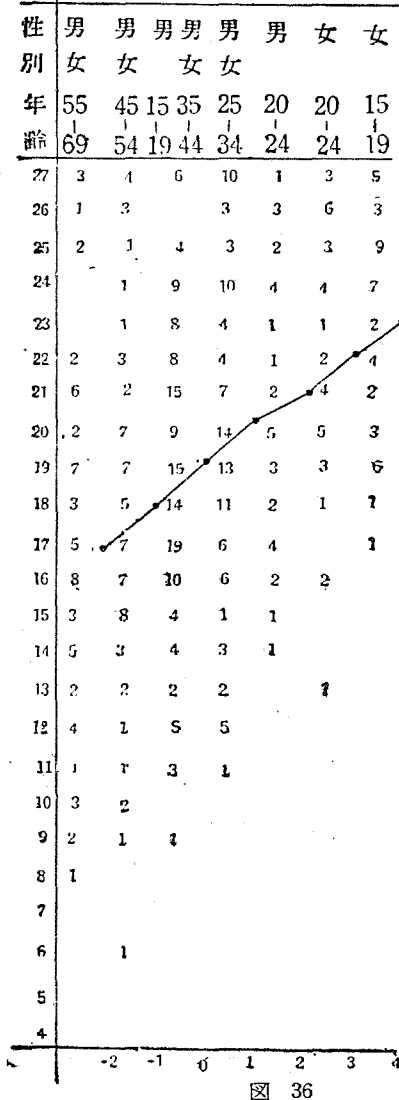


図 37

- (1) 性の差は著しくない
- (2) 15—34歳と50—69歳との間の差が注目される
- (3) 若い男女の間の差が目立つなどのことが見られた。

## (iii) 学歴

119 ペに示す表および図 38 により、学歴の低い集団の平均点は低く、同じく高い集団のそれは高い傾向が体系的に現れている。ちなみに、高小卒（平均点19.3）と旧制中学卒業・中退（平均点21.9）の間には有意差が見られる。その他の集団についてはサンプル数が少なく決定的な結論を出すことができない。なお、平均点の高い集団の分散は小さいことが見受けられる。

いま、学歴を適宜に集めて比較すれば、図 39 のようである。これらにより、学歴はかなり著しい要因と考えられる。





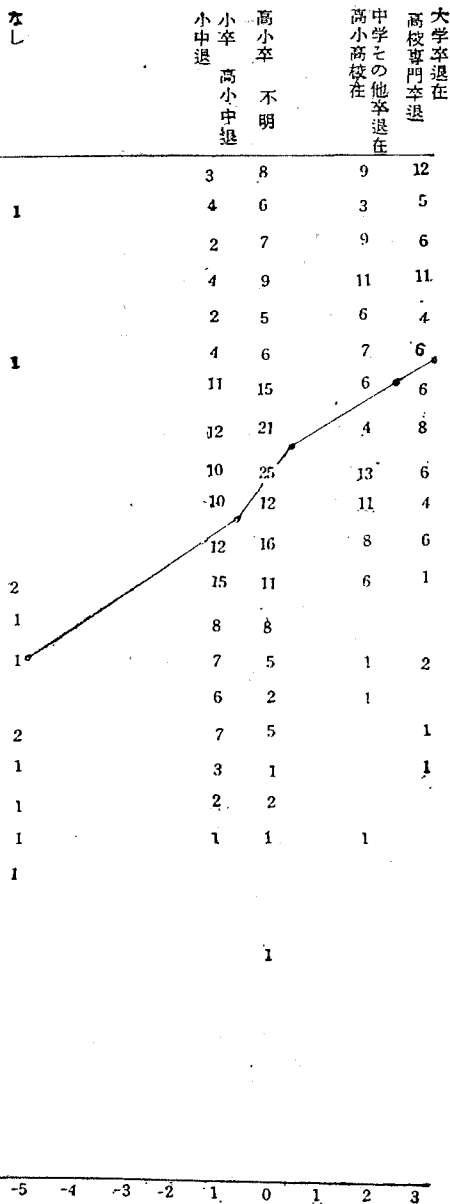
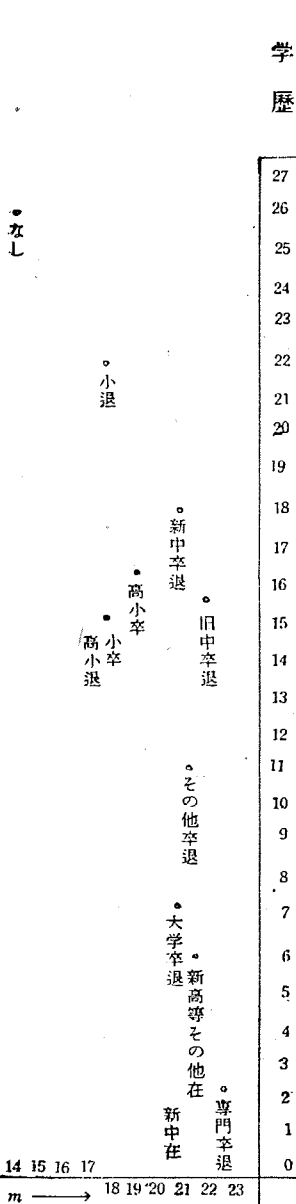


図 38

図 39

64—68 本人は主婦で、家の職業がこの4ないし8（ただし、6, 7を当然除く）に該当する者

71—73 本人は学生ないし生徒で、家の職業が1ないし3に該当する者

74—78 本人は学生ないし生徒で、家の職業が4ないし8に該当する者

81—83 本人は無職で、家の職業が1ないし3に該当する者

84—88 本人は無職で、家の職業が4ないし9に該当する者

このように分類して、次のような音韻の点数との相関図表を作ってみた。その結果、1と2, 3, 4, 5, 6との間に有意な差が認められる。特に4と5, すなわち、日雇と農業とが低いのは注目される。なお、平均点の低い4と5との分散が平均点の高い1（給料生活者）のそれと大した差を示さないのは興味深い。

職業	音韻	8	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
1							1	1			2	3	2	6	6
2		1				2		1	1	1	3	4	2	2	6
3							1	4	1	4	5	7	10	3	6
4								1	2	1	3	2	2	2	3
5					1	1	2	2	1	4	2	6	6	5	5
61—63				1	1	1	2	3	1	5	1	5	9	10	12
64—68				1				2	2		1		3	3	1
71—73				1								1	3	2	5
74—78									1			2	3	2	2
81—83						1		1		1		1	1	1	6
84—88												4	1	1	2
計		1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	34

職業	音韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
1		11	4	7	4	7	7	5	10	76	21.7	13.39	0.4
2		2	4	1	2	6	1	1	2	42	19.0	22.79	0.7
3		7	6	2		4	5	4	4	73	19.1	18.66	0.5
4		2	1		1	1			1	22	17.8	13.63	0.8
5		2	3	1		3	1			45	17.1	13.95	0.6
61—63		12	10	5	3	4	1	5	8	99	19.4	18.87	0.4
64—68		1	2			2	1	1	1	21	18.4	23.86	1.1
71—73		3	3	3	4	4	4		2	35	21.1	11.82	0.6
74—78		1	3	2				1	1	18	19.4	11.76	0.8
81—83		2	1	3	2	3	3	2	2	30	20.9	17.82	0.8
84—88		2	1		1	1	1		1	15	19.8	11.89	0.9
計		45	38	24	17	35	24	19	32	476			

次に、職業を適宜な集団にまとめた場合の構造は図 40 のとおりである。

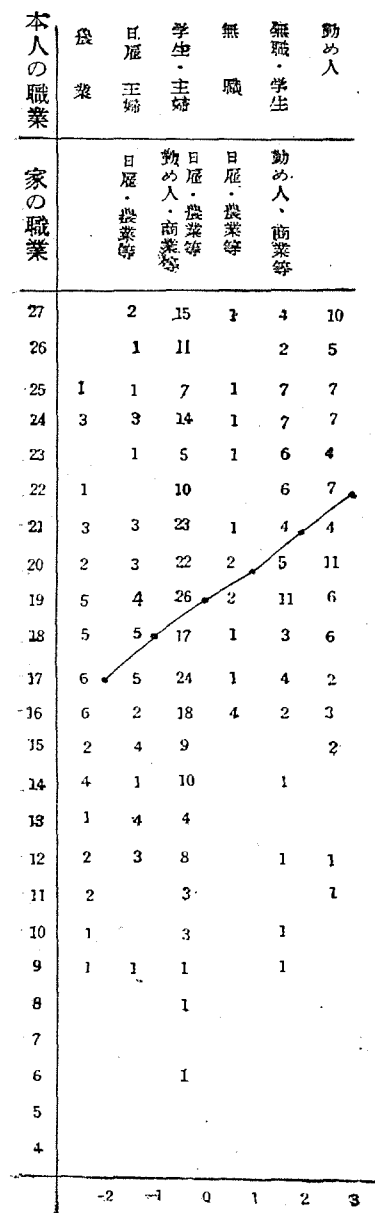


図 40

次に、家の職業を見るために、

61, 62, 63,  
71, 72, 73,  
81, 82, 83,

の集団(第1集団)と、

64, 65, 66, 67, 68,  
74, 75, 76, 77, 78,  
84, 85, 86, 87, 88,

の集団(第2集団)とに分け、二

つの集団の間に有意な差があるか

どうかを見た。

$$m \quad \sigma^2 \quad \sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$$

第1集団 20.0 18.01 0.11  
第2集団 19.1 16.66 0.31

これにより、二つの集団の差は有意と認められなかった。つまり、家の職業は強い要因として働いていないと言えよう。

以上、経歴的要因については、

(1) 高小卒と旧制中学卒業・中

退との間には著しい差が認め

られる。

(2) 学歴は一般に強い要因と考

えられる。

(3) 給料生活者とそれ以外の職

業との間の差は目だつ。

(4) 家の職業は強い要因とは考

えられない。

などのことが見られた。

(v) 階層

階層のそれぞれの間には有意な差は見られない。

なお、階層は現地の市役所吏員の主観的判定ないし納税額による推定によって決められたが、この決定はかなり危険である。これは戸別訪問の際に確かめられた。

階層 \ 音韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
上				1				2	2	2	3	7	8	10
中				1	3	3	10	3	8	8	19	23	21	30
下			1	1	2	3	4	3	5	5	10	10	6	14
不	1			1			1	1	1	2	3	2	2	
明														
計	1		1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54

階層 \ 音韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
上	6	9	2	6	4	3	3	7	75	20.3	15.31	0.5
中	25	17	14	9	23	17	6	15	255	19.7	17.39	0.3
下	10	9	5	2	5	2	8	9	114	19.1	21.97	0.4
不	4	3	3		3	2	2	1	32	19.1	24.98	0.9
明												
計	45	38	24	17	35	24	19	32	476			

(vi) 現住所

普通、農業を主とする地域が、商業を主とする市の中心地域および住宅を主とする地域よりも共通語を話す度合いが低いと言われるが、今度の調査では著しい差を示していない。

	m	$\sigma^2$
農業地域	18.4	19.61
中心商業地域	20.8	16.57
住宅地域	20.5	15.75

いま、白河市のこのような農業地域と附近の農村とを比較すると、両者の間には有意な差があり、白河市の農業地域のほうが共通語を話す度合いが高い。

	m	$\sigma^2$
白河市農業地域	18.4	19.61
五箇村(全村農業地域)	14.4	18.49
金山村A	15.5	24.16
金山村B	16.1	16.96

参考までに、農業に従事する者の集団について比較しても、白河市の農業と五箇村、金山村Aのそれとの間に有意な差が見られる。

	白河市	五箇村	金山村A	金山村B
m	17.1	13.7	13.8	15.8

なお、白河市の農業地域で農業に従事する者は全体の 23.0% しかなく、その上、給料生活者が 11.5% もあることは、農業地域の平均点を高める一つの原因になっていると見ることができる。

現住所 \ 音韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
中心商業地域					2		1	2	1		4	6	6	7
周辺商業地域				1		1	7	2	1	7	9	11	12	12
住宅地域			1			2		2	3	7	11	4	21	
農業地域	1		1	2	3	3	7	3	12	7	15	14	15	14
計	1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54

現住所 \ 音韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
中心商業地域	4	11	6	5	8	4	4	7	78	20.8	16.57	0.5
周辺商業地域	13	3	4	4	10	7	6	7	117	19.5	18.69	0.4
住宅地域	8	11	6	7	9	8	4	10	116	20.5	15.75	0.4
農業地域	20	13	8	1	8	5	5	8	165	18.4	19.61	0.3
計	45	38	24	17	35	24	19	32	476			

適宜にまとめた集団についてその分布構造を見れば、図 41 のとおりである。

(vii) 父母の出身地

音韻の点数（共通語を話す度合）に対して、父の出身地も母のそれも同様の傾向を示す。つまり、京浜地方が最も高く、西白河郡が最も低い。

さらに詳しく言えば、父の場合、京浜地方と東北地方以下との間、東北地方と白河市以下との間、および、白河市と西白河郡との間、それぞれに有意な差が見られる。母の場合、京浜地方とその他の地方（中部、近畿、中国、四国、九州および北海道地方）以下との間、および、白河市と西白河郡との間に有意な差が見られる。125べ、126べの表および図42を参照。

現住所	農業地域	住宅地域	商業地域	中心商業地域
27	8	17	7	
26	5	10	4	
25	5	15	4	
24	8	19	8	
23	1	11	5	
22	8	10	6	
21	13	14	11	
20	20	21	4	
19	14	32	7	
18	15	16	6	
17	14	22	6	
16	15	16	4	
15	7	10		
14	12	3	1	
13	3	4	2	
12	7	7	1	
11	3	3		
10	3		2	
9	2	2		
8	1			
7				
6	1			
5				
4				
	-1	0	1	2

図 41

音韻	父の出身地																												計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27									
市郡北他東浜明 河白の 西栗之関京不	1			2	1		1	4	9	6	14	16	12	13	17	15	7	6	10	7	3	5	149	19.1	115.90	0.3						
		2			5	2	3	2	2	3	8	6	7	13	12	10	4	3	3	3	1	1	1	94	17.3	15.81	0.4					
						2	1	2	1	2	7	9	7	16	9	8	6	6	9	8	3	7	103	20.3	15.73	0.4						
							1	2		2	3	2	3	3	3	3	3	4	3	3	2	7	37	21.3	22.21	0.8						
							1	2	1	1	5	6	3	8	5	3	3	1	9	4	7	6	64	21.1	16.95	0.5						
									1			2	1	1	2	1	4	1	1	1	2	4	9	23.7	20.89	1.5						
						1	1			1		2	1	2	1	4	1	1	1	1	2	20	20.3	19.21	1.0							
	計	1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54	45	38	24	17	35	24	19	32	476								

母の出身地		音韻																	
		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19				
白河の 西東北他 東浜明	市郡北他東浜明	1			2			2	4	8	5	10	15	6	12				
				2	3	4		8	2	4	9	11	10	18	13				
					2	1		2	1	1	1	6	9	7	15				
			1							1	1	4	1		2				
								2	2	1		4	5	5	10				
							1	1		1	1		2	1	2				
計		1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54				

母の出身地		音韻										計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
		20	21	22	23	24	25	26	27						
白河の 西東北他 東浜明	市郡北他東浜明	10	13	7	5	8	1	6	5	119	19.2	16.21	0.4		
		19	10	2	5	7	5	2	2	137	18.1	17.18	0.4		
		9	6	8	6	7	9	3	5	98	20.2	15.47	0.4		
		1	2	1		3	2	1	8	28	21.6	26.53	1.0		
		5	2	4		9	5	4	6	64	20.8	16.98	1.0		
			1	1			1	2	5	10	25.5	4.45	0.7		
計		45	38	24	17	35	24	19	32	476					

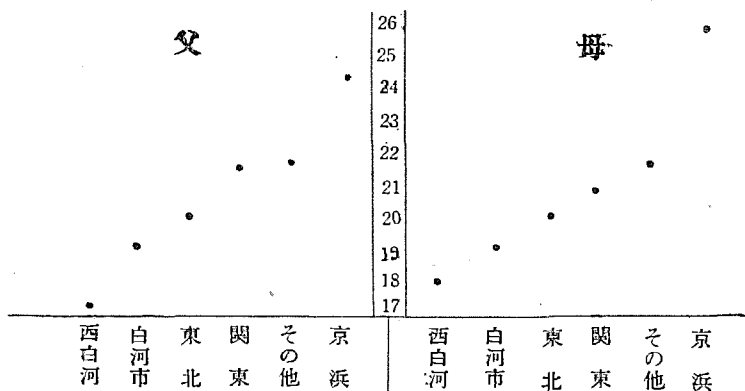


図 42

さて、ここで、京浜地方出身の父と、同じく京浜地方出身の母との間に差があるのではないかという問題がある。

	m	$\sigma^2$	n
父	23.7	20.89	9
母	25.5	4.45	10

サンプル数の少ないことが致命的であるが、分散のひどく違うことが注



目される。しかし、平均点の差は有意と認められない\*。

父と母との二重相関表を作れば128ページの表のようである。これによると、点数の最も低いのは両親のそれぞれが白河市か西白河郡かであるような集団で、これに続くのが両親のどちらかが関東地方出身の集団であり、ついで両親のどちらかがその他の地方出身の集団であって、最も点数の高いのは両親とも京浜地方出身の集団である。いま、最も点数の低い集団と最も点数の高い集団とを比較すると、次のように著しい差が見られる。

	m	$\sigma^2$	n
両方とも西白河郡	17.0	17.66	65
両方とも京浜地方	25.7	4.55	6

出身地別の分布を父と母とに分けて示せば図43のとおりである。

父母いずれが共通語を話す度合に強い影響を与えているかは、各集団の平均点や分散の比較だけでは確かなことは言えないようである。

しかし、疎開児童・生徒の言語について調べたところ、母親の出身地のほうが父のそれよりも強い影響を与えていることが明らかとなった。すなわち、京浜地方から白河市へ直接疎開して、現在(1949年秋)まで白河市に居住している児童・生徒(小学校1年から高等学校3年まで男女)の全員約500人(集計に使った人数は444人)について、京浜地方のアクセシ

\* いま、京浜地方出身の父を持つ者の数を  $n_1$ 、同様に京浜地方出身の母を持つ者の数を  $n_2$  とし、さらに、両親とも京浜地方出身の者の数を  $m$  とすると、

$$n_1 = n'_1 + m$$

$$n_2 = n'_2 + m$$

父の平均点を  $\bar{x}_1$ 、母のそれを  $\bar{x}_2$  で表わせば、

$$\sigma^2_{\bar{x}_1 - \bar{x}_2} = \sigma^2_{\bar{x}_1} + \sigma^2_{\bar{x}_2} - 2 \frac{m}{n_1} \cdot \frac{m}{n_2} \cdot \sigma^2_{x_m}$$

ところで、われわれの場合、

$$|\bar{x}_1 - \bar{x}_2| = 1.8$$

$$\sigma_{\bar{x}_1 - \bar{x}_2} = 1.59$$

したがって、両者の間に有意な差は認められない。

[illegible]

20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
6	5	4	3	4		1	2	62	18.5	15.15	0.5
8	7		2	3	2	1		52	18.6	14.21	0.5
2	2	1	1	3	1	1	2	18	21.5	14.81	0.9
								2	16.5		
1	1	1			4		1	14	20.9	15.70	1.1
		1						1	22.0		
1	2	1						16	17.3	9.31	0.8
8	2	1	2	2	1	1	1	65	17.0	17.66	0.5
1		1	1					7	18.7	13.06	1.4
				1				6	18.2	12.47	1.4
2	4	1	1	2		1	2	22	20.6	12.50	0.8
2	1		1	2	1		1	12	21.0	14.50	1.1
5	3	4	4	4	6	2	2	63	19.8	15.60	0.5
				1				2	19.0		
		1			1			2	23.5		
							2	2	27.0		
	1	1		1		1	1	7	21.7	17.06	1.6
1								2	16.0		
1		2			1		1	7	21.7	10.31	1.2
1	2	1		2	2	1	5	21	21.5	25.68	1.1
1	1		1	1	1	3		12	21.2	18.80	1.3
		1			1			5	20.2	8.56	1.3
	1				1			3	21.0	10.67	1.9
							1	1	27.0		
4	1	2		8		4	5	41	21.2	16.58	0.6
					1			1	25.0		
								1	14.0		
							1	1	18.0		
								1	27.0		
								1	14.0		
	1					2	3	6	25.7	4.55	0.9
1	4	1	1	1	1	1	1	1	27.0		
								19	19.9		
45	38	24	17	35	24	19	32	476			



トを保持しているか、白河地方のアクセントに同化してしまったかを、両親の出身地について調べたところ次のような結果を得た。ここでは、出身地の組合せを白河市と京浜地方とに限って、簡単に比較できるようにした。

アクセント	両親の出身地			両方とも 白 河	父が京浜 母が白河	父が白河 母が京浜	両親とも 京 浜
	白 京 判	河 浜 定	式 式 困 難				
	170(84.2%)	38(80.9%)	28(77.8%)	15(68.2%)			
	16( 7.9%)	5(10.6%)	3( 8.3%)	5(22.7%)			
	16	4	4	2			
計	202	47	36	36			

これによれば、父が京浜地方で母が白河市の出身の者と、父が白河市で母が京浜地方出身の者との差は、白河式のアクセントへの同化については、80.9%—77.8% であり、京浜式のアクセントの保持については、10.6%—8.3% である。非常に著しい差とは言えないまでも、一応の差と認めることができる。

音韻の特徴についてはアクセントほどはっきりした差が現れないが、「イとエとの混同」の項目については次のようにやや目だつ差を示している。つまり、「イとエとの混同」を調べるための四つの語について、共通語で答えたときに1点、方言で答えたときに0点を与え、その得点について比較してみた。該当する被調査者がもっと多ければ、はっきりした差が現れるかも知れない。

両親の出身地	両親とも西白 河郡（白河市 を含む）	父が京浜、 母が西白河 郡	父が西白河 郡、母が京 浜	両親とも 京 浜
「イとエとの混同」 に関する点数	2.83	2.86	3.37	3.18
該当の被調査者数	128	42	27	22

次に、父と母との出身地の関係について少し詳しく調べてみよう。いま、父の出身地と母のそれとの相関表を描けば次のページの表のようである。

母	父	白河市	西白河郡	東北(白河市、西白河郡以外)	中国、四	近畿、中部、北海道	関東(京浜以外)	京浜	不明	計
白河市		62	16	22	7		12	1		120
西白河郡		52	65	12	2		5			136
東北(白河市、西白河郡以外)		18	7	63	7		3			98
中国、四国、九州、近畿、中部、北海道		2		2	21		1	1		27
関東(京浜以外)		14	6	2			41	1		64
京浜		1		2			1	6		10
不明							1	19	1	21
計		149	94	103	37		64	28	1	476

まず、白河市出身の父を持つ者の比率と白河市出身の母を持つ者の比率との間に有意な差があるかどうか考えてみよう。つまり、

$$\frac{120}{476} = 0.25$$

$$\frac{149}{476} = 0.31$$

の間に有意な差があるかどうかを見ると、まず有意な差があると言うことができる\*。

\* 一般の検定の式を考えておこう。サンプル比率  $p_1, p_2$  の間に差があるか。

$$\begin{cases} \sigma^2 p_1 = \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{(1-p_1)p_1}{n} \\ \sigma^2 p_2 = \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{(1-p_2)p_2}{n} \end{cases}$$

であるから、

$$\sigma^2 p_1 - p_2 = \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{1}{n} \left( p_1(1-p_1) + p_2(1-p_2) - 2\rho \sqrt{p_1(1-p_1)p_2(1-p_2)} \right)$$

となる。

検定では unbiased estimate を採るから  $p = \frac{p_1 + p_2}{2}$  として分散を計算する。

$$\sigma^2 p_1 - p_2 = \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{2}{n} p(1-p)(1-\rho)$$

われわれの例では、

$$p = 0.28, \quad \rho = 0.26$$

であるから、

次に、父が白河市、母がその他という集団（A）と、母が白河市、父がその他という集団（B）との間の比率の差は、

$$A \quad \frac{87}{476} = 0.18$$

$$B \quad \frac{58}{476} = 0.12$$

のようであり、通常の有意差検定により、有意な差が認められる。

以上により、白河市出身の父を持つ者の比率が白河市出身の母を持つ者のそれよりも大きい。すなわち、白河市においては、父の土着性が母よりも高かったとすることができるであろう。

以上のことは、本籍を白河市に持つ者についての婚姻関係について調査した結果と比較される。つまり、福島地方法務局の白河支局に保管されている大正4年（1915）から昭和23年（1948）までの間に提出された婚姻届から、比率  $\frac{1}{10}$  でランダムにサンプルしたものについて調べた結果は次のようである。

白河市に本籍を有する女子と結婚した男子の本籍

年 代 \ 本 籍	白河	西白河	県内	栃木	東京	以外	
1915—1923	58	20	33	18	31	37	197
1924—1926	9	6	4	4	3	6	32
1927—1935	33	11	24	14	18	26	126
1936—1941	18	25	15	7	13	36	114
1942—1944	9	13	10	10	17	14	73
1945—1948	24	22	13	8	7	13	87
	151	97	99	61	89	132	629

$$\sigma_{p_1-p_2} = 0.025$$

したがって、

$$\frac{|p_1 - p_2|}{\sigma_{p_1-p_2}} = 2.46$$

となり、有意な差が認められる。

上 表 の 百 分 率

年 代 \ 本 籍	白河	西白河	県内	栃木	東京	以外	
1915—1923	29	10	17	9	16	19	100
1924—1926	27	19	13	13	9	19	100
1927—1935	27	9	19	11	14	20	100
1936—1941	16	21	13	6	11	33	100
1942—1944	12	18	14	14	23	19	100
1945—1948	28	25	15	9	8	15	100
計	24	15	16	10	14	21	100

白河市に本籍を有する男子と結婚した女子の本籍

年 代 \ 本 籍	白河	西白河	県内	栃木	東京	以外	
1915—1923	58	42	23	23	4	22	172
1924—1926	9	9	7	6	3	4	38
1927—1935	33	27	19	18	4	18	119
1936—1941	18	25	15	12	9	24	103
1942—1944	9	16	12	7	5	18	67
1945—1948	24	24	12	12	6	19	97
計	151	143	88	78	31	105	596

上 表 の 百 分 率

年 代 \ 本 籍	白河	西白河	県内	栃木	東京	以外	
1915—1923	35	24	13	13	2	13	100
1924—1926	24	23	18	16	8	11	100
1927—1935	28	23	16	15	3	15	100
1936—1941	17	24	15	12	9	23	100
1942—1944	14	24	18	10	7	29	100
1945—1948	25	25	12	12	6	20	100
計	25	24	15	13	5	18	100

東京に本籍を有する配偶者の比率が男女の間で著しく異なる。つまり、白河市に本籍を有する女子が東京に本籍を有する男子と結婚すること（おそらく、多くは白河市の女子が東京へ出て東京の男子と結婚する場合であろう）のほうが、白河市に本籍を有する男子が東京に本籍を有する女子と結婚すること（おそらく、多くは白河市の男子が東京へ出て東京の女子と結婚する場合であろう）よりも著しく多いことが、各年代についても、また



年代を通じても明らかに見受けられる。このことを大づかみに別のことばで言えば、女子のほうが男子よりも東京へよく出たと言うことであろう\*。

次に、父の出身地と母の出身地との相関を見ると、

母	父	白河市 その他		母	父	白河市 西白河郡 その他	
	白河市 その他	62 87	58 269		白河市西白河 郡その他	159 48	61 172

のようになり、試みに  $\chi^2$  検定を行うと、その値はそれぞれ

30.94, 139.88

となり、父の出身地と母の出身地とは相関度が高いとすることができる。

(viii) 生育地（言語形成期におけるおもな居住地）

言語形成期におけるおもな居住地（生育地）とそこに居住した年数との関係を見ると、次のとおりである。

年 数	9	8	7	6	5	4	3
%	86.6	4.4	3.1	1.9	3.4	0.4	0.4

9 年、つまり、言語形成期の全部を同じところで過した者がきわめて多いことが注目される。

いま、言語形成期の 9—7 年を生育地で過ごした者の集団について、音韻の点数と生育地との関係において見れば図 44 のとおりである。

この図によれば、京浜地方で生育した者の音韻の点数が最も高く、西白河郡で生育した者の音韻の点数が最も低い。また、京浜地方とその他以下との間、および、白河市と西白河郡との間の差は有意であると認められる。年少時の生育地と言うものの影響がきわめて激しいことを知るのであ

\*なお、以上の表から次のことも知られる。夫婦とも白河市に本籍を持つ者は全体の約 25% で、戦時中はこれが 10% まで下り、そのかわり、その他の者が増加している。また、白河市の男女で西白河郡に本籍を持つ者と結婚した者は全体で男子は 24%、女子は 50% で、男子は年代的にほぼ一定しているが、女子についてはやや増加の傾向が見られるようである。しかし、これも、男子の例から推して、昭和20年（1945）から昭和23年（1948）までの間の 25% が限度ではなからうか。

る。

京浜地方で生育した者の音韻の平均点数と西白河郡で生育した者のそれとの差 9.0 (25.5—16.5) の分散は 0.51 である。この信頼幅はかなり狭いものと言えることができる。つまり、この差はきわめて重大な意味を持つ。

同様に、京浜地方で生育した者の音韻の点数と白河市で生育した者のそれとの差は 6.0 (25.5—19.5) となり、その分散は

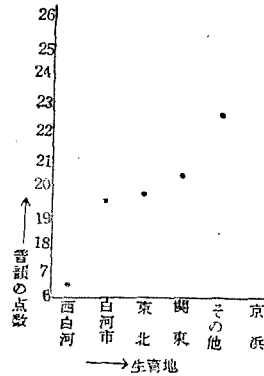


図 44

0.30 である。この信頼幅もかなり狭く、この差も重大な意味を持つと認められる。

さらに、京浜地方で生育した者の分散が最も小さい (4.95) ことも注目に値する。これは京浜地方に生育したと言うこと、言い換えれば、言語形成期におけるおもな居住地が京浜地方であることが他の地方に比べて決定的な要因であることを思わせる。

#### (ix) 生育地とその後の居住地

次に、言語形成期におけるおもな居住地と言語形成期以後の居住地とを組み合わせたものと音韻の点数との関係を見ることによって、いっそう決定的な要因をつきとめようと試みた。いろいろな組合せを作ってみたが、あるいはサンプル数が少な過ぎ、あるいは音韻の点数に影響を与える要因ではなかったりしたが、けっきょく、次のような分類方法がまず適切であると考えられた。

まず、言語形成期のおもな居住地を、

- I 西白河郡
- II 白河市
- III 東北地方
- IV 関東地方

年数	場 所	音 韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19		
9 — 7 年	白 河 市 西 白 河 郡 東北(白河市西白河) 郡以外 中国, 四国, 九州 中部, 近畿, 北海道 関東(京 浜 以 外) 京 浜		1			2	1		3	4	10	8	19	28	19	31		
						2	2	4	8	2	4	7	4	4	7	8		
						2	1	3					4	8	6	8		
							1					1				1		
										1	1	1		4	2	4	5	1

年数	場 所	音 韻	20	21	22	33	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
6 — 3 年	白 河 市 西 白 河 郡 東北(白河市西白河) 郡以外 中国, 四国, 九州 中部, 近畿, 北海道 関東(京 浜 以 外) 京 浜		29	24	13	10	20	12	6	6	246	19.5	13.73	0.2
			5	3		1	2	2		1	66	16.5	17.34	0.5
			6	5	7	4	4	5	2	1	66	19.7	15.34	0.5
					2	1		1	1	5	14	22.6	28.96	1.4
			3	1	1		3	2	2	6	36	20.6	19.62	0.7
			1	1			1	1	6	9	20	25.5	4.95	0.5

年数	場 所	音 韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
6 — 3 年	白 河 市 西 白 河 郡 東北(白河市西白河) 郡以外 中国, 四国, 九州 中部, 近畿, 北海道 関東(京 浜 以 外) 京 浜										1		1		1	
								1		1			1			
												1	1			
										1						
													1			

計			1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54
---	--	--	---	---	---	---	---	---	----	---	----	----	----	----	----	----

年数	場 所	音 韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
6 — 3 年	白 河 市 西 白 河 郡 東北(白河市西白河) 郡以外 中国, 四国, 九州 中部, 近畿, 北海道 関東(京 浜 以 外) 京 浜		1	2	1	1	2		1		11	20.9	11.97	1.0
			1			1					2	21.3		
										3	6	20.2	48.81	2.9
									1	1	4	21.0	30.50	2.8
								1			2	19.0		
						2					3	20.8		

計			45	38	24	17	35	24	19	32	476					
---	--	--	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	--	--	--	--	--

V その他

VI 京浜地方

と分け、これを、さらに、言語形成期以後の居住地によって、

a 東北地方

b その他

言語 形成期	音 韻		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
	以後	年数															
I	a	1	1		2	2	4	1	1	3	2	4	3	1	4	1	
	b	2															1
II	a	1			2	1			2	2	3	7	1	5	13	8	16
	b	2															
III	a	1				2	2	1	1		2	5	2	1	4	3	1
	b	2															
IV			1 2 1 4 2 4 5														
V			1 2 1 1														
VI			1 1														
計			1 0 1 4 5 6 15 9 16 17 35 42 37 54														
言語 形成期	音 韻		20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$			
	以後	年数															
I	a	1	2	1	3	1	1	2		1	13	19.0	18.00	1.2			
	b	2													1	1	1
II	a	1	11	13	8	6	14	12	6	5	123	20.9	11.94	0.3			
	b	2													14	10	5
III	a	1	3	3	3	4	1	1	1	3	7	21.4	18.36	1.0			
	b	2													3	1	1
IV			3 1 1 3 3 2 6							38	20.6	20.61	0.7				
V			2 1 1 1 2 6							18	22.2	29.73	1.3				
VI			1 1 3 1 6 9							23	25.0	8.12	0.6				
計			45 38 24 17 35 24 19 32							476							

に分け、それをさらに、その時期の居住年数によって、

- 1 1-9 年
- 2 10年以上

と分けて、音韻の点数の分布と、それに伴ういろいろな数値を出してみた。

前のページの表を参照。

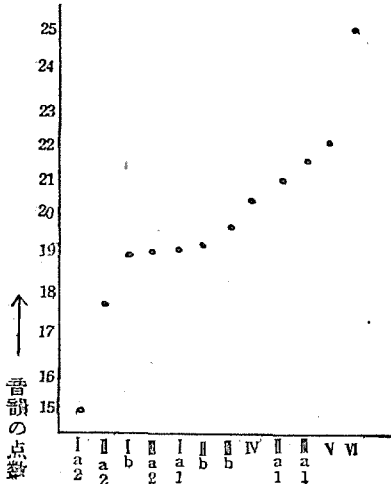


図 45

点数の平均だけを目盛った表を作れば図 45 のようである。

サンプル数が少なくなるので、あらゆる集団の間に有意な差を認めることはできないが、言語形成期のほかに言語形成期以後の居住地および居住年数（居住年数は主として個人の年齢に左右されるのかも知れない）もまた音韻の点数を作りだす要因（音韻の点

数に影響を与える要因）となっていることが知られる。

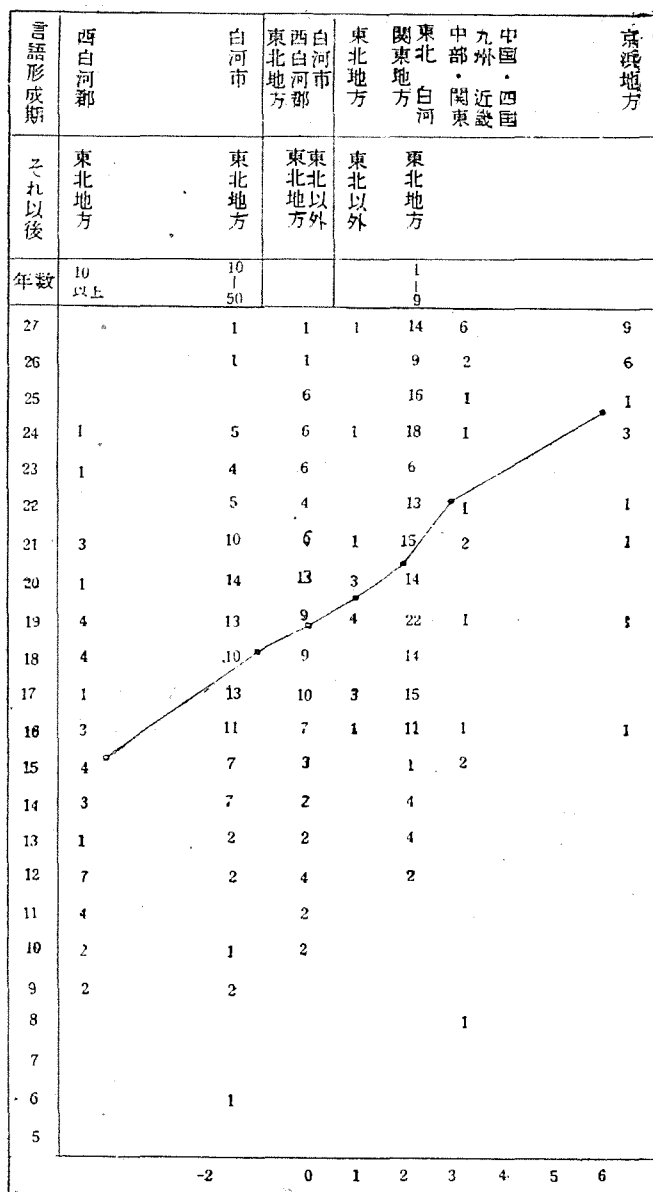
これらの分類を適宜まとめたものの分布構造は次のページの図 46 に示すとおりである。

#### (x) 行き来

いま、昭和24年（1949）における個人の行き来を、

- 0 福島市、宇都宮市より遠くへは1度も行ったことがない
- 1 京浜地方へは1度も行ったことがない
- 2 京浜地方へ1度行ったことがある
- 3 同じく2-3度行ったことがある
- 4 京浜地方へ1度、関東地方へ1度以上行ったことがある
- 5 京浜地方へ4度以上行ったことがある

## 言語形成期



に分け、音韻の点数との関係を見れば次の表のとおりである。

音韻 行き 来	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
			1	2	3	4	12	7	8	13	28	23	15	30
0				1	1	2	2	1	3	1	3	9	13	12
1					1	1	1	1	5	2	4	4	2	6
2										1		1	2	2
3	1											2	2	2
4												3	5	2
5														
計	1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54
音韻 行き 来	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$		
0	28	24	19	5	16	13	7	10	268	19.0	17.36	0.3		
1	7	7		3	9	8	3	11	96	20.3	19.84	0.5		
2	5	6	3	5	3	1	7	7	64	20.3	21.91	0.6		
3	1		1	2	2	1	1	1	16	20.4	25.11	1.3		
4					3	1	1	2	11	22.6	13.69	1.1		
5	4	1	1	2	2			1	21	20.1	7.27	0.6		
計	45	38	24	17	35	24	19	32	476					

全体的に著しい差は見られないが、0と1—5との間には有意な差が見受けられる。

この分類を適宜まとめたものの分布構造を示せば次のページの図47のようである。

#### (xi) 新聞、ラジオの利用度

新聞の利用度、ラジオの利用度それぞれと音韻の点数との関係を見ると、142ページ、143ページの表のように、「新聞を読む」と「同じく読まない」、「ラジオを聞く」と「同じく聞かない」との間には有意な差が見られる。特に、新聞のほうが強い影響を与えているように思われる。

次に、新聞の利用度とラジオのそれとの関係を見ると次のようである。

ここで、新聞の

1は「新聞を読む」

2は「 ” 読んだり読まなかったり」

3は「 ” 読まない」

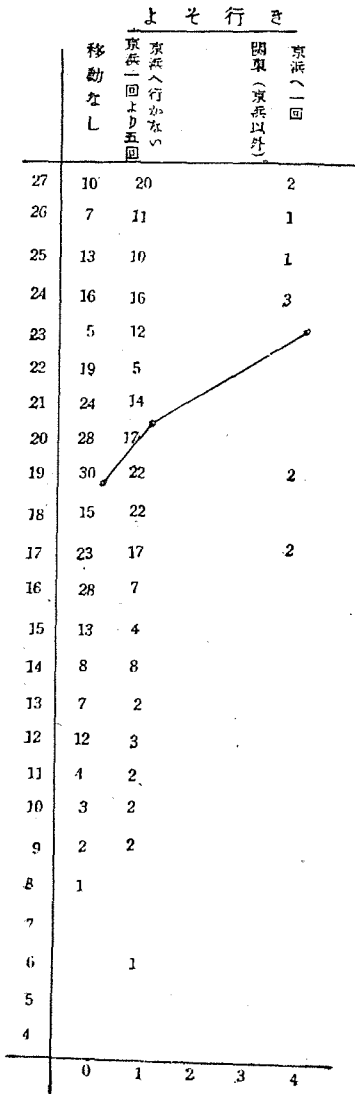


図 47

新 聞	音 韻	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$				
		$\sigma^2$	m			
読 読 読 読 読 不	む	20.3	17.66	322	0.2	
	だ	19.7	13.49	65	0.5	
	ん	16.6	18.70	79	0.5	
	な	19.5	4.45	10	0.7	
	明			476		
計						



ラジオ	音 韻																		
	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19					
聞	1			1	2	3	5	4	5	4	11	13	32	21					
聞				い	た														
聞				い	な	2		2		5	1	3	11	6	9				
聞				か	な														
計		1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54				

ラジオ	音 韻													
	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$		
聞	22	18	8	13	21	14	6	24	224	20.3	18.87	0.3		
聞	10	9	5	2	7	6	3	3	84	19.8	15.66	0.4		
聞	13	11	11	2	7	4	10	5	168	18.5	18.39	0.3		
計	45	38	24	17	35	24	19	32	476					

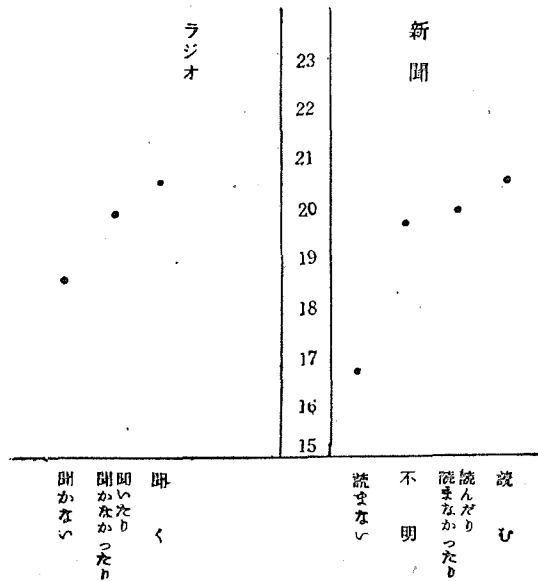


図 48

新聞, ラジオ	音 韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
新聞を読み、ラジオも 聞く		1		1	2			3	2	4	2	9	17	21
新聞を読み、ラジオを ときどき聞く				1				2		2		3	6	3
新聞を読み、ラジオを 聞かない					1		1	3	5	5	7	3	5	
新聞をときどき読み、 ラジオを聞く									1	1				1
新聞をときどき読み、 ラジオをもときどき聞く										2	1		5	2
新聞をときどき読み、 ラジオを聞かない						1	2				1	2	1	
新聞をよまず、ラジオ を聞く						3	2	1			2	2	1	1
新聞を読まず、ラジオ をときどき聞く				1						1				1
新聞を読まず、ラジオ も聞かない		1	1	2	2	5	2	2	1	6	11	7	3	
不	明											1	2	
計		1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37

新聞, ラジオ	音 韻	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
新聞も読み、ラジオも 聞く		16	17	15	7	7	18	11	6	22	181	20.6	18.48	1.3
新聞を読み、ラジオを ときどき聞く		5	6	6	4	2	3	5	3	2	53	20.2	16.18	0.6
新聞を読み、ラジオを 聞かない		15	8	6	6	2	6	4	6	5	88	19.7	16.65	0.4
新聞をときどき読み、 ラジオを聞く		3	3	1		5	3	1		1	20	21.1	11.79	0.8
新聞をときどき読み、 ラジオをもときどき聞く		3	4	2	1		3	1			24	19.3	9.10	0.6
新聞をときどき読み、 ラジオを聞かない		4	3	2	2		1		1	1	21	19.0	17.47	0.9
新聞を読まず、ラジオ を聞く		1		2		1		2			18	16.7	21.31	1.1
新聞を読まず、ラジオ をときどき聞く		1		1			1			1	7	18.9	31.28	2.1
新聞を読まず、ラジオ も聞かない		5	1	3	1				3		54	16.2	15.39	0.5
不	明	1	3		3						10	19.5	4.45	0.7
計		54	45	38	24	17	35	24	19	32	476			

ラジオ \ 新聞	1	2	3	不明	計
1	185	20	18		219
2	53	24	7		84
3	88	21	54		163
不 明				10	10
計	322	65	79	10	476

を表わし、ラジオの

1は「ラジオを聞く」

2は「 “ 聞いたり聞  
かなかったり」

3は「 “ 聞かない」

を表わすこととした。

これらについて分布を見れば上の表のようである。

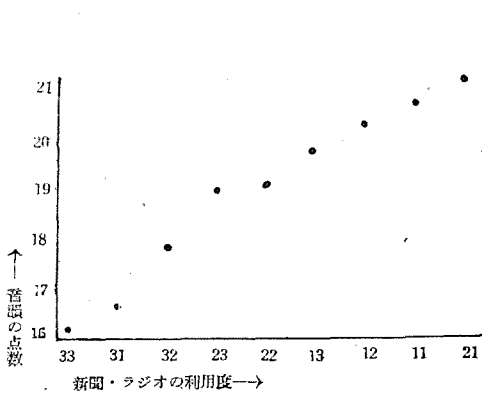


図 49

以上によれば、新聞・ラジオの利用度と音韻の点数との間には体系的な傾向が見られる。しかし、サンプルが片寄るために決定的なことは言えない。図 49 を参照。

次に、上の分類を適宜まとめたものの分布構造を見れば図50のようである。

## (xii) 社会的態度

われわれは調査票の項目11において、土地の人の気風、子供に将来やらせたい職業、日本映画が好きか外国映画が好きか、今の交通を便利と思っているかどうか、他の土地に移住の希望があるかどうかについて質問し、その反応によって、社会的態度が

- 1 満足、現状のまま
- 2 無関心
- 3 不満、前進的

のいずれであるかを判定した。

いま、このような社会的態度と音韻の点数との相関表を作ると、147 ペの表のように、三つの間に有意な差が見受けられる。

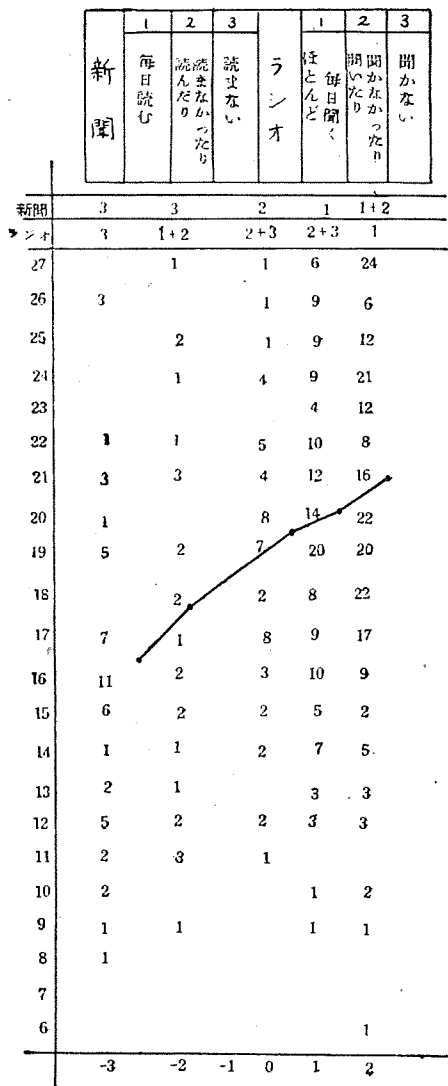


図 50

社会的 態度	音韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
満足, 現状のまま		1			3	4	3	9	7	9	12	18	17	16	20
無関心			1				3	4	1	4	3	6	10	9	10
不満, 前進的				1	1			2	1	3	2	11	15	12	24
計		1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54

社会的 態度	音韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
満足, 現状のまま		16	20	10	5	17	4	2	7	200	18.4	18.25	0.3
無関心		10	9	5	1	8	6	3	2	95	19.7	16.35	0.4
不満, 前進的		19	9	9	11	10	14	14	23	181	20.9	17.62	0.3
計		45	38	24	17	35	24	19	32	476			

(xiii) 白河のことばに対する自覚と価値づけ

調査項目47と48とにおける反応については、いずれについても、音韻と数との間にいかなる傾向的な関係も見いだされなかった。

これは、次のように該当サンプルが激しく片寄っているためであろう。

項目47

コード	0	1	2	3	計	コード	0	無関心
サンプル	2	420	18	36	476	1	1	違う
						2	2	わからない
						3	3	違うない

項目48

コード	0	1	2	3	不明	計	コード	0	無関心
サンプル	25	394	22	7	28	476	1	1	白河市のほうが良い
							2	2	わからない
							3	3	白河市のほうが悪い

項目47と48とを組み合わせた二重分類を試みると、次のようである。

項目48	項目47	0	1	2	3	不明	計
0		3	12	2	9		25
1			392	2			394
2			8	6	8		22
3			7				7
不明			1	8	19		28
計		2	420	18	36	0	476

項目47で1, 項目48で3の者——つまり, 白河のことばと在のことばとは違うと答え, かつ, 後者のほうが前者より良いことばだと答えた者——(これを 13 と表わす)と, いちばんサンプルの多い11——つまり, 白河のことばと在のことばとは違うと答え, かつ, 前者のほうが後者より良いことばだと答えた者(これを 11 と表はす)——と音韻の点数の平均点を比べると,

13 18.7

11 19.7

のようであって, 両者の間に有意な差はない。

以上によって, ほとんどの人が, 白河市のことばと在のことばとが違うと答え, かつ, 白河市のことばのほうが良いことばだと答えていることと, このような質問において, でたらめな反応を示す者が少ない(調査をまじめに受けている者が多い)ことが注目される。

#### (xiv) 白河のことばと共通語との比較および共通語の使用

調査項目49において, 共通語(標準語)と白河のことばとが違うと感じると答えた者と, 違うと感じないと答えた者との間に音韻の点数について有意な差が見られる。

音 韻			6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
無感 わ感 不	関 じ な	心 る い 明				3	3	5	13	1	13	11	22	1	1	2	1
					1					1		2	3	2	29	40	
			1			1	2	1	2	3	3	4	9	11	5	1	1
計			1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54	

音 韻			20	21	22	23	24	24	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
無感 わ感 不	関 じ な	心 る い 明												
			35	27	17	16	30	23	17	27	616.8	3.81	0.8	
					1		1			1	36320.0	18.81	0.2	
			9	11	6	1	4	1	2	4	1417.4	20.37	1.2	
計			1									9218.6	17.01	0.4
計			45	38	24	17	35	24	19	32	476			

次に、調査項目 50a において、共通語（標準語）を使う時があると答えた者（1）と、使う時はないと答えた者（4）との間に、音韻の点数について有意な差が見受けられる。共通語（標準語）を使いたいができないと答えた者（3）は多くない。

コード	m	$\sigma^2$	n	コード	
0	18.0	—	1	0	共通語（標準語）を知らない
1	20.8	16.84	285	1	〃 を使う時がある
2	17.6	10.02	19	2	わからない
3	19.6	7.3	7	3	共通語（標準語）を使いたいができない
4	16.8	16.76	88	4	〃 を使う時がない

次に、項目49と項目 50a との二重分類を試みると次のようになる。

項目50a	項目49	0	1	2	3	不明	計
0		1					1
1			250	2	33		285
2			10	2	6	1	19
3			7				7
4		2	64	3	19		88
不明		3	32	7	34		76
計		6	363	14	92	1	476

以上の分類のうちで、おもなものを取り出せば、

項目49	項目50a	m	$\sigma^2$	n
1	1	21.0	15.45	250
1	4	16.6	17.45	64
3	1	19.1	24.33	33
3	4	17.9	12.52	19

となり、11と14、11と31 との間には有意な差が認められる。

(xv) 共通語意識

「共通語意識」のある・なし（調査項目 50b）の間には音韻の点数について有意な差が認められる。

項目50b	意 識	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
共通語意識あり		1		2	4	3	6	4	10	8	17	23	25	32	
なし			1	2	1	3	9	5	6	8	15	15	10	17	
不明										1	3	4	2	5	
計		1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54

項目50b	音	韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
共通語意識あり			35	24	16	16	34	23	17	29	329	20.5	18.65	0.2
共			9	11	7			1	1		121	17.0	11.79	0.3
な			1	3	1	1	1		1	3	26	20.0	12.96	0.7
不														
明														
計			45	38	24	17	35	24	19	32	476			

調査項目50b と項目49との関係を見ると,

項目50b	項目49	0 共通語と方言 との違いにつ いて無関心	1 感じる	2 わから ない	3 感じな い	不	明	計
共通語意識あり			291	2	36			329
共		6	60	11	43	1		121
な			12	1	13			26
不								
明								
計		6	363	14	92	1		476

いま, 特に,

項目50b	項目49	1	2
1		291	36
2		60	43

に注目すれば, 明らかに, 項目49と項目50b との間に相関関係が認められる ( $\chi^2$  検定による)。

以上の表における四つの集団の平均点を取ると次のようになる。

項目49	項目50b	m	$\sigma^2$
1	1	20.7	17.36
1	2	16.5	12.48
3	1	18.9	26.54
3	2	18.0	10.32

11と12, 11と32 との間には有意な差が認められるが, 31と32 との間には有意な差は認められない。11と31 との間の差はきわどいところである。

(xvi) 場面による共通語と方言との使い分け

調査項目51—58 (ただし53を除く) における七つの場面で共通語を使うと答えた数 (0点—7点) と音韻の点数との関係を見ると, 7点と2点,



1点, 0点との間には有意な差を認めることができる。

場面	音韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
0				1	2	3	4	8	3	4	8	16	15	10	22
1						1		3	2	4	4	4	8	7	4
2				1	1	2		2	1	5	2	7	12	9	13
3								2	2	3		4	2	4	8
4				1								1		1	2
5												1	2	2	1
6		1							1		1		1	2	1
7												2	2	2	3
計		1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	45

場面	音韻	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
0		11	10	7	3	7	2		4	140	17.9	16.01	0.3
1		7	3	4	1	5	3	1		61	18.4	14.31	0.5
2		10	12	4	5	6	6	5	3	106	19.5	15.80	0.4
3		2	5	3	2	4	5	7	6	61	20.8	20.09	0.6
4		5	4	2	2	5	2	1	3	29	21.8	13.55	0.7
5		5	1	1	2	5	1	2	7	30	22.7	12.42	0.6
6		3	1	2	1	2	2	1	3	22	20.9	25.21	1.1
7		2	2	1	1	1	3	2	6	47	22.2	14.97	0.7
計		45	38	24	17	35	24	19	32	476			

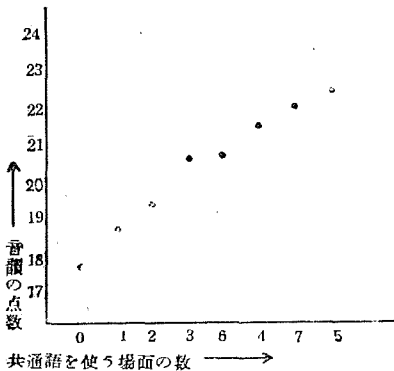


図 51

以上の分類をまとめて, その分布を見れば左の図のようである。

(xvii) 共通語に対する態度

調査項目59において, 子供が人前で共通語(標準語)を話せるようになることは将来必要であると答えた者(1)と必要でないと答えた者(3)の間には有意な差が認めら

れる。ただし, (1)と, わからないと答えた者(2)との間の差が有意なのは説明できない。それは, 一つには(2)に属するサンプルが少なすぎたためであろう。また, 年齢を考慮に入れていないためでもであろう。

項目59	音 韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
		1	1	4	5	5	10	7	12	13	29	33	33	28	48	40	37	22	16	33	24	19	29				
無 関 必 要 わ か 不 明	心 要							1	1				3	4	1	2								1117.5	4.43	0.6	
	な 要							1	3		1	4	2	3	28	40	37	22	16	33	24	19	29	41619.9	18.96	0.2	
	明 要							1	3		1	4	2	3	1			2			1		1516.9	10.86	0.9		
								1	4		1	2	1	4	3	3	3		1	1	1		3	2618.1	20.67	0.9	
								1			1	1	1	1	2	1	1						817.1	5.36	0.8		
計		1	0	1	4	5	6	15	9	16	17	35	42	37	54	45	38	24	17	35	24	19	32	476			

## 使い分けの度合

(数の多い程度が強い)

共通語を使う場面の数

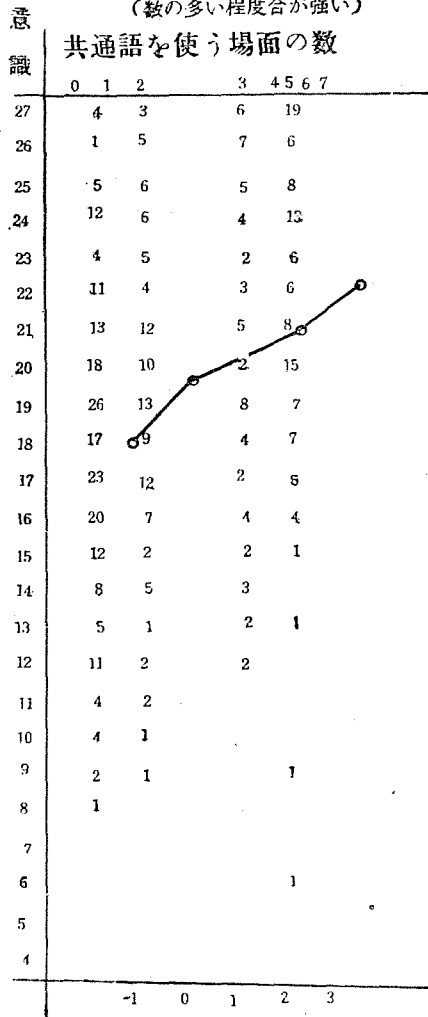


図 52

## (2) 要因の比較

さて、以上12の要因ないし六つの要因群のうち、どれがいちばん影響を与えている（いちばん著しい差をひき起している）かということについて見ることにしよう。このためには、各要因の広がり（range），すなわち、最高値と最低値との差を比較することにする。この広がりが大きいのほど強い要因と考えられる。なお、この際、相対精度（サンプリングによる推定平均の変異係数）があまり良くない（大きい）ものは、他の近いものと合わせて精度を高めるようにした。

いま、各要因の広がり（range）の値およびその分散 $\sigma^2$ を示せば次のようである。

			range の 値	$\sigma^2$	まとめた ものの m
I	自然的 要因	性	1.1	0.15	3.9
		年齢	4.4	0.56	
		年 × 年	6.3	0.83	
II	経歴的要 因	学 歴	9.3	2.77	6.9
		職 業	4.5	0.49	
III	社会的・地 域的・環境 的要因	階 級	1.2	0.40	1.9
		住 所	2.5	0.33	
IV	生育・居 住環境の 要因	父 母 の 出 身 地	9.4	2.43	8.2
		母 親 の 出 身 地	7.4	0.57	
		生 育 地	9.0	0.51	
		生育地とその後の居住状況	9.9	0.73	
V	コムニケ ーション	行 新 聞 の 利 用 度	3.6	0.24	3.4
		ラ ジ オ の 利 用 度	3.7	0.29	
		新 聞 × ラ ジ オ の 利 用 度	1.8	0.19	
		新 聞 × ラ ジ オ の 利 用 度	4.6	0.37	
VI	社会的態度、共通語に對する意識	社 会 的 態 度 に	2.5	0.19	3.1
		白 河 の 自 覚 の 使 用	1.4	0.24	
		対 する 通 語 の 意 識	4.0	0.25	
		共 通 語 と 方 言 と の	3.4	0.15	
		共 通 語 と 分 け の 言 語	4.0	0.27	
		い ど も の 言 語	3.0	0.77	

\* 分散は次のように求められる。

(155ページへ続く)

各要因において最高値を示すカテゴリの平均を  $\bar{x}_h$ ，最低値を示すカテゴリのそ



広がり (range) の大きい要因群は、生育・居住環境の要因 (IV) および経歴的要因 (II) である。これらの広がりには次のようである。

$$\text{IV} \quad 8.2 \pm 2.0$$

$$\text{II} \quad 6.9 \pm 2.5 \quad (\text{信頼度} 95\%)$$

なお、IV と II との間には有意な差は見られないが、I と III; II, IV と V, VI, I, III との間の差は有意と認められる。

細かい要因 21 のうち、特に高いのは、IV に属する四つの要因および学歴である。しかし、学歴は分散が他のものに比べて大きい。

したがって、強い要因として注目されるのは、大まかに言って生育、居住、環境の要因および経歴的要因であり、細かく言えば、学歴、父母の出身地、生育地、生育地とその後の居住の状況であると認められる。

次に、いくつかの要因を組み合わせたものによって分けられた集団の平均点数と分散についての分布を見ると図 54 のようである。これによって、共通語を話す度合を決定する要因が明らかになるであろう。つまり、平均点数が高く、分散の小さい集団を分けている要因こそ決定的な要因とすることができよう。

これによると、

れを  $\bar{x}_i$  とすれば、

(153ページから続く)

$$y = \bar{x}_h - \bar{x}_l$$

ただし、 $y$  は range である。

これによって、

$$\sigma_y^2 = \sigma_{\bar{x}_h}^2 + \sigma_{\bar{x}_l}^2$$

となる。 $\sigma_{\bar{x}_h}^2$ ,  $\sigma_{\bar{x}_l}^2$  はそれぞれ各カテゴリのサンプリングによる分散である。

したがって、 $\sigma_{\bar{x}_h}^2$ ,  $\sigma_{\bar{x}_l}^2$  は近似的にそれぞれ  $\frac{\sigma_h^2}{n_h}$ ,  $\frac{\sigma_l^2}{n_l}$  によって表わされ

る。ここに、 $\sigma_h^2$ ,  $\sigma_l^2$ ,  $n_h$ ,  $n_l$  は、最高値を示すカテゴリ、最低値を示すカテゴリそれぞれの分散およびサンプル数である。

これによって、range の分散  $\sigma_y^2$  が求められる。

京浜地方出身の母を持つ集団

言語形成期の 6—7 年を京浜で過ごした集団

15—16 歳の女の集団\*

高等専門学校卒業ないし中退の集団

が注目される。これらは、平均点22点以上、「イとエとの混同」が半分程度消えており（点数約4点）、かつ、集団内の個人による差の少ない集団と言うことができる。

このようにして得られた要因は、前に述べた分析の結果と比較される。このような方法では、まず、これらの要因が決定的と考えられる。

### (3) 共通語を話す度合を推定する手がかり

以上、共通語を話す度合に影響を及ぼす要因について単純相関の考えを使って分析を進めてきたが、ここでは分解した要因をもう一度組み立てて、それらの要因によって共通語を話す度合をどの程度決めることができるかについて考えてみよう。

個人の共通語を話す度合（音韻の点数）が要因によってどの程度、どのように測定されるものであるかを考えることにしよう。要因としては、単純相関の分析から、

1. 性×年齢
2. 学歴
3. 職業
4. 父の出身地
5. 母の出身地
6. 言語形成期におけるおもな居住地（生育地）
7. 現住所
8. 行き来
9. 新聞、ラジオの利用度
10. 共通語と方言との使い分け

を採った。

---

\* この集団についてはやや疑問の余地がありそうである。つまり、面接という緊張した場面における特別な反応と考えられないであろうか。もっと細かく調べてみる必要がある。



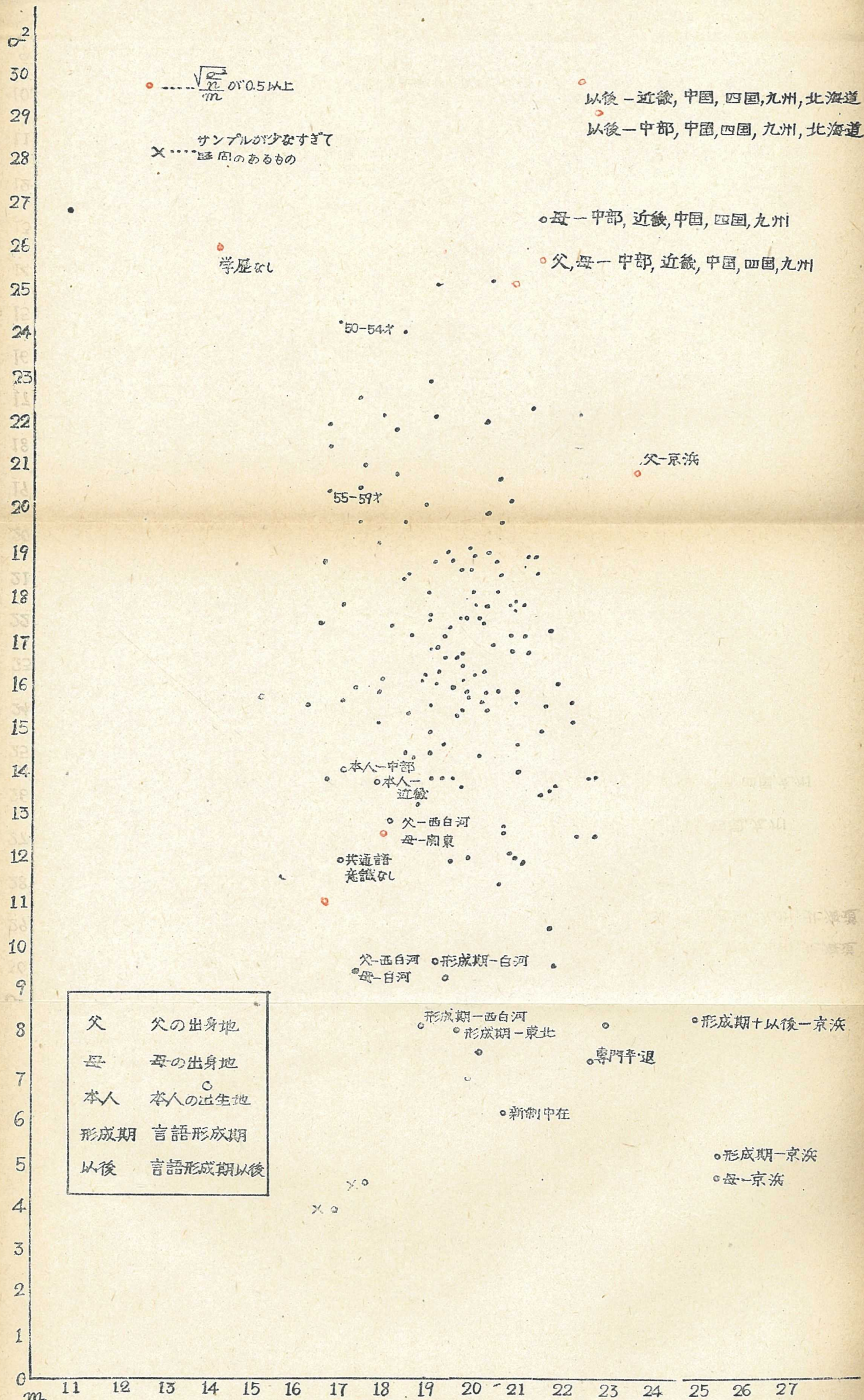


図 54



しかし、ここでは厳密な意味の「要因」だけではなく、広く、共通語を話す度合を測定する「手がかり」を含めて考えることとし、

#### 11. 判定

#### 12. 社会的態度×信頼性の検定（項目60）

を加えることにする。

以上、12の「手がかり」によって決定される共通語を話す度合の模様を見ることにしよう。そのために、重相関の考えを用いようと思う。そこで、この方法を用いるためには、まず、要因を適当に数量化しなければならない。各要因のカテゴリは決まった性質のものであって、このままでは相関係数を求めることはできない。たとえば、言語形成期に白河市にいたとか、京浜地方にいたとかいうようなものである。われわれは、これらに対する数量として、それぞれの「手がかり」のカテゴリのそれぞれに属するサンプルから得られる音韻の点数の平均を用いることとした\*。

もし、これが母集団の値であるならば、この数量化によって、共通語を話す度合と各要因との間の回帰線にしたがって、それぞれの「手がかり」のカテゴリのそれぞれに属する個人の共通語を話す度合の予測が確実に行われると言うことができる。しかし、われわれはこの値を知らないで、サンプルの値をもって代用しなければならない。このように、サンプルの値で近似するのであるから、その値の推定は相当の精度をもって行わなければならないことは当然である。しかし、推定の精度をあまり深刻に考えると各要因のカテゴリの数が減りすぎてしまって、満足すべきなんらかの結論も得ることができなくなってしまう。このように考えて、サンプリングによる母集団の平均を推定する精度、すなわち変異係数が最も甘いところで5%\*\*を起えないということで満足することにした。問題の性質から言

\* これが妥当性ある数量化の方法による第1次近似（first approximation）であることについては、林知己夫：統計数理的数量化の問題 補遺、統計数理研究所講究録第6巻第11号を参照されたい。

\*\*問題によっては変度（変異係数）1%を求めることがある。



音 韻 判 定	性 年	× 年 齡	学 歴	職 業	父 の 出身地	母 の 出身地	
音 韻 判 定 × 年 齡 性 年 齡 学 歴 職 業 父 の 出身地 母 の 出身地	1	0.5235	0.3956	0.4802	0.3117	0.3353	0.3126
	0.5235	1	0.2380	0.3702	0.2482	0.2518	0.2678
	0.3956	0.2380	1	0.5044	0.2760	0.0113	0.0484
	0.4800	0.3702	0.5044	1	0.5469	0.1800	0.0710
	0.3117	0.2489	0.2760	0.5469	1	0.1154	0.1113
	0.3353	0.2518	0.0113	0.1800	0.1154	1	0.5529
	0.3126	0.2678	0.0484	0.0710	0.1113	0.5529	1
	0.4857	0.3928	0.3569	0.3674	0.2054	0.4957	0.4434
	0.2050	0.1033	0.0688	0.3077	0.2163	0.1939	0.0357
	0.1804	0.1725	0.0609	0.2761	0.2359	0.0950	0.0788
	0.3335	0.3364	0.1466	0.5063	0.3258	0.1133	0.0653
	0.3582	0.3675	0.1953	0.3968	0.2196	0.1559	0.2041
0.4106	0.5579	0.2359	0.5161	0.2849	0.1295	0.1371	
音 韻 判 定	現 住 所	行 き 来	新 聞, ラ ジ オ の 利 用 度	共 通 語 と の 使 い 分 け	社 会 的 態 度 × 信 頼 性 の 検 定		
音 韻 判 定 × 年 齡 性 年 齡 学 歴 職 業 父 の 出身地 母 の 出身地	0.4857	0.2050	0.1804	0.3335	0.3582	0.4106	
	0.3928	0.1033	0.1725	0.3364	0.3675	0.5579	
	0.3569	0.0388	0.0609	0.1466	0.1953	0.2359	
	0.3674	0.3077	0.2761	0.5063	0.3968	0.5161	
	0.2054	0.2163	0.2359	0.3258	0.2196	0.2849	
	0.4957	0.1939	0.0950	0.1133	0.1559	0.1295	
	0.4434	0.0857	0.0788	0.0653	0.2041	0.1371	
	1	0.1286	0.1302	0.1423	0.2602	0.2903	
	0.1286	1	0.0916	0.1757	0.1272	0.1217	
	0.1302	0.0916	1	0.2583	0.1754	0.1929	
	0.1423	0.1757	0.2583	1	0.2385	0.3940	
	0.2602	0.1272	0.1754	0.2385	1	0.3792	
0.2903	0.1217	0.1929	0.3940	0.3792	1		

化するには 114 ペから 152 ペに至る各表において音韻の点数として示されたものを用いた。

このようにカテゴリのそれぞれを数量化してから、音韻の点数と「手がかり」（要因を含む）との相互の相関関係を求めてみた。

さて、個人の音韻の点数（予測値）を  $\bar{y}$ 、それぞれの「手がかり」のカテゴリに属するサンプル（集団）の音韻の点数（実測値）を  $x_1, x_2, \dots, x_{12}$  で表わすことにして、個人の音韻の点数（共通語を話す度合）が

$$\bar{y} = a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{12}x_{12} + c$$

すなわち、

$$\bar{y} = \sum_{i=1}^{12} a_i x_i + c$$

で予測されるものとする。ただし、 $a_i$  は重み (weight)、つまり、共通語を話す度合に寄与する (contribute) 度合を表わし、 $c$  は常数を表わす。

ここで、予測値  $\bar{y}$  とそれぞれのカテゴリに属する個人の実際の音韻の点数  $y$  との重相関係数を求めることにする。なお、 $a_i, c$  は重相関係数の計算から測定される。

予測値  $\bar{y}$  とある一つのカテゴリに属する個人の实測値  $y_1$  との相関係数よりも、予測値  $\bar{y}$  といくつかの他のカテゴリに属する個人の实測値  $y_2, y_3, \dots$  との結合した相関係数を出せば、いゝそう良い結果を得るのである。このように結合した相関係数がいま求めようとする重相関係数である。

そこで、158 ペにあげた表から、重相関係数を求めると 0.69 となった。次に、それぞれの  $a_i$  を求めると次のページの表のようである。

以上によって見ると、すべての個人の点数は以上の「手がかり」によっても、なお、相関係数 0.69 でしか予測できない。つまり、完全には測定できないということがわかる。われわれは個人の点数を測定する「手がかり」としてもっと別なものを考えなければならないことを知るのである。

また、以上の重みから見ると、重相関の考えを用いて、決められた要因から予測する立場を採るとき、音韻の点数、つまり、共通語を話す度合を

	1	2	3	4	5	6
手がかり	性×年齢	学 歴	職 業	父の出身地	母の出身地	生育地
重 み ( $a_i$ )	0.5069	0.2654	0.08033	0.2960	0.2960	0.2746
	7	8	9	10	11	12
手がかり	現住所	行き来	新 聞 ラジヲ	使 い 分 け	判 定	社会的態度×信頼性検定
重 み ( $a_i$ )	0.2307	0.07946	0.2275	0.1916	0.4818	0.03610

常数( $c$ )=38.709

予測する重要な「手がかり」として、性×年齢、判定が注目される。それに対して、職業、行き来、社会的態度×信頼性の検定（項目60）はさして重要な「手がかり」とは考えられない。

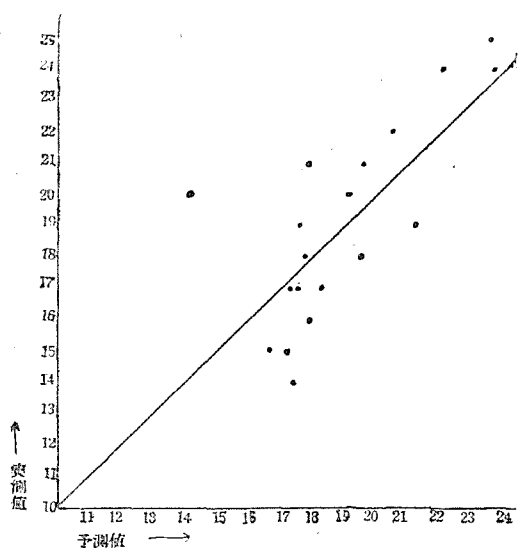


図 55

チェックのため、476のサンプルからランダムに抜いた20人について、上の予測式によって得られた予測値と実際の調査によって得られた実測値とを目盛ってみると図55のようである。この程度ならば、まず満足すべき結果と言える。相関係数 0.69 とはこの程度の関係と考えていい。

しかし、以上12の「手がかり」のうち共通語を話す度合に影響を及ぼす「要因」と見ることできるのは、先に述べたように、判定(11)、社会的態度×信頼性の検定を除いた10個の「手がかり」である。10個の「要因」のうち、音韻の点数にあ

まり影響を及ぼしていない現住所と行き来との二つの要因——これらと音韻の点数との相関係数はそれぞれ 0.2050, 0.1804 である (158 への表参照)——は、予測の精度をあげるためにあまり役だたないと考えて、計算の都合上省くことにした。けっきょく、八つの要因と音韻の点数との重相関係数および予測式の重みを求め、次のような値を得た。

重相関係数 0.65

重み：性×年齢	0.5288	母の出身地	0.3702
学歴	0.4017	生育地	0.3802
職業	0.1221	新聞、ラジオの利用度	0.3823
父の出身地	0.2894	共通語と方言との使い分け	0.3420
		常数	-35.450

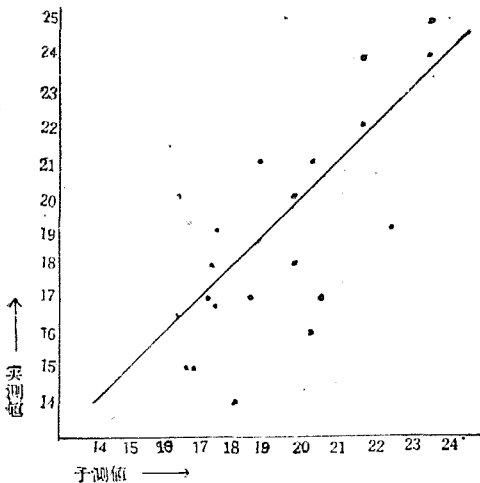


図 56

これによると、12の「手がかり」について見た場合と係数もほぼ等しく、重みも、性×学歴が大きく、職業が目だって小さく、だいたい同じ傾向を示すと言える。同じように、予測値と実測値とを比べてみても、ほぼ満足すべき結果が得られる。ここで、上にあげた予測式の計算例をあげてみよう。まず、共通語を話す度合の低い例。

1. 55歳ないし69歳の女で、
2. 学歴が全然なく、
3. 農業をやっており、
4. 父は西白河郡の出身で、
5. 母も西白河郡の出身で、
6. 本人も同じく西白河郡で育ち、

7. 新聞も読まず、ラジオを聞くこともなく、
8. どのような場面でも共通語を使うことがないと答えた者は、

$$\begin{aligned}\bar{y} &= \sum_{i=1}^8 a_i x_i + c \\ &= 0.5288 \times 16.7 + 0.4017 \times 14.3 + 0.1221 \times 17.1 + 0.2894 \times 17.3 \\ &\quad + 0.3702 \times 18.1 + 0.3802 \times 15.5 + 0.3823 \times 16.2 + 0.3420 \\ &\quad \times 17.9 + (-35.450) = 46.9588 - 35.450 = 11.509\end{aligned}$$

すなわち、このような調査では、この個人は、平均的に言ってだいたい  
11.5点を取ると考えられる。

次に、共通語を話す度合の高い人の例。

1. 25歳ないし34歳の男で、
2. 大学を卒業した、
3. 給料生活者で、
4. 父は京浜地方の出身で、
5. 母も京浜地方の出身で、
6. 本人も同じく京浜地方で育ち、
7. 新聞も読み、ラジオも聞き、
8. どのような場面でも共通語を話す者は、

$$\begin{aligned}\bar{y} &= 0.5288 \times 19.6 + 0.4071 \times 20.5 + 0.1221 \times 21.7 + 0.3894 \times 23.7 \\ &\quad + 0.3702 \times 25.5 + 0.3802 \times 25.5 + 0.3823 \times 20.6 + 0.3420 \times 22.2 \\ &\quad + (-35.450) = 62.75179 - 35.450 = 27.3017\end{aligned}$$

すなわち、このような調査では、この個人は、平均的に言って、だいた  
い満点を取ると考えられる。

#### (4) 偏相関

次に、ある要因（ないし「手がかり」）が独自に、他の要因（ないし「手がかり」）に依存しないで、共通語を話す度合にどの程度寄与しているかを見るために、ある要因（ないし「手がかり」）に注目しつつ他のそれを一定にしたときの、その要因（ないし「手がかり」）と音韻の点数との相関関係——すなわち、この係数が偏相関係数である——を求めてみた。普通、一つの要因だけで分析した場合には、その要因と他の要因との相関関係の程度によって、注目された要因の寄与の程度に他の要因のそれが加算されているのである。これを分離して、ある要因の独自の寄与を見ることは、

決定的な要因をつきとめるにはどうしても必要と考えられる。

そこで、以上のような偏相関係数を12の「手がかり」について求めれば次のようである。

	1	2	3	4	5	6
手がかり	性× 年 齢	学 歴	職 業	父の出 身地	母の出 身地	生育地
偏相関係数	0.215	0.070	0.031	0.090	0.113	0.140
	7	8	9	10	11	12
手がかり	現住所	行き来	新 聞 ラジヲ	使 分 い け	判 定	社会的 態度× 信頼性
偏相関係数	0.077	0.017	0.098	0.087	0.092	0.254

偏相関係数から見ると、性×年齢、社会的態度×信頼性の検定、それに競いて生育地、母の出身地などが大きく、これに対して、職業、行き来などが小さい。

重相関係数の場面と同じように、八つの要因だけについて偏相関係数を求めれば次のようである。

性×年齢	0.217
学歴	0.108
職業	0.046
父の出身地	0.101
母の出身地	0.135
生育地	0.186
新聞・ラジオの利用度	0.161
共通語と方言との使い分け	0.151

これによっても、性×年齢、生育地が高く、職業が低い。つまり、偏相関の考えに基いて分析した結果は、性×年齢、生育地が強い要因と認められる。

しかし、実際には、いろいろな要因は複合して存在するのであるから、こういう立場からは、各要因と音韻の点数との単純相関ならびにそれらの要因のカテゴリの広がり (range) の考えも必要であろう。

したがって、結論はこれらすべてを考え合わせて出す必要がある。

#### (5) 要因のおもなもの

以上の各種の相関係数による分析を総合して考えると、共通語を話す度合に影響を及ぼす要因としては、

性×年齢  
父と母の出身地  
生育地  
学歴

などと言えるであろう。また、共通語を話す度合を測定する「手がかり」としては、この他に、最も重要なものとして、判定を加えることができるであろう。

共通語を話す度合が、これらの要因ないし「手がかり」によって、重相関係数 0.69 程度の予測ができたことは、初期の調査としてはまず成功と言えるのであるが、なお、完全とは言いがたいのである。完全に近づくためには、別の要因を見つけ出さなければならない（これについては275ページ以下参照）。ということは、共通語を話す度合はかなり複雑・微妙なものであって、これらの要因だけでは完全に決定することも、また、完全に予測することもむずかしいということを示しているのである。

#### (6) 共通語を話す度合の高い者の分析

共通語を話す度合の高い者、すなわち、音韻の点数で27点を示した者は32人(6.7%)である。いま、これらの者がどのような要因分布を示すかを調べ、全体の要因分布と比較してみよう。この分布に差があるならば、その要因が共通語を話す度合になんらかの影響を及ぼしていると考えられるのである。

このためには、 $\chi^2$  検定の考えを一般化した検定法\*を作り、それによ

\* 説明は、林知己夫：適合度の検定と  $\chi^2$  検定『統計数理研究所講究録 1950』を参照せよ。

いま、 $p_1, p_2, \dots, p_k$  を、ある要因のカテゴリに関する母集団の示す比率とする。このとき、サンプルの比率の母集団からのかけ離れた度合を表わす尺度として、

て得られた判定値を比較すれば次のページに示すようである。

$$S_{\alpha}^2 = \frac{1}{k} \sum_{i=1}^k \frac{(p_i - x_i)^2}{p_i^{2\alpha}}$$

を考える。

$\alpha=0$  は、絶対的比率の差を問題にしたものである。つまり、絶対的比率の大きいところがものを言うのである。

$\alpha=1$  は、相対差の比率を問題にしたものである。つまり、絶対的比率の小さいところがものを言うように作られている場合である。

$\alpha=\frac{1}{2}$  は、 $\chi^2$  の立場で、中間的なものである。

さて、

$$E(S_{(\alpha)}^2) = \frac{1}{k} \sum_{i=1}^k \frac{1}{p_i^{2\alpha}} \cdot \frac{p_i(1-p_i)}{n} = \tau_{\alpha}^2$$

である。 $\sigma_{s^2(\alpha)}^2$  を求めると、

$$\begin{aligned} \alpha=0; & \left\{ \frac{4(n-2)}{n^3} \sum_{i=1}^k p_i^2(1-p_i) \right. \\ & \left. - \frac{2(n-3)}{n^3} \left( \sum_{i=1}^k p_i^2 \left( \sum_{i=1}^k p_i^3(1-p_i) \right) \right) \right\} \frac{1}{k^2} \\ \alpha=\frac{1}{2}; & \left( \frac{1}{n^2} 2(k-1) - \frac{1}{n^3} (k^2+2k-2) + \frac{1}{n^3} \sum_{i=1}^k \frac{1}{p_i} \right) \frac{1}{k^2} \\ \alpha=1; & \left\{ \frac{1}{n^3} \left( \sum_{i=1}^k \frac{(1-p_i)}{p_i^3} - \sum_{i+j}^k \frac{1}{p_i p_j} + 4(k-1) \sum_{i=1}^k \frac{1}{p_i} \right) \right. \\ & \left. + \frac{2(n-3)}{n^3} \left( k(k-1) + \sum_{i=1}^k \left( 1 - \frac{1}{p_i} \right)^2 \right) \right\} \frac{1}{k^2} \\ & + \frac{2}{n^2} \left( k(k-1) + \sum_{i=1}^k \left( 1 - \frac{1}{p_i} \right)^2 \right) \end{aligned}$$

われわれの場合、点数27点を取っている者(32人)を次のいろいろな要因について分析し、その分布と全体の分布(白河市)との比較を試みよう。後者の分布比率が  $p_1, p_2, \dots, p_k$  であり、前者(32人)のそれが  $x_1, x_2, \dots, x_k$  である。

これから、

$$D_{(\alpha)} = \frac{|S_{(\alpha)}^2 - E(S_{(\alpha)}^2)|}{\sigma_{s^2(\alpha)}^2}$$

を計算すると、 $D_{(\alpha)}$  はサンプルの母集団からのかけ離れた度合の確率論的尺度を与えていると言える。高能率化されたチェビシェフの定理を使い、 $D$  の値が3以上になるとき有意な差があるとみなすことができる。



判定値 ( $D_{(\alpha)}$ ),  $\alpha = \frac{1}{2}$  の場合

性	0.67
年齢	1.00
学歴	2.39
職業	0.39
父の出身地*	13.17
母の出身地*	13.86
生育地	19.62
現住所	0.34
階層	0.41
新聞の利用度	2.38
ラジオの利用度	4.07
社会的態度	26.71
共通語と方言との使い分け	7.23
共通語に対する態度(項目59)	0.12
信頼性の検定(項目60)	13.20

以上により、性、年齢、学歴、職業、現住所、階層、新聞の利用度、および共通語に対する態度については有意な差が見受けられない。これらの要因は、「共通語を話す度合」に「有意」という立場では影響を与えているとは言えないわけである。これに対して、激しく影響していると思われるのは、父の出身地、母の出身地、生育地、社会的態度、信頼性の検定である。

このようなことをも考え合わせてみると、前にあげた結論は別の面から補われるところがあるろう。

\* 父の出身地、母の出身地について特に  $\alpha=0$ ,  $\alpha=\frac{1}{2}$ ,  $\alpha=1$  の場合、 $D_{(\alpha)}$  の値を比較すると次のようである。

	$\alpha=0$	$\alpha=\frac{1}{2}$	$\alpha=1$
父	3.42	13.17	13.44
母	5.58	13.86	20.97

いずれによっても以上の結論は保証される。

### 4.3 「文法の点数」から見た共通語を話す度合を決定する要因

調査票の項目 36—46 は文法物語いについての反応を見ようとしたものである。いま、この11項目について共通語で答えた場合に1点、方言で答えた場合に0点を与えて、その合計得点を求め、これを一つの指標として要因分析を試みようと思う。この項目は一つ一つ特定の要因の影響を見るために設けられたのであるから、これら全体をもって共通語を話す度合を表わす指標とすることにはいろいろ議論の余地があるけれども、各項目の細かい分析をも合わせ考えれば、大づかみな見通しは得られようと思う。また、この結果を、他の指標による要因分析の結果と比較すれば、全体としていっそう確実に要因をつかむことができようと思う。

#### (1) 性

	m	$\sigma^2$	n
男	6.2	5.76	224
女	6.8	5.33	252

平均点について見ると女のほうが男より高く、その差は有意である。

分布について男女の間に差があるかどうかを見るために  $\chi^2$  検定を行うと、 $\chi^2=20.34$ 、(自由度9)となり、分布構造についても男女の間に有意な差が認められる。この傾向は音韻の点数を指標とした場合に見られた。つまり、性は目だつ要因の一つと考えられる。

文 法 性	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
男	3	10	18	35	23	35	29	30	20	13	8	224	6.2	5.76	0.6
女	3	6	14	16	36	34	41	31	39	22	10	252	6.8	5.33	0.2
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

#### (2) 年齢

60—69歳の者を除いて、ほかの年齢層相互の間に平均点について有意

な差が見られないのはきわめて興味深い。また、注意して見ると老年から若年になるにしたがい、分散、つまり各人平均点の散らばり方が減って行く傾向が見られるのは常識を良く裏書きするものである。つまり、老年層には共通語を話す度合について若い層に比べてかなりいろいろな人があるということである。

文法 年齢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
15—19		1	1	11	15	16	21	11	7	6	2	91	6.63	5.58	0.2
20—24	1	1	5	8	9	9	13	9	7	5		67	6.34	6.65	0.3
25—29	1		4	8	7	5	8	6	12	4	2	57	6.75	6.67	0.3
30—34			5	3	1	10	5	6	10	4	2	46	7.15	5.10	0.3
35—39	3	1	2	4	9	7	2	5	6	2	2	43	6.16	7.77	0.4
40—44		3	2	4	6	7	5	7	3	4	4	45	6.76	6.43	0.4
45—49		1	5	4	3	4	6	5	5	3	2	38	6.66	6.19	0.4
50—54		2	3	3	2	5	2	6	3	2	1	29	6.46	6.17	0.5
55—59		4	1	2	3	3	5	2	3	3	1	27	6.37	7.19	0.5
60—69	1	3	4	4	4	3	3	4	3	2	2	33	5.97	7.78	0.5
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

## (3) 学歴

文法 学歴	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
学歴なし	1	3	2	2	1	1	1	1				12	3.9	4.41	0.6
小学卒	2	3	12	8	17	14	11	10	13	5	3	98	6.1	5.88	0.3
小学高小		1	1	5	4	3	3	4	1	1	2	25	6.3	5.64	0.5
小学高小	2	5	9	19	17	24	23	24	22	14	5	164	6.6	5.50	0.2
新中卒				3	1		2	3	2	1		12	6.9	4.24	0.6
旧中卒		1	6	8	6	7	9	5	11	4	1	58	6.5	5.35	0.3
旧高卒						1	2				1	4	7.8	6.72	1.3
旧専門卒	1	1			1		1	1	2	1		8	7.0	13.00	0.4
その他卒							2	3	1	2		8	8.8	2.44	0.4
新中卒		1				4	5	3	5	4	2	24	8.0	4.00	0.4
旧中卒		1		2	6	6	3	5	2			25	6.2	2.80	0.3
旧中卒					4	6	9	9	2	2	1	35	6.5	2.99	0.3
その他卒				1								1			
大卒			1									2	6.5	12.25	2.5
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

学歴について見てもほぼ常識を裏書きしている。つまり、学歴の低い者の平均点が低く、学歴の高い者のそれが高いことが示されている。特に、「学歴なし」と大学卒業・中退との間の差は著しい。また、学生(在学者)

および大学卒業・中退の分散が特に小さいのもおもしろい。両者の生活構造の類似を思わせる。以上の結果は音韻の点数を指標として見た場合の結果とほぼ一致する。

#### (4) 職業

まず、本人の職業について見ると、農業の平均点数が低く、主婦、給料生活者などの都会的な職業の平均点数が高い。なお、学生についてその分散が小さめなのは注目に価する。

なお、音韻の点数から見た場合と比較せよ。

職業	文 法	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
勤め人	人	1	1	2	7	5	17	11	13	10	7	2	76	6.9	4.59	0.3
商務者	A	3	3	2	10	9	9	12	8	8	6	3	42	6.5	5.73	0.4
労働者	B			7		3	1	4	3	2	2		22	6.0	6.00	0.5
農主	業	1	8	10	7	5	4	3	3	4			45	4.6	5.18	0.3
主婦	婦		1	4	12	15	16	17	11	21	12	6	115	7.1	4.97	0.2
学生	生		1	2	6	10	11	10	6	4	2	1	53	6.3	3.60	0.3
無職	職	1	1	1	4	7	4	10	6	4	4	3	45	6.8	5.56	0.3
不明	明						1		2	1	1		5	8.2	1.76	0.6
計		6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

家の職業について見ても、本人の職業とほぼ同一の傾向が見られる。

職業	文 法	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
勤め人	人	1	2	2	10	12	20	15	13	12	13	2	102	6.9	4.75	0.2
商務者	A	1	2	5	14	11	23	14	18	17	7	4	116	6.7	4.84	0.2
労働者	B	3	5	2	11	11	9	12	14	15	6	6	94	6.7	6.73	0.3
農主	業			9	3	10	2	7	3	2	4	1	41	5.9	5.58	0.4
主婦	婦	1	7	8	10	7	8	9	8	6	3		67	5.6	5.77	0.3
学生	生			1		1	1	1	1	2	1		8	7.1	4.86	0.8
無職	職				2	3	6	4	11	4		3	37	6.8	4.23	0.3
不明	明			3		1	2	1		1	1	2	11	6.7	8.93	0.9
計		6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

#### (5) 階層

階層には著しい差は認められない。これは音韻の点数を指標とした場合と一致する。

文法 階層	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
上	1	1	4	10	5	15	15	9	8	2	5	75	6.6	5.02	0.3
中	3	9	15	27	28	38	36	33	38	21	7	255	6.6	5.55	0.2
下	2	5	11	11	24	12	15	14	8	8	4	114	6.1	5.84	0.2
不明	1	2	3	2	4	4	5	5	4	2		32	7.2	5.88	0.4
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

## (6) 現住所

商業を主とする市の中心地域の平均点数が高く、農業を主とする地域のそれが低い。周辺商業地域と住宅地域との間を除いて相互の間に有意な差が認められる。

以上の結果は、音韻の点数から見た場合に、市の中心地域の平均点数と農業を主とする地域のそれとの間に有意な差のないことと比較される。

文 法													計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
現住所		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11				
中心商業地域				1	5	7	11	14	15	13	6	6	78	7.5	3.81	0.2
周 邊 商 業 地 域	2	4	7	13	14	22	16	15	9	13	2		117	6.4	5.46	0.2
住 宅 地 域	1	4	5	11	14	18	21	8	23	8	3		116	6.7	5.16	0.2
農 業 地 域	3	8	19	22	24	18	19	23	14	8	7		155	6.0	6.22	0.2
計		6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

## (7) 父母の出身地

## (父)

文 法		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
出身地																
白 河 市	1	7	11	24	21	24	26	14	12	6	3		149	6.0	4.79	0.2
西 白 河 郡	3	4	10	2	15	17	11	12	10	8	2		94	6.3	6.08	0.3
東北(白河市、西白河郡以外)	2	3	5	14	10	13	14	12	15	11	4		103	6.7	6.13	0.3
中国、四国、九州、近畿、中部、北海道		1	2	2	7	3	4	8	3	2	5		37	7.1	6.04	0.4
関東(京浜以外)		1	4	7	4	10	12	11	12	2	1		64	6.8	4.18	0.3
京 浜							1	1	1	4	2		9	9.6	1.58	0.4
不 明				2	2	2	2	3	6	2	1		20	7.7	4.03	0.5
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18		476			

(母)

出身地	文 法											計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11				
白 河 市		2	11	12	23	21	14	12	11	10	3	119	6.3	4.92	0.2
西 白 河 郡	4	8	11	23	12	21	18	19	11	8	2	137	5.9	5.85	0.2
東北(白河市, 西白河郡以外)	2	3	5	7	14	8	21	15	14	6	3	98	6.7	5.28	0.2
中国, 四国, 九州, 近畿, 中部, 北海道		1	2	2	4	3	2	4	2	2	6	28	7.3	7.77	0.5
関東(京浜以外)		1	3	5	4	14	13	9	13	2		64	6.8	3.51	0.2
京 浜									2	5	3	10	10.1	0.49	0.2
不 明					2	2	2	2	2	6	2	20	7.4	5.03	0.5
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

父も母も出身地が京浜地方である場合は、他とまったく異なり、高い平均点を示している。なお、その分散の小さいことも注目される。

白河市と西白河郡との差は父についても母についても見受けられない。音韻の点数を指標とした場合には両者の間に差のあったことは注意すべきである。

次に、父が京浜地方出身の者と、母が京浜地方出身の者との間には差があるであろうか。

	m	$\sigma^2$	n
父	9.6	1.58	9
母	10.1	0.49	10

音韻の点数から見た場合と同じ考えによって計算すると(127 べ参照),

$$|\bar{x}_1 - \bar{x}_2| = 0.4$$

$$\sigma_{\bar{x}_1 - \bar{x}_2} = 0.37$$

となり、両者の間に有意な差は認められない。

この結果は音韻の点数から見た場合と一致する。つまり、このような調査では、母が京浜地方出身であることが、父が京浜地方出身であることよりもいっそう共通語を話す度合に影響を及ぼしているという期待は確認されなかった。

次に、父と母との出身地を組み合わせたものを作って、その示す文法の点数を比較すれば次のようである。

父の出身地 母の出身地		白河市	西河	白郡	東北	中国, 四国, 九州, 近畿, 中部, 北海道	関	東	京	浜
白	河	市								
西	白	河								
東	白	河								
中国, 四国, 九州										
近畿, 中部, 北海道										
関										
京										
浜										
白	河	市	6.2	6.7	6.9	5.3	6.2	7.0		
西	白	河	5.2	6.3	6.5	6.0	6.6	—		
東	白	河	7.4	5.0	6.6	7.4	7.0	—		
中国, 四国, 九州			3.5	—	5.0	7.7	6.0	11.0		
近畿, 中部, 北海道			6.1	6.7	8.0	—	7.0	7.0		
関			9.0	—	10.5	—	11.0	10.0		

われわれの期待に反する結果は現れていない。詳しくは次の表を見よ。

文 法		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
父 白 河 市	白		1	8	5	13	10	7	8	4	4	2	62	6.2	4.97	0.3
	西	1	5	2	15	5	8	11	2	3			52	5.2	3.85	0.3
	東			1	1	2	2	7	3	2	1	1	18	7.4	2.36	0.4
	中												2	3.5	0.25	0.4
	関	1		3	1	4	1	1	2	1			14	6.1	4.84	0.6
西 白 河 郡	白				1								16	6.7	3.97	0.5
	西	3	3	7	2	7	12	7	11	5	6	2	65	6.3	6.73	0.3
	東		1	1		3	1		1				7	5.0	4.27	0.8
	中							2	1				6	6.7	4.22	0.8
	関															
東 北 白 河 市 (西 白 河 市 以 外)	白		1		2	3	6	2		4	3	1	22	6.9	5.45	0.5
	西			1	4		1		3	1	2		12	6.5	6.25	0.7
	東	2	2	4	7	7	5	11	9	9	5	2	63	6.6	6.22	0.3
	中				1		1						2	5.0	1.00	0.2
	関							1		1			2	8.0	1.00	0.2
中 九 州 ・ 四 国 ・ 近 畿 道	白												7	5.3	2.20	0.6
	西			1	1	2	2		1				2	6.0		
	東					1		2	3	1			7	7.4	1.36	0.4
	中															
	関	1	1		4	1	2	3	2	2	5		21	7.7	7.44	0.6
関 東 (京 浜 以 外)	白		1	4		1	2	2	1	1			12	6.2	4.97	0.6
	西		1	1				1	2				5	6.6	6.64	1.2
	東				1		1		1				3	7.0	2.67	0.9
	中					1							1	6.0		
	関		2	2	3	8	9	8	8	1			41	7.0	2.90	0.3
	白	1										1	1	11.0		
	西												1	2.0		

文 法		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
父	母															
京	西白河郡								1				1	8.0		
	中関京							1				1	1	11.0		
浜	東浜										1	4	1	1	7.0	
										1	4	1	6	10.0	0.33	0.2
不明	中不部明								1				1	8.0		
				2	2	2	2	2	2	6	2	1	19	7.6	4.23	0.5
計		6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

## (8) 生育地(言語形成期におけるおもな居住地)

居住地別に平均点数などを示せば次のようである。

生育地	文 法	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
白河市		3	7	16	36	40	43	42	29	25	13	3	257	6.2	4.57	0.1
西白河郡		3	6	9	2	8	12	8	7	5	6	2	68	5.9	7.27	0.3
東北(白河市、西白河郡以外)			2	3	10	6	5	11	11	15	6	3	72	7.0	5.42	0.3
中国、四国、九州、近畿、中部、北海道				2		2	2		3		3	6	18	8.2	7.84	0.7
関東(京浜以外)			1	2	2	2	7	7	8	8	1		38	6.9	3.65	0.3
京浜					1	1		2	3	6	6	4	23	8.9	3.21	0.4
計		6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

京浜地方と、中国・四国・九州、近畿、中部、北海道地方を除いた他の地方との間に有意な差が認められる。関東地方と白河市、西白河郡との間にも有意な差が認められる。

なお、試みに居住年数と居住地(おもなものだけ)との関係において、該当サンプルの点数を比較すると次のようである。しかし、居住年数はほとんど(86.6%)が9か年のため、各該当サンプルの数が少なすぎて、大した意味はないであろう。

居 住 地	年 数	9	8	7	6	5
白河市		6.1(0.02)	6.4(0.94)	8.1(0.33)	6.5(0.56)	5.4(1.17)
関東		6.9(0.11)	6.0(—)	—	—	7.0(—)
京浜		9.4(0.09)	10.0(0.50)	7.5(3.13)	—	6.7(1.19)

( ) は  $\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$  を示す。



参考のため、居住地と居住年数との相関表を示そう。

居住地 年数	白河市	西河郡	東北	中国、四国、 九州、近畿、 中部、北海道	関東	京地	浜方	計
9	230	60	57	14	35	16		412
8	8	2	8	0	1	2		21
7	8	4	1	0		2		15
6	4	1	2	2				9
5	5	1	3	2	2	3		16
4			1					1
3	2							2
計	257	68	72	18	38	23		476

### (9) 言語形成期以後の居住状況

言語形成期以後のおもな居住地とそこに居住した年数との関係において、その平均点数を比較すると次のようになる。

居住地 居住年数	白河市	西白河郡	東北	関東	京地	浜
5—9	6.4(80)	4.5(2)	7.4(5)	7.5(8)	7.9(23)	
10—19	5.9(62)	5.2(5)	7.1(9)	8.3(9)	9.1(17)	
20—29	6.2(66)	(0)	8.5(2)	6.5(2)	9.3(10)	

( ) はサンプル数を示す。

サンプル数が少ないために決定的なことは言えないが、京浜地方については年数の高くなるにつれて有意的に平均点が高くなる。この点から居住年数が影響を与えていると認めることができる。

次に、言語形成期以後始めて白河市に居住した年齢層別に平均点を比較すると次のようになる。

	年 齢	m	$\sigma^2$	n
1	15—19	6.9	6.19	261
2	20—29	6.1	6.40	27
3	30—39	7.0	1.00	2

なお、言語形成期以後も白河市以外に居住したことのない者、すなわち4については次のようである。

m	6.0
$\sigma^2$	4.25
n	186

以上1と4との間の差は有意と認められるが、1と2との間には有意な差は認められない。

(10) 行き来

	m	$\sigma^2$	n
1. よそへ出ない	6.2	5.75	268
2. 京浜地方へは行かない	6.4	5.60	96
3. 京浜地方へ1回行く	7.1	4.73	64
4. 京浜地方へ2—3回行く	7.8	5.19	16
5. 京浜地方へ1回、関東地方へ行く	7.1	2.99	11
6. 京浜地方へ4回以上行く	7.8	3.90	21

京浜地方へ行かない(1, 2)者と、京浜地方へ行く(3—6)者との間には有意な差が見られる。

(11) 新聞, ラジオの利用度

まず、新聞を読む者と読まない者との間に明らかに有意差が認められる。

ラジオについても、ラジオを聞く者と聞かない者との間の差は有意と認められる。

文 法		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
新 聞	読 む	4	5	14	35	33	55	49	40	43	28	16	322	6.8	5.30	0.1
	読んだり読まなかつたり	1	3	4	5	10	8	9	11	10	3	1	65	6.4	5.26	0.3
	読まない	1	7	13	11	13	5	11	10	4	3	1	79	5.4	5.61	0.3
	読 不		1	1		3	1	1		2	1		10	6.1	6.29	0.8
計		6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

文 法		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
ラ ジ オ	聞 く	1	6	9	22	21	37	37	27	33	18	13	224	6.9	5.25	0.2
	聞いたり、聞かなかったり	1	2	3	9	12	13	9	17	11	5	2	84	6.6	4.80	0.2
	聞 か な い	4	8	20	20	26	19	24	17	15	12	3	168	5.9	6.00	0.2
	計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

## (12) 社会的態度, 共通語に対する態度・意識

## (i) 社会的態度

「満足」に思っている者と「不満」に思っている者との間の差は有意である。

社会的態度	文法											計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11				
満足, 現状のまま	2	10	18	20	22	28	30	27	24	13	6	200	6.4	5.80	0.2
無関心	3	2	2	15	13	14	13	11	11	5		95	6.0	5.14	0.2
不満, 前端的	1	4	6	16	24	27	27	23	24	17	12	181	7.0	5.32	0.2
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

## (ii) 白河のことばに対する自覚と価値づけ

白河のことばと在のことばとは違うと答え、かつ、白河のことばのほうが良いと答える者が大部分 (82.4%) である。項目47と48との反応をいろいろに組み合わせた集団相互の間に有意な差は見受けられない。

項目 47, 48	文法											計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11				
00				1	1							2	4.5	0.25	0.4
10			1	1	2			3	2	1		12	6.8	4.52	0.6
11	4	12	28	38	50	56	61	53	48	30	12	392	6.5	5.40	0.1
12				3	2		2			1		8	5.8	3.94	0.7
13	1	2		1		1		1		1		7	7.3	9.92	1.2
20				1		1						2	5.0	1.00	0.7
21						2						2	6.0		
22							3		2		1	6	8.3	2.22	0.6
30			1	1	1	1	2	2	1			9	6.5	5.25	0.9
32		1	2	1	1	2			1			8	4.8	4.44	0.8
1不明	1											1	1.0		
2不明				2		1		1	1	1	2	8	7.9	7.36	1.0
3不明		1		2	2	3	2	1	4	1	3	19	7.3	6.64	0.6
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

## コード

項目47  
0 無関心  
1 違う  
2 わからない  
3 違わない

項目43  
0 無関心  
1 白河のほうが良い  
2 わからない  
3 白河のほうが悪い

いま、項目47と48とを別別に単純に集計すると次のようである。これらの集団の間にはまったく有意な差を認めることができない。このような項目は、こういう分析においては重要な要因と考えられないのではないか。

文法 項目47	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
0				1	1							2	4.5	0.25	0.4
1	6	14	29	43	54	59	63	57	50	33	12	420	6.5	5.55	0.1
2				3		4	3	1	3	1	3	18	7.5	5.36	0.6
3		2	3	4	4	6	4	3	6	1	3	36	6.5	6.42	0.4
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

文法 項目48	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
0			2	4	4	4	2	5	3	1		25	6.3	4.04	0.4
1	4	12	28	38	50	58	61	53	48	30	12	394	6.5	5.37	0.1
2		1	2	4	3	2	5		3	1	1	22	6.1	5.72	0.5
3	1	2		1		1		1		1		7	4.7	9.92	1.2
不明	1	1		4	2	4	2	2	5	2	5	28	7.3	8.12	0.5
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

### (iii) 白河のことばと共通語との比較と共通語の使用

項目49の反応1, つまり, 白河のことばと共通語との違いを感じる集団のうち, 共通語を使うときがあると答えた部分集団と, そういことがないと答えた部分集団との間には有意な差が見られる。前者を 11, 後者を 14 とすれば,

	m	$\sigma^2$	n
11	7.0	5.31	250
14	5.4	4.71	64

のようである。

また, 共通語と白河のことばとの違いを感じなくて, しかも共通語を使うときがあるかどうかかわからないと答えた者はやや低い点数を示している ( $m: 4.7$ ,  $\sigma^2: 0.56$ ,  $n: 6$ )。

文法 項目49, 50a	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
00							1					1	7.0		
04					1			1				2	6.5	2.25	1.1
0不明			1	1	1							3	4.0	0.67	0.5
11	2	6	8	20	30	38	35	34	37	26	14	250	7.0	5.31	0.2
12	1		1			5	1		1	1		10	6.0	6.00	1.0
13				1		2	3	1				7	6.4	1.38	0.5
14	1	4	11	7	11	8	8	9	4	1		64	5.4	4.71	0.3
1不明		1	2	4	4	5	5	5	5	1		32	6.4	4.23	0.4
21				1				1				2	6.0		
22			2									2	3.0		
44		1	1		1							3	3.3	1.55	0.7
2不明				2	1	1	1	1	1			7	6.1	3.27	0.7
31			2	5	2	7	6	4	3	3	1	33	6.7	4.46	0.4
32				3	2	1						6	4.7	0.55	0.3
34	2	1		3	1		7	3	2			19	6.1	6.09	0.6
3不明		3	4	4	5	2	3	1	6	3	3	34	6.4	8.36	0.5
不明2								1				1	8.0		
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

コード 項目49 0 無関心 項目50a 0 標準語を知らない  
 1 感じる 1 使うことがる  
 2 わからない 2 わからない  
 3 感じない 3 使いたいが使えない  
 4 使うことがない

いま、項目別（49, 50a）に集計すると次のようである。

文法 項目49	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
0			1	1	2		1	1				6	5.3	2.89	0.7
1	4	11	22	32	45	58	52	49	47	29	14	363	6.7	5.44	0.1
2		1	3	3	2	1	1	2	1			14	5.1	4.49	0.6
3	2	4	6	15	10	10	16	8	11	6	4	92	6.3	6.24	0.3
不明								1				1			
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

文法 項目50a	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
0							1					1			
1	2	6	10	26	32	45	41	39	40	29	15	285	7.0	6.11	0.2
2	1		3	3	2	6	1	1	1	1		19	5.4	5.01	0.5
3				1		2	3	1				7	6.4	1.55	0.5
4	3	6	12	10	14	8	15	13	6	1		83	5.5	5.51	0.3
不明		4	7	11	11	8	9	7	12	4	3	76	6.3	6.05	0.3
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

項目49では、「感じる」と「わからない」、項目50aでは、「ある」と「ない」、「ある」と「わからない」との間に有意な差が見受けられる。このような「意識」の度合の差は、共通語を話す度合に影響を及ぼしていると言えよう。

(iv) 共通語意識

共通語と白河のことはとの違いを感じる者のうち、「共通語意識あり」と判定された者と「なし」と判定された者との間には有意な差が見受けられる。

文法 項目50b												計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11				
あな りし 明	3	7	14	30	38	52	46	49	44	30	16	329	6.9	5.97	0.1
	3	6	14	19	20	15	19	12	11	2		121	5.5	4.86	0.2
		3	4	2	1	2	5		4	3	2	26	6.4	8.91	0.6
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

ここで、項目49と項目50bとを組み合わせた表を作れば、次のように両者の間に相当深い関係が見受けられる。

		項目50b											共通語意識あり		共通語意識なし	
項目 49													291		60	
感 わ 感	か	じ	ら	な	い							2		11		
	感	じ	な	い							36		43			
文 法	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$	
項目49, 50b																
01			1	1	2		1	1				6	5.3	2.89	0.7	
11	3	7	12	23	35	44	40	44	42	27	14	291	6.9	5.30	0.1	
12	1	4	9	7	9	12	8	5	4	1		60	5.4	4.40	0.3	
1不明			1	2	1	2	4		1	1		12	6.3	3.77	0.6	
21				1				1				2	6.0			
22		1	3	2	2	1	1	1				11	4.5	3.16	0.5	
2不明									1			1	9.0			
31			2	6	3	8	6	4	2	3	2	36	6.6	4.74	0.4	
32	2	1	1	9	7	2	9	4	7	1		43	6.0	5.16	0.4	
3不明		3	3				1		2	2	2	13	6.3	13.44	1.0	
不明2								1				1	8.0			
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476				

コード	項目49	0 無関心	項目50b	1 共通語意識あり
		1 感じる		2 " なし
		2 わからない		
		3 感じない		

$\chi^2$ 検定を試みると、項目49の「感じる」集団とその他の集団との間には、項目50bの2項に関して有意な差が認められる。

次に項目50bについて単純に集計すると、両者の間の差は有意である。

(v) 場面による共通語と方言との使い分け

七つの場面(項目51—58、ただし54を除く)において共通語を使うと答えた場面の数を点数で表わし、それぞれの点数に該当する集団の文法の平均点を比較すれば次のようである。

文法 使用度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
0	3	10	15	17	21	18	19	14	12	7	4	140	5.8	6.07	0.2
1		2	4	7	10	8	14	9	6	1		61	6.1	3.68	0.3
2	3	3	10	16	17	22	11	12	11	1		106	6.3	4.31	0.2
3		1	2	7	8	12	8	10	8	4	1	61	6.7	4.12	0.3
4				1	2	5	8	4	6	3		29	7.4	2.46	0.3
5			1	3	1	1	7	4	6	5	2	30	7.8	4.51	0.4
6						1	1	5	6	4	5	22	7.2	1.88	0.3
7						2	2	3	4	10	6	27	7.3	2.22	0.3
計	6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			

場面の数の高くなるにつれてだんだん文法の平均点が高くなる傾向が見受けられる。相互に有意な差を示す集団も少なくない。

(iv) 共通語に対する態度

子供が人前で共通語を話せるようになることを「必要」と考えている者と「不必要」と考えている者との間には有意な差がある。

項目	文 法												計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11				
59																
無 必 わ か ら な い 要 明	関 心 要 明		1	1		3		2	3	1			11	6.1	4.63	0.7
		5	12	22	44	49	64	62	55	51	35	17	416	6.7	5.49	0.1
			1	4	1	2			2	4		1	15	6.1	8.46	0.7
		1		5	4	4	5	3	1	3			26	5.3	4.29	0.4
			2		2	1		3					8	4.8	3.94	0.7
計		6	16	32	51	59	69	70	61	59	35	18	476			





以上、社会的態度、共通語に対する態度・意識については、共通語に対して「好ましい」態度・意識を持つ者の平均点がだいたいにおいて高い。つまり、態度と意識とは共通語を話す度合に対してまず積極的な影響を及ぼすと言えるであろう。

以上の諸要因の広がり (range) を比較すると、図 57 のようである。さらに、これらの要因を六つの要因群に分けて、その広がりを比較すると、

I 自然的要因	0.95
II 経歴的要因	3.07
III 社会的・地域的環境の要因	1.00
IV 生育・居住環境の要因	3.06
V コミュニケーション	1.33
VI 社会的態度、共通語に対する態度・意識	1.43

のようになり、経歴的要因、生育・居住環境の要因が優勢であることがわかる。

#### 4.4 主観的判定から見た共通語を話す度合を決定する要因

主観的判定から見た共通語を話す度合の分析には、「八丈島の言語調査」(前出) の46ページ以下で用いた「K-図表」を利用することにした。

われわれが主観的判定によって調

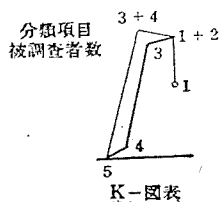


図 58

べた共通語を話す度合は、

1. 正しい共通語
2. 共通語だが、どこことなく違う (えせ共通語)
3. 共通語がまざる (まざり)
4. 共通語を話さない (方言)
5. 共通語が通じない

の五つの段階で捕えた。そこで、各集団の共通語を話す度合 (主観的判定から見た) を次のように表わすことにした。これが「K-図表」である。

K-図表における 1+2 の値は共通語を話す度合を示す最も重要な数値と思われるので、ここでは特に「K-数値」として区別することにした。

K-図表における各数値の相互の関係については、「八丈島の言語調査」

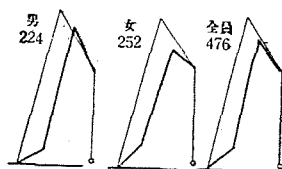


図 59

の 46 ペを見れば明らかであるが、ここに 1 例をあげて説明をくり返すことにする。図

59 における、女という集団には 252 人が属し、そのうち共通語を話す度合の段階 5 の者はひとりもない (0%)

のであるが、段階 4 の者は 11%, 3 の段階の者は 48%, 2 の段階および 1 の段階の者は合計して 41% であり、そのうち 1 の段階の者が 3% である。なお、3 の段階と 4 の段階とを加えると、60% である。

#### (1) 性

まず、性別に各集団の共通語を話す度合を比較すると、男女の差は著しくない。図 60 参照。

#### (2) 年齢

年齢別に各集団の共通語を話す度合を比較すると、15—19 歳、20—39 歳、

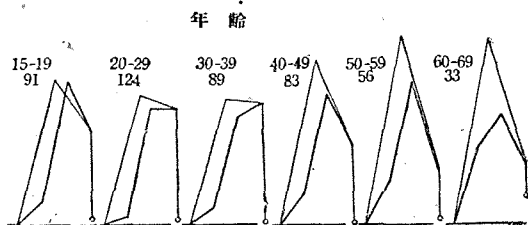


図 60

40 歳以上の三つの段階の区別がやや著しい。図 61 参照。

### (3) 学 歴

学歴別に見ると、学歴が高くなるにしたがって K-数値が大きくなる傾向を見ることができる。学歴なしと専門・大学卒業との差は著しい。新制高校卒業および在学、高小卒業の三つの集団の K-数値が互に近いのは注目される。ただし、K-図表を見ると、新制高校卒業の 1 の段階は他に比べて高くなっている。図 62、図 63 を参照。

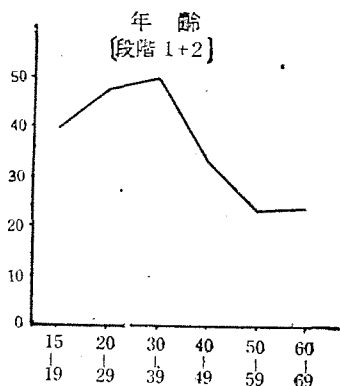


図 61

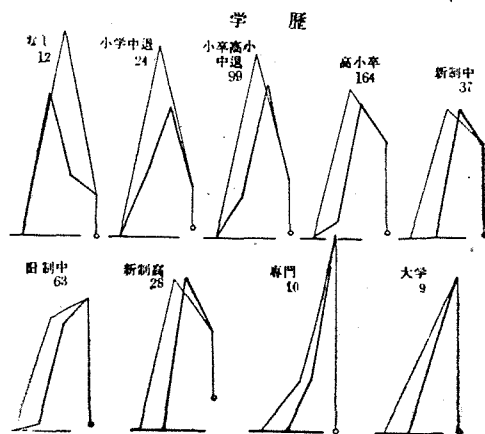


図 62

## (4) 職業

職業別に見ると、勤め人が最も高く、農業が最も低い。労務者B（工員など肉体労働者）と主婦とがK-数値について近いことは興味深い。図 64, 図 65 参照。

## (5) 階層

階層別に見ると、上、中、下の順に段階的な変化を見せている。図 66 参照。

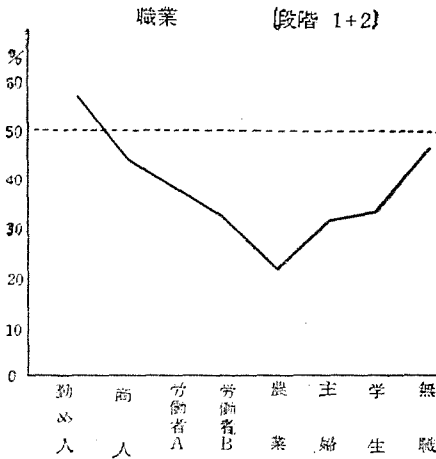


図 63

## 職業

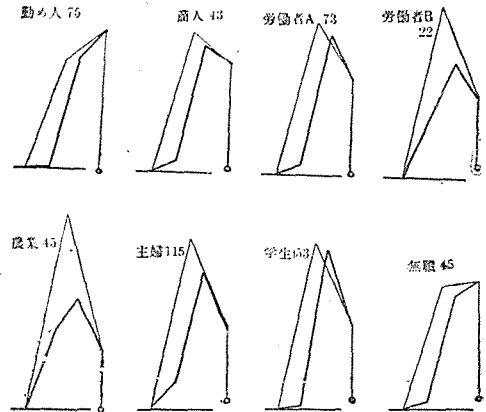


図 64

## (6) 現住所

現住所別(居住地域)に見ると、中心商業地域が最も高く周辺商業地域が最も低い。住宅地域と農業地域とがK-数値についても、図表についても似ていることが注目される。図 67 参照。

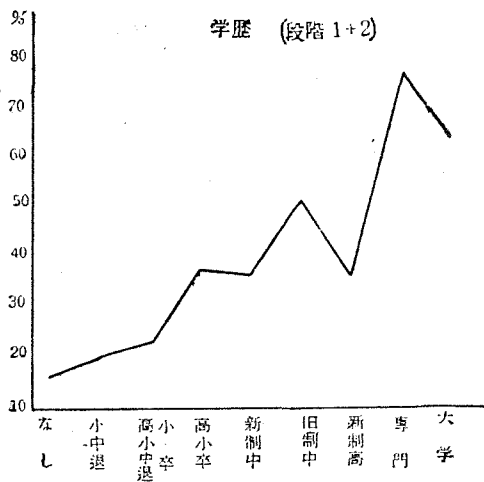


図 65

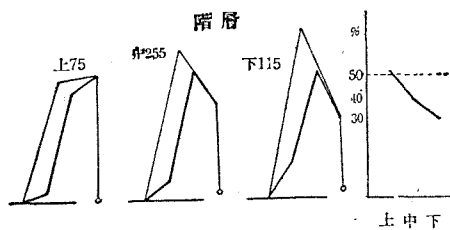


図 66

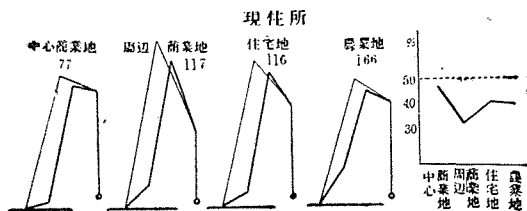


図 67

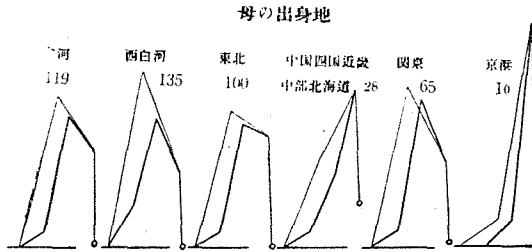


図 68

## (7) 父母の出身地

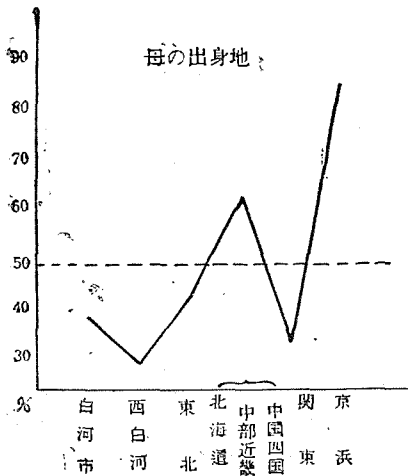


図 69

母の出身地、父の出身地別に見ると、両者はともに、西白河郡が最も低く、京浜地方が最も高い。出身地別の差の模様が父母互に似ている。ただし、西白河郡と京浜地方との差は父の出身地より母の出身地のほうがいっそう著しい。図 68-71 参照。

## (8) 生育地（言語形成期におけるおもな居住地）

言語形成期におけるおも

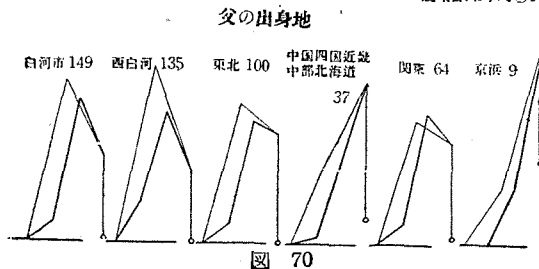


図 70

な居住地別に見ると、K-数値については西白河郡、白河市、それに東北地方、関東地方が同じ程度に低いことが注目される。しかし、段階4について見ると、西白河郡が著しく高く、白河市、東北地方がやや低い。母の出身地、父の出身地と模様がやや違う点に注意すべきである。図 72、図 73 を参照。

父の出身地。

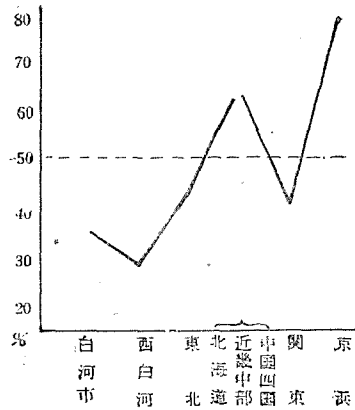


図 71

### (9) 行き来

行き来について見ると、0回、1回、2回以上の間に著しい差が現れている。図 74 を参照。

言語形成期におけるおらな居住地

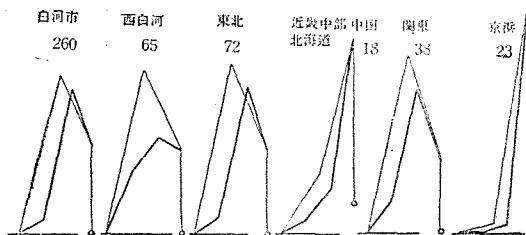


図 72

(10) 新聞, ラジオの  
利用度

新聞, ラジオの利用度について見ると, いずれも, 「読む」ないし「聞く」と「読まない」ないし「聞かない」との間には著しい差があり, 特に, 新聞のほうがラジオよりも大きい差を示している。図 75, 図 76 を参照。

言語形成期におけるおもな居住地

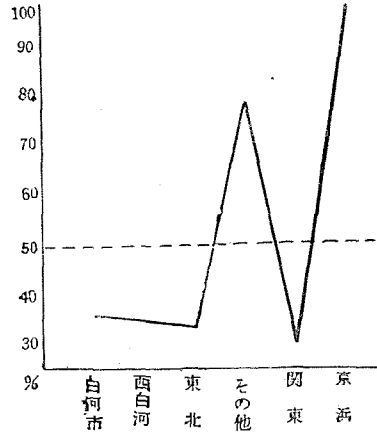


図 73

(11) 社会的態度

社会的態度についても, 満足と不満足との間にはかなりな差が現れている。図 77 を参照。

(12) 共通語意識

共通語意識のあるなしによる差は驚くべきほど大きく現れている。図 78 を参照。

行き来 (よそ行き) [1949年]

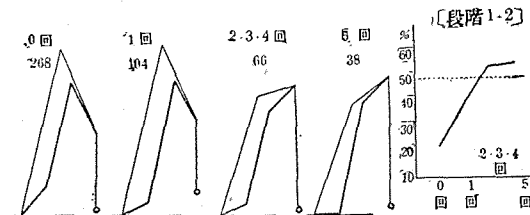


図 74



## 新聞の利用度

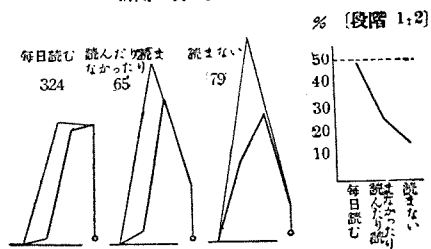


図 75

## ラジオの利用度

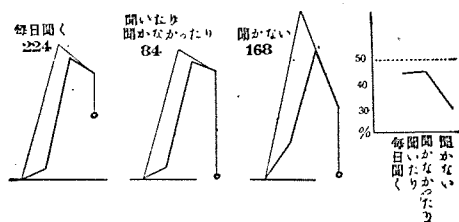


図 76

## 社会的態度

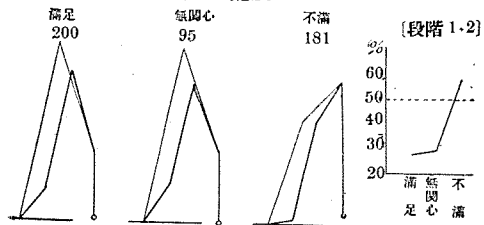


図 77

(13) 場面による共通語と方言との  
の使い分け

場面による共通語と方言との使い分け  
(点数) による差は、段階を四つに分けた  
ときに特に直線的に現れる。0・1点, 2・3  
点, 4点以上の3段階の差が目だつ。

図 78-81 参照。

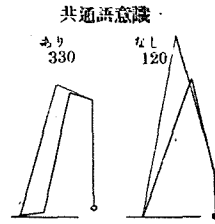


図 78

場面による共通語と方言との使い分け (点数別)

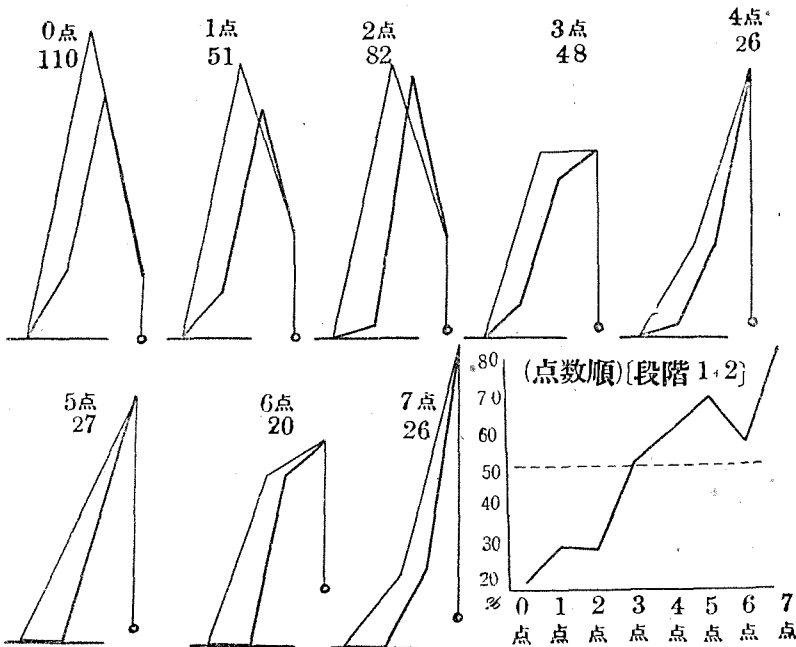


図 79

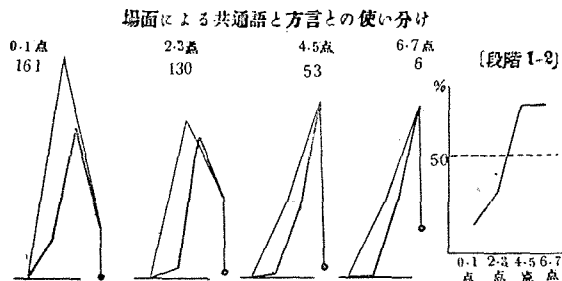


図 80

場面ごとに見ると、旅行者、役場と家庭との間に著しい差が認められる。旅行者と役場とが類似した模様を示しているのが注意される。また、店、仲間、在 がかなり類似している。近所における「標準語（よそ行きのことば）」が下へ下がってきているのはまずい。これは、近所という場面が被調査者によっていろいろに受け取られたためであろう。家庭では、三つの段階がはっきりした差を示している。

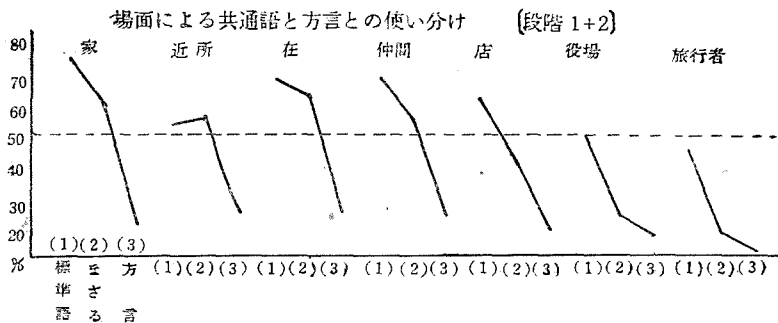


図 81

以上述べた要因別に広がり (range) を比較すると図 82 のようである。これによれば、

言語形成期におけるおもな居住地  
学 歴  
共通語と方言との使い分け

母の出身地

父の出身地

などが著しい要因として注目される。この結果は、音韻の点数、文法の点数による分析の結果と比較しても、だいたい一致すると言える。

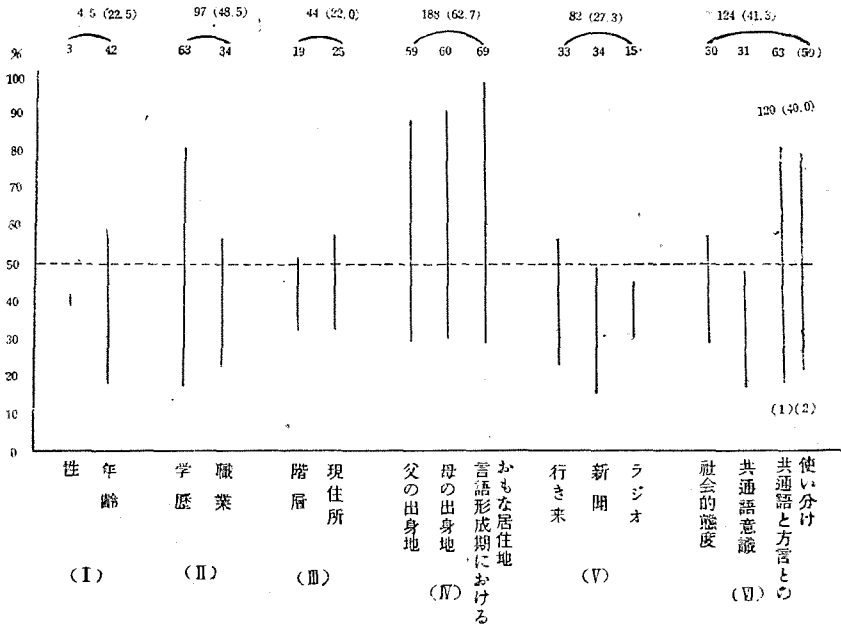


図 82

#### 4.5 共通語を話す度合を決定する要因としての言語能力

調査票で調べた、共通語を話す度合を決定する要因は、

- I 自然的要因
- II 経歴的要因
- III 社会的・地域的環境の要因
- IV 生育・居住環境の要因
- V コミュニケーション
- VI 社会的態度、共通語に対する態度・意識

であるが、このほかに、言語能力が共通語を話す度合を決定する一つの要

因とは考えられないであろうか。言語能力のすぐれた人は共通語を覚えることが達者ではないであろうかと考えられる。

言語能力を何によって表わすかという問題はむずかしいが、われわれとしては、

1. 新語（六三制，アルバイト，鉄のカーテン，コンクール）の理解度（知っているかどうか）
2. 聞き，書き，読むなどの能力（点数）

の二つの指標を考えた。

新語の理解度とはもとと共通語を話すようになる過程を明らかにするための項目であって，共通語を話す度合を決定する要因として設けた項目ではない。しかし，ここでは一応言語能力を表わすものとして，これと音韻の点数との相関関係を見ることとする。

この結果によれば，両者の関係は非常に密接とは言えないが，全然無関係とも言えないようである。

新語 \ 音韻	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
0点			1		1	3	10	2	5	5	9	6
1				2	4	1	2	6	3	8	12	9
2				1		1	1		2	2	6	8
3							2	1	4	1	6	6
4	1			1	1	1			3	1	2	12
計	1		1	4	6	6	15	9	17	17	35	41

新語 \ 音韻	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計
0点	9	7	1	3	2		3	1	2	2	72
1	7	13	10	8	3		2	3	2	4	99
2	6	10	12	9	5	1	5	4		3	76
3	3	12	9	6	4	8	6	6	8	9	91
4	12	12	12	12	10	8	19	10	7	14	138
計	37	54	44	38	24	17	35	24	19	32	476

相関係数 = 0.41

聞き，書き，読むなどの能力は，戸別調査のサンプル 500 人のうちからさらにランダムに抽出した 100 人について集合調査によって調べたもので

ある。実際に調査を受けた者は63人、そのうち集計に使うことのできた者は61人にすぎない。

いま、調査事項と調査票とを示せば次のようである。

次の事項について調査した。

1. 音声言語の聞き取り
2. 文字言語の読み取り、ローマ字の読み取りと書き取り
3. 漢字の書き取り
4. 電文の書き取り

使用した調査票は次のページ以下に示すとおりである。

#### 調査票の説明

①はローマ字の読み取り、②はローマ字の書き取り、③は電文の書き取りで、次の電文を読みあげ書き取らせた。「アスハジツクエキマデムカエヨユリコ」。  
④、⑤は漢字の書き取りで、これは1948年の「読み書き能力調査」の漢字の書き取りの問題と同じものを使った。⑥—⑩は文字言語の読み取りで、これは国立国語研究所第3研究室の「国語能力標準設定のためのテスト 第2回」から各学年の標準を代表する問題を選んだ。⑪—⑮は音声言語の聞き取りで、次のような問題文を学校の放送設備によって与えた。

⑪ 杉医学博士のカゼについてのお話をお伝えいたします。寒くなると、だれでも一度や二度はカゼをひきます。カゼはだれにでもよくわかってる最もありふれた病気です。しかし、さてカゼとは何か、ということを医者に聞いてみてもどうもよくわかりません。よく、やぶ医者のことを「カゼも直せない医者」と言いますが、ある大家の医者も「カゼは直せない」と告白しているほどです。それは、医学的にカゼはどわかりにくいものではなく、たいていはひとりで直ってしまうからです。それにまたカゼだけで死ぬ者はないので、解剖して調べることができないからでもあります。実際、カゼのことの書いてある医学書はきわめてまれであり、カゼの講義をする学校はほとんどないのです。カゼはけっきょく全身の病気なのです。そして、のどや気管のカタルは、感冒的疾患ではあっても、カゼの一部分の変化であり、一つの症状にすぎないのです。ですから、カゼをひいてのどがいたいからといって、薬をぬったり、また熱があるからといって、熱さましを飲んだりしてもたいしてききめはありません。もっぱら安静と保温によって、からだ全体の調子を回復させるはかないのです。つまり自然に直るのを助けるのであって、ある大家が「カゼは直せない」と言ったのはこの意味なのです。

⑮ 明年度の経済の方向について池田蔵相は次のように語りました。外電によると、ドッジ氏は為替レートの切下げにつき有力な意見を持って訪日すると伝え

①

NIPPON

カナで

ニ ツ ボ ン

HORI DENKI

カナで

SUZUKI KAZUKO

カナで

②

ニッポン

ローマ字で

NIPPON

フクシマ

ローマ字で

モトマチ

ローマ字で

③

○ 紙 信 額 報 電 ○

電報料金

郵便局	日 時 分	手 切 便 郵				郵便
郵便局	時 分					番号
郵便人 (住所) 氏名	姓	名	本	定	報	郵便 料金 支払 時間 分

郵便人  
の  
住所  
を  
明  
記  
し  
て  
送  
る  
に  
よ  
り  
送  
料  
を  
定  
め  
る  
こ  
と  
に  
よ  
る

④

- 7 ④ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
- 15 14 13 12 11 10 9 3
- あなたのためなら  
申すまいです。
- 私は、  
にいました。
- あつく、  
申しあげ  
ます。
- さつそく、  
をしま  
しょう。
- あすは、  
九時には  
じまる。
- あとのことは  
す
- のちほど  
しま  
す。
- みなさん  
です  
か。

⑤

- 23 22 21 20 19 18 17 16
- 君はあの一とどうい  
う  
があるか。
- それは法律で  
さ
- い。  
になって下さ  
い。
- お  
い致します。
- 休んだ  
を話しな  
さい。
- その本の  
をお教  
え下さい。
- 私には  
がありま  
す。
- ります。  
すると千円にな  
ります。
- 30 29 28 27 26 25 24
- はかる。  
できるだけの  
を
- しなさい。  
をお出  
す。
- ともかく  
を致し  
ます。
- 右のように  
致し  
ます。
- 一切の權利を  
し  
ます。
- と別に暮してい  
る。
- 役場へ  
を出す。
- かぜをひいて  
した。  
を



## ⑥

## もんだい 1

つぎの三つの文を、どのようにしなければなら、いみがよくわかるようになるか。上のかっこの中に、そのじゅんばんをかきなさい。

- ( ) あるきながら、よそのうちのとけいをのぞいたら、六時十分だった。
- ( ) 私はいそいでくつをはいた。
- ( ) かいしゃまでは二十分かかると思いながらうちを出た。

## もんだい 2

せかいで いちばん、りっぱな とけいの できる国は、どこでしょう。それは スイスです。この スイスで、ちかごろ、めざましうでどけいが つくりだされました。あさねほうして、いると、ふとんの中で、うでどけいになりだして、がっこうに おくれないように して、くれます。大ききも、ふつうの うでどけいと かわりません。ねじを 右に まわすと、とけいの ぜんまい、左に まわすと、ベルのぜんまいが まけるようになって いるそうです。

## しつもん

この ニュースは、つぎの どれに あたつて いるでしょう。あつて いる のに ○を つけなさい。

- 1 せかいで いちばん、りっぱな 国は スイスです。
- 2 スイスで こんど めざましうでどけいが つくりだされた。
- 3 めざましうでどけい が なりだして、がっこうに おくれない。
- 4 日本で めざましうでどけい が つくられた。

## ⑦

もんだい 3

児童福祉法は、一九四七年十二月十二日、法律第百六十四号によって公布されました。その目的は、児童がひとしくその生活を保障され、愛護されるところにあります。しかしその責任は国と地方公共団体が、児童の保護者とともに持つように規定されています。この規定を受ける児童は満十八才未満の者です。

しつもん

児童福祉法に対して、責任を持つのはだれとだれか。○をつけなさい。

- 1 児童  
2 児童の保護者  
3 国  
4 地方公共団体  
5 法律

(8)

もんだい 4

おしつまってまいりました。皆様さまおかわりもございましたか。

きょう銚子名産の「焼きはぜ」を少々お送りいたしました。御笑味くださいませ。召し上りかたは、一度湯煮をよくなさいますして、それから適宜に味をつけて召し上ってくださいませ。湯煮は長くなさればなるほど、骨までも召し上れるようになります。味は薄味の方がよろしいと思いますけれど、お口に召すようお願いいたします。

なお、この「焼きはぜ」はこのままで置きますれば長く持ちますから、湯煮をなすってくださいませ。

ではこれで失礼いたします。

皆さまよいお年をおとりなさいますようお願いいたします。

しつもん

右の文の（ ）の中に書きこむにはつぎのどれかよいか。○をつけなさい。

- 1 なるべく早く  
2 このままで  
3 召し上るだけ  
4 全部

(9)

## 10

もんだい 5

いつものように机に向かっていると、いつか十二時をうつ音がする。今夜もまず本を閉じ、それからあしたのつわり次第すぐに仕事にかかれるように、机の上を片づける。片づけるといっても大したことはない。原稿用紙と入用の書物とをひとまとめに重ねるばかりである。最後に火鉢の火の始末をする。はんねらのびんに鉄びんの湯をつぎその中へ火を一つずつ入れる

しつもん

このあとに次の四つの文が、続くのですがそれはどんな順序にしたらよいか。かつこの中に番号を書き入れなさい。

- ( ) 炭の鳴る音も盛んにする。水蒸気ももやもや立ちのぼる。
- ( ) 何か楽しい心もちがする。
- ( ) 火は見る見る黒くなる。
- ( ) 何かまたはかない心もちもする。

## 1

しつもん 1

この人は、カゼをひいた時にはどういう手当をするのがいちばんいいと云っていきますか。あつてゐるのに○をつけなさい。

- 1 のどへくすりをぬる。
- 2 からだをあたたくし、しずかにしている。
- 3 ねつさましをのむ。
- 4 げんきよくうんどうをする。

しつもん 2

ある大家のいしゃが「かぜは治せない」と云ったのはどういうわけですか。

- 1 カゼによくきく、ねつさましがないから。
- 2 日本の医学がとくに、おくらてゐるうえに、じぶんのうでが下手だから。
- 3 からだ全体の調子がよくならなければ、カゼは全快しないから。
- 4 カゼのために、おこる病気が、ひどいように多いから。

## しつもん 1

この はなしを したの は だれですか。

- |      |      |      |          |
|------|------|------|----------|
| 4    | 3    | 2    | 1        |
| 吉田首相 | 池田蔵相 | ドッジ氏 | マッカーサー元帥 |

## しつもん 2

この はなしは なんの はなしですか。

- ④
- |           |           |              |          |
|-----------|-----------|--------------|----------|
| 4         | 3         | 2            | 1        |
| 民自党と国会のこと | 煙草が安くなること | インフレと米の値段のこと | 為替と煙草のこと |

## しつもん 1

ふたりのひとは なにについて はなしを いますか。

- |      |       |    |      |
|------|-------|----|------|
| 4    | 3     | 2  | 1    |
| 国語問題 | 東京の仕事 | 大風 | 国語教育 |

## しつもん 2

ふたりのひとは どんな気持ちで はなしを していますか。

- ⑥
- |                |                  |                 |                  |
|----------------|------------------|-----------------|------------------|
| 4              | 3                | 2               | 1                |
| よろこんで おれいをしてる。 | かなしんで なくさめあっている。 | たのしんで ぎろんをしている。 | はらをたてて けんかをしている。 |

られているが、レート切下げは安定した日本経済をふたたび混乱に陥れるものであり、外電の伝えることが真実とすれば、日本政府としてはドッジ氏および総司令部に対してレート切下げを行わぬようあくまで懇請するつもりである。たばこの民営移管については臨時専売制度協議会として近く民営の試案を作るが、民自党の方針も決定しているし、民営移管は時の問題にすぎない。民営案が決定すれば至急閣議にはかることになる。池田蔵相はこのように語りました。

⑤ A やあ、しばらく。あいかわらず、いそがしがっているようだね。どうだい、すこしのんびりしたら。国語問題も、もう、とうげを越したなんて言っている連中もいるぜ。

B ごあいさつだね。あいかわらず。のんびりは大賛成だが、そうそうサキモノ買いみたいなことを言い出すなよ。国語問題は文化問題だからなあ。そう短兵急に、とうげの越せるはずはないさ。おのぼりさんのくせに、存外、せっかちなことを言う！

A アハハハ。いや、そう、ハリキランでくれよ。イナカ住いの習いで、小生自身は、そんなせっかち論に肩を持つ気になれないんだが、東京の住人に、国語問題についての世論の一端を紹介しとく必要を感じてるわけだ。……小生に言わせると、いったい東京でやり出す仕事、言い出す説は、どうもせっかちすぎていかん。新しいことを、次から次に言い出す、やり出す。まるで、さあっと風が吹き出すようなもんだ。盛んに木の葉や砂を吹き飛ばすが、すぐ吹き過ぎちまう。そして、それっきりだ。……どうもそんな気にさせられることが多いな。

B 国語改良なるものも、まさに、一陣の突風のごとし、というわけか。

A とにかく、台風一過というなりゆきにするのは願ひ下げだね。気長に、ジリジリというはらでやってくれるんだね。

いま、この調査によって得た各種の能力の点数と音韻の点数との相関関係を見ると、次のとおりである。数字は相関係数を示す。

聞き取り	0.46
読み取り	0.36
書き取り	0.50
ローマ字の読み書き	0.35
電報の書き取り	0.44
総点数	0.41

これによると、両者の関係はそれほど高いとは言えないようである。このような言語能力を、共通語を話す度合を決定する要因の重要なものとすることはむずかしいようである。

もっとも、問題そのものが妥当 (valid) かどうか、また、信頼の置けるものである (reliable) かどうかについて吟味していないし、集計に用いることのできたサンプル (61人) にやや片寄りがあると思われるので、この結果だけをもって、言語能力が共通語を話す度合に影響を与えないとは言えないであろう。書き取りとの相関係数がいちばん高いのもあるいは書き取りの問題そのものがいちばん妥当なためかもしれない。書き取りの問題は、先に述べたように昭和 23 年 (1948) の「読み書き能力調査」に用いられた漢字の書き取りの問題と同じものであって、この問題は、少なくとも妥当性 (validity) の吟味を経たものである。

## 聞き取り

$y$	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計
$x$																		
0	2				1	1					1		1					6
1				1	1	1												3
2						1												2
3					1				2	2	2	1	1		1			10
4			1			2		1				1		1	2		2	10
5		1				1	1	2	2	1		1		2	1	1	2	15
6								1	3	3	1		1	1	2	3		15
計	2	1	1	1	3	6	1	6	7	6	3	3	2	6	5	4	4	61

 $x$  聞き取りの点数

相関係数=0.46

 $y$  音韻の点数

## 漢字書き取り

$y$	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計
$x$																		
0-2	2			1	1	3					*** 1							8
3*-5											1***							1
6*-8																		0
9*-11					1		1	1	1				1	1				6
12-14				2				1										3
15-17					1		1		1			1						4
18-20							1		1	1			2				1	6
21-23			** 1				1	1	1						1	2		7
24-26					1				3					2	2		2	10
27-29		*						2	2	2		2	1	1	2	2	1	16
計	2	1	1	1	3	6	1	6	7	6	3	3	2	6	5	4	4	61

相関係数=0.50

$x$  漢字書き取りの点数

$y$  音韻の点数

\* 21歳まで栃木県, 30歳, 鉄道員, 高小卒

\*\* 生えぬき白河人, 19歳, 農業, 新制高卒

\*\*\* 20歳まで東京, 58歳, 旅館業, 高小卒

\*\*\* 生えぬき白河人, 15歳, 農業, 中学在

### ローマ字

$x \backslash y$	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計
0	2	1		1	3	6	1	4	4	4	3	1	1	2	1	1	2	37
1										1						1		2
2														1			1	2
3								1										1
4														1	1	1		3
5									1			1			1			4
6			1					1	2	1		1	1	1	2	1	1	12
計	2	1	1	1	3	6	1	6	7	6	3	3	2	6	5	4	4	61

$x$  ローマ字の点数

相関係数=0.35

$y$  音韻の点数

### 電報

$x \backslash y$	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計
0	2				1	1	1	1			1			1				8
1				1		2					1	1	1					6
2						2				2				1				6
3			1	1			1		1	1					1			6
4						2		1	4	2	1			1	1	1	1	14
5								4	2	1		2		3	3	3	3	21
計	2	1	1	1	3	6	1	6	7	6	3	3	2	6	5	4	4	61

$x$  電報の点数

相関係数=0.44

$y$  音韻の点数

## 読み取り

$y \backslash x$	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計
0	2			1	2	3				1	2	1						12
1					1		1		2					2	1		1	8
2						2			1	1			1	2		1	1	9
3		1						4	2	2			1	1	1		1	13
4			1			1		1		2	1	1			2	1	1	11
5								1	2			1		1	1	2		8
計	2	1	1	1	3	6	1	6	7	6	3	3	2	6	5	4	4	61

 $x$  読み取りの点数

相関係数=0.36

 $y$  音韻の点数

$y \backslash x$	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計
0	2				1	1												4
1-4				1		2				2								5
5-8																		0
9-12																		0
13-16													1					1
17-20					1			1		1				1				4
21-24				1	1				1			1						4
25-28					1				1					1				3
29-32							1	2		2				1			1	7
33-36									2	1	1				1		1	6
37-40			1			1		1		1				1	1	2	1	9
41-44		1						1										2
45-48								1	1			1	1	1	2		1	8
49-52									2	1		1		1	1	2		8
計	2	1	1	1	3	6	1	6	7	6	3	3	2	6	5	4	4	61

 $x$  総点数

相関係数=0.42

 $y$  音韻の点数

## 4.6 新語の理解度を決定する要因

音韻の点数と相関関係の高い新語の理解度を決定する要因を分析して、共通語を話す度合を決定する要因を見つけるための参考にしたい。

(1) 六三制, コンクール, アルバイト, 鉄のカーテン

六三制, コンクール, アルバイトおよび鉄のカーテンの四つの新語につ



いて、正しく理解している\*と認められた者の%を各要因別に求めて比較したのが図 83 である。

ここに取り上げた要因は、すべて著しい影響を与えているが、とりわけ、学歴、年齢および職業が目だつ。学歴なしと大学卒業とは、鉄のカーテンの理解度について 100% (100—0) の差がある。25—29歳と60—69歳とは、コンクリートの理解度について52.1% (91.5—39.4) の差がある。労務者B (工員など) と給料生活者とは、六三制について82.9% (92.0—9.1) の差がある。

## (2) カメラ、バッテリー、スタイル・ブック

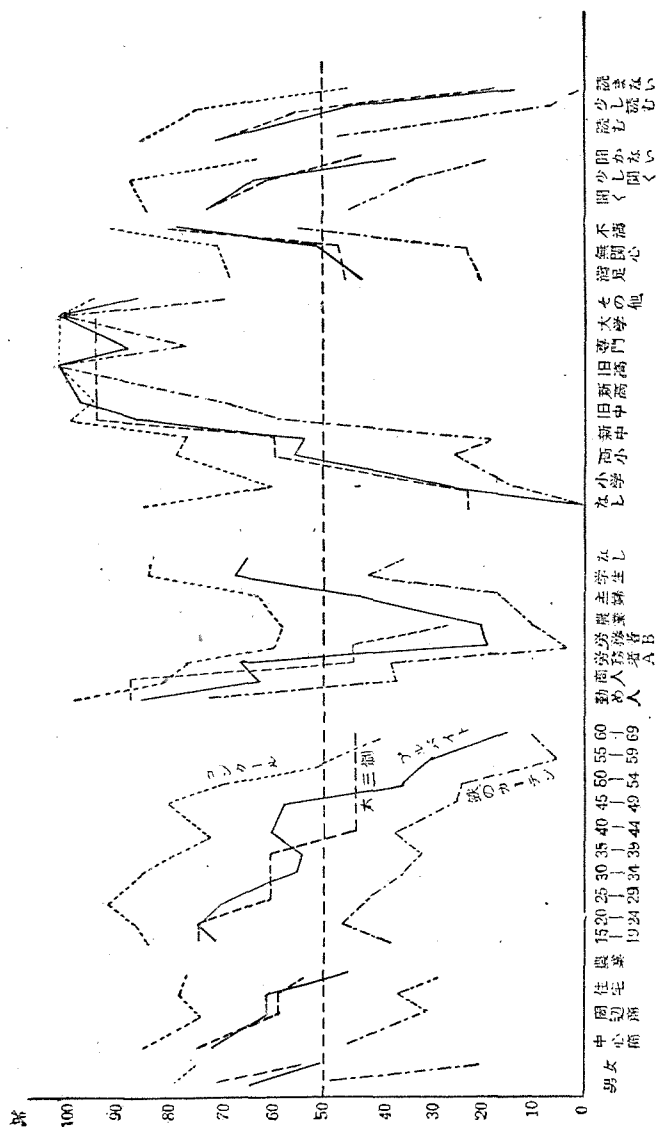
カメラ、バッテリー、スタイル・ブック (調査項目30—32) の三つの新語について、それぞれのものを描いた絵を示して「これは何ですか」という刺激を与え、それに対して何と反応するかを調べた。つまり、カメラについては、「カメラ」と反応するか、「写真機」と反応するか、それともそういうものを知らないか。同じように、「バッテリー」か「蓄電池」か、知らないか。また、スタイル・ブックか、洋裁の本か、知らないか。

いま、要因別に、カメラと反応した者の、知っている者 (カメラないし写真機と反応した者) にする割合と、知らない者の全員に対する割合とを示せば、図 84 のとおりである。バッテリー、スタイル・ブックについても、それぞれ図 84、図 85 に示した。

三つの語のいずれについても、どの要因もかなりの影響を与えているが、

---

\* このことについては、われわれはかなり甘く考えた。つまり、非常に正確に理解していなくても、だいたいの意味さえつかんでいれば、「正しく理解した」と認めた。例をあげると、「六三制」を「新しい学校のことでしょ?」と答えても正しいと認めた。「コンクリート」を「のど自慢」と答えても、理解していると考えた。「アルバイト」を「新聞を売ったりすることではないですか」のように答えた場合も正しいと認めた。「鉄のカーテン」を「共産党に関係あるんじゃないですか」と答えた場合は正答とした。答はきわめて多様であった。判断が調査員によっていくぶん動揺していることはやむをえない。



性 住 所 年 齢 職 業 学 歴 社会的 ラジト 新聞

特に、学歴、年齢が目だつ。カメラとスタイル・ブックとについては、学歴別の最高値と最低値との差は実に100%に達する。語について言えば、バッテリーは最高値が50%を越すことがない。カメラないし写真機を知らない者の最高値は35%以下である。スタイル・ブックないし洋裁の本を知らない者の最高値は100%に達するが、スタイル・ブックを知っている者の割合も比較的高い。以上によって、カメラはいろいろな集団にじゅうぶん普及しているが、バッテリーはまだそれほど普及していないことを知る。そして、スタイル・ブックもかなり普及しているが、まだじゅうぶん普及しているとは言えないことがわかる。つまり、スタイル・ブックは最近広まった語であることを思わせる。

なお、スタイル・ブックについては、男女の差がわずかであることが注意を引く。また、バッテリーの学歴なしが100%理解しているのは、サンプルがひとりしかないことによることを注意しておきたい。このサンプルは、土建の現場監督（親方）で、東京で育ったのち、北海道、カムチャツカ、東北地方を転転と歩き回っている。職業がらこの語を知っているものと予想される。

### (3) 新語の点数

今度は、カメラ、バッテリー、スタイル・ブックの三つの語について、カメラと反応した者に1点、そうでない者に0点；バッテリーと反応した者に1点、そうでない者に0点；……のように点数を与え、その総点数と要因との関係を調べることにする。

同時に、EDT、インフレ、PTAの三つの語について、それぞれ[-di:-] [i-], [-ti:-] と反応した者に1点、そうでない者に0点を与え、その総点数と要因との関係を調べることにする。

二つの新語群はそれぞれ語い、音韻に関する調査のために選ばれたもので、性質が違うので、二つを比較対照する必要がある。以後、前者を「カメラの類」、後者を「DDTの類」と呼ぶことにする。

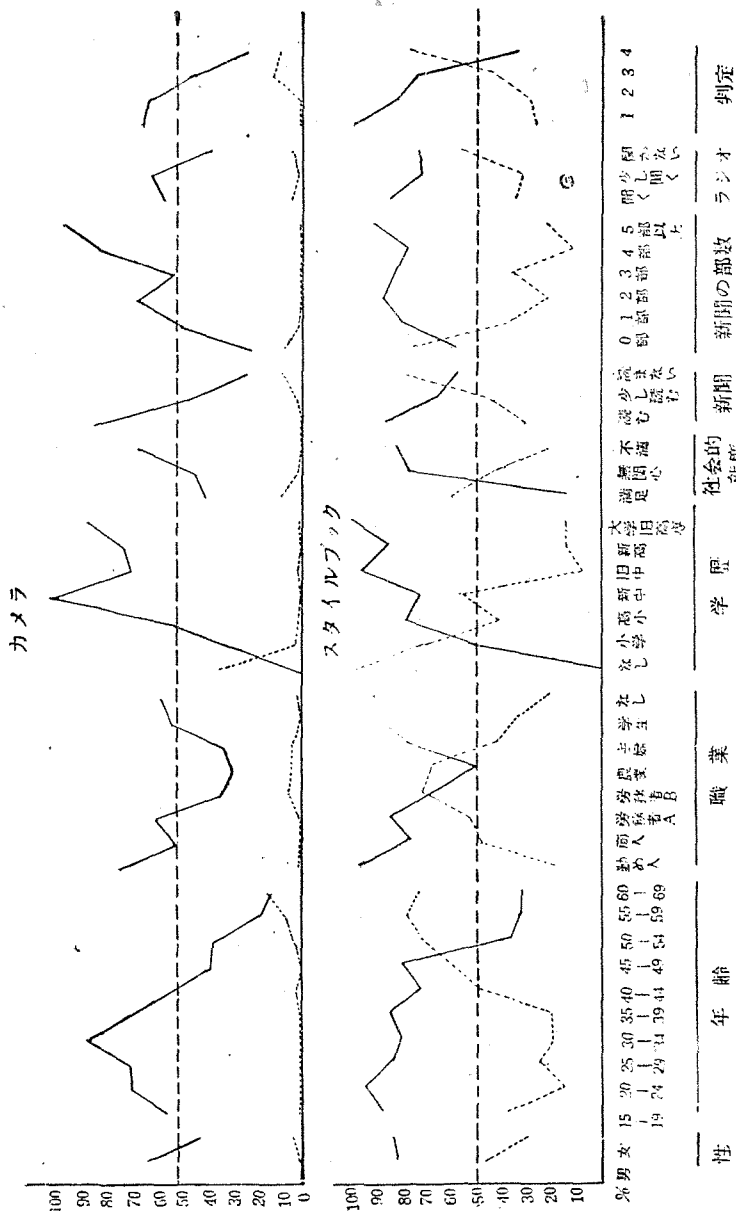
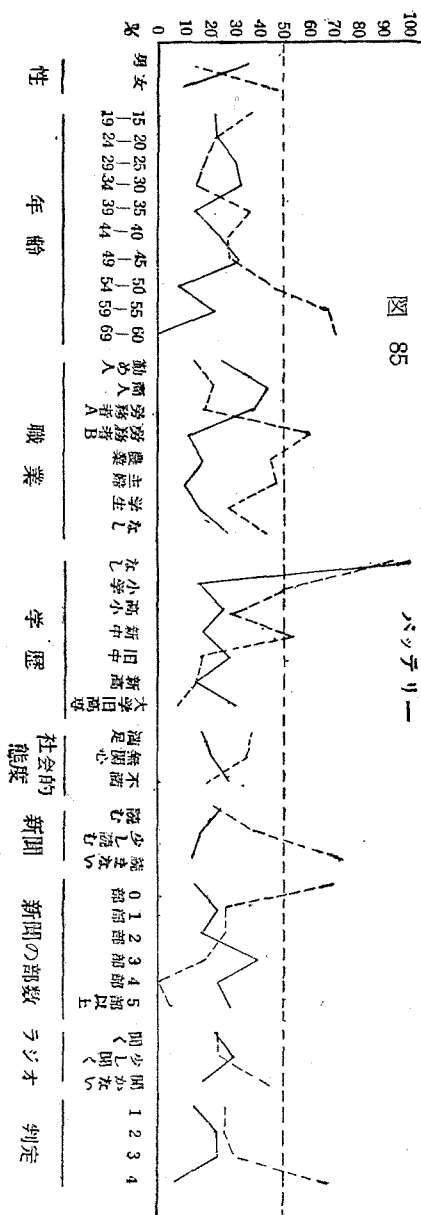


図 84

## (i) 性

まず、性別に見ると、カメラの類については男が高く、DDT の類については男女の間に有意な差が認められない。これはやや興味のある事実である。

図 85



カメラの類

性	点 数				計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
	0	1	2	3				
男	60	70	60	34	224	1.3	1.05	0.1
女	98	73	75	6	252	1.0	0.78	0.1
計	158	143	135	40	476			

DDT の類									
性	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
男		174	40	7	3	224	0.3	0.35	0.04
女		193	56	3		252	0.3	0.21	0.03
計		367	96	10	3	476			

## (ii) 年齢

カメラの類については年齢による差はきわめて著しい。DDT の類についても有意差の認められるところがあるが、その差はさほど著しくない。これをグラフに描くといっそうはっきり示される。なお、カメラの類とDDTの類とが年齢別に平行的に変化していることがわかる。図84, 85参照。

カメラの類									
年齢	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
0		66	22	2	1	91	0.3	0.33	0.1
1		45	19	2	1	67	0.4	0.39	0.1
2		39	13	4	1	57	0.4	0.49	0.1
3		39	6	1		46	0.2	0.19	0.1
4		36	7			43	0.2	0.14	0.1
5		35	9	1		45	0.2	0.23	0.1
6		31	7			38	0.2	0.15	0.1
7		24	5			29	0.2	0.14	0.1
8		24	3			27	0.1	0.10	0.1
9		28	5			33	0.2	0.13	0.1
計		367	96	10	3	476			

DDT の類									
年齢	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
0		23	29	34	5	91	1.2	0.79	0.1
1		8	18	33	8	67	1.6	0.71	0.1
2		9	17	21	10	57	1.6	0.91	0.1
3		6	15	18	7	46	1.6	0.81	0.1
4		17	13	10	3	43	1.0	0.91	0.1
5		13	19	10	3	45	1.1	0.77	0.1
6		16	13	6	3	38	0.9	0.88	0.2
7		16	12	1		29	0.5	0.32	0.1
8		22	3	1	1	27	0.3	0.51	0.1
9		28	4	1		33	0.2	0.21	0.1
計		158	143	135	40	476			

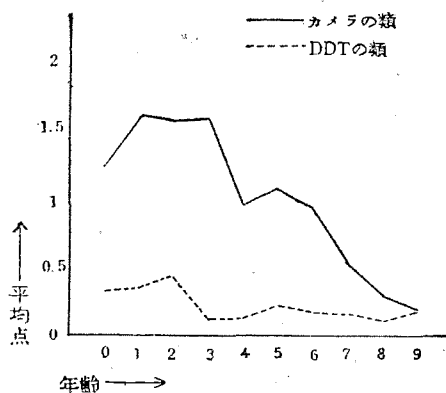


図 86

## (iii) 学歴

学歴別に見ると、カメラの類も DDT の類も、ともに著しい段階的な差を示しているが、特に、前者についてその差が著しい。これは当然考えられるところである。これは、カメラの類は知識を尋ねているのに対し DDT の類は発音を観察していることによるのであろう。

## カメラの類

学 歴	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
学 歴 な し	11	1				12	0.1	0.01	0.03
小学卒、高小退	63	20		13	2	98	0.5	0.64	0.1
小学卒、中学退	16	9				25	0.4	0.23	0.1
小学卒、中学退	45	53		50	16	164	1.2	0.92	0.1
小学卒、中学退	2	8		2		12	1.0	0.33	0.2
小学卒、中学退	3	15		30	10	58	1.8	0.60	0.1
小学卒、中学退		1		2	1	4	2.0	0.50	0.4
小学卒、中学退		3		3	2	8	1.9	0.61	0.3
小学卒、中学退		2		3	3	8	2.1	0.61	0.3
小学卒、中学退	1	12		8	3	24	1.5	0.58	0.2
小学卒、中学退	11	9		5		25	0.8	0.58	0.2
小学卒、中学退	6	9		17	3	35	1.5	0.76	0.2
小学卒、中学退				1		1	2.0		
小学卒、中学退				1		2	1.5	0.25	0.4
計		158	143	135	40	476			

## DDT の類

学 歴	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
学 歴	な し	11	1			12	0.1	0.08	0.1
小学卒	高 小	88	6	1		98	0.1	0.12	0.03
小学卒	学 小	21	4			25	0.2	0.13	0.1
高 小	卒	136	26	1	1	164	0.2	0.20	0.03
新 中	卒	8	4			12	0.3	0.22	0.1
旧 中	卒	31	24	3		58	0.5	0.35	0.1
専 門	卒	2	2			4	0.5	0.25	0.3
大 学	卒	3	4	1		8	0.8	0.44	0.2
その 他	卒	3	3	1	1	8	1.0	1.00	0.4
高 小	在 学	16	6	2		24	0.4	0.41	0.1
旧 中	在 学	21	4			25	0.2	0.13	0.1
その 他	在 学	24	9	1	1	35	0.4	0.47	0.1
大 学	在 学	1				1			
不 明		2				2			
計		367	96	10	3	476			

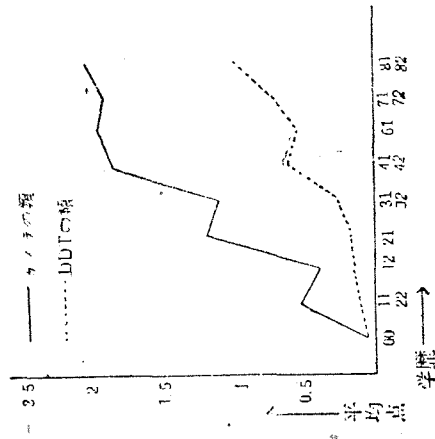


図 87



カメラの類について、学歴をまとめたものについてその分布を見ると、段階的な差はいっそう明らかになる。

学 歴 点 数	学歴なし 小 学 退	小学卒 高小退	高小卒 新中卒 高卒退	旧中卒 旧中退	旧高校 専門校 大 学
0	27	63	47	3	
1	10	20	61	15	6
2		13	52	30	8
3		2	16	10	6
サンプル数	37	98	176	58	20
平 均 点	0.27	0.53	1.21	1.81	2.00

カメラの類について、新制中学在学生の低い (0.76) ことはともかく、新制高校在学生の低い (1.49) ことは注目に価する。この点数 (1.49) は、旧制中学卒業・退学の1.81よりも低く、高等小学卒業の1.23よりわずかに高い程度である。

#### (iv) 職業

職業別に見ると、カメラの類については著しい差が見られ、特に、農業、日雇いはなはだしく低く、給料生活者が高い。DDT の類についても、同じ傾向が見受けられる。

カメラの類								
点 数 職 業	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
1	11	21	30	14	76	1.6	0.90	0.1
2	11	16	9	6	42	1.2	0.99	0.2
3	16	26	24	7	73	1.3	0.84	0.1
4	11	10	1		22	0.6	0.34	0.1
5	30	10	3	2	45	0.5	0.65	0.1
6	56	27	29	3	115	0.8	0.81	0.1
7	14	16	20	3	53	1.2	0.82	0.1
8	9	15	17	4	45	1.4	0.81	0.1
不 明		2	2	1	5	1.8	0.56	0.3
計	158	143	135	40	476			

## DDT の類

職業 \ 点数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
1	43	24	7	2	76	0.6	0.59	0.1
2	30	11	1		42	0.3	0.26	0.1
3	59	14			73	0.2	0.16	0.1
4	17	5			22	0.2	0.18	0.1
5	43	2			45	0.04	0.04	0.03
6	100	15			115	0.1	0.11	0.03
7	40	11	1	1	53	0.3	0.36	0.1
8	33	11	1		45	0.3	0.25	0.1
不 明	2	3			5	0.6	0.24	0.2
計	367	96	10	3	476			

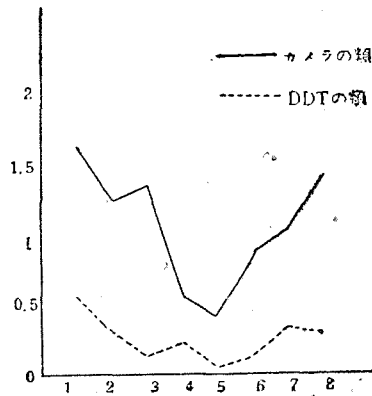


図 88

家の職業についても同様なことが言える。

## カメラの類

家の職業 \ 点数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
1	26	32	32	12	102	1.3	0.95	0.1
2	29	41	35	11	116	1.2	0.87	0.1
3	31	23	33	7	94	1.2	0.95	0.1
4	24	12	4	1	41	0.6	0.59	0.1
5	34	16	14	3	67	0.8	0.85	0.1
6	2	4	2		8	1.0	0.50	0.3
8	11	12	9	5	37	1.2	1.04	0.2
不 明	1	3	6	1	11	1.6	0.60	0.2
計	158	143	135	40	476			

## DDT の類

点 数 家の職業	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
1	70	29	3		102	0.3	0.28	0.1
2	85	27	4		116	0.3	0.28	0.1
3	76	17	1		94	0.2	0.18	0.04
4	34	7			41	0.2	1.14	0.1
5	61	4	2		67	0.1	0.17	0.1
6	6	2			8	0.3	0.19	0.2
8	30	7			37	0.2	0.15	0.1
不 明	5	3		3	11	1.1	1.54	0.4
計	367	96	10	3	476			

## (v) 現住所

現住所について見ると、カメラの類は中心商業地域が高く、周辺商業地域および農業地域が低く、両者の間に有意な差が認められる。

DDT の類は、中心商業地域と農業地域との間にだけ有意な差が認められる。

## カメラの類

点 数 現 住 所	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
中心商業地域	20	22	29	7	78	1.3	0.90	0.1
周辺商業地域	35	40	33	9	117	1.1	0.87	0.1
住宅地域	37	33	37	9	116	1.2	0.93	0.1
農業地域	66	48	36	15	165	1.0	0.98	0.1
計	158	143	135	40	476			

## DDT の類

点 数 現 住 所	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
中心商業地域	50	21	6	1	78	0.5	0.48	0.1
周辺商業地域	96	20	1		117	0.2	0.17	0.04
住宅地域	84	30		2	116	0.3	0.32	0.1
農業地域	137	25	3		165	0.2	0.19	0.03
計	367	96	10	3	476			

## (vi) 階層

階層別に見ると、カメラの類は、上・中と下との間に、DDT の類は上

と下との間に有意な差が認められる。

### カメラの類

階層 \ 点数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
上	20	23	26	6	75	1.2	0.88	0.03
中	76	74	81	24	225	1.2	0.95	0.1
下	54	34	20	6	114	0.8	0.82	0.1
不明	8	12	8	4	32	1.3	0.94	0.2
計	159	143	135	40	476			

### DDTの類

階層 \ 点数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
上	55	15	3	2	75	0.4	0.47	0.8
中	194	53	7	1	255	0.3	0.28	0.04
下	92	22			114	0.2	0.16	0.04
不明	26	6			32	0.2	0.15	0.1
計	369	90	10	3	476			

### (vii) 新聞、ラジオの利用度

新聞の利用度、ラジオの利用度について、カメラの類は、両者とも、読むと読まないとの間、聞くと聞かないとの間に著しい差が見られる。DDTの類についても同様である。カメラの類、DDTの類について、読む集団と聞く集団との間には著しい差は見られない。次の表および図89を参照。

### カメラの類

新聞の利用度 \ 点数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
読んだ	68	103	109	37	322	1.0	0.88	0.1
読んだり、読まなかったり	26	19	18	2	65	0.9	0.80	0.1
読まない	59	13	6	1	79	0.4	0.46	0.1
不明	5	3	2		10	0.7	0.61	0.3
計	158	143	135	40	476			

## DDTの類

新聞の 利用度	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
読んだら、読まな	む	227	82	10	3	322	0.4	0.34	0.03
かったり		56	9			65	0.1	0.12	0.04
読まな	い	74	5			79	0.1	0.03	0.03
不	明	10				10			
計		367	96	10	3	476			

## カメラの類

ラジオ の利用度	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
聞いた、聞か	く	57	66	77	24	224	1.3	0.93	0.1
かったり		21	26	26	11	84	1.3	0.98	0.1
聞か	ない	80	51	32	5	168	0.8	0.73	0.1
計		158	143	135	40	476			

## DDTの類

ラジオ の利用度	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
聞いた、聞か	く	159	55	7	3	224	0.4	0.37	0.04
かったり		63	19	2		89	0.3	0.24	0.1
聞か	ない	145	22	1		168	0.1	0.14	0.03
計		367	96	10	3	476			

## (viii) 行き来

行き来について、カメラの類を見ると、次の表が示すように、一応の差を認めることができる。

行き来 数値	今年にな ってよそ へ行った ことがな い	京浜地方 へ行かな い	京浜地方 へ1回行 った	京浜地方 へ1回~2 回行った	京浜地方 へ1回、 関東地方 へ行った	京浜地方 へ4~5回 行った
m	0.9	1.3	1.3	1.6	2.2	1.8
$\sigma^2$	0.86	0.85	0.80	0.61	0.33	1.33
n	268	96	64	16	11	21

DDT の類については著しい差は見られなかった。

行き来 数値	今年にな ってよそ へ行った ことがな い	京浜地方 へ行かな い	京浜地方 へ1回行 った	京浜地方 へ1回～2 回行った	京浜地方 へ1回、 関東地方 へ行った	京浜地方 へ4～5回 行った
m	0.2	0.3	0.5	0.4	0.6	0.4
$\sigma^2$	0.17	0.19	0.66	0.36	0.43	0.33
n	268	96	64	16	11	21

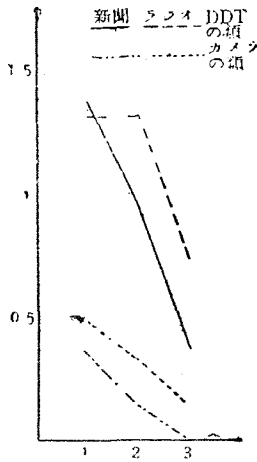


図 89

### (ix) 社会的態度

社会的態度について見ると、不満と満足との間に著しい差が認められる。

#### カメラの類

社会的態度	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
満足、現状のまま	99	49	44	8	200	0.8	0.84	0.1
無関心	35	34	22	4	95	1.0	0.77	0.1
不満、前進的	24	60	69	28	181	1.6	0.82	0.1
計	158	143	135	40	476			

## DDTの類

社会的態度	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
満足、現状のまま		172	26	2		200	0.2	0.15	0.03
無関心		81	13	1		95	0.2	0.15	0.04
不満、前進的		114	57	7	3	181	0.4	0.42	0.1
計		367	96	10	3	476			

## (x) 共通語と方言との使い分け

共通語と方言との使い分けの段階に応じてそれぞれ差のあることが見られる。

## カメラの類

使い分け	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
0		80	31	32	6	140	0.7	0.80	0.1
1		21	20	14	6	61	1.1	0.96	0.1
2		27	46	27	6	106	1.1	0.72	0.1
3		15	16	23	7	61	1.4	0.95	0.1
4		3	12	12	2	29	1.5	0.59	0.1
5		3	5	14	8	30	1.9	0.82	0.2
6		4	5	12	1	22	1.5	0.70	0.2
7		5	8	10	4	27	1.5	0.92	0.2
計		158	143	135	40	476			

## DDTの類

使い分け	点 数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
0		124	16			140	0.1	0.10	0.03
1		52	8	1		61	0.2	0.17	0.1
2		85	19	1	1	106	0.2	0.25	0.1
3		44	15	2		61	0.3	0.28	0.1
4		19	8	2		29	0.4	0.38	0.1
5		14	12	3	1	30	0.7	0.61	0.1
6		13	9			22	0.4	0.24	0.1
7		16	9	1	1	27	0.5	0.55	0.1
計		367	96	10	3	476			

## (xi) 共通語に対する意識

白河のことばに対する自覚と価値づけ（調査項目47、48）については、

著しい差は見られない。

項目47 (白河のことばに関する自覚)

自覚 数値	無 関 心	違 う	わからない	違 わない
m	0.5(0.5)	1.1(0.3)	1.7(0.6)	0.8(0.1)
$\sigma^2$	0.25(0.25)	0.95(0.25)	0.78(0.69)	0.70(0.29)
n	2	420	18	36

項目48 (白河のことばに対する価値づけ)

価値づけ 数値	無 関 心	白河のほう が 良 い	わからない	白河のほう が 悪 い
m	0.8(0.1)	1.1(0.3)	1.0(0.1)	1.4(0.1)
$\sigma^2$	0.85(0.07)	0.95(0.26)	0.82(0.11)	0.82(0.12)
n	25	394	22	7

( ) の外はカメラの類

( ) の中は DDT の類

(xii) 白河市のことばと共通語との比較, 共通語の使用と共通語意識

共通語と白河市のことばとの比較(調査項目49)については, カメラの類は「感じる」と「わからない」と「感じない」の三つの間に有意な差を見せるが, DDT の類は著しい差を見せない。

項目49

	感 じ る	わからない	感 じ ない
m	1.2(0.3)	0.3(0.1)	0.9(0.2)
$\sigma^2$	0.93(0.31)	0.20(0.12)	0.72(0.17)
n	363	14	92

共通語の使用(調査項目 50a)については, カメラの類も DDT の類もともに著しい差を見せている。特に, DDT の類について差の著しいのは興味深い。

項目50a

	使 う こ と が あ る	わからない	使いたいが 使えない	な い
m	1.4(0.4)	0.5(0.0)	0.9(0.1)	0.4(0.1)
$\sigma^2$	0.84(0.34)	0.46(—)	0.41(0.12)	0.83(0.06)
n	285	19	7	88



共通語意識（調査項目50b）については、意識のある者とない者との間に著しい差が見られる。

項目50b

	意識あり	なし
m	1.3(0.3)	0.6(0.1)
$\sigma^2$	0.89(0.33)	0.69(0.10)
n	329	121

## (xiii) 共通語に対する態度

共通語に対する態度（調査項目59）については、カメラの類は「無関心」とその他との間に有意な差を見せるが、DDTの類は著しい差を見せない。

カメラの類

共通語 に対する態度		点	数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$	
無 必 わ 不 不	関 心 な い 要 明	か ら 必 要	6	3	2			11	0.6	0.60	0.2	
			120	130	128	38		416	1.2	0.92	0.1	
			11	4				15	0.3	0.20	0.1	
			15	4	5	2		26	0.8	1.02	0.2	
			6	2				8	0.3	0.19	0.2	
計												
					158	143	135	40	476			

DDTの類

共通語に対する態度			点	数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
無 必 わ 不 不	関 心 な い 要 明	か ら 必 要	10	1					11	0.1	0.03	0.1
			313	90	10	3		416	0.3	0.30	0.03	
			15					15	0.0	0	0	
			22	4				26	0.2	0.13	0.1	
			7	1				8	0.1	0.11	0.1	
計					367	96	10	3	476			

## (xiv) 判定

最後に、主観的判定との関係を見ると、カメラの類は、正しい共通語およびせ共通語とその他との間に有意な差が見られ、特に、方言（共通語を

話さない)の段階との間の差が著しい。DDTの類は、正しい共通語とその他との間の差が著しい。これは当然考えられるところである。

カメラの類

判定	点数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
正しい共通語 せ共通 え共通 ま共通 方共通		2	3	5	1	11	1.5	0.79	0.3
		28	59	69	20	176	1.5	0.79	0.1
		95	75	58	19	247	1.0	0.93	0.1
		33	6	3		42	0.3	0.35	0.1
計		158	143	135	40	476			

DDTの類

判定	点数	0	1	2	3	計	m	$\sigma^2$	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$
正しい共通語 せ共通 え共通 ま共通 方共通		2	9			11	0.8	0.15	0.1
		107	57	9	3	176	0.5	0.45	0.1
		218	28	1		247	0.1	0.12	0.2
		40	2			42	0.1	0.05	0.3
計		369	96	10	3	476			

以上、「新語の点数」によって要因の強さをながめると、カメラの類は各要因で相当の段階的の差がつくが、DDTの類はそれほどではなく、カメラの類と同様な傾向を示す。これは(iii)で述べたように、カメラの類は知識を尋ねているのに対し、DDTの類は発音を観察しているためと考えられる。

次に、要因別に最高値と最低値との広がり (range) を比べると図90のようになる。これによると、カメラの類では、学歴、年齢、ついで、職業、新聞の利用度、共通語と方言との使い分け、判定などが目立ち、DDTの類でも学歴、ついで、判定、共通語と方言との使い分け、職業などが目だっている。

#### 4.7 共通語を話す度合と一日の言語生活における実際の 共通語行動

われわれは、初対面の共通語を話す人(調査員)との会話における被調

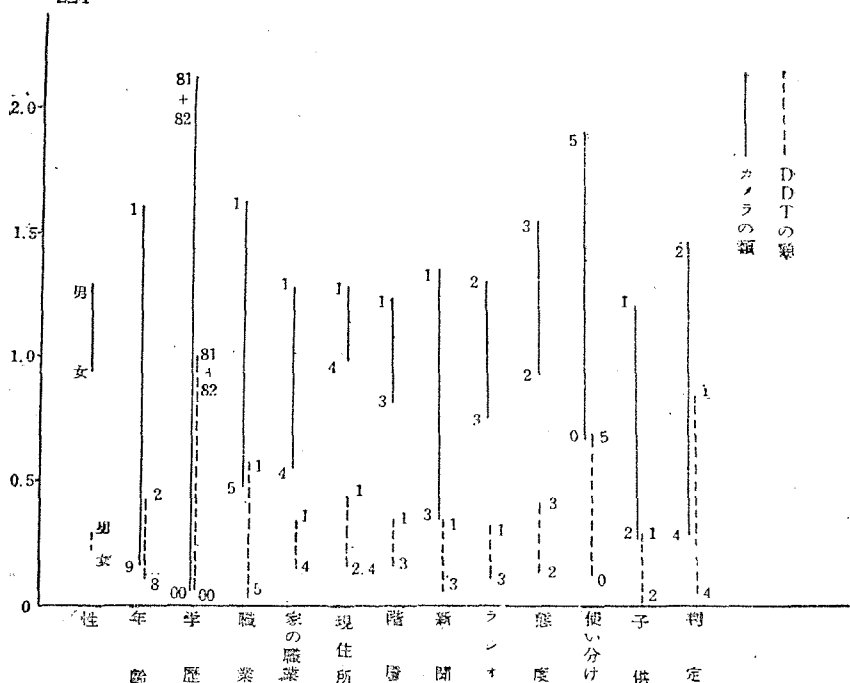


図 90

査者の言語行動を、あるいは主観的に判定し、あるいは客観的に観察することによって共通語を話す度合を測定しようとした。しかし、同じ被調査者が上のような場面以外の場面でどのような言語を使っているか、つまり、どの程度の共通語を使っているかは、戸別調査だけではわからない。

そこで、われわれは白河市民の4人について、ある一日（うち3人は昭和24年11月8日、うち1人は昭和24年12月7日）の言語行動をすべて記録し、この一日の、すなわち「24時間」の言語生活における共通語を話す度合と戸別調査におけるそれ（音韻の点数）とを比較してみることにした。これによって、音韻の点数の差が実際の言語生活における共通語を話す度合のどのような差を表わしているかが明らかになるであろう。

さて、一日の言語生活における共通語を話す度合は次のようにして表わされた。まず、言語行動の連続を話題ごとに区切り、それぞれの話題のた

めに用いられる言語が、

1. 共通語
2. まじり
3. 方言

のいずれであるかを、分析者が主観的に判定した。判定のしかたは調査票の項目61における主観的判定のそれとまったく同じである。上の(1) 共通語は項目61の1, 2にあたり、(2) まじり は項目61の3, (3) 方言は項目61の4にあたる。なお、判定は、ひとりの被調査者についてひとりの分析者が一貫してするように努めた。

このようにして得た結果は次のとおりである。

被調査者	判定の段階	(1) 共通語で話された話題の数	(2,3) 共通語で話されない話題の数	共通語を話す割合	戸別調査における音韻の点数
A		142	562	20.1%	16点
B		510	151	77.2%	24点
C		656	75	89.7%	21点

$$\text{一日の共通語を話す割合} = \frac{(1)}{(1) + (2,3)} \times 100$$

この表によると、音韻の点数のこのあたりの8点ないし5点の差(24-16=8, 21-16=5)は、一日の言語生活における共通語を話す割合、すなわち、話題ごとの判定の比率について、57% ないし 70% (77.2-20.1=57.1, 89.7-20.1=69.6) の差となって現れている。考えてみるのに、このあたりの8点ないし5点の差はきわめて深刻であるということが出来る。これは「イとエとの混同」をする者としらない者との差を表わしていると認められる。

さて、A, BおよびCが実際にどのように共通語と方言とを使っているかの状況の一部を具体的に示すこととする。なお、それをどのように分析したかを示すために、同じ場面について分析した場面分析表を参考までにかかげる。

A: 51歳, 男, 農業, 高等小学卒業, 1-51歳 飯沢(白河市)に居住, 父の出身地 飯沢町, 母の出身地 飯沢町, 妻の出身地 西白河郡五箇村田島字人方

## 記 録

時刻	場所	相手	話 題
11—30	畑	長女	<p>ことしこれ、親いけねほうが いいかしんね。こんなものい けたってしょーあんめ。 親はだめなんだ。 いいや、こ(子)ーばっかりま けばいい。 みっちらかこつとくとこはい いけん、だめだ。</p> <p>あんちゃん、みんなしょっち うのか、あれ。</p> <p>とても取れねもの、きれーに。 あわ食ってさわぐはあんめー</p> <p>きょうはきくおんつら、な んだ。</p> <p>はがしたっていい、かまわね。 とても土取れねもの。離さなけ りゃ。</p> <p>こーだ(こんな)もの出したっ てしょーあんめ。</p> <p>そんな粟<sup>あわ</sup>作ってあわねわ。 えっぼん(1本)ばかしの粟。 あわ食って騒ぐはあっか、あ わ食って騒ぐはあっか、えっぼ んばかり。</p>
		妻	<p>親いも(さと いも)のこと</p> <p>長男のこと</p> <p>さといもの土 のこと</p> <p>近所の人のこ と</p> <p>さといもの離 し方</p> <p>品評会のこと</p> <p>粟のこと</p>

## 分 析 表

時刻	場所	相手	性 年齢 職業など	話 題	共通 方 言	上,中,下 備 考
11—30	畑	長女(18歳)		親いもはいけないほうがいい	3	
				長男 <sup>ない</sup> の堆肥運びについて	1	
				さといもの土が落ちないこと	2	
				きくおんつ <sup>か</sup> ら、何しているの	2	
				さといも(根)の離し方	2	
				品評会に出してもしょうがない	3	
		妻(48歳)		畑の中に一本だけ生えていた 粟について	3	

## 記 録

12—30	庭	客(岩淵)	<p>ああそうですか。 いーえ、何もできねけつと、 いーい。 よくわかったこと。</p>	あいさつ
-------	---	-------	--	------

土間	妻	あの南町でこね？ いや。	} 知人のこと
	長男	芳松、これ国語研究所の部長 さんだつて。	
	客	いーい、なんの。 何も仕事に別段あれしねから はあ。 いやいやわしら。何も遠慮会 釈なしにあれですから。	} 調査のこと
土間	長女	久子、あれ、お茶入れてくん ねか、あれ、て(手)ーよく洗わ ねから。 はいってる。	
	客	は、は、は(笑声)、これ、あ の妹でね、あの道場町にいろん です。 きのーたくさんもらって。	} 紹介
	妹(客)	おはつ来た、よくわかったな。 九州行つたつて。どうした。	
	客	きのーたくさんもらって、ど うも、あれですから。	} お礼
土間	客	そうです。それで仕事は1週 間進れやした。ゆうべもお話し したけども、20何年、そう30 年か30何年かずっとつけた日記 広げてみるつうと、11月10日 までにはあれです。 春まき終えたんですが。はあ。 もっとも今から5、6年前には 12月4日までかかったこともあ りやした。 こんで何です、適期は、春まき 土用が10月1日から20日ごろ、こ れが一ばんの適期ですけつと、 まだ大したことはないんです。	
炬燵	客	岩淵、はあ、白河町のどちら さんで？ 本町、はあ、岩淵たけちゃん の何かになってんですか。 はあ、わたしとけちゃんと学校 いっしょで。 いまたけちゃんめーねようで すが。 わしら51になって同級会やっ たんです。47人ばかり集まった んですけつと、柳屋の〇〇〇〇 さん、満州へ行って大した役を やったつてうことは聞いてやし たがね。同級会にはむすこさん が来たんです。 はあ、いまお聞きしかとも って。 ああそうですか。 ええ、役場へ出てったんです。	} 友だちのうわ さ

12—30 炬ばた 客

そうでしょうね。横町の、は  
あ。  
役場でわしらもよくいっしょ  
にやったけど。  
そうです、もっとも最近です。

## 分 析 表

時刻	場所	相手	話 題	共、方	上、中、下 備 考
12—30	庭	客(岩淵)	あいさつ	2	
	土間	妻(48歳)	南町の人が来ないか	2	
		長男(21歳)	客を紹介する	1	
		客(岩淵)	調査が仕事に影響しないこ と	2	
		長女(18歳)	お茶を入れることを言いつ ける	2	
		客(岩淵)	妹を紹介する	1	
		客(妹)	あいさつ	1	
		客(岩淵)	きのうもらったお菓子のお 礼	1	
			麦まきについて	2	
	炬ばた		学校時代の友だちのうわさ	2	

B: 45歳, 男, 美容師, 高等小学校卒業, 1—45歳白河市に居住, 18歳の時,  
講習に出席のため, 6か月間東京に下宿した。父の出身地 白河市中町, 母  
の出身地 白河市金谷町, 妻の出身地 須賀川町。

## 記 録

時刻	場所	相手	話 題
17.00	店内	妻	あいさつ
			ア— アリガト—。
			オジイチャンナンダ。
			ウン, ウン。
			ツキソイナケレバトモイカン ニャエ—。
			ナンダタイシタモノブラサゲタ ネ—。
			レンタンドコカラ?
			カクナガ。
			コレイツモノオーキサノデスカ。
			コンドイイヨ。
			ネガイイヨ。
			ソコニフタツアッタネ。
			はけ(ひげブラシ)
			はけ

- 17.00 店内 妻 ソレオケビン〔毛を入れるビン〕  
ノナカニトットイテ。  
ウン。  
ソレアシタカラツカッテミルン  
ダ、キョーモッテキタノネ。  
ウン、ナガイ、ソコニハインネ  
ーネ。  
カエスコトニシテキタノ。  
使用人 ヨシコ、ソコカラ鉛筆、ソコニ鉛筆  
アル。  
調査員 アー ヨーガス。  
使用人 オカリシタ。  
チイサイカミ1枚クンニャー 紙カ  
イ。  
調査員 イヤ ケッコーデス、ココデメ  
モ用紙アリマスカラ、コッチニア  
リマスカラ。  
コレデイインデス。  
ハー。
- 17.05 (書く) メモ  
17.07 アリガトーガス。 お礼  
使用人 ダイドコロハジマッタノカイ、 きく  
ハー。
- 17.12 (読む) 労働失業保険の広告  
17.13 コレハナニカ基準局ト関係アリ  
マスガ。 広告  
労働者グアイワルイワケデスナ、  
ハッハッハッ。
- 17.15 客 オバンカタ。 あいさつ  
ハイ、イイデス。  
使用人 キョーワタイヘンニサムクナイ  
ナイ。  
ウン。
- 17.17 (読む) 新聞(広告)  
キノノコンクールノトキネ。 コンクール  
マッサキニアガッテイタナイ。 うわさ話  
セノヒクイヒト。  
チガウチガウ。  
アノヒトガオトートノショセイ  
オシテイル。  
コーリヤマニイル。



17.17	店内	使用人	モッテンノ。 ハハー、ヒビガイレチャッタナ。器具戸棚 スッカリ。 ウ、ヒビガハイッチャッタ。 ワレチャッタ。 アツクナリスギタノカナー。	
17.25	店内	女客	タイセイイッテマスカ。 アマリイッテナイ。 アレワ御夫婦デ先生デスカ。 フン。	人(だれか のこと)
17.26			フッフッフ。 (読む)	毎日新聞をち らっと見る
	店内	使用人	コノポスターダレモッテキタ ノ? コーシノオバサン? ウー。	ポスター (労働失業保険)
17.27			アレ。 ドーシタノ。 マダオユアル。 ツカッチャエナ。	お湯
	妻		タマトリカエニヤリナサイ。	電球
	使用人		ヤー、二三本ワシカタナイネ。 カオサネバルヤツナラシカタナ イケド、ソーデナケレバ。 ソーカ。 ソレワコノヘンサ、コナイ品物 ナンダッテサ。	は(ひげブラシ) け
17.32	客		ハーイラッシャイ。 モーシマイナデスカ。	あいさつ 地方事務所 のこと

## 分 析 表

時刻	場所	相手	話 題	共, 方	上, 中, 下 備 考
17.00	店内	妻	あいさつ	1	
		"	法事	2	
		"	広告ビラ	1	
		"	煉炭	1	
		"	はけ(ひげブラシ)	1	
		使用人	鉛筆(言いつける)	1	

17.00	店内	調査員	受け答え	1
		使用人	"	1
		"	紙	2
		調査員	受け答え	1
		"	お礼	1
		使用人	聞く	1
		調査員	広告	1
		客	あいさつ	2
		使用人	気温	2
		"	コンクールうわさ話	2
		"	器具戸棚	1
		女客	だれか人のこと	1
		使用人	ポスター	1
		"	お湯	1
17.00		妻	電球	1
		使用人	はけ	2
		客	あいさつ	1
		"	地方事務所のこと	1
17.30		客	あいさつ	1
		"	地方事務所のこと	1

C: 49歳, 女, 文房具商, 高等小学校卒業 (のち裁縫学校), 1—15歳東白川郡塙町に居住, 15—17歳裁縫学校在学中 水戸に下宿, 17—49歳白河市に居住, 父の出身地 塙町, 母の出身地 塙町, 夫の出身地 白河市本町。

# 記 録

時刻	場所	相手	話 題	
15—01	店先	むすこ	あすこはどこ, 京橋 京橋区 じゃあ, むこうにいつてみよ う。	商談
		店先	社長の弟	
		むすこ	きゅうちゃん, んじゃあこれ どこですか, たいようこう (太 陽工)。 書いてくれっかい。 うん。 木村さんとしてやるのけ。 だって篠崎であれしていい の。え。	商談

15-01	店先	むすこ	原簿2冊。 領收書つけて下さいなんて言 って。 だけど、これさしず来なくち ゃあ返せないんでしょ。 マッチは。 太陽工業。 はんばだってしょうがない。		
	女店員		はい、これおねがいします。	商用(言いつけ)	
	むすこ		あんなあとで、ええ。 京橋区っけ。 新しい。 住所がわからないんで、いつ も手紙が書けない。	商談	
	(ひとりごと)		京橋区、片倉、片倉ビル内、 片倉、太陽工業物産。	太陽物産の住 所	
	むすこ		あーそう。 あしたない。	商談	
	(ひとりごと)		95個さし引いて送金する。	送金	
	(電話)		もしもし、はいはい、はい、 いいえ、かえて、はー。 どちら、えーどちらへ、はー。 篠崎さん、は、ありがとうご ざいます。 はい、は、ええでしゅ、え、 うりとかえ、はい。	(電話) あいさつ 商談	
	むすこ		篠崎さん、篠崎さんでしょう。	電話のこと	
	(電話)		はい、ありがとうございま す。	(電話)あいさ つ	
	むすこ		きゅうちゃん、領收書書いて 下さいって。 篠崎さんうりとかえだっけ。 佐々木さんに行ってもらうか な、これ出しながら。 これ、うりとかえ。	商談	
	女店員		そうです。 500円もらってくんなね。	商談	

## 分 析 表

時刻	場所	相手	話 題	共、方	上、中、下 備 考
15-00	店先	むすこ	商談	1	
		社長の弟	"	1	
		むすこ	"	2	
		女店員	商用(言いつけ)	1	
		むすこ	商談	2	
		(ひとりごと)	商用(太陽物産の住所)	1	
		むすこ	商談	1	
		(ひとりごと)	商用(送金)	1	

15—00	店先	(電話)	あいさつ、商談	2
		むすこ	電話のこと	1
		(電話)	あいさつ	1
		むすこ	商談	1
		女店員	"	1

## 記 録

時刻	場所	相手	話 題
15—30	居間	社長	<p>なんてです、ああ。 え、え。 じゃああしたそう書いてやり ましょ、送金するとき。 まるっきり知らなくなつてば かりでないんですね。 175 箱ですか、それでひとつ ぱこにして返すつーわけにもい かないですか。 えー、いーでしょ、あした ひとつぱこだけさし引いておく れば、いーでしょ。 ひとつぱこだけ返品したら。 え、あ、そー(で)すね。 どっち返品する、言ってくれ て書いてあるんです。 え、出しちゃった。</p> <p>&lt;新聞(白陽タイムス)を読む&gt;</p>
15—35		社長	<p>おしださんの写真出るんです か、こんど停電ですか。 きょう水曜日です、え、んじゃ。</p> <p>カレンダー頼んだんですか、 とみおさんは。 はー。</p>
		社長の弟	<p>とみおさんカレンダー頼んだ 頼まない? いくつぐらいだろーね。 なんだかぼんとしたのもらい たいなんて言つてたよ。 ふー、1枚1枚のね、へー。 あいさえすればわかるんだけ んど、やっぱりねー。</p>
15—36		(ひとりごと)	<p>第2学校の安田先生んとこま わんなければなんねー。</p>
		女店員	<p>佐々木さんお金もらつて来 た。あー、そー。 なにたずねんの。 なん枚。</p>
15—41		女客	<p>はい、あります。 ききょうあげますか。 はい、はい。 ありがとうございます。 へい、ありがとうございまし た。</p>

商談

新聞

商談

商談

商用

商談

たばこを売る

分 析 表

時刻	場所	相手	話 題	共, 方	上, 中, 下 備 考
14—30	居間	社長	商談	2	
	"		<新聞(白陽タイムス)を読む>		
	"	社長	新聞	1	
	"	"	商談	1	
	"	社長の弟	商談	2	
		(ひとりごと)	商用	2	
	"	女店員	商談	1	
	店先	"	"	1	
	"	客(女)	応答(たばこを売る)	1	

#### 4.8 アクセントの区別を保持する要因

共通語としてはアクセントの一定の型の区別のある・なしは問題にならないかもしれない。しかし、アクセントの区別を保持するかどうかということがどのような要因によって決定されるものであるかということを調べて、一般に、共通語を話す度合を決定する要因を見つけ出すための一つの資料を提供することは無意味ではないであろう。

白河市は「アクセントのない」地域、いわゆる「一型アクセント」の地域である。そういう地域にもアクセントを区別する個人(ないし集団)がいる。それはどのような個人か、つまり、その個人にアクセントを区別させている要因(文化的条件)は何か、ということ調べてみる必要がある。

被調査者476人の「アクセントのある・なし」に関する分布を見れば次のとおりである。

1) アクセントのない者	427人( 89.7%)
2) アクセントのある者	37 ( 7.7%)
3) 不明	12 ( 2.5%)
計	476 ( 100.0%)

いま、アクセントの区別に影響を与える要因として、

- 1) 両親のアクセント
- 2) 本人の言語形成期における居住地

## 3) 本人の全居住経歴

の三つを考え、まず、両親のアクセントを、

- a) 両親ともアクセントのある地域の出身
- b) 片親ないし両親がアクセントのない地域の出身

によって表わすこととし、本人のアクセントのある・なしについて相関表を作れば次のようになる。

本人のアクセント 両親のアクセント	な し    あ り		計
	な し	あ り	
b	400	7	407
a	9	22	31
計	409	29	438

上の表について、a) と b) との間に有意な差があることは明らかであるが、試みに  $\chi^2$  検定 (Yates) を行えば、

$$\chi^2 = 223.420 \quad (\text{自由度 } 1)$$

となり、確率 0.001 における  $\chi^2$  の値よりはるかに大きい。すなわち、本人のアクセントのある・なしと両親のアクセントのある・なしとの関係は密接であると言いうる。

次に、本人の言語形成期における居住地を、

- a) 本人が言語形成期の 50% 以上をアクセントのある地域に居住したこと
- b) 本人が言語形成期の 50% 未満 (0%\*を含む) をアクセントのある地域に居住したこと

によって表わすこととし、本人のアクセントのある・なしについて相関表を作れば次のようになる。

本人のアクセント 言語形成期	な し    あ り		計
	な し	あ り	
b	419	3	422
a	8	27	35
計	427	30	457

上の表について、a) と b) との間に有意な差のあることは明らかであるが、試みに  $Z^2$  検定 (Yates) を行えば、

$$Z^2 = 279.656 \quad (\text{自由度 } 1)$$

となり、確率 0.001 における  $Z^2$  の値よりはるかに大きい。すなわち、本人のアクセントのある・なしと本人の言語形成期における居住地との関係は密接であると言いうる。

次に、本人の全居住経歴を、

a) 本人のアクセントのない地域にいた年数の全経歴年数に対する割合が 50% 以上

b) 同じく 50% 未満 (0% を含む)

によって表わすことにし、本人のアクセントのある・なしについて相関表を作れば次のとおりである。

本人の アクセント 経歴	な し    あ り		計
	な し	あ り	
a	416	4	420
b	11	26	37
白	427	30	457

上の表から、a) と b) との間に有意な差のあることは明らかであるが、試みに、 $Z^2$  検定 (Yates) を行えば、

$$Z^2 = 255.175 \quad (\text{自由度 } 1)$$

となり、確率 0.001 における  $Z^2$  の値よりはるかに大きい。すなわち、本人のアクセントのある・なしと本人の全居住経歴との関係は密接であると言いうる。

以上により、上の三つの要因はそれぞれアクセントの区別に強い影響力を持っていることが明らかになった。すなわち、本人のアクセントのある・なしは、両親のアクセントのある・なし、本人の言語形成期における居住地および本人の居住地および本人の全居住経歴に強く影響されるものであると認められる。なお、三つの要因は強さについて著しい差を見せない。

そこで、内部構造をさらに詳しく見るために、それぞれの表における特殊な集団に注目してみよう。まず、両親ともアクセントのない地域の出身であるにもかかわらず、本人がアクセントを区別している者7名について調べると、7名のうち5名までが、言語形成期の50%以上をアクセントのある地域に居住し、しかも、全経歴年数の50%以上はアクセントのある地域に居住している。残りの2名についてはのちに述べる。

次に、言語形成期の50%未満しかアクセントのある地域に居住しないにもかかわらず、アクセントを区別する者3名について調べると、3名のうち1名は両親ともアクセントの区別のある地域の出身者であり、しかも、全経歴年数の50%以上はアクセントのある地域に居住している。残りの2名は先に述べた2名と同一人である。詳しくはのちに述べる。

次に、全経歴年数の50%以上アクセントのない地域に居住しながらアクセントを区別している者4名について調べると、そのうち2名は、両親ともアクセントのある地域の出身者で、しかも言語形成期の50%以上アクセントのある地域に居住している。残りの2名は先の2名と同一人である。

つまり、2名を除いて、一つの要因で説明されない者は他の二つの要因

個 人	A	B
性	男	男
年 齢	24	29
出 生 地	会津若松市	白河市
居 住 経 歴	1—5 若松市 5—8 福島県相馬郡原町 8—9 同県伊達郡掛田町 9—24 白河市	1—18 白河市 18—25 東京 25—26 山形県鶴岡市 26—29 白河市
父の出身地	福島県伊達郡伏黒村	白河市
母の出身地	同 飯坂町	福島県東白川郡溯倉町
職 業	会社員	医者
学 歴	専門学校中退	大学卒業
社会的態度	不満	満足
音韻の点数	23	24
判 定	3	2



で一応説明される、つまり、それらの要因が影響を及ぼしていると認めることができるわけである。

さて、ここで残された2名について詳しく見よう。

2名について注目されることは、前のページの表が示すように、年齢の若いこと、学歴の高いことおよび音韻の点数の高いことである。個人Aについては、調査員が「アクセントを覚え込んでいるらしい」と記している。言語形成期以後にアクセントを体系的に獲得し、それを日常談話語で使いこなすことはきわめて困難と考えられる。これらの2名は例外的な個人と言うべきであろう。

今度は、上と対照的な特殊な集団に注目してみよう。

まず、両親ともアクセントのある地域の出身であるにもかかわらず、本人はアクセントを区別していない者9名について見ると、6名は、言語形成期の50%未満(0%を含む)しかアクセントのある地域に居住しなかった者である。残りの3名についてはのちに述べる。

次に、言語形成期の50%以上をアクセントのある地域に居住したにもかかわらず、本人はアクセントを区別しない者8名について見ると、4名は、少なくとも片親はアクセントのない地域の出身者であり、しかも、全居住経歴の50%以上はアクセントのない地域に居住しており、1名は、全居住経歴の50%以上アクセントのある地域に居住しているけれども、両親ともアクセントのない地域の出身者である。残りの3名は先の3名と一致する。

次に、全経歴年数の50%以上をアクセントのある地域に居住しながら、本人はアクセントを持っていない者11名について見ると、7名は、少なくとも片親がアクセントのない地域の出身者であり、しかも言語形成期の50%未満しかアクセントのある地域に居住していない。1名は、言語形成期全部アクセントのある地域に過ごしているが、両親はアクセントの区別のない地域の出身者である。残りの3名はのちに述べるが、上にあげた3名と一致する。

つまり、3名を除いて、一つの要因で説明されない者は他の二つの要因で説明される。すなわち、それらの要因が影響を及ぼしていると認めることができるわけである。

さて、ここで残された3名について詳しく見よう。

個 人	a	b	c
性	男	女	女
年 齢	64	37	69
出 生 地	新潟県三島郡	和歌山県海草郡	新潟県柏崎
居住経歴	1—33 出生地 33—64 白河市	1—18 和歌山県 18—33 東京 33—37 白河市	1—45 出生地 45—69 白河市
父の出身地	新潟県	和歌山県(義父)	新潟県柏崎
母の出身地	同上	同上 (義母)	同上
職 業	家畜業	荒物商	古物商, のち印刷植字工
学 歴	小学卒業	旧制中学卒業(さらに淑徳学園2年)	なし
社会的態度	不満	不満	満足
音韻の点数	19	27	15
判 定	3	2	3

3名について注目されることは、年齢が高いということぐらいである。

以上を総合すると、438～457名のうちせいぜい5名を除けば、以上にあげた三つの要因、すなわち、(1)両親のアクセント、すなわち、両親の出身地、(2)本人の言語形成期における居住地、(3)本人の全居住経歴によって、本人のアクセントのある・なしをじゅうぶん説明できることが明らかである\*。すなわち、アクセントの区別を保持する要因は、両親の出身地、

\*アクセントの区別のあることに対して父および母の出身地が影響力を持っているかどうかを、164ページ以下で述べた適合度の検定による判定値によって調べると次のようである。

	$\alpha=0$	$\alpha=\frac{1}{2}$
父	9.56	17.29
母	12.18	18.73

これによれば、父の出身地および母の出身地はともに、本人のアクセントの区別に対して強く影響していると言いうる。

本人の生育地および本人の全居住経歴と考えてまちがいなからうと思う。

#### 4.9 白河市および附近の農村の共通語を話す度合の相違

白河市、五箇村、金山村それぞれの共通語を話す度合を音韻の点数によって比較することにしよう。

まず、平均点、中央値などから比較すると、次のように、白河市と村との間には有意な差が見られるが、二つの村の間にはたいした差は見られない。

	m	$\sigma^2$	中央値	$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$	n
白 河 市	19.6	18.85	19.9	0.2	476
五 箇 村	14.4	18.49	14.1	0.3	77
金 山 村 A	15.5	24.16	15.0	0.3	43
金 山 村 B	16.1	16.96	16.3	0.3	42

次に、分布を見ると、白河市、五箇村、金山村A、金山村Bそれぞれ特色がある。いま、次に示すように、平均点 4—7 の段階と平均点24—27の段階とそれぞれにおいて、三つの地点を比較すると、白河市と村との差はきわめて著しいが、二つの村の差は目だつほどではない。

音韻の点数の分布 (%)

点 数 市, 村	4—7	8—11	12—15	16—19	20—23	24—27
白 河 市	0.2	3.4	11.9	35.3	26.1	23.1
五 箇 村	6.5	18.2	33.8	33.7	3.9	3.9
金山村 A	4.7	11.6	41.7	23.3	7.0	11.6
金山村 B	4.8	4.8	36.8	28.6	26.2	0
金山村 AB	4.7	8.3	38.7	25.9	16.5	5.9

次に、要因別に分析して比較しよう。まず、性別について見ると、

	m		$\sigma^2$		$\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}$	
	男	女	男	女	男	女
白 河 市	19.0	20.1	17.35	17.43	0.1	0.1
五 箇 村	14.5	14.3	15.09	20.76	0.5	0.5
金山村 A	14.3	16.5	19.80	25.50	1.0	1.1
金山村 B	16.8	15.4	12.79	20.43	0.6	1.0

のように、二つの村の間にはそれほどの差は見受けられないが、白河市と

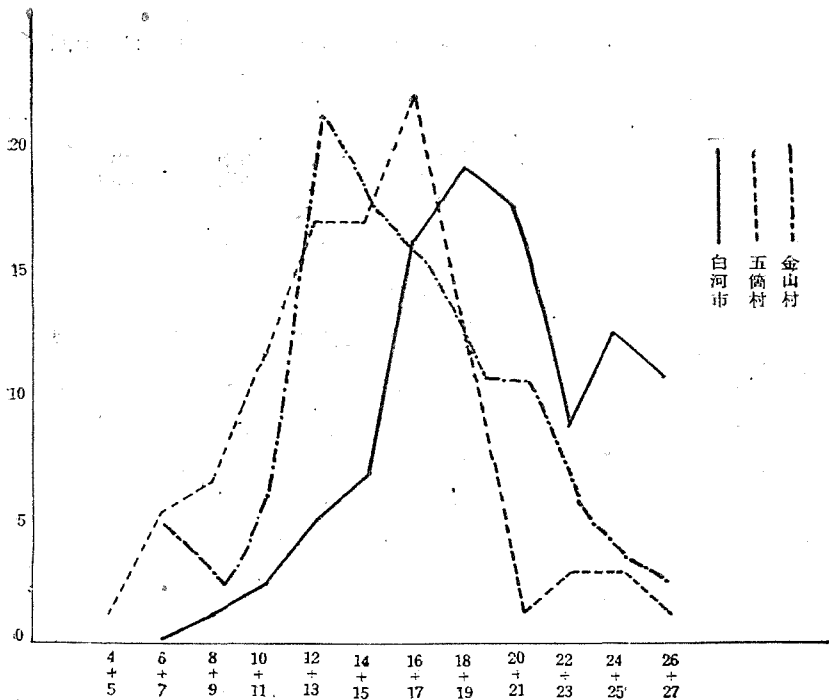


図 91

村との間の差は明らかに有意である。

年齢別に、平均点だけについて見ると次のようである。

市・村	年 齢					
		15—19	20—24	25—39	40—54	55—69
白 河 市	市	20.9	21.5	20.1	19.5	16.9
五 箇 村	村 A	15.6	13.7	13.9	14.4	14.1
金 山 村	村 B	20.3	14.4	16.3	11.3	14.3
金 山 村	村	17.3	16.5	16.7	15.0	14.0

これによると、市と村との差が有意であるばかりではなく、老年層でないところでは、五箇村に比べて金山村の方がやや点数が高いと見受けられる。また、五箇村で、年齢による差の少ないのが注目されるが、これは、

老若ともに生活が単純なために、若い層でも点数が低く現れたからではなかろうか。

学歴別に見ると、二つの村の差はあるかなきかであるが、市と村との間には有意な差が見られる。

			小学退	小学卒 高小退	高小卒	新中在 新高退	旧中在 旧中退
白	河	市	17.9	17.8	19.3	20.6	21.0
五	箇	村	10.6	14.5	14.1	14.2	16.8
金	山	村	11.3	15.1	15.0		
金	山	村		14.7	16.3		17.3

次に、農業に従事する者（本人）について比較すると、五箇村と金山村Bとの間の差がやや目立つ。金山村Aと金山村Bの間にはほとんど差がない。これは両者の生活環境が似ているためではなかろうか。また、金山村Bと白河市との間に有意な差の見られないのは、おそらく金山村Bのサンプル数が少ないためであろう。

			n1	n
白	河	市	17.1	45
五	箇	村	13.7	77
金	山	村	13.8	44
金	山	村	15.8	40

いま、五箇村について、農業に従事する者、農業に従事して学歴高小卒の者、さらに学歴高小卒の者の平均点を比較すると、

			m	n
農	・	業	13.7	53
農	・	業	14.0	28
高	・	卒	14.1	35

のように、三者互に大差がない。農業に従事している者の共通語を話す度合と高小卒の者のそれとがほぼ等しいことは興味深い。

父母の出身地について見ると、母の出身地白河市の場合に、白河市、金山村A、金山村Bと五箇村との間に有意な差が見られる。白河市と金山村との間に差の見られないのが注目される。

父		母	
調査地	出身地	調査地	出身地
	白河市 東北		白河市 東北
白河市	17.3	17.3	20.3
五箇村	14.3	14.3	16.2
金山村A	16.0	16.0	15.3
金山村B	16.1	16.1	16.8

次に、言語形成期を西白河郡で過ごした者について比較すると、白河市、五箇村、金山村A、金山村Bいずれの間にも有意な差が見られない。

	m	$\sigma^2$	n
白河市	16.5	17.34	66
五箇村	14.5	14.17	49
金山村A	16.0	23.67	21
金山村B	16.6	12.38	30

これははなはだ興味のある問題である。つまり、西白河郡で育った者は、その後白河市で生活しても、その共通語を話す度合はなかなか変わらないものと見ることができよう。言いかえれば、言語形成期の居住地のほうがそれ以後の居住地よりも共通語を話す度合にいっそう強い影響を及ぼしていると思われる。

新聞、ラジオ（mass media）の利用度について見ると、次のように、利用度の高い者について、二つの村の間には差がないが、白河市と村の間には有意な差が見られる。

新聞				ラジオ			
	毎日読む	読んだり読まなかったり	読まな		ほとんど毎日聞く	聞いたり聞かなかったり	聞かない
白河市	20.3	19.7	16.6	白河市	20.3	19.8	18.5
五箇村	14.8	15.4	13.2	五箇村	15.5	12.9	14.3
金山村A	15.7	18.8	12.7	金山村A	17.4	13.6	15.8
金山村B	17.2	17.9	13.2	金山村B	17.3	15.5	15.7

1949年（被調査者にとっては、ことし、つまり、1月から11月までのうち）に遠くへ行った回数について見ると、二つの村の間に差は見られない。しかし、五箇村と金山村Aとにおいて、自分の村で用足しすることの少ない

者のほうがわずかに（きわどいところでその差は有意）共通語を話す度合が高いことはやや常識に反する。

村			回 数	
			0~3	4~7
五 箇 村	金 山 村	A	15.3	13.2
五 箇 村	金 山 村	B	17.3	14.9
五 箇 村	金 山 村	B	15.7	16.2

また、1949年11月（被調査者にとって先月）ちゅうに遠くへ行った日数について見ると、遠くへまったく行かない者と遠くへ1度でも行った者との間にも有意な差が見られない。

村			回 数	
			0	1~
五 箇 村	金 山 村	A	14.5	14.2
五 箇 村	金 山 村	A	15.4	15.7
五 箇 村	金 山 村	B	15.8	16.8

階層別に見ると、市と村との間には有意な差が見られるが、二つの村の間には差が見られない。また、階層の間にも有意な差は見られない。

市, 村			階 層		
			上	中	下
白 河 市	五 箇 村	A	20.3	19.7	19.1
白 河 市	五 箇 村	A	14.9	14.3	14.4
白 河 市	五 箇 村	B	15.4	15.2	15.2
白 河 市	五 箇 村	B	16.2	14.8	17.4

社会的態度について見ると、市と村の間には有意な差が見られるが、二つの村の間の差は有意ではない。ただし、「不満」に当る者以外はサンプル数が少ないので、たとえば「満足」に当る者についてはなんとも言えない。

市, 村			不 満		無関心	満 足	
			m	n		m	n
白 河 市	五 箇 村	A	18.4	200	19.7	20.7	181
白 河 市	五 箇 村	A	13.6	57	17.2	15.7	8
白 河 市	五 箇 村	A	13.4	25	16.5	19.1	14
白 河 市	五 箇 村	B	15.2	25	16.3	18.2	11

次に、「標準語を使うときがある・ない」について見ると、次のように、市と村との間には有意な差が見られるが、二つの村の間には差は見られない。金山村Aを除いて、「ある」と「ない」との間に差のあることは注目される。

標準語			あ る	な い
市 , 村				
白 河 市	五 箇 村	市 村 A	20.8	16.8
金 山 村	金 山 村	金 山 村 B	15.5	12.8
			16.5	13.5
			17.1	12.8

「こどもが人前で標準語を話せるようになることは将来必要と思う・不必要と思う」について見ると、市と村との間には有意な差が見られるが、二つの村の間には差が見られない。

こどもに標準語			無関心	必要と 思 う	不必要 と思 う
市 , 村					
白 河 市	五 箇 村	市 村 A	17.5	19.9	18.2
金 山 村	金 山 村	金 山 村 B	14.8	14.4	13.4
				15.9	
				16.4	16.8

主観的判断について見ると、次のように、「えせ共通語」の段階において、白河市、五箇村、金山村Aの間には有意な差は見られないが、これらと金山村Bとの間の差は有意である。

白 河 市	21.6
五 箇 村	19.7
金 山 村 A	20.3
金 山 村 B	17.3

以上、要因別の分析の結果を総合して考えると、ほとんどあらゆる要因およびそのカテゴリにおいて、市と村との間に有意な差のあることが注目される。市に住んでいることそのことが共通語を話す度合を高める要因になっている事実は、先に試みられた要因分析に対して参考となるであろう。

なお、言語形成期を西白河郡で過ごした者の間には市と村との間で有意



な差の見られないことも同じように注目すべきことである。

さて、以上のように、市と村との差は要因別の分析において明らかに現れたのであるが、これを別な面から調べてみた。

白河市で育ち（1歳から15歳まで住み）、白河市から1度もよそへ出たことのない者（SS）と、今は白河市に住んでいるが、育ったのは白河市の附近の村である者（SM）とを比較してみた。それには次のような手続を取った。まず、戸別調査の集計に使われたサンプル476からMSに該当する者を全部取り出したら37名あった。今度はSSに該当する者全員から、MS37名と性、年齢、学歴などの条件ができるだけ同じであるように同数37名を選び出した。そして、それぞれの集団の共通語を話す度合（音韻の点数）を比較すると、次のように、一応の差が見られる。

SS            15.7

MS            12.8

参考のために、五箇村に育ち、五箇村に住んでいる者（GG）37人、金山村に育ち、金山村に住んでいる者（KK）34人（該当者の全員）を取り出して、その共通語を話す度合を比較すると次のようである。

GG            11.2

KK            13.6

これを、上に示したSS、MSの度合とも比較すると、同じはえぬきの者でも白河市と五箇村とでは違うようである。

今度は、白河市に育ち、のち、ほかの土地に住み、現在また白河市に住んでいる者（SHS）、白河市の附近の村に育ち、のち、ほかの土地に住み、現在また白河市に住んでいる者（MHS）、金山村に育ち、のち、ほかの土地に住み、現在また金山村に住んでいる者（KHK）、それぞれ26名ずつと、五箇村に育ち、のち、ほかの土地に住み、現在また五箇村に住んでいる者（GHG）16名を取り出し、その共通語を話す度合を比較すると次のようである。

SHS	17.2
MHS	16.0
KHK	13.0
GIIG	13.9

SHS と KHK との間の差は有意である。言語形成期以後ほかの土地に住んでも、ふたたび生育地に帰った場合は、生育地が白河市と金山村とではかなりの差のあることがうかがわれる。

以上の結果からも、言語形成期の居住地が市であるか村であるかによって、共通語を話す度合にかなりの差の現れることが明らかになった。

#### 4.10 結 論

以上の分析から、共通語を話す度合を決定する要因がやや明らかになったと思う。どの面から分析しても、共通語を話す度合を決定する要因として注目されるものはほぼ一致する。つまり、共通語を話す度合を決定する要因として重要とみなされるものは、

- 1) 学 歴
- 2) 父母の出身地
- 3) 本人の生育地

であると言えよう。

いま、これらの重要な要因がほかの要因とどういう関係にあるかについて考えてみることにする。

まず、学歴について言えば、学歴の高い者はたいいて新聞を読み、ラジオを聞いており\*、京浜地方へ行き来することが多く\*\*、また、多くの場面

---

\* 学歴が旧制中学中退・卒業以上の者のなかで、新聞も読みラジオも聞いている者および新聞をとときどき読みラジオを良く聞いている者の占める割合は63.3%である。

\*\*京浜地方へ 1949 年(被調査者にとっては、ことし)のうちに、少なくとも1回以上行ったことのある者の割合は学歴の高い者全体の 51.9% である。

\*\*\* 七つの場面のうち四つないし七つの場面で共通語を使っている(つもりの)者は学歴の高い者全体の 44.3% である。

籍 学歴の高い者のうち、給料生活者が占める割合は 39.2% である。

で共通語を使っており（厳密には、使っているつもりであり）\*\*\*、さらに、職業としても、給料生活者が少なくない\*\*。（\*\*\*、\*\* は前のページを見よ）

次に、父母の出身地について言えば、父についても母についても、出身地が京浜地方の者は、われわれの指定した七つの場面のうちのたいていの場面において共通語を使っている（つもりである）\*。

さらに、生育地について見ても、京浜地方で生育した者は、七つの場面のたいていの場面で共通語を使っている（つもりである）\*\*。

その上、父母の出身地と本人の生育地との間に密接な関係が見られるから\*\*\*（次のページを見よ）、両者を一つのものであると考えることもできる。つまり、考え方によっては、共通語を話す度合を決定する重要な要因は、

- (1) 本人の生育地または両親の出身地
- (2) 学 歴

の二つにまとめることもできる。

さて、上の(1)の要因はある程度どうにもならないものと一応考えられる。すなわち、ただちに社会政策の対象になしえないものと思われる。(2)の要因も今までの社会ではなかば宿命的に決定されていたきらいがある。

しかし、(1)の要因にしても、それはもともと、本人を常にとりまく環境における共通語の状態によると考えられるから、生育地の地域社会全体のラジオの普及率を高め、交通の便を良くし、本人を常にとりまく環境における共通語を話す度合を高め、さらに、絶えず共通語を話さなければならぬ場面に接する機会を作ることなどによってこの要因の改革をすることは不可能ではない。すなわち、地域社会全体の改革によって共通語を話す

\* 父が京浜地方出身の者で、七つの場面のうち四つないし七つの場面共通語を使っている（つもりである）者は 66.7% に達する。母の場合は、80.0% に及んでいる。

\*\* 京浜地方で生育した者で、七つの場面のうち四つないし七つの場面共通語を使っている（つもりである）者は 56.5% の割合である。

度合を高めることができるのである。(2)の要因については、今後、就学<sup>1</sup>等の理想が実現して、意志と能力とのある者はすべて高い教育を受けることができるようになれば、共通語を話す度合は高まるに違いない。

ところで、学歴が共通語を話す度合を決定する重要な要因ならば、義務教育における「標準語教育」が共通語を話す度合を高めるのにどういう役目を果しているだろうか。共通語を話す度合は、学校を卒業して日がたってもそれほど低くなるものではない<sup>\*\*\*</sup>。(この<sup>\*\*\*</sup>は次のページを参照)

\*\*\*

x \ y			a2 b a1 b		a1 a1 IV		V	VI	計
	Ia1	Ia2	Ia1 Ib	Ib	Ia1 IV	IV	V	VI	計
I	35	13	29		16		1		94
II	3	62	13		65		1	5	149
III		18	43	14	42		3	3	123
IV, V	3	14	8		55		13	5	101
VI		2						7	9
計	41	109	93	14	178		18	23	476

x=本人の生育地      y=父の出身地      相関係数=0.44

x \ y			a2 b a1 b		a1 a1 IV		V	VI	計
	Ia2	Ia2	Ia1 Ib	Ib	Ia1 IV	IV	V	VI	計
I	32	31	40	2	47		3	2	157
II	3	51	18		42			5	119
III	4	13	33	12	34			2	98
IV	1	7	1		52			3	64
V	1	7	1		2		14	3	28
VI					1		1	8	10
計	41	109	93	14	178		18	32	476

x=本人の生育地      y=母の出身地      相関係数=0.41

ただし、I—VI は本人の生育地、a—b は言語形成期以後の居住地、さらに、I—2 は a—b に居住した年数を表す。(4.2(9)を見よ)。

I	西白河郡	a	東北地方
II	白河市	b	その他
III	東北地方		
IV	関東地方		
V	その他	1	1—9 年
VI	京浜地方	2	10 年以上

このような要因の束は、共通語を話すようにさせる地域社会（community）そのものの社会的要求を形成すると考えられる。こういう社会的要

職 業	學 歴			卒 在			卒 在			卒 在		
	學歴なし 小学退	小高 新中退	卒退 高中退	卒在 小中退	卒在 高中退	卒在 旧高退	卒在 山高退	卒在 旧高退	卒在 旧高退	卒在 旧高退	卒在 旧高退	卒在 旧高退
給料生	13.0 (1名)	18.8 (5)	17.0 (26)				20.1 (19)		22.4 (5)		18.0 (7)	
商店主 経営者	16.7 (6)	14.0 (14)	16.3 (19)				18.0 (4)		19.0 (1)			
勞務者 農 民	13.4 (15)	15.0 (50)	16.2 (65)				17.8 (6)					
主 婦	14.1 (14)	15.3 (30)	17.3 (51)				17.5 (15)					

求は地域社会の性格に応じて異なるであろう。たとえば、市と村とでは共通語の社会的要求はかなり異なるに違いない。われわれの調査の結果でも、白河市と二つの村とについて見ると、いつも市と村との間に共通語を話す度合の著しい差が見られ、村と村との間にはほとんど差が見られない。また、同じ農民でも、白河市の農民と五箇村または金山村の農民との間には共通語を話す度合について明らかに差が見られる。これは、共通語を話す度合というものに、職業という一つの要因よりも、市であるか村であるかという総合的な要因のほうが強く影響していることを示すものである。

以上のように、共通語を話す度合を決定するものは一つ一つの要因ではなく、いくつかいっしょになった要因の束であると見られる。一つ一つの要因は弱くても、それがいくつか集まれば強力になると思われる。

われわれは常識的に、mass media の利用度が共通語を話す要因として強く働いていると考えていたが、調査の結果ではたいした要因となっていない。これは、一つには質問のしかたによるのかもしれない。とすれば、mass media の利用度もほかの要因といっしょになれば強力な要因となるのではないかと考えられる。したがって、ラジオを普及することなどは共通語を話す度合を高めるためにも望ましいことである。

また、mass media の利用度と同じように、ほかの土地への行き来も調査票による結果の示すかぎりでは、強い要因とはなっていない。これも聞き方によるのかもしれない。ところが、白河市という地域社会全体として、東京との行き来がほかのどことよりもひんばんであることは、白河市の共通語を話す度合を決定する一つの大きな要因と考えられる。これは、附近の農村と比較するとき、特に注目されるものである。

共通語を話す度合を決定するものが共通語の社会的要求であるということになれば、今後、白河市における共通語の社会的要求が強くなればなるほど、それだけ白河市民の共通語を話す度合は高まるであろう。白河市に

おける共通語の社会的要求が強くなるということは、白河市が内部的に城下町的な性格からぬけ出すとともに、外部に對して、経済的にも文化的にも中央の都市との結合がいっそう緊密になることにほかならない。

## 5. 共通語を話す度合の高まる過程と共通語を話す ようになる過程

### 5.1 共通語を話す度合の高まるのはどのような場面からか

調査票の項目 51—58 において、被調査者に、次の七つの場面を使って  
いる言語について内省させた。つまり、そういう場面で共通語を使うか、  
方言を使うか、両方がまざるかについて質問したわけである。

- |                                    |                |
|------------------------------------|----------------|
| 1. 家 庭                             | 4. 仕事仲間        |
| 2. 近所の人                            | 5. 買いつけの店      |
| 3. 在の人あるいは白河の人<br>(白河市で在の人 村で白河の人) | 6. 郵便局や役場      |
|                                    | 7. 知らない人や旅行者など |

このようにして得た結果に、いわゆる L. Guttman の尺度解析 (cornell technique) を施してみた。つまり、ある場面で共通語を使うと答えた者に 1 点、まざると答えた者に 2 点、方言を使うと答えた者に 3 点を与え、七つの場面の合計点を求め、合計点の順に被調査者を並べ、被調査者それぞれの各場面における点数の分布の模様を描いてみた。図 92 (五箇村の場合) がそのようにして得られた、なまの模様図である。白河市については被調査者が多いので、印刷の便宜と大づかみにながめる便宜とのため、合計点の段階ごとに被調査者をまとめ、各場面にはその平均点数をプロットした。図 93 を見よ。

白河市についてこの模様図を見ると、各場面は共通語を話す度合の高まる過程において、平均的に言って、一次元的関係があるとみなしうる。いま、この図を説明すると、合計点 21 点の被調査者はどの場面でも方言を使っていると答えた者であり、合計点 20 点の被調査者は、平均的にいって、「知らない人や旅行者」などの場面において「まざる」と答えた者である。合計点 16 点ぐらいの被調査者になると、まだ家庭では方言を使っていると答えているが、「郵便局や役場」、「知らない人や旅行者など」の場面



## 五 箇 村

戸 番	家 族	近所の人			白河の人			仕事仲間			買いつけの店			郵便局や役場			知らない人 旅人など		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
21	1		●			●			●			●			●			●	
	2		●			●			●			●			●			●	
	3		●			●			●			●			●			●	
	4		●			●			●			●			●			●	
	5		●			●			●			●			●			●	
	6		●			●			●			●			●			●	
	7		●			●			●			●			●			●	
	8		●			●			●			●			●			●	
	9		●			●			●			●			●			●	
20	1		●			●			●			●			●			●	
	2		●			●			●			●			●			●	
	3		●			●			●			●			●			●	
19	1		●			●			●			●			●			●	
	2		●			●			●			●			●			●	
	3		●			●			●			●			●			●	
	4		●			●			●			●			●			●	
	5		●			●			●			●			●			●	
	6		●			●			●			●			●			●	
	7		●			●			●			●			●			●	
	8		●			●			●			●			●			●	
	9		●			●			●			●			●			●	
	10		●			●			●			●			●			●	
	11		●			●			●			●			●			●	
	12		●			●			●			●			●			●	
18	1		●			●			●			●			●			●	
	2		●			●			●			●			●			●	
	3		●			●			●			●			●			●	
	4		●			●			●			●			●			●	
17	1		●			●			●			●			●			●	
	2		●			●			●			●			●			●	
	3		●			●			●			●			●			●	
	4		●			●			●			●			●			●	
	5		●			●			●			●			●			●	
	6		●			●			●			●			●			●	
	7		●			●			●			●			●			●	
	8		●			●			●			●			●			●	
	9		●			●			●			●			●			●	
	10		●			●			●			●			●			●	
	11		●			●			●			●			●			●	
16	1		●			●			●			●			●			●	
	2		●			●			●			●			●			●	
	3		●			●			●			●			●			●	
	4		●			●			●			●			●			●	
	5		●			●			●			●			●			●	
15	1		●			●			●			●			●			●	
	2		●			●			●			●			●			●	
	3		●			●			●			●			●			●	
	4		●			●			●			●			●			●	
	5		●			●			●			●			●			●	
	6		●			●			●			●			●			●	
	7		●			●			●			●			●			●	
14	1		●			●			●			●			●			●	
	2		●			●			●			●			●			●	
13	1		●			●			●			●			●			●	
12	1		●			●			●			●			●			●	
11	1		●			●			●			●			●			●	
10	1		●			●			●			●			●			●	
9	1		●			●			●			●			●			●	
7	1		●			●			●			●			●			●	
	2		●			●			●			●			●			●	
	3		●			●			●			●			●			●	
	4		●			●			●			●			●			●	
	5		●			●			●			●			●			●	

## 白 河 市

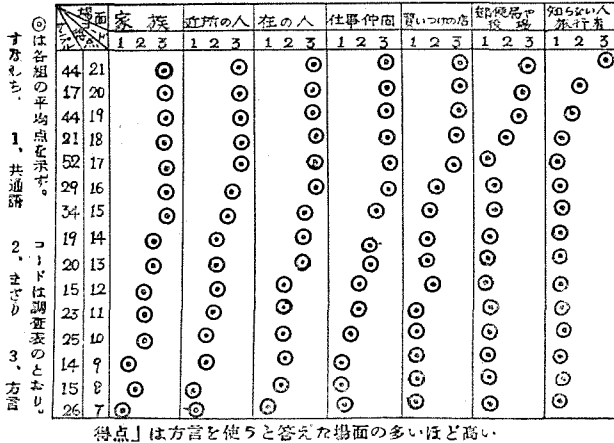


図 93

では共通語を使っていると答えていることが見られる。

この模様図における○の動きを見ると、場面によってかなり違うものが見られる。「知らない人や旅行者など」の場面と「郵便局や役場」の場面では、比較的点数の高い者（全体として方言を使うことの多い者）でも共通語を使っているが、「家庭」の場面では、比較的点数の低い者（全体として方言を使うことの少ない者）でも方言を使っていることが見られる。

このようなことは、共通語を話す度合の高まるのは、まず「知らない人や旅行者など」、「郵便局や役場」の場面からであり、最も遅れるのが「家庭」の場面である、ということの意味するであろう。

これは、一方から言うと、「知らない人や旅行者など」および「郵便局や役場」の場面では、「家庭」の場面に比べて、共通語を話すように要求されることが強いということを示していると考えられる。

以上の白河市の結果は五箇村にも金山村（図 94 を参照。金山村はA、

## [金山村A+B]

世帯 番号	家 族	近所の人			白河の人			仕事仲間			買いつけの店			郵便局や役場			知らない人 旅行者など		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
21	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
	3			○			○			○			○			○			○
	4			○			○			○			○			○			○
	5			○			○			○			○			○			○
	6			○			○			○			○			○			○
	7			○			○			○			○			○			○
	8			○			○			○			○			○			○
	9			○			○			○			○			○			○
	10			○			○			○			○			○			○
	11			○			○			○			○			○			○
	12			○			○			○			○			○			○
	13			○			○			○			○			○			○
20	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
19	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
	3			○			○			○			○			○			○
	4			○			○			○			○			○			○
18	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
	3			○			○			○			○			○			○
	4			○			○			○			○			○			○
17	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
	3			○			○			○			○			○			○
	4			○			○			○			○			○			○
	5			○			○			○			○			○			○
	6			○			○			○			○			○			○
	7			○			○			○			○			○			○
16	1			○			○			○			○			○			○
15	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
	3			○			○			○			○			○			○
14	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
	3			○			○			○			○			○			○
	4			○			○			○			○			○			○
	5			○			○			○			○			○			○
13	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
	3			○			○			○			○			○			○
	4			○			○			○			○			○			○
	5			○			○			○			○			○			○
	6			○			○			○			○			○			○
12	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
	3			○			○			○			○			○			○
	4			○			○			○			○			○			○
	5			○			○			○			○			○			○
11	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
	3			○			○			○			○			○			○
10	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
9	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
8	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○
7	1			○			○			○			○			○			○
	2			○			○			○			○			○			○

Bに分けて模様を描いてもほぼ同様であるのは過程の恒常性を示すものとして注目される)にも同様に認められる。ただ、「白河の人」の場面は共通語を話すようにとの要求が「仕事仲間」の場面よりも強いと認められる。

さて、以上の結果は、「しかじかの場面で標準語を使いますか、方言を使いますか」のように質問して得た反応(自分で内省して答えた結果)を分析したものであるから、これが実際の言語行動をどの程度反映しているかが問題となる。われわれは、このような自分で内省して答えた結果と実際の言語行動との関係を見るために、項目60を用意した。つまり、「知らない人や旅行者などといろいろ話をなさるときのことばは、土地のことばですか、標準語ですか、いろいろまざりますか」ないし「土地の普通のことばですか、よそ行きのていねいなことばですか、いろいろですか」と質問し、それに対する被調査者の発表(これを「共通語意識」と考えることにする)を求めるとともに、さらに、項目60において、「どうもありがとうございました。〇〇さんのお宅はどちらでしょうか」と質問し、そのときの言語行動を項目58におけると同じ3段階に調査員自身が判定し、その結果(このようにして得られた結果を「共通語行動」と考えることにする)を項目58の結果と比較することとする。

いま、上に述べた「共通語意識」と「共通語行動」との関係を、両者の関連表(cross tabulation)によって見ると、図95のようになる。もし、

項目 56 \ 項目 60	1	2	3	計
1	153	121	30	304
2	10	39	13	62
3	16	29	32	77
計	179	189	75	443

1. 標準語(共通語)ないしよそ行きのていねいなことば
2. …まざる
3. …土地のことば(方言)ないし土地の普通のことば

不明が33ある

図 95

共通語意識と共通語行動とが完全に一致するならば、全員が対角線上 (11, 22, 33) に来なければならない。しかし、この表が示すように、両者の間には相當の食い違いが見られる。いま、統計的に両者の間に関係があるかどうかを見てみよう。分割表による  $\chi^2$  検定を行うと、

$$\chi^2 = 67.897 \quad (\text{自由度 } 4)$$

となり、これに相当する確率は 0.1% よりはるかに小さいから、共通語意識と共通語行動との間に関係がないとは言えない。しかし、この関係は決定的とは考えられないので、さらに分析を進めることとする。

ここで問題になるのは、共通語を使うと言いながら (1), 実際には方言を使うと判定される (3) 者, 方言を使うと言いながら (3), 実際には共通語を使うと判定される (1) 者である。いま、前者を (13), 後者を (31) と表わし、それぞれの内部をやや詳しく分析することにする。

まず、性別に見ると、

	男	女
(13)	18	12
(31)	6	10

のようになる。(13) と (31) との間に男女の割合に関して差があるかどうかを見るために、Fisher-Yates の  $\chi^2$  test を用いると、

$$\chi^2 = 1.145$$

となり、両者の間に有意な差が認められない。すなわち、共通語意識と共通語行動との食い違い方が男女によって違わないと見なされる。

次に、年齢別に見ると、(13) のほうが若く、(31) のほうが年寄である傾向が見られる。つまり、若い者は、実際に方言を使いながら、共通語を使うと言い、年寄は、実際に共通語を使いながらも、方言を使うと答えていることは興味深い。

次に、客観的な共通語を話す度合、すなわち、調査票の項目 22—26 における音韻の点数平均を見ると、

(13)	16.9
(31)	19.0

のようであって、両者の間に有意な差が認められる。

以上の模様をさらに詳しく見るために、項目 51—58（ただし、54 を除く）のうち、共通語を使うと答えた項目の数の平均を見ると、

(13)	2.3
(31)	0.1

となり、両者の間には明らかに有意差が認められる。

次に、職業別に見ると、

	1	2	3	4	5	6	7	8
	給料 生活者	店主 工場 経営者	工員、 運転手	日雇	農業	主婦	学生 生徒	無職
(13)	4	3	11	2	2	6	1	1
(31)	0	2	2	0	2	6	2	2

となり、これをさらに分類し直せば、

	1. 2. 3	5. 6
(13)	18	8
(31)	4	8

となり、職業の間にも有意な差を認めることができる。(13) は交際の職業の比率が大きいと認められる。

判定（調査票の項目60）との関係を見ると、

判定	1. 2	3. 4
(13)	1	29
(31)	9	7

となり、判定の間にも有意な差が認められる。(31) のほうが判定が高く出ていることが注目される。

以上によって、共通語意識というものはかなり複雑な要素を持っているもので、今後、別な調査方法と分析とをくふうしなければならないと考えられる。

今度は、調査票の項目49, 50<sub>a</sub>, 50<sub>b</sub>, について、(11), (12), ……,(22), (33), ……のそれぞれに該当する者を分析すると次の表が示すようである。

調査項目	49				50 <sub>a</sub>				50 <sub>b</sub>				
	標準語と土地のことばとの違いについて				標準語（共通語）を使うことがあるか				標準語（共通語）意識				
反応の種類	不明	無関心	感じる	わからな	感じない	不明	ある	わからな	使いた いがて きない	ない	不明	あり	なし
(11)			132 (86.3)	1 (0.6)	20 (13.1)	13 (11.7)	113 (77.1)	5 (3.3)	1 (0.7)	11 (7.2)	7 (4.6)	129 (84.3)	17 (11.1)
(12)		2 (1.7)	100 (82.6)	1 (0.8)	18 (14.9)	14 (11.6)	90 (74.3)	2 (1.7)	2 (1.7)	13 (10.7)	1 (0.8)	95 (79.4)	24 (19.8)
(13)			18 (60.0)	3 (10.3)	9 (30.0)	4 (13.3)	17 (53.7)	1 (3.3)		8 (26.7)		20 (66.7)	10 (33.3)
(21)			8 (80.0)		2 (20.0)	2 (20.0)	5 (50.0)		1 (10.0)	2 (20.0)	2 (20.0)	6 (60.0)	2 (20.0)
(22)	1 (2.6)		28 (71.7)	1 (2.6)	9 (23.1)	9 (23.1)	17 (43.6)	2 (5.1)	3 (7.7)	8 (20.5)	3 (7.7)	25 (64.1)	11 (28.2)
(23)			8 (61.5)	1 (7.7)	4 (30.8)	1 (7.7)	3 (23.1)			9 (69.2)		4 (30.8)	9 (69.2)
(31)			11 (68.7)	2 (12.5)	3 (18.8)	5 (31.2)	5 (31.2)	3 (18.8)	3 (18.8)	3 (18.8)	1 (6.3)	9 (56.2)	6 (37.5)
(32)	1 (3.4)		19 (65.6)		9 (31.0)	9 (31.0)	8 (27.6)	1 (3.4)		11 (38.0)	7 (24.1)	15 (51.8)	7 (24.1)
(33)	1 (3.1)		18 (56.3)	4 (12.5)	9 (28.1)	8 (25.0)	3 (9.4)	2 (6.3)		19 (53.3)	1 (3.1)	6 (18.8)	25 (78.1)

( ) は%を示す

項目49, すなわち, 標準語(共通語)と方言との区別に関する意識については, 「区別を意識すると言う者」が(11), (12)に多く, (23), (31), (32), (33)に少ないことは当然である。この二つの集団の間には有意差が認められる。すなわち, (11), (12)の「区別を意識すると言う者」の比率は80%程度であって, 両者の間に有意な差が認められる。

項目50a, すなわち, 「標準語を使うことがあると答えた者」は(11), (12)に多く, 他に少ない。「標準語を使うことがないと答えた者」が(33), (23)に多いのも当然である。しかし, (11)のなかに「使うことがないと言う者」があるのは注意を要する。これは調査方法に考慮を加えなければならないことを意味する。

項目50bについても, 50aと同じように, 「標準語意識あり」と認められた者が(11), (12)に多く, 「標準語意識なし」と認められた者が(22), (23)に多い。「意識なし」と認められた者が, (31), (13)ではほぼ等しい比率を示しているのは興味深い。しかし, (31), (13)の比率は, (23), (33)の比率よりも有意的に小である。

以上の結果から, (11), (12), ……(22), ……(33)と「共通語意識のある・なし」との関係は相当密接であると言える。

以上を総合すれば, ここで考えたような共通語意識と共通語行動との関係は, 細かく見るといろいろな問題があり, その構造はかなり複雑であるが, まず, 相当の関係を認めることができるであろう。したがって, 上に述べた共通語を話す度合の高まる場面の順序と関係とは実際の行動についても一応認められると言って良いようである。

## 5.2 共通語を話す度合の高まるのはどのような集団からか

共通語を話す度合を決定する要因として注目される, 言語形成期のおもな居住地(生育地), 母の出身地, 学歴の三つをいろいろに組み合わせた集団を作り, その集団の分布を音韻の平均点数と分散とによって示せば,



図96のとおりである。

これによると、「非ズーズー弁地域」(ここでは全国から東北、北関東、西白河郡、白河市を除いた地域と定義する)のいろいろな集団(図96におけるA)と、西白河郡のいろいろな集団(C)との間には明らかに差が見られる。したがって、非ズーズー弁地域でもにも言語形成期を過ごした人人に比べて、西白河郡でもにも言語形成期を過ごした人人のほうが、共通語を話す度合の高まる順序は遅いとみなされる。これは当然のことである。また、西白河郡(C)と白河市(D)との間にも差が見受けられそうであるが、今度の結果でははっきりしたことは言えない。

なお、分散の小さいことで注目されるのは、

非ズーズー弁地域でもにも言語形成期を過ごした旧制中学以上の集団  
京浜地方でもにも言語形成期を過ごし、かつ、母の出身地が非ズーズー弁地域である集団

白河市でもにも言語形成期を過ごし、母の出身地が西白河郡で、学歴が小学校ないしそれ以下の集団

西白河郡でもにも言語形成期を過ごし、母の出身地も西白河郡で、学歴が小学校ないしそれ以下の集団

非ズーズー弁地域でもにも言語形成期を過ごし、母の出身地も非ズーズー弁地域の、学歴が高等小学ないし新制中学の集団

白河市でもにも言語形成期を過ごし、母の出身地が西白河郡で、学歴が旧制中学以上の集団

西白河郡でもにも言語形成期を過ごし、母の出身地も西白河郡で、学歴が旧制中学以上の集団

などである。

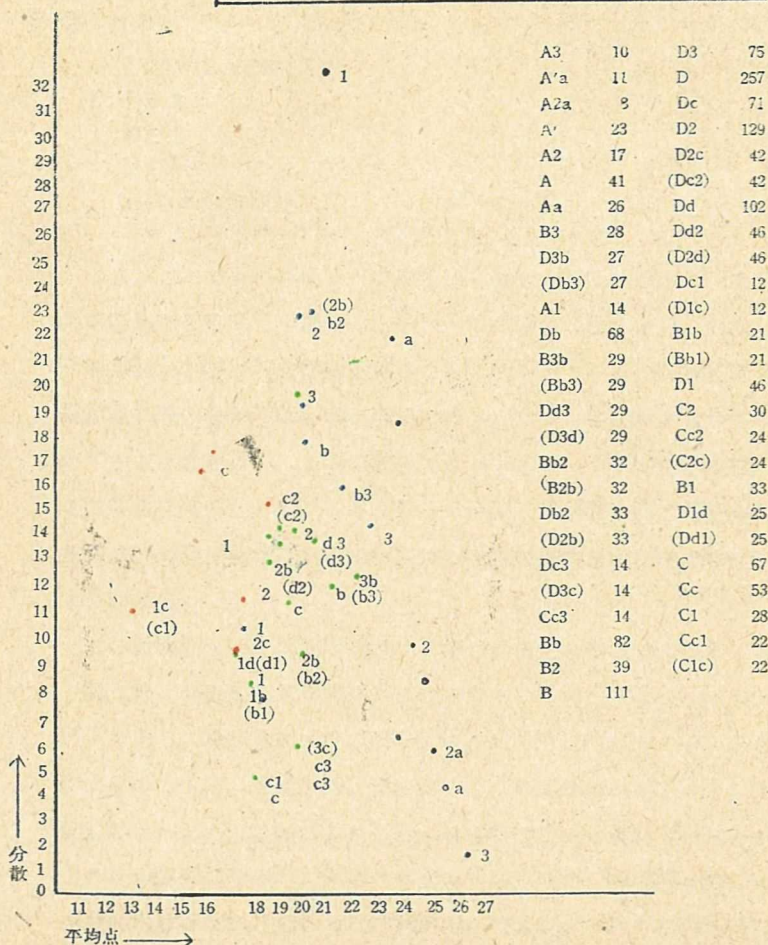
### 5.3 共通語を話すようになるのはどのような言語構造的 特徴からか

一般に、言語構造的に変化を受けやすいのは語いであり、ついで文法であって、音韻は最も変りにくいとされている。

今度の調査では、語い、文法および音韻を上のような観点から比較することはできない。それは、調査項目 22—29 はおもに音韻に関するもので

# 平均点数を指標とした種々の集団の分布

言語形成期のおもな居住地	京浜	非ブーズー弁 地域	東北関東	西白河郡	白河市
母の出身地	A'	A	B	C	D
学歴	ない 小学	高小 新中	旧中以上		
	1.	2.	3.		



あり、調査項目 36—46 はおもに語い（文法的語い）であって、純粋に文法に関する調査項目が用意されなかったことと、上の二つの調査項目群は調査の方法が互に違っていることのためである。

ここでは、調査項目 22—29 だけについて、どのような言語構造的特徴から共通語が話されるようになるかを見てみようと思う。

調査項目 22—29 には次のような種類の言語的特徴、すなわち小項目が含まれる。

「イとエとの混同」

有声化

無声化

ji の音

「ヒとシとの混同」

語い（ハゲアタマ、ハナ、ホウチョ）

いま、ここでもいわゆる尺度解析法（cornell technique）を用いて、共通語形で反応した小項目の、一つ一つの項目（最小項目）の数（これを「総点数」と呼ぶ）の構造を見ることにする。つまり、被調査者全員を、総点数の高い者から低い者へ順順に並べ、次に、各被調査者が各項目について示す点数を調べ、この点数をプロットして一つの模様図を得、さらにこの模様を大づかみにはっきり見るために、総点数の同じ者を集め、それらについて、各項目において示される点数の平均を図示すると、図 97 のようになる。

この模様図から平均的な意味で了解されることは次のようなことである。

総点数（共通語を話す度合）の低下をまずひき起すのは「イとエとの混同」である。総点数20までの低下はまったく直線的に「イとエとの混同」によるのである。総点数19, 18においてはわずかに「イとエとの混同」と見られないものも見受けられるが、総点数17以下においてはほとんど「イとエとの混同」を示していることがわかる。次に、共通語を話す度合（総点数）の低下をひき起すのは「有声化」である。「イとエとの混同」が完全になってから（すなわち、0点に近くなってから）はじめて有声化が始

## 白 河 市

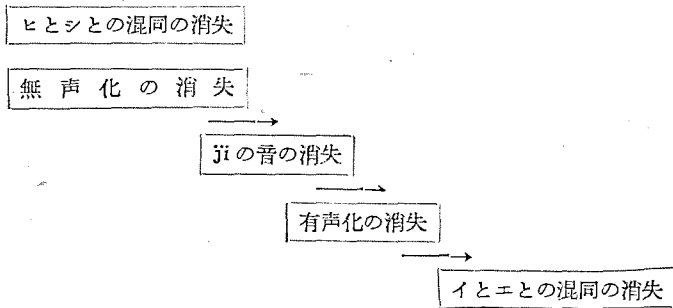
音 価 点 数	イとエ	有. 声	無 声	ji	ヒとシ	語 い
	0 1 2 3 4 5 6 7 8	0 1 2 3 4 5 6	0 1 2 3	0 1 2 3 4	0 1 2 3	0 1 2 3
32						
27						
19						
24						
25						
35						
24						
17						
23						
14						
22						
38						
21						
44						
20						
54						
19						
37						
18						
42						
17						
35						
16						
17						
15						
16						
9						
13						
12						
15						
6						
11						
5						
10						
4						
9						
8						
1						
7						
6						
1						

図 97

まる。有声化に続くのは ji の音であり、ついで「ヒとシとの混同」が現れる。その他のものについては特にとりたてて言うべきことはなく、共通語を話す度合にほとんど影響を与えないと言ってさしつかえないであろう。しかし、これら、つまり無声化、語いについても、全体の共通語を話す度合（総点数）が下るにつれて次第に共通語形で反応する数（各項目の点数）が減ってくる（◎印が左へ寄ってくる）のは注目に価する。

以上を逆に言ってみれば、次のようになる。大づかみな立場に立つならば、白河市の音韻的特徴のうち最も共通語に近づいているのが「ヒとシとの混同」と「無声化」とであり、ついで「ji の音」、**「有声化」**であり、**「有声化」**がだいたい共通語になったところで**「イとエとの混同」**が共通語へ近づいてくる。つまり、「イとエとの混同」が、白河市の方言が共通

語に近づいていく過程において最も遅れていることが見られる。以上を図に示すならば次のようになるであろう。



さて、以上は白河市についての事情であるが、附近の村についてはどうであろうか。相互に比較してみることにする。

まず、各項目の地域別平均点を比較すると次のようである。

小項目 地域	「イと エとの 混同」	有声化	jiの音	無声化	「ヒと シとの 混同」	語い	計
最小項目の数	8	6	4	3	3	3	27
白河市	2.36	4.74	3.36	2.44	2.54	2.54	19.6
五箇村	1.29	3.17	2.69	2.36	2.60	2.29	14.4
金山村A	1.77	4.37	2.49	2.14	2.40	2.37	15.8
金山村B	2.02	3.48	3.26	2.36	2.55	2.45	15.9
金山村A,B	1.89	3.93	2.87	2.25	2.47	2.41	15.8

ここで、比較を容易にするため、各項目の最小項目数を全部3にして計算すると、次のようになる。

	「イと エとの 混同」	有声化	jiの音	無声化	「ヒと シとの 混同」	語い	計
白河市	0.89	3.37	2.52	2.44	2.54	2.54	13.07
五箇村	0.48	1.59	2.02	2.36	2.60	2.20	9.60
金山村A	0.66	2.19	1.87	2.14	2.40	2.37	10.53
金山村B	0.76	1.74	2.45	2.36	2.55	2.45	10.60
金山村A,B	0.71	1.97	2.15	2.25	2.47	2.41	10.53

これによって見ると、「イとエとの混同」、「有声化」、「jiの音」については、白河市と村との間に一応の差が見られるが、その他の項目については両者の間にほとんど差が見られない。これによって、音韻の点数（共通

## 五箇村

音 韻 点	イ と エ								有 声						無 声			j i				ヒ と シ			語 い			
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	0	1	2	3	4	5	6	0	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	3
26									○						○		○			○				○			○	
25									○						○		○			○				○			○	
24									○						○		○			○				○			○	
23									○						○		○			○				○			○	
22									○						○		○			○				○			○	
20									○						○		○			○				○			○	
19									○						○		○			○				○			○	
18									○						○		○			○				○			○	
17									○						○		○			○				○			○	
16									○						○		○			○				○			○	
15									○						○		○			○				○			○	
14									○						○		○			○				○			○	
13									○						○		○			○				○			○	
12									○						○		○			○				○			○	
11									○						○		○			○				○			○	
10									○						○		○			○				○			○	
9									○						○		○			○				○			○	
8									○						○		○			○				○			○	
7									○						○		○			○				○			○	
6									○						○		○			○				○			○	
5									○						○		○			○				○			○	

語を話す度合)に差をひき起すのは、「イとエとの混同」、「有声化」、「j i の音」の三つの項目であらうと考えられる。この三つの項目、すなわち、音韻構造的特徴がおもに共通語を話す度合を左右していることは、白河市について尺度解析を施した模様図(図97)にも同じように見られた。

また、各小項目の平均点数の関係は白河市と村とはほぼ同様である。

いま、この関係をさらに詳しく見るために、白河市と同じように尺度解析を施して得た模様図(大づかみに見るために同点数群をまとめて作ったもの)は図98、図99のようである。

以上の模様図を見ると、語いと「ヒとシとの混同」とが同様な傾向を示すと見られるほかは、白河市と同じ模様であるとみなすことができる。

### 金山村全体

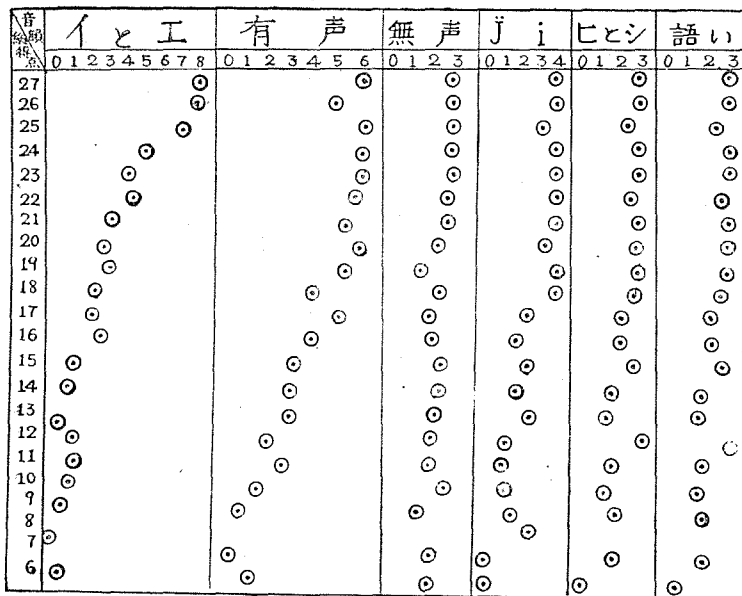


図 99

以上の結果により、どのような言語構造的特徴から共通語に近づくかと

いう現象は相當組織的な (systematic) 模様を示すものであり、大づかみに見るときは、この地方の言語状態において、各項目が一次元的関係を示していることは興味深いところである。

なお、265 べの表を見ると、金山村 A と金山村 B との間には、有声化の現象を除いて、組織的な差がありそうに思われる。つまり、金山村 B のほうが、有声化を除いて、共通語を話す度合がやや高いのではないかと考えられる。3.1 および 4.9 のところで述べたように、金山村 B は東白川郡棚倉町に地理的にも近いし、コミュニケーションの点でもかなり密接である。また、棚倉町が白河市よりも「標準語に近い」ということを白河市でよく耳にした。

そこで、金山村 B が金山村 A に比べて共通語で話す度合の高いことは棚倉町の影響ではないかと考え、昭和 25 年 10 月 8 日、機会を得て、棚倉町で小さな調査を試みた。すなわち、次のような 7 人について、白河市の戸別調査における音韻に関する項目 (22—26、項目数は 27 でなく 24) を白河市の調査と同じ方法で調べてみた。その結果は次のようである。

No.	年齢	言語	経歴	学歴	点数 (2点満点)	同じ条件 (年齢、言語経歴、学歴) の白河市民について	
						平均点	該当サンプル数
1	25—29	生	れ	つ	き	17	4
2	55—59	生	れ	つ	き	19	3
3	65—69	生	れ	つ	き	19	4
4	35—39	言語形成期後の若い時代東京で 20 年間過ごす			中学卒	18	2
5	30—34	生	れ	つ	き	20	3
6	40—44	生	れ	つ	き	14	6
7	25—29	生	れ	つ	き	21	4

さて、棚倉町 7 人の平均点は 18.3 で、これをほかの地点と比較すると、

白河市全部 (476人) の平均	16.8 (24点満点)
五箇村 " (75人) "	11.9
金山村 " (85人) "	13.6

のように、棚倉町が白河市よりも共通語を話す度合の高いことが見られる。しかし、特に、有声化の現象が著しいということは認められない。各項目について高いようである。

しかし、この小さな調査は被調査者の数も少なく、しかも、棚倉町を良く代表する良いサンプルであるという保証もないから、この結果はただ参考として報告するにとどめる。



#### 5.4 共通語を話すようになる過程という点から見た言語 構造的特徴相互の関係

5.3 において、共通語を話すようになる過程という点から目だったのは、

- 1) 「イとエとの混同」
- 2) 有声化
- 3) ji の音

の三つの構造的特徴であった。

いま、この三つの関係を見ると、まず、「イとエとの混同」と有声化との関係は次のようである。

有 声 イとエ	0	1	2	3	4	5	6	計
0	6	5	8	14	12	25	72	142
1	4	2	3	4	6	11	34	64
2		1	2	4	3	7	28	45
3	1	1	2	1	2	9	26	42
4					3	10	29	42
5	1				4	4	25	34
6				3	1	4	26	34
7					1	7	17	25
8			1		2	2	43	48
計	12	9	16	26	34	79	300	476

点数は、それぞれの項目について共通語形で反応した数。したがって、点数の少ないほど、それぞれの項目の特徴を示すことが多いわけである。

回帰関係は曲線的である。

上の表から、「イとエとの混同」がひどくなるにつれて変化して行く有声化の状況を見ることができる。しかし、尺度解析によって大づかみにながめるときほど、「イとエとの混同」に関する正しい共通語形による反応の消滅と有声化のはじまりとの明確な関係を見ることはできない。しかし、「イとエとの混同」に関する正しい共通語形による反応が減る（点数が小さくなる）につれて急激に有声化が増してくる状況は明らかである。

「イとエとの混同」と「ji の音」との関係については、「イとエとの混同」と有声化との関係と同様なことが言える。

ji イとエ	0	1	2	3	4	計
0	11	9	16	19	87	142
1	4	3	4	14	39	64
2	1	3	4	15	22	45
3	1	2	6	7	26	42
4	1	1	4	4	32	42
5		1	1	2	30	34
6		1	3	2	28	34
7				5	20	25
8			1		47	48
計	18	20	39	68	331	476

次に、有声化と「jiの音」との関係については、有声化がひどくなると「jiの音」がひどくなる状況が明らかである。試みに、「jiの音」の有声化への相関比と相関係数とを見ると、相関比は 0.241, 相関係数は 0.201 となる。ついで、回帰型が直線であるかどうかを検定してみると、有意な差が認められなかった。つまり、両者の関係の直線性は否定されないことになる。すなわち、一方が増せば一方も増すという関係が正比例関係に近いということが言えるのである。

「イとエとの混同」と有声化との関係、「イとエとの混同」と「jiの音」との関係が曲線的であるのに対して、この関係が直線的であることは注目しに価する。

ji 有声化	0	1	2	3	4	計
0		1	2	3	6	12
1	1	1	2	3	2	9
2	2	3	3	3	5	16
3		2	5	5	14	26
4	2	2	2	5	23	34
5	4	2	6	10	57	79
6	9	9	19	39	224	300
計	18	20	39	68	331	476

さらに詳しく見るために、「jiの音」に関する反応を、0, 1, 2, 3, 4の段階に分け、それぞれについて、「イとエとの混同」と有声化との関係を取ってみた。ところが、このようにしても、「jiの音」の現れることが

少なくなる（点数が大きくなる）につれて、「イとエとの混同」も少なくなり（点数が大きくなり）、有声化の現象の現れることも少なくなる（点数が大きくなる）ことが見られるだけで、特殊な関係を新たに見出すことはできなかった。

ji の音 0 点の者

有声化 イとエ	0	1	2	3	4	5	6	計
0		1	2		2	2	4	11
1						1	3	4
2							1	1
3						1		1
4							1	1
5-8								0
計	0	1	2	0	2	4	9	18

ji の音 1 点の者

有声化 イとエ	0	1	2	3	4	5	6	計
0	1	1	1	1	1	2	2	9
1			1		1		1	3
2			1	1			1	3
3							2	2
4							1	1
5							1	1
6							1	1
7-8							0	0
計	1	1	3	2	2	2	9	20

ji の音 2 点の者

有声化 イとエ	0	1	2	3	4	5	6	計
0	1	1	1	4		2	7	16
1	1	1				2		4
2					1	1	2	4
3			2			1	3	6
4					1		3	4
5							1	1
6				1			2	3
7								0
8							1	1
計	2	2	3	5	2	6	19	39

## ji の音 3 点の者

有聲化 イとエ	0	1	2	3	4	5	6	計
0	1	2	2	2	1	4	7	19
1	2			1	1	1	9	14
2		1	1	2	1		10	15
3							7	7
4					1	2	1	4
5					1		1	2
6						1	1	2
7						2	3	5
8								0
計	3	3	3	5	5	10	39	68

## ji の音 4 点の者

有聲化 イとエ	0	1	2	3	4	5	6	計
0	3		2	7	8	15	52	87
1	1	1	2	3	4	7	21	39
2				1	1	6	14	22
3	1	1		1	2	7	14	26
4					1	8	23	32
5	1				3	4	22	30
6				2	1	3	22	28
7					1	5	14	20
8			1		2	2	42	47
計	6	2	5	14	23	57	224	331

## 5.5 新語の普及度

いま、六三制、アルバイト、鉄のカーテン、コンクール の四つの新語が、白河市でどの程度普及し、また、どういうふうに普及して行ったと考えられるかということを調べてみよう。これは、共通語を話すようになる過程を明らかにするための一つの資料になるであろう。

新語の普及度が新語の理解度によって表わされると考えて、上の四つの新語の理解度（理解していると認められた者の％）を比較すると、

コンクール	77.6%
アルバイト	57.3%
六三制	38.2%
鉄のカーテン	33.4%

のようである。われわれの予想\* に反して、コンクールがいちばん良く理解されており、また、われわれの予想どおり、鉄のカーテン が最も理解されていない。

このような理解度の関係はどの要因について見ても認められる。図84、図85が示すように、いつもコンクールがとび抜けてよく理解されており、鉄のカーテンがいつも著しく理解されていない。

いま、コンクールだけについて見ると、この語がこんなに（全員で77.6%）普及していることは驚くべきことである。労働者B（日雇などの肉体労働者）が、他の3語については、4%ないし18.2%（鉄のカーテン 4.4%、六三制 9.1%、アルバイト 18.2%）の者しか理解していないのに、コンクールは59.1%の者が理解していることは、この語の普及の広さを思わせる。

この語ははじめはおそらくラジオを通じて普及したと思われる。現に「コンクールはのど自慢のこと、歌うこと」のように答えたものが目だっている。しかし、ラジオを聞く者と聞かない者による新語の理解度の差はそれほど著しくない。

コンクールがこのように広まったのは、おそらく、最近、白河市で盛んにコンクールが開かれていることによるのであろう。われわれが調査している期間中にもときどきコンクールのビラを町かどに見かけた。また、年齢についてはかなり著しい差があるから、おそらく、この語は、若い年齢層によるコンクール開催がきっかけになって、これほどまで白河市民一般に広まったのであろう。

---

\* われわれは、六三制、アルバイト、鉄のカーテン、コンクールの順に理解されていると考えて、調査票にもこの順序に項目を設けた。

## 6 結 び

以上によって、白河市という地域社会における共通語の実態を、共通語の地盤となる社会背景および共通語そのものの構造について研究するとともに、おもに、共通語を話す度合を決定する要因と共通語を話す度合の高まる過程および共通語を話すようになる過程との二つの面から分析してみた。その結果、共通語を話す度合を決定する要因は、一つ一つ切り離して考えると、(1) 本人の生育地または父母の出生地、(2) 学歴 の二つの要因が目だつけれども、これらにしても、決定的な要因とは認めがたい。しかし、以上のいくつかが集まった要因の束はかなり強力である。この要因の束は地域社会そのものの社会的要求を形成すると考えることができる。とすれば、共通語を話す度合を決定するのは、共通語を話させるようにする地域社会そのものの社会的要求であると考えられる。

また、共通語を話す度合の高まる過程については、「知らない人や旅行者」の場面が最も良く共通語の場面になっており、「家族」の場面が最も遅れていることが明らかになった。集団としては、「非ブーズー弁地域」で生育した者が最も良く共通語を話しており、西白河郡で生育した者が最も共通語を話していないように見受けられた。さらに、言語構造の点から見ると、「ヒとシとの混同」とか「無声化の現象」は最も良く共通語になっているけれども、「イとエとの混同」は最も共通語に近づいていないと考えられる。共通語を話す度合を決定する要因についてはすでに八丈島で調べたので、今度の調査は2度目である。八丈島における調査では、重要な要因として、居住経歴、特に島外居住年数が浮び上った。その上、言語形成期におけるおもな居住地、すなわち生育地は重要な要因として出てこなかった(「八丈島の言語調査」98—115 べ)。しかし、われわれとしては、「共通語を話さなければならない場面が積み重ねられることによって『共通語を話す度合』は高まっていく」(同書113べ)と結論しておいた。

八丈島における結果を今度の結果と比較すると、重要な要因として出てきたものは必ずしも一致しなかった。八丈島における調査は、サンプル数が多くなく(216人;なお、白河市では476人)、土地としても特殊なところであったこと、さらに、おもな指標を主観的判定に採ったことなどを考えると、今度の調査でつかんだ要因のほうがいっそう確実なもののように思われる。もっとも、大きな結論の目ざすところはほぼ同じである。

共通語を話す度合の高まる過程については今度の調査がはじめてである。われわれの得た結果は、場面についてはともかく、集団と言語構造的特徴については、白河市という特定の地域社会についてしかあてはまらないものである。特に言語構造的特徴は白河市の特殊な方言的特徴である。今後の調査では、このような特殊な特徴を一般的特徴として捕える必要はないであろうか。たとえば、「イとエとの混同」は「共通語で区別するものを区別しないような方言的特徴」として捕え、また、九州や新潟県などにある *ka* と *kwa* (および *ga* と *gwa*) との区別は「共通語で区別しないものを区別する方言的特徴」として捕え、さらに、「有声化の現象」などは「共通語の区別に対応する区別を有する方言的特徴」として捕えて、三者を比較するのはその一つの方法である。これによって、三つのうちどれが最も早く共通語に近づくかということを知ることができるであろう。こういうことを知るためには、上の3種類の特徴が全部見られるような言語の行われる地域社会を調査地点として選ぶべきであろう\*。

今度の調査では、個人の自然的要因、経歴的要因、社会的・地域的環境の要因、生育・居住環境の要因、コミュニケーション、社会的態度および共通語に対する態度・意識などについて調べたが、心理的な面の調査が欠けている。今後の調査では、パーソナリティ (personality) も一つの要因

\* 昭和25年(1950)の特定地点として選ばれた山形県鶴岡市および附近の農村は、この条件を満たす地域社会である。

\*\*1950年の調査では、projective method の一つである Rorschach test および suggestibility test を採用してこの面にも触れている。

として考えておくべきであろう\*\*。(\*\*)は前のページを見よ。

さらに、今後の調査で大切なことは言語的場面の分析ということである。日本語は場面によって著しく変動する言語である。それだけに、どういう場面では共通語を使い、どういう場面では使わないかということを詳しく研究する必要がある。これには「24時間調査」の方法が有効であろう。また統計的調査と事例研究 (case study) との融合を図る上にも「24時間調査」を平行して実施することが必要と考えられる。

なお、調査語一つ一つについての分析は今後の調査の結果と合わせて論ずることとし、ここでは省くことにした。

ところで、われわれの調査においては、白河市という特定の地域社会を選んで、一般的に、共通語を話す度合を決定する要因を明らかにしようとした。それには尺度として用いた数字の変化によって強い要因を見つけ出そうとした。しかし、こういう方法によっては、ある地域社会と他の地域社会とを、共通語を話す度合という点から比較することは困難である\*\*\*。地域社会の共通語を話す度合を比較するためには、たとえば、日常生活に最も必要な、基礎的な (basic) 語いを、どの程度方言で話しているかということによって測るのも一つの方法である (『八丈島の言語調査』173頁)。また、24時間調査によって、ある個人の一日の言語生活における共通語を使う割合と調査票によって調べられる共通語を話す度合との関係が、地域社会それぞれにおいて明らかになれば、地域社会の共通語を話す度合を互に比較することができる。しかし、そのためには、24時間調査の被調査者なるべく多くして、調査票によって調べられる共通語を話す度合のいっそう妥当な (valid) 関係を求めるようにしなければならない。

しかし、どういう調査にしても、調査員の個人差による変動をなるべく

---

\*\*\* もちろん、白河市と五箇村、金山村との比較は可能である (4.9 を参照)。また、主観的判定による割合によって比較することも可能であるが、そのためにも、厳密には調査員が同じであることが必要である。



少なくすることがなによりも大切である。それには、少数のすぐれた調査員が、しかも、一定の訓練を受けて調査に当るならば、その結果はいよいよ信頼できる (reliable) ものになるであろう。

ともかく、八丈島の調査がある意味の試し調査 (pre-test) となって、今度の調査では、共通語を話す度合を決定する要因がやや明らかになったと思われる。

共通語を話す度合の高まる過程および共通語を話すようになる過程については、なお今後の調査に期待すべきである。

## 第2部 個人の一日の言語生活

## 1. 「24時間調査」の課題と方法

### 1.1 「24時間調査」とは何か

戸別訪問して面接によって共通語を話す度合を調べる調査においては、見知らない旅の人と話すという場面に限られていた。それでは、それ以外の場面における共通語を話す度合はどうであろうか。これを知るために、特定の個人を選んで一日じゅうつきまりでその人の言語と言語生活とを全部記録し、調査票による結果と比較してみた。その結果は、すでに第1部4.7で述べた。このように特定の個人について一日じゅうつきまりでその言語と言語生活とを全部記録する調査をわれわれはかりに「24時間調査」(詳しくは「言語生活の24時間調査」)と呼ぶことにする。

24時間調査の第1の目的は、上に述べたように、戸別調査の場面と関連をつけることであった。すなわち、調査票による結果の数字(共通語を話す度合)が、どのような妥当性(validity)を有するかを知ることであった。さらに、附随的に、言語生活、特に談話生活の実態を知ることをも目ざした。これによって、統計的調査と事例研究(case study)との融合を図ることができた。さて、第2部では、後者についての結果を述べることにする。

### 1.2 調査の方法

被調査者を選ぶのには、戸別調査と関連して共通語を話す度合を調べるという点から、第1に、

1. ほとんど方言ばかりを話している人
2. ほとんど共通語ばかりを話している人
3. 1.と3.との中間の人

の三つの段階から選ぶようにしなければならない。さらに、職業（産業・職業）について特殊な人でないことと、男と女とを含むことなどを注意しなければならない。

国民の言語生活の実態を知るという点からは、いろいろな条件が平均的な人か、国民のうちで最も多数を占める階層の人かを選んだほうがいい。そのためにはむしろかなり多くの人について調べてその平均を求めるようにすべきであろう。

しかし、実際には、特定の人をお願いすることそれ自身にいろいろな困難が伴う。調査の趣旨を本人だけではなく家族の人にも良くのみこんで知らなければならぬ。調査が十数時間ぶっ続けて行われるので、調査員ばかりでなく被調査者も身体的・精神的に相当疲れることも承知してもらわなければならない。さらに、私事にかかわり、時に、仕事（商売）のじまになることも了承してもらふ必要がある。したがって、物分りの良い家庭の人には頼みやすいが、そうでない人には頼みにくいということがある。

われわれが実際に選んだ被調査者は次のようである。

1. 農民——男、51歳、高小卒、1歳から51歳まで白河市飯沢に居住、父の出身地も母の出身地も飯沢、妻の出身地は西白河郡五箇村田島字入方、1948年11月8日に記録。

2. 商家の主婦——女、49歳、文房具商、高小卒（後、裁縫学校卒）、1歳から15歳まで東白川郡塙町に居住、15歳から17歳まで水戸市に下宿して裁縫学校へ通学、17歳から49歳まで白河市に居住、父母とも出身地は東白川郡塙町、夫の出身地は白河市本町、1949年12月7日に記録。

3. 美容院主——男、45歳、美容師、高小卒、1歳から45歳まで白河市に居住、ただし18歳の時6か月東京に下宿して講習に出席、父母とも白河市の出身、1949年11月8日に記録。

4. 市役所の課長——男、57歳、師範卒、1歳から20歳まで石川郡沢田村、20歳以後栃木県黒磯、西白河郡、福島市、石川郡など転転し（教員

として), 後, 茨城県, 東京, 静岡県を会社の仕事などで転転とし, 57歳のとき白河市に移る, 父は西白河郡三上村, 母は同じく関平村の出身, 妻は石川郡浅川町の出身, 1949年11月8日に記録。ただし, この記録はいろいろなつごうで分析できなかった。

調査員は, ひとりの被調査者に2人の調査員がつききることにした。だいたい, 2人が同じことを平行して記録することにした。長い会話は2人が交代して記録するようにした。はじめは, 調査員2人が一日じゅうつききったが, こうすると調査員が非常に疲れる(食事もとれない)ので, のちには, 午前, 午後, 夜 の三つの部分に分け, それぞれ2人ずつで記録した。つまり, ひとりの被調査員に延べ6人の調査者がつくわけである。この方法によったところ, 調査員の疲れを最小限にとどめることができ, 疲労による記録の荒さを避けることができた。

調査の時間は「24時間」ではなく, 朝起きてから夜床へ入るまでの十数時間である。

記録の方法は, 最も原始的な手書き(handwriting)によるよりしかたがなかった。文字は調査員の好みと能率の良さによって, カタカナ, ひらがな, 漢字まじり, ローマ字などが用いられた。ときには, 便宜上ある種の略記号が用いられた。現在の速記を修正して用いることができれば, 記録はもっと正確に, もれなくできるであろう。録音機を一日じゅう平行的に使うか, 一日の一部分だけに使うかすれば記録の正確さと完全さとが補われるであろう。

記録する際には, 時刻, 話し相手, 場所, 言語, 話題などをできるだけ詳しく書き取るようにした。あとで二つの記録を照らし合わせて定本を作り, それに基いて分析を進めた。

被調査者につききるのは, 徹底的についてまわるのであって, 外出のときにもついて行った。記録は被調査者の話すことばだけであって, 話し相手のことばは記録しなかった。

### 1.3 調査の経過

上に述べた4人について調べるまでには、次のような準備作業を試みた。

まず、一日じゅううつききることがはたしてできるかどうか、どの程度記録できるかについて知るために、国立国語研究所の5人の職員がその父あるいは母について調べた。この際には、時刻、場所、話し相手の性、年齢および職業、さらに言語行動の種類（ラジオを聞く、隣人と雑談、新聞を読むなど）について記録した。この結果によると、この程度の記録は可能であるが、つききること自身にいろいろな困難の伴うことがわかった。

そこで、第1回の準備調査のとき、白河市の中学生（3年）と高校生250人に、その父あるいは母（不可能のときは家族のひとり）について一日じゅうの言語行動を記録してもらった。記録してもらったことは、時刻、場所、話し相手、言語行動の種類、および、できれば実際のことばである。同時に、新聞、ラジオの利用、手紙の読み書き、雑誌、告示板の利用などについても調べた。この結果から、一日じゅうの記録はかなり困難であるが、不可能ではないという見通しを得た。また、これらの調査によって、記録票のデザインについても考案することができた。

そこで、今度はわれわれ自身が直接記録することにした。記録は言語および言語行動をいっさい書き採るという方法を取ることにした。

### 1.4 分析の課題

一日じゅうの言語の記録は話しことばの研究に無限の資料を与えるが、ここでは次の課題について分析してみた。

- (1) 一日にどのくらい話すか
- (2) 一日の生活でどんなことばをよく使うか
- (3) 一日にどのくらい読んだり書いたりするか
- (4) 話しことばの文の長さはどれほどか

## 2. 一日じゅうの言語量

### 2.1 話題の数, 文の数, 文節の数

一日に使う延べのことばの数は数千であろうか, 数万であろうか。これについては, われわれはなんらの科学的知識も持ち合わせていない。

われわれが調べたところによると, まず, 話題の数は,

農 民	706
商家の主婦	731
美容院主	661

であって, 3人ともそれほど大差なく, 700 前後とすることができる。話題の数え方は実際にはかなりむずかしい。たとえば, お客と雑談しながら散髪している美容院主が, 店へ入って来る客にあいさつしたり, 使用人に命じたりする場合に, 話題をどう数えるかということが問題になる。このときは, われわれはお客との雑談が終るまでを一つの話題と考えた。枝葉の話題は無視して, 中心の話題についてだけ計算した。

次に, 一日じゅうの延べの文の数は, だいたい 2,600~3,000 と認められる。商家の主婦がやや目だって多いのは, 店に来る客との応対の多いことが原因であろう。

農 民	2,638
商家の主婦	3,206
美容院主	2,894

文節の延数はだいたい 8,500~10,000 と見られる。この数は自立語の延べ数でもある。

農 民	10,038
商家の主婦	9,290
美容院主	8,558

## 2.2 言語量の時刻別分布

一日のうちで、何時ごろ多く話し、何時ごろあまり話さないかを1時間単位に調べてみた。

農民、商家の主婦、美容院主の3人について見ると、図100および図101が示すように、ひとりひとり別別にながめると、一日のうちに大きな山がそれぞれ三つ認められる。それらの山は、朝、昼、晩の3か所にあることがわかる。これは、食事時にいちばん話をすることを示していると認められる。3人について調査をする前に、約250人の生徒に頼んで調べた24時間調査の結果を、言語行動の種類について合計したもの、これとだいたい同じ結果を示すことは興味深い。図102を見よ。

なお、3人について、少し詳しく見ると、農民と商家の主婦、美容院主とは型が違っていることがわかる。これは職業の相違および類似によって説明できると思われる。すなわち、農民は朝早く起き、朝食も早い、商店の主婦や美容院主は朝食が8時過ぎぐらいになる。昼食は農民は12時ごろに食べるが、客を相手の職業では遅れて午後2時ごろとなる。夕食はだいたい3人とも午後7時前後である。

なお、3人の話題による時刻別分布についてもだいたい同様の結果となった。図103を見よ。

## 2.3 一日の異語数

一日の異語（自立語）数は、農民2,324、商家の主婦2,138である。この単語数が個人の総使用語数の何%を占めるかは明らかでないが、農民にしても商家の主婦にしても一日に2,000語以上使っていることは興味深い。

いま、異語（自立語）数を文節（自立語）の延べ数と比較してみると、農民も商家の主婦も、一つの自立語が平均4.3回ずつ使われている。この点でも両者に違いのないのはおもしろい。



## 言語量の時刻別分布

一文節数による

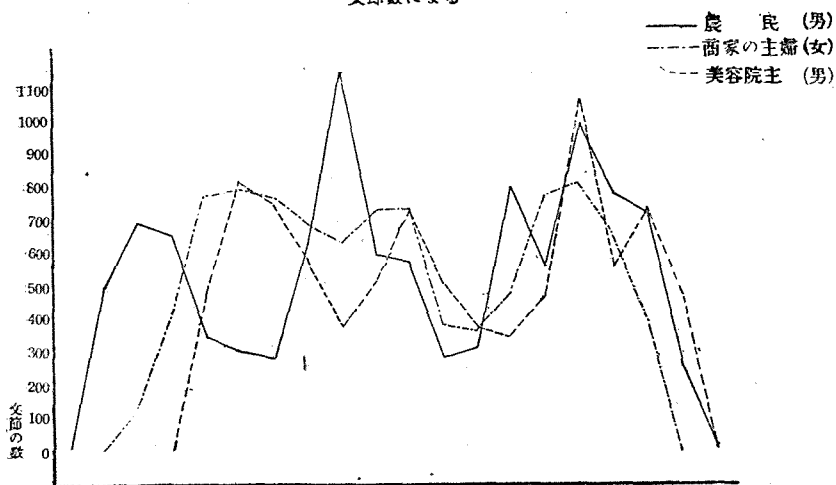


図 100

## 言語量の時刻別分布

一文の数による

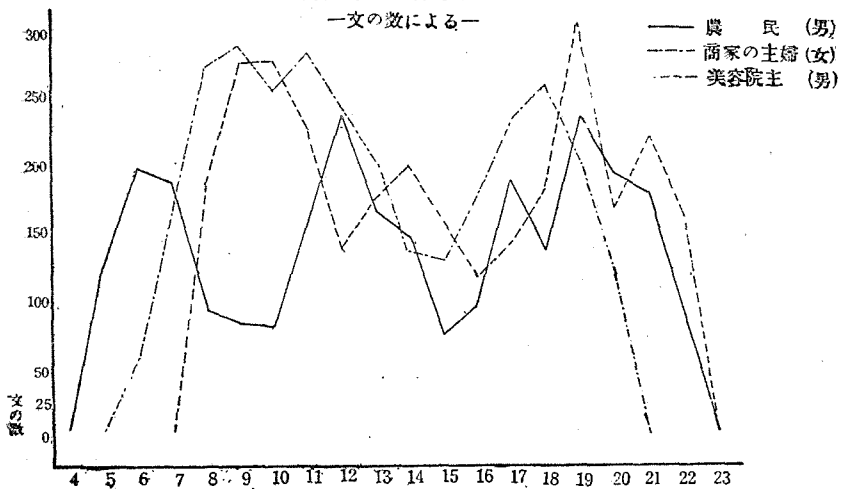
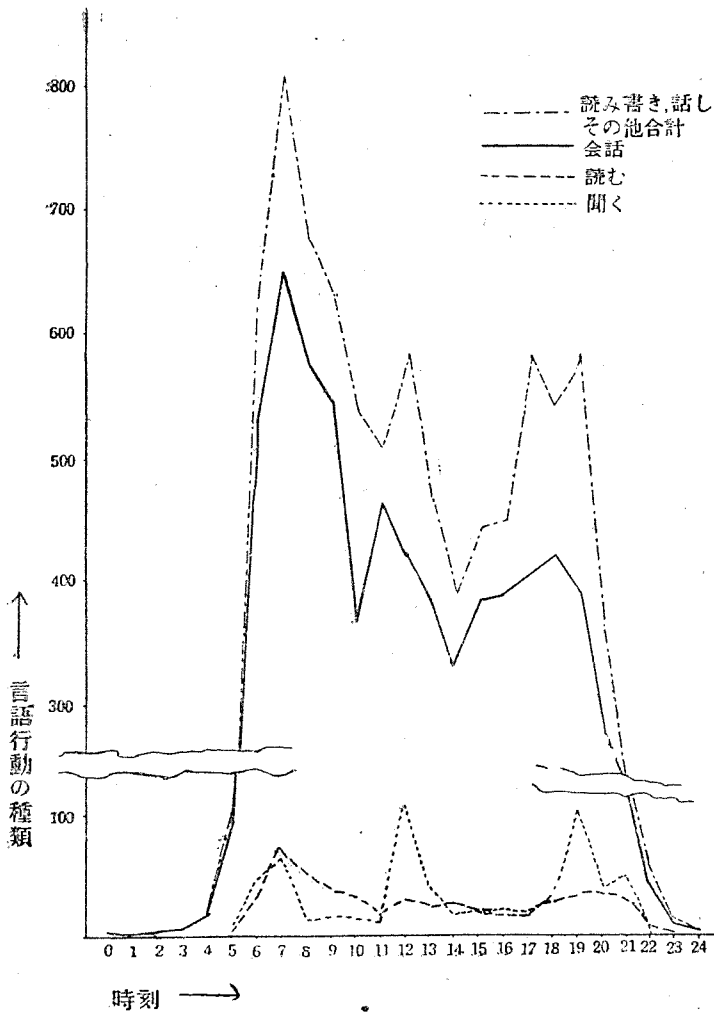


図 101

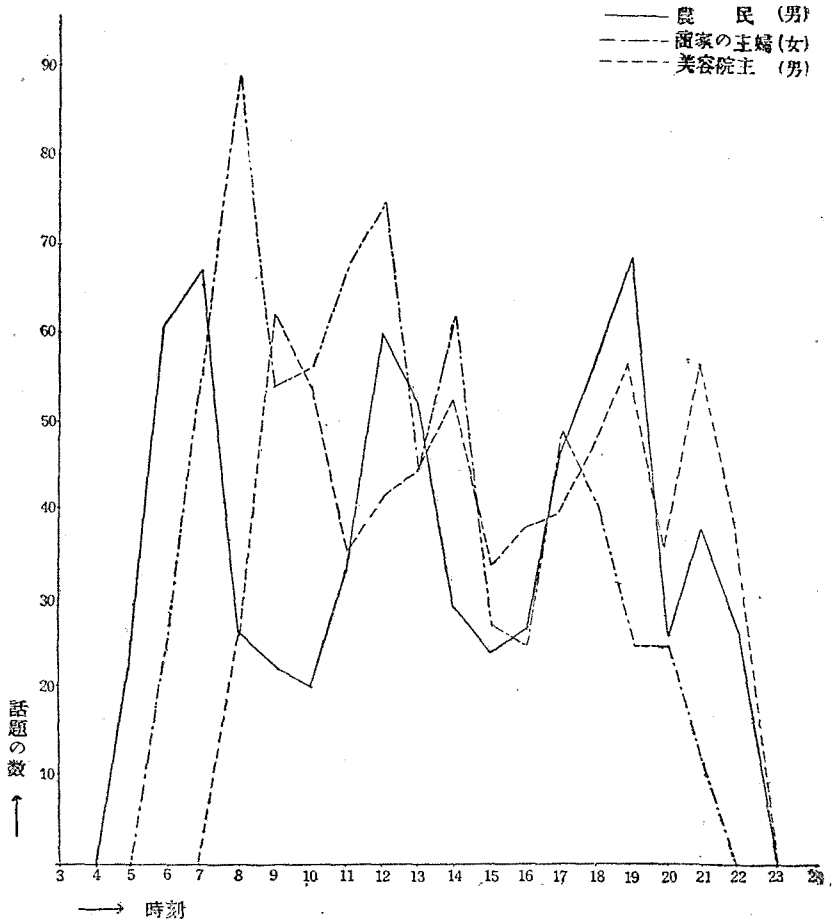
# 言語量の時刻別分布

—言語行動の種類による(生徒250人)—



# 言語量の時刻別分布

## ——話題の数による——



### 3 よく使われることば

#### 3.1 語と文節との使用度数

語（自立語）の使用度数順の曲線は図 104 が示すように、農民と商家の主婦とがほぼ一致している。このような曲線の型（L字型とすることができよう）は、外国語の文字言語に関する調査の結果および日本の漢字についての調査の結果に見られる曲線の型とほぼ同じである。

なお、文節についても同様な結果が得られた。

いま、農民と商家の主婦とについて最もよく使われている（度数 100 以上）語を見ると、次のように、両者共通して、具体的・実質的な意味を持つ名詞はなくて、指示語（代名詞と連体詞）、返事やあいさつのことば（副詞など）、基本的な用言などが現れる。

農 民		商家の主婦	
あれ	190	はい	359
これ	147	これ	172
ある（有る）	132	いい（良い）	164
それ	127	なに（何）	147
そお（そのように、副詞）	124	～ない	144
この	116	そお（そのように、副詞）	136
なに（何）	112	ある（有る）	126
～なる	103	ござる（ございます）	116
		ありがたい	100
		それ	100

10回以上の使用度数を持つ語および文節の個人別の一覧表を見ると、農民において10回以上使われている語（自立語）は合計5,622であり、これは総自立語数（総文節数）10,068の55.8%を占める。商家の主婦において

は 57.8% である。つまり、使用度数10回以上の語の総使用度数は一日の語の総使用度数の 56~58% (6割近く) を占めるわけである。また、使用度数10回以上の異語数は総異語数の約 8% を占める (農民 8.3%, 商家の主婦 7.6%)。

### 10回以上使われた語の度数順一覧表

#### — 農 民 —

( ), [ ]には語の意味を理解するための注をつけた。

語	度数	累積数	語	度数	累積数
あれ	190	190	みる (見る)	39	2828
これ	147	337	おらち (わたくしのうち)	37	2875
ある	132	469	とこ (所)	"	2902
それ	127	596	～みる (～てみる)	"	2939
そお	124	720	そっち	36	2975
この	116	836	ない	"	3011
なに (何)	112	948	のむ	35	3046
なる (成る)	103	1051	もつ (持つ)	"	3081
いい (良い)	99	1150	い (良い)	34	3115
～くる	94	1244	まだ	"	3149
うん	93	1337	した (下)	33	3182
いく	87	1424	みんな	"	3215
いま	86	1510	よい	"	3248
する	85	1595	いる	32	3280
ああ [感動詞]	81	1676	とき	"	3312
ほお (方)	75	1751	むぎ	31	3343
あれ [代名詞]	72	1823	こと	30	3372
とる	69	1892	ことし	"	3402
やる (行う, わたす)	"	1961	あと	29	3431
ね (無い)	67	2028	こお (このように)	"	3460
くる (来る)	65	2093	はやい	28	3488
あの	60	2153	もってく (持って行く)	"	3516
おら [代名詞]	56	2209	たいへんだ (大変だ)	27	3543
だめ	"	2265	ばっば (婆)	"	3570
いや (否)	54	2319	ひさこ (人名)	"	3597
やつ (あいつ)	47	2366	よく [副詞]	"	3624
ここ	46	2412	くさ (草)	25	3649
ね (無い)	"	2458	ちょ おど	"	3674
はあ	45	2503	つくる	"	3699
その	44	2547	わし [代名詞]	"	3724
こっち	42	2589	あっち	24	3748
あの [間投詞]	41	2630	～くれる (～てくれる)	"	3772
はいる (入る)	"	2671	～やる (～てやる)	"	3796
いれる (入れる)	40	2711	～いる (～ている)	23	3819
いや	39	2750	うえ (上)	"	3842
どこ	"	2789	うち	"	3865

語	度数	累積数	語	度数	累積数
でる (出る)	23	3888	おこす (起す)	14	4823
はたけ (畑)	"	3911	ちょっと	"	4837
もう (思う)	"	3934	どお	"	4851
もん (もの)	"	3957	なっちゅう	"	4865
あ	22	3979	ふる (降る)	"	4879
ええ	"	4001	やすむ (休む)	"	4893
きょお (今日)	"	4023	おおきい	13	4906
しかし	"	4045	おや (親)	"	4919
だす (出す)	"	4067	こおい (こういう)	"	4932
あした	21	4083	こんだ (今度)	"	4945
おちゃ (お茶)	"	4129	さあ [間投詞]	"	4958
たべる	"	4130	じぶん (自分)	"	4971
うし (牛)	20	4150	すこし (少し)	"	4984
そお [返事]	"	4170	た (田)	"	4997
かう (買う)	19	4189	だれ	"	5010
くう (食う)	"	4208	ちっと	"	5023
なってる	"	4227	はや (もう)	"	5036
ふうん	"	4246	よしひろ (人名)	"	5049
まえ (前)	"	4265	わしら (わたしたち)	"	5062
まく (種をまく)	"	4284	あさ (朝)	12	5074
ゆうべ	"	4303	あまり [副詞]	"	5086
うえる (植える)	18	4321	いくら	"	5098
つち (土)	"	4331	いるあ [感動詞]	"	5110
ひと (人)	"	4357	うなう (耕す)	"	5122
はら	"	4376	おもい (重い)	"	5134
～ゆう (～と言う)	"	4394	おわる (終る)	"	5146
あがる (上がる)	17	4411	かえる (帰る)	"	5158
いも (芋)	"	4428	かかる (要する)	"	5170
うらう	"	4445	かまう	"	5182
おえる (終)	"	4462	ごじ (5時)	"	5194
くつ (足にはくつ)	"	4479	しる (知る)	"	5206
できる	"	4496	だいこん (大根)	"	5218
むぎまき	"	4513	たいひ (肥料)	"	5230
もらう	"	4530	ちがう	"	5242
やま (山)	"	4547	とおか (10日)	"	5254
わかる (理解できる)	"	4564	とても	"	5266
ええ (良い)	16	4580	ねえちゃん	"	5278
おひる	"	4596	はんぶん	"	5290
こんな	"	4612	ひ (日)	"	5302
さといも (里芋)	"	4628	また	"	5314
そんな	"	4644	むかし	"	5326
ひとつ	"	4660	むこお [名詞]	"	5338
ゆう (言う)	"	4676	もっとも (ただし)	"	5350
おそい (遅い)	15	4691	あんちゃん	"	5361
おちる	"	4706	いる (要る)	"	5372
こないだ (このまえ)	"	4721	ええ [間投詞]	"	5383
ざる (一種のかご)	"	4736	おく (置く)	"	5394
つける (付ける)	"	4751	きょねん (昨年)	"	5405
なか (中)	"	4766	しごと (仕事)	"	5416
わりい (悪い)	"	4781	したあ (したら) [接続詞]	"	5427
あける (からにする)	14	4795	だから	"	5438
あれする	"	4809	て (手)	"	5449

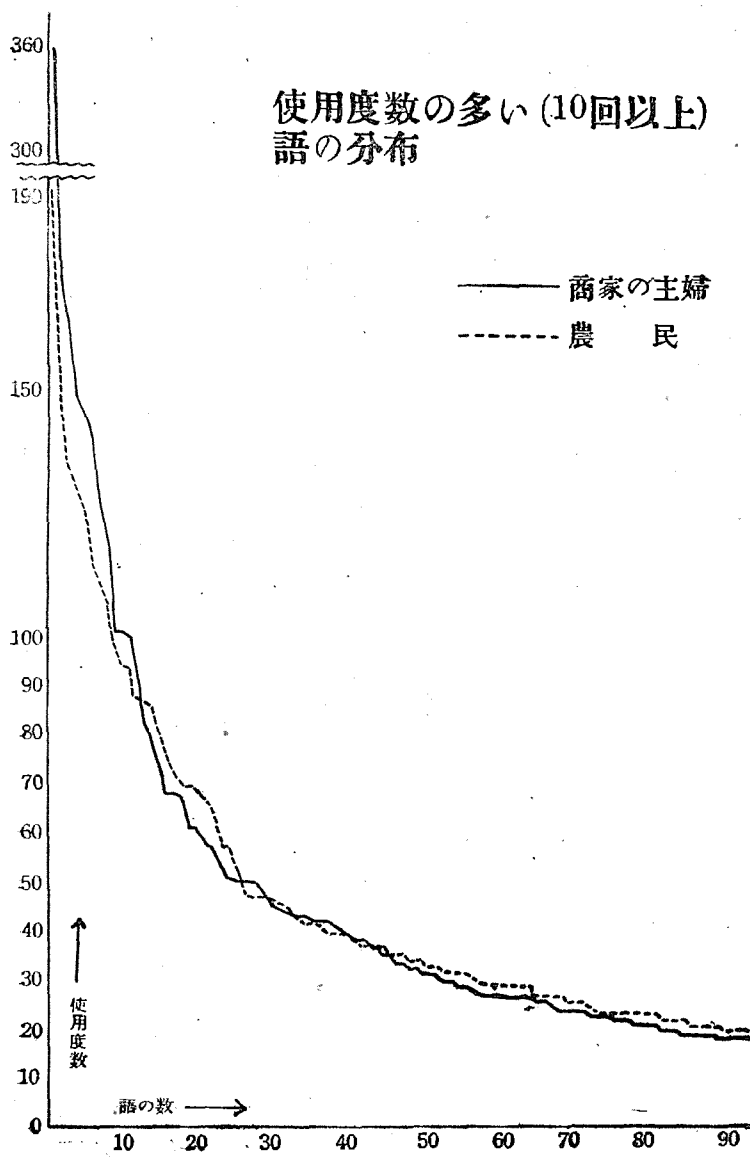
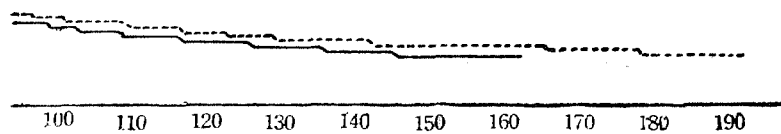


図 104





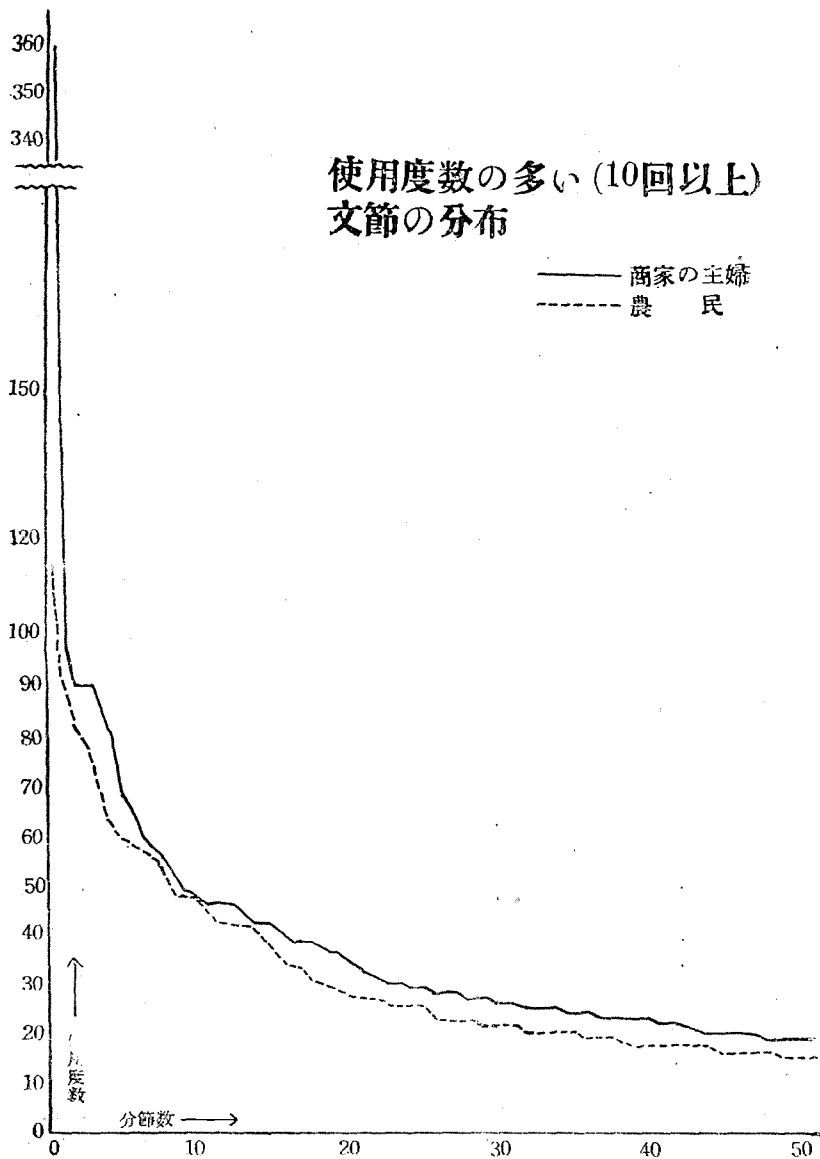
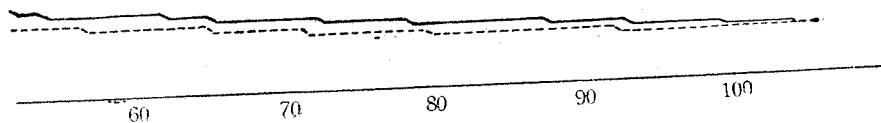


図 105



語	度数	累積数	語	度数	累積数
はお [感動詞]	11	5460	たね (種)	10	5552
もって (で)	"	5471	とし (年)	"	5562
らっかせえ (落花生)	"	5482	どれ	"	5572
あめ (雨)	10	5492	ひんぴょ おかい (品評会)	"	5582
いつ (何時)	"	5502	へん (辺)	"	5592
うまい (味)	"	5512	ほる (掘る)	"	5602
こいつ	"	5522	めし (飯)	"	5612
こども (子供)	"	5532	もと (以前)	"	5622
さけ (酒)	"	5542			

## 10回以上使われた語の度数順一覧表

## —商家の主婦—

語	度数	累積数	語	度数	累積数
はい	359	359	その	41	3048
これ	172	531	いま	40	3088
いい	164	695	きゅっ ちゃん [人名]	39	3127
なに	147	842	どお	38	3165
～ない	144	986	はあ	37	3202
そお	136	1122	～くださる	36	3238
ある (有る)	126	1248	いらっしやる	35	3273
ござる	116	1364	はいる	"	3308
ありがたい	100	1464	ふたよ ちゃん [人名]	"	3343
それ	"	1564	きょお	34	3377
する	99	1663	この	33	3410
ああ [間投詞]	90	1753	どこ	"	3443
ええ [返事]	81	1834	もつ (持つ)	32	3475
くる (来る)	78	1912	だす (出す)	31	3206
～なる	72	1984	とる (取る)	"	3537
あ	67	2055	あれ	30	3567
～くる	"	2118	とみおさん [人名]	"	3597
あげる (やる)	64	2182	うん [返事]	29	3626
あと	60	2242	だけど	"	3655
ない	"	2302	きく (聞く)	28	3683
ほお (方)	57	2359	ここ	"	3711
え [返事]	56	2415	いれる (入れる)	27	3738
わかる	52	2467	いる	26	3764
いくら	50	2517	じゃ	"	3790
ゆう (言う)	"	2567	ちがう	"	3816
あの	49	2616	ふうん [間投詞]	"	3842
～ゆう	"	2665	まだ	"	3868
そお [返事]	46	2711	やっぱり	25	3893
かく (書く)	44	2755	～あげる	24	3917
～ちよおだい	43	2789	すこし	"	3941
ひと	"	2841	うれる (売れる)	23	3964
ちょっと	42	2883	かう (買う)	"	3987
どおも	"	2925	ふくしゃ (複写)	"	4010
いく (行く)	41	2966	もしもし	"	4033
こっち	"	3007	だから	22	4055

語	度数	累積数	語	度数	累積数
でる	22	4077	いちばん(最も)	13	4862
は〔返事〕	"	4099	うら(裏)	"	4875
みる(見る)	"	4121	おいしい	"	4888
～みる	"	4143	おはよお	"	4901
いる(要る)	21	4164	さんじゅうえん(30円)	"	4914
じゃあ	"	4185	だって	"	4927
それから	"	4206	ほお〔間投詞〕	"	4940
わたし(私)	"	4227	まえ(前)	"	4953
つける(付ける)	20	4247	もってく(持って行く)	"	4966
なんまい(何枚)	"	4267	うち(家)	12	4978
もお	"	4287	こんど	"	4990
～ある	19	4306	じゅうえん(10円)	"	5002
おかえし	"	4325	すむ	"	5014
おちゃ(お茶)	"	4344	ちいさい	"	5026
こお	18	4362	とこ(所)	"	5038
ごはん(御飯)	"	4380	どっち	"	5050
へえ〔返事〕	"	4398	また	"	5062
いつてる(言っている)	"	4415	もの	"	5074
いまいさん〔人名〕	"	4432	もらう	"	5086
～いる	17	4449	～やる	"	5098
そこ	"	4466	あした	11	5109
そっち	"	4483	かける	"	5120
だめ	"	4500	がせんし(画仙紙)	"	5131
とき(時)	"	4517	かみ(紙)	"	5142
どれ	"	4534	ごえん(5円)	"	5153
みせ(店)	"	4551	すぐ	"	5164
みんな	"	4568	ふん〔間投詞〕	"	5175
やる(する)	"	4585	もとちゅう(元帳)	"	5186
いく(行く)	16	4601	うち(中)	10	5296
～こと	"	4617	おおきい	"	5206
ずいぶん	"	4633	かたい	"	5216
たいへんだ	"	4649	きょうちゃん(人名)	"	5226
さむい	15	4664	～くれる	"	5236
だれ	"	4679	さき	"	5246
どおぞ	"	4694	しかし	"	5255
～なっちゃう	"	4709	～しれる	"	5266
ひとつ	"	4724	だいじょうぶ	"	5276
いたたく	14	4738	たくさん	"	5286
いちまい(1枚)	"	4752	でてる(出ている)	"	5296
こちら	"	4766	でんぴょう(伝票)	"	5306
さきさん〔人名〕	"	4780	とりかえる	"	5316
そんな	"	4795	にじゅうえん(20円)	"	5326
むこう(向う)〔名詞〕	"	4808	にじゅうごえん(25円)	"	5336
～もらう	"	4822	はやい	"	5346
よい	"	4836	へ〔返事〕	"	5355
あさ(朝)	13	4849	まいにち	"	5366

## 10回以上使われた文節の度数順一覧表

## —農民—

文 節	度数	文 節	度数	文 節	度数
この	114	ふうん	19	いやあ	12
うん	93	こんで	18	おらちの(おれのうち)	"
ああ	81	しまう	"	こないだ(先日)	"
あれ	77	むぎ(麦)	"	とても	"
それ	64	いって	"	なんです	"
あの	60	ううん	17	また(ふたたび)	"
これ	58	こっち	"	みて(見て)	"
いや	54	こと	"	もって(思って)	"
いま	47	そお	"	もつとも(ただし)	"
おら	"	はやく	"	わし	"
はあ	45	ひさこ	"	あれだ	11
その	43	ゆう	"	あれも	"
あの	41	あと	16	いいんだ	"
おれ	"	ある(有る)	"	いも	"
いや	39	とこ(所)	"	ええ	"
いい	38	ばっば	"	ここえ	"
ほおが(方)	34	あれわ	15	ざといも(里芋)	"
だめだ	33	きて(来て)	"	すこし(少)	"
まだ	31	つち(土)	"	そおです	"
もって	"	なった(～なる)	"	そんで(それで)	"
こお	29	ひとつ	"	ちつと	"
して	27	ほお(方)	"	ほう	"
よく[副詞]	"	むぎまき	"	み(見て)	"
みんな	26	よかんべ	"	もって	"
そおだ(そのとおりだ)	25	くさ(草)	14	いれて	10
ちょおど	"	ことしわ(今年)	"	こお(来い)	"
あ	22	そっち	"	ここ	"
ええ[返事]	"	どお	"	ここに	"
しかし	"	とき(時)	"	これで	"
いんだ(良いのだ)	21	のんで(飲んで)	"	こんだ(今度)	"
おちゃん	"	はいって	"	ざる(いれもの)	"
やつ	"	ゆうべ	"	したあ(したら)	"
そお[返事]	"	あした	13	そおかい	"
どこえ	20	いまの	"	だから	"
とって(取って)	"	くつ(足にはく)	"	なって(～なる)	"
なに	"	さあ[誘い]	"	なんだ	"
やって	"	ちょつと	"	ねんだ(～ない)	"
これわ	19	はや	"	めし(飯)	"

## 10回以上使われた文節の度数順一覧表

## —商家の主婦—

文 節	度数	文 節	度数	文 節	度数
はい	359	これ	99	ええ[返事]	81
ありがとお	99	ああ	90	あ	67

文 節	度数	文 節	度数	文 節	度数
ございます	60	もしもし	23	みんな	15
ないの	57	ゆう(こういう)	"	あとわ	14
え	56	きて(へてきて)	22	あります	"
あの	49	は[返事]	"	いって(言って)	"
なに	"	だから	21	ない	"
そおですか	47	じゃあ	20	なにか	"
ございました	46	そおですね	"	いいですか	13
そお[返事]	"	どお	"	おはよお	"
ちょっと	42	もお	"	かって	"
どおも	"	あれ	19	きた(へてきた)	"
それ	40	かいて(書いて)	"	だって	"
その	39	きいて(聞いて)	"	とって(取って)	"
〜ちょ おだい	"	それから	"	ひとつ	"
あと	37	とお(このように)	18	ほお[間投詞]	"
はあ	"	へえ	"	ある	12
ほおが	34	いって(行って)	17	いちばん	"
この	32	きょお(今日)	"	これで	"
もって(持って)	31	すこし	"	それで	"
いま(今)	30	そお	"	どれ	"
いくら	29	だして	"	また	"
うん	29	なんですか	"	いらっしゃい	11
〜ください	28	ふたよちゃん[人名]	"	いいんですか	"
なんだか	"	みて	"	おかえし	"
いいの	27	きょおわ	16	ごはん(御飯)	"
とみおさん	"	ずいぶん	"	これわ	"
じゃ	26	ひとが	"	すぐ	"
ふうん	"	ふたえちゃん[人名]	"	ふん	"
して	25	あげます	15	いちまい	10
だけど	"	おちゃ	"	しかし	"
まだ	"	ここ	"	したの(する)	"
いらっしゃいまし	24	こっち	"	たくさん	"
やっぱり	"	そおです	"	へ[返事]	"
あげますか	23	どおぞ	"		
きゅうちゃん	"	〜ない	"		

### 3.2 よく使われる語の個人的相違

3.1 で述べたように、100 回以上現れる 8 語ないし 10 語のうち、6 語までが農民と商家の主婦とに共通であるほど、両者におけるよく使われる語の類似度は高い。しかし、もう少し詳しく見ると両者にかなりの差が認められる。

いま、使用度数が 50 以上の語について両者を比較すると 300 ペ以下に示すようになる。ところで、一日のうちに 50 回以上も使われるような語は、その人にとって基本的な語であろうと考えられる。さて、上にあげたもの

のうち、農民または商家の主婦のどちらかが50回以上使っているにもかかわらず、他の一方が10回も使わない語がある。これらは、よく調べてみると、職業的に必要であるため、あるいは方言か共通語かの違いのため、または男女の別によって区別されるためであると説明することができる。

すなわち、次の語が商家の主婦によく使われて農民にあまり使われないのは、職業（文房具商）上使われるためであると考えられる。

あげる

ありがたい (cf. ありがとうございます)

～ござる (cf. ありがとうございます)

はい

「おら、おれ」は農民によく使われるが、商家の主婦にはあまり使われない。これは、これらの語が女性的な語でない（したがって、女性が全く使わない、という意味ではない。現に白河では女性も「おら、おれ」を使っている）ためと、商家の主婦が共通語形をよく使うためであると考えられる。

「～ない(そうでない)、ない(～がない)」が商家の主婦によく使われて、農民にあまり使われず、そのかわり、「ね(ない)」がよく使われるのは、前者が共通語をよく話し、後者が方言を話すためと考えられる。

次に、農民に「いや」がよく使われて「え」があまり使われないのは、農民が方言をよく使うからであろう。商家の主婦がこの逆であるのは、この人が共通語をよく使うためと考えられる。「いや」が商家の主婦にあまり使われないのは、これが女性的なことばでないためと見なされる。なお、商家の主婦は「いや」のかわりに「いいえ」を使っていることを、後日、実際の会話から調べることができた。

空白は10回以下を示す

	農民	商家の主婦
あ	(22)	67
ああ〔問投詞〕	81	90
あげる(与える)	— cf. やる 7)	66 cf. やる 17
あと(後)	(29)	60

	農民	商家の主婦
あの	60	(49)
ありがたい	—	100 ありがたいございます (職業上)
あれ〔指示代名詞〕	192	30
ある(有る)	131	126
いい(良い)	99	164
いく(行く)	88	(44)
いくら	(12)	51
いま(今)	86	(40)
いや(否)	54	(6)
うん〔返事〕	93	(29)
え	— cf. うん 93	56 cf. うん 29
ええ〔返事〕	(22)	81
おら〔代名詞〕	56 cf. わたし10以下	— cf. わたし21
おれ	72 cf. わたし10以下	— cf. わたし21
くる(来る)	67	80
～くる	92	67
～ござる〔補助用言〕	—	116 ありがたいございます (職業上)
この〔指示代名詞〕	116	33
これ〔指示代名詞〕	147	172
する(行う)	87	99
そお(そのように)	135	139
それ〔指示代名詞〕	127	100
だめだ(駄目だ)	56	(17)
とる(取る)	69	(31)
ない	(36)	60
～ない	— cf. ね 67	144 cf. ね10
なに(何)	112	147
～なる(成る)	108	71
～ね	67 cf. ない 10以下	— cf. ない 144
はい〔返事〕	—	359 職業上
ほお(方)	75	57
やる(いかせる, 与える)	70	(17)
わかる(分る)	(17)	52



#### 4 一日のうちにどのくらい読み・書きするか

一日のうちにどのくらい読み・書きするかということを農民、商家の主婦、美容院主について分析した。

その結果によれば、書く言語生活はきわめて少ないことが3人に共通している。

農民 3分間

美容院主 2分3秒

新聞を読むのに費す時間 もあまり多くない。

農民 約1分間

商家の主婦 1分3秒以上

美容院主 1分ぐらい

読み・書きに費す時間は3人とも10分を越えない程度と認められる。

以上により、一日の言語生活において、読み・書きに費す時間はきわめて少ないと言えるのではなからうか。

3人についての分析を詳しく示せば次のとおりである。

---

\* 清水幾太郎「ジャーナリズム」(岩波新書3) 141 べによれば、「一般の読者が非常に忙しくて、新聞のために多くの時間をさくことができないのは確実である。しかし毎日どの位の時間をこれに費しているのか。ウォルター・リップマン(Walter Lippmann)によれば、異なった時間と場所と方法とをもっておこなわれた三つの調査は、ほぼ一致した結果を示している。これらの調査のいずれによっても、調査人員の70パーセント乃至75パーセントは、新聞を読むのに一日十五分を使用している。私が粗雑な方法で自ら調査した結果も、おおむね十五分ということになっている。」調査の対象、方法などが詳しく示されなければ、これを科学的な数字として受取ることとはできないが、ともかく、これは、特定の都会生活者の場合ではないだろうか。また、おそらく、質問方法で調べたために、実際より多く見積られているのではなからうか。一方、われわれの「24時間調査」では、つききりで記録されるために、他の日よりは少ないということも考えられる。

## 農 民

時 刻	場 所	読・書	内 容	時 間
朝 6.30~	須ぼた	読	新 聞	約1分間
昼 {12.30~	"	読	聞 刺 状 (品評会)	約5分間
{13.00~	"	読	賞 日 記 帳 (古)	3分間
夜 {22.00~	"	読		
"		4・1		9分+α
				6分・3分
				読・書

## 商 家 の 主婦

時 刻	場 所	読・書	内 容	時 間
6.30~	居 間	書	出荷案内	1分間
7.00~	"	読	新聞 (福島民友)	
"	"	読	新聞 ( " )	
7.30~	"	読	新伝票	約30秒
8.00~	店 先	書	領收書 (白陽タイムス)	
"	"	読	新伝票	
9.00~	"	書	手紙とはがき (計6通)	約20秒
"	居 間	読	はがき	
9.30~	"	書	はがき	
10.00~	店 先	書	はがき 伝票	約1分半
"	"	読	メ モ 新聞 (白陽タイムス)	
"	"	書	新メ (経済新聞3面)	
10.30~	"	読	同覧板	約5枚
"	"	読	新聞 (白陽タイムス)	
11.00~	"	読	プリント (専売公社)	
11.30	"	書	はがき (商用)	3分20秒+α
"	"	書	領收書	
12.00	"	読	名 刺	
13.00	"	書	領收佐票	1分30秒
14.00	"	書	仕切書	
14.30	"	書	メ モ 手紙	
15.30	居 間	読	新聞 (白陽タイムス)	1分30秒
17.30	店 先	読	新聞 (ながめるだけ)	
19.00	居 間	書	商用の書類	
19.30	"	読	書類 (自筆の)	
		16・13		

## 美 容 院 主

時 刻	場 所	読・書	内 容	時 間
9.00~	居 間	読	はがき (受けた礼状)	1分間
"	"	読	ビラ (郵便局の)	30秒間
13.00~	"	読	はがき	1分30秒
13.30~	"	読	広告(半紙半枚の郵便案内)	

時 刻	場 所	読・書	内 容	時 間
13.30	居 間	読	はがき (読みあげる)	1分間
17.00	店 内	書	メモ (計算)	2分間
"	"	読	新聞 (毎日新聞1面下広告)(ちらりと)	
"	"	読	広告 (労働者保険) 3枚	1分間
"	"	読	新聞 (広告)	1分以内
"	"	読	新聞 (毎日新聞)(内容は読まないらしい)	
18.30~	"	書	メモ (数字合計)	30秒
21.30~	居 間	読	はがき (家具店関係)	
"	"	読	手 紙	
<hr/>				8分30秒+α
				6分・2分30秒
				読・書

11.2

## 5 話しことばの文の長さ

農民、商家の主婦、美容院主について、文の平均の長さを求めると、だいたい 3—4 文節である。文を、長さの順に並べたとき、その中央の位置に来る文の長さを見ると、平均よりも長いが、やはり 3—4 文節あまりである。

	平均 $\left( \frac{\text{総文節数}}{\text{総文数}} \right)$	中央値
農 民 (男)	$\frac{10068}{2638} = 3.81 \text{ 文節}$	4.05 文節
商家の主婦 (女)	$\frac{9290}{2206} = 2.89 \text{ 文節}$	3.05 文節
美容院主 (男)	$\frac{8558}{2894} = 2.92 \text{ 文節}$	3.25 文節

話しことばの文の長さについては、書きことばより短かいであろうとは予想されていたが、はたしてそれが証明された。ちなみに、新聞用語の文の長さ（一文の文節の平均実数）は 18.8 であり<sup>\*</sup>、放送用語の文の長さは 9—18 文節である<sup>\*\*</sup>。

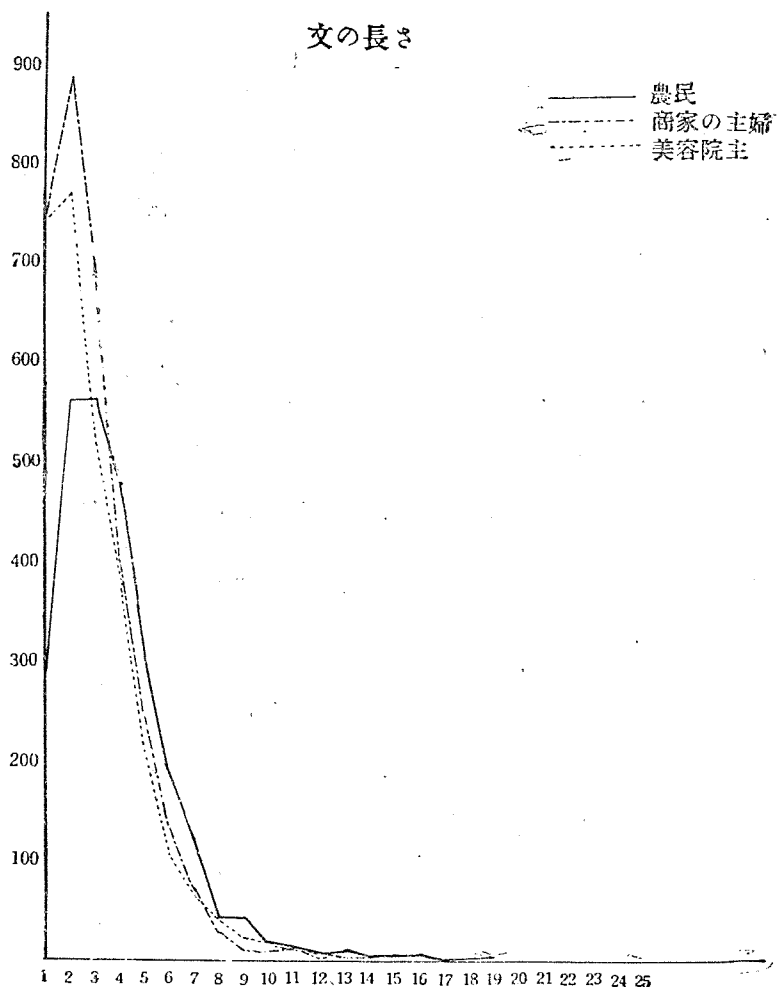
\* 文部省：「やさしい新聞文章」（国語シリーズ 1）昭和 25 年 12 月。これは朝日新聞（最終版）の 1948 年 9 月 15 日から 10 月 30 日までのニュース記事 68 件について調べたものである。

\*\* 放送文化研究所が 1949 年 1 月（放送文化研究所月報 No. 13）に発表した結果によれば、次のようである。

種 目	グラフの頂点【度数の最も高い文節】	平均数
家庭の話題	9 文節	12.3 文節
ニュース	10	15.0
時のうごき	13	16.6
文化だより	17	17.7
学校新聞	16	20.6

なお、この月報によれば、朝日新聞の社説は、13 文節の文が最もよく現れ、1 文の平均文数節は 16.9 となっている。

これは、それぞれの種目のスクリプトについて、それぞれ 200—1,100 個の文を材料にして調べたものである。



## 6 よく使われる語の使用度数順一覧表

次(309ページ以下)の二つの一覧表は、使用度数10回以上の単語(異なる自立語)を使用度数の順に並べるとともに、語と文節との関係を具体的に示したものである。一覧表の一つは農民、他の一つは商家の主婦についてまとめたものである。

さて、次に、整理のしかたおよび表そのものについて説明しよう。

まず、見出しのことは語を基準とした。つまり、同一の語と認められるものは一つにまとめた。しかし、実際に、二つ以上の形を、まとめて一つの語と認めるべきかどうかについて問題のある場合がかなりあった。その場合には、まず、形(形態音素の連続)が異なるものは別にした。たとえば、「よい」と「いい」とは形が違ふと認められるから、別々の見出しことばになっている。しかし、「いった」、「ゆった」、「ゆう」(言)は同じ形と認められる。つまり、同じ形態音素 /i-/ を有すると認められるから、一つの基本形にまとめた。ただし、「ならない」と「なんない」は便宜上一つにまとめたが、別にしたほうが良かったかもしれない。なお、「なに」、「なんでも」を一つにまとめたのは、「なに」と「なん」とが続く音に対して相補う関係にあるからである。つまり、「なんでも」という形はあるが、「なにでも」という形は普通見られないからである。

次に、形が同じでも文法的機能が異なれば別の見出しことばとした。たとえば、「あとで来る」と「帰ってくる」とでは、同じ「くる」でもその文法的機能が異なる。つまり、前者は実質的な意味を持った動詞であるが、後者は形式的な意味しか持たない補助動詞である。そこで、この二つの形をそれぞれ「くる」、「～くる」のように区別し、別の見出しことばとして扱った。この種の語には、「ない」と「～ない」、「なる」と「～なる」、「みる」と「～みる」、「くれる」と「～くれる」、「やる」と「～やる」、「い

る」と「～いる」などがある。

さて、形も文法的機能も同じであるのに意味が著しく異なる場合には別の見出しことばとした。意味の違いを認めるのには、ひとまず、漢字で書き分けられるかどうかということを基準とした。たとえば、「(……するのには……が) いる」(要る)と「(……に……が) いる」とは別の見出しことばとした。

次に、どこまでを語と認めるかという問題がある。われわれは、「でてゐる」(出ている)、「もってく」(持って行く)をはじめ、「なっちゃう」、「あれする」も一つの語として扱った。

見出しのことばの次のかっこには語の意味を知る手がかりを与えておいた。

見出しのことばは、使用度数10回以上のものを度数の順に並べた。数字はその左方の語または文節の度数を示す。

文節は語幹の「五十音順」に並べた。

## 農 民

あれ	190	～と	1	～わ	2
あれ	77	～な	1	～んだ	5
～か	6	～なあ	3	～んだから	4
～が	3	～なんです	1	～んだけっとも	1
～かい	3	～に	1	～んだけど	1
～かな	1	～ね	1	～んだけんにょも	1
～から	3	～の	2	～んです	1
～きり	1	～も	8	あれば	2
～だ	11	～より	1	あんだ	5
～だからな	1	～わ	19	～だい	3
～だけでも	1	こんだって	18	～だもの	1
～だけども	1	～で	1	～な	1
～だけな	1	ある(ある, 有る)	132	～なあ	1
～だぜ	3	あつか	6	～のか	1
～だぞ	3	～から	6	～べ	1
～だつと	2	～けつとも	1	～べえ	9
～だと	3	～けんども	1	～べとい	2
～だな	4	～た	1	～まい	1
～だなあ	1	～たあ	1	～まいか	2
～だね	1	～たか	1	～まいな	3
～だもの	3	～たがね	1	～め	1
～だらば	1	～たから	3	～めえ	3
～だろ	1	～たけんども	1	～めか	1
～だわ	1	～たし	1	それ	127
～だわい	3	～たっけかな	2	それ	64
～だんだ	3	～たったから	1	～お	1
～だんだよ	1	～たです	2	～が	4
～だんだわい	1	～たな	1	～から	4
～だんべ	9	～たね	1	～じゃ	1
～だんべえ	1	～たの	2	～だからね	1
～で	3	～たもの	1	～だけ	2
～です	3	～たら	1	～だけの	1
～ですから	1	～たんだ	1	～で	7
～ですから	2	～たんだから	1	～てえ	1
～ですな	2	～たんですね	1	～でも	1
～なんだ	2	～たんばい	1	～でわ	6
～なんでしゅう	1	～て	1	～ね	1
～なんです	1	あります	3	～の	1
～に	1	～やした	2	～まであ	1
～ね	1	～やす	4	～より	2
～の	2	～やせん	1	～わ	2
～も	4	ある	16	～んじ	3
～わ	15	～がな	1	～だ	1
これ	147	～から	2	～だから	4
これ	58	～さ	1	～だら	1
～が	4	～ぞ	1	～で	11
～から	7	～つて	1	～でも	4
～さ	4	～でしゅう	1	～でわ	2
～じゃ	1	～と	1	～なら	1
～だけ	1	～な	2	それ	124
～で	1	～ね	1	それ	17
～です	10	～の	2	～か	3
～ですか	2	～め	1	～かい	10
～でも	3	～ように	1		



～かえ	2	～ですよ	4	～ねんだもの	1
～かな	3	～でも	5	～べ	1
～かなあ	3	～とも	1	～まい	2
～け	3	～とも	2		
～けえ	2	～に	1	いい	90
～さ	2	～にも	5	いい	38
～さな	3	～の	1	～か	1
～さなあ	1			～かな	1
～す	4	なる(成る)	108	～かも	1
～すか	2	なっか	1	～から	1
～すね	1	～た	15	～かん	1
～た	1	～たから	3	～かんね	1
～た(でわ)	2	～たし	1	～けつと	2
～た	25	～たぜ	2	～けど	1
～だつたぞ	1	～たって	1	～けどな	1
～だと	1	～たと	1	～けんど	2
～だに	1	～たな	2	～けんども	1
～だね	2	～たね	1	～けんどもさ	1
～だねえ	1	～たの	1	～さ	2
～だんべ	3	～たのか	1	～ぞ	2
～だんべて	1	～たべ	1	～だ	1
～で	4	～たら	2	～だろ	1
～でしゅう	2	～たんだ	1	～でえあ	1
～でしゅうね	2	～たんだけど	1	～でしゅう	2
～です	11	～たんです	3	～ですと	1
～ですか	6	～たんべ	1	～と	5
～ですな	1	～て	10	～な	8
～なんです	1	～てから	7	～の	1
～に	1	～てからかな	1	～のお	2
～わ	2	～てからね	1	～や	2
		～てからわ	1	～よな	1
この	116	～てね	2	～わ	1
この	114	～つと	1	～わい	1
～くらい	1	ならないんだけど	1	～んだ	11
～くれ	1	～ないんです	1	～んだけつと	1
		～なかつたんだから	1	～んです	2
なに(何)	112	～ね	1	～んですよ	1
なに	20	～りました	2	いく(良く)	1
～か	2	～ました	1		
～かに	1	～やした	2	くる(来る)	94
～ね	1	～やしたかね	1	きた	6
～ほど	1	～やしたね	1	～たい	1
～も	9	～やしお	1	～たけど	1
なんか	2	～やす	1	～たの	3
～せ	2	なるかな	2	～たのかい	1
～だ	10	～から	1	～たのけ	2
～だい	3	～でしゅう	1	～たら	2
～だか	6	～と	3	～たんだ	2
～だって	7	～な	1	～たんだい	3
～だない	1	～のわ	1	～たんです	1
～だない	1	～まで	2	～たんべ	1
～だね	4	～んだ	3	～て	15
～だの	1	なれば	5	～てね	1
～だろ	1	なんないんです	1	～てます	1
～だろお	2	～ねえ	1	～てやすからな	1
～だわい	1	～ねえんだ	1	くつか	1
～で	3	～ねかな	1	～から	3
～です	12	～ねぞ	1	～と	3
～です	3	～ねものな	1	くる	2

～ぞ	1	～たっ たです	1	～なくて	1
～と	3	～たっ たね	1	～なけりゃ	1
～に	1	～たっ て	4	～ねんだ	2
～わ	1	～たな	1	～ば	1
～んだ	1	～たね	1	～ぶうかな	1
～んだね	2	～たの	1	～ようと	1
くれば	5	～たら	2	しれば	1
くんじゃ	1	～たり	2	しろ	1
～んだんべ	1	～たろ	1	～や	2
こ	2	～たろなあ	1	しんたって	1
こい	2	～たんけ	1	～のは	1
こいつ	1	～たんだ	4	すっと	1
こお	10	～たんたべな	1	すりゃあ	1
こなかったか	2	～たんだんべて	1	するように	1
～なかったの	1	～たんべ	3	～んだ	1
～なくつゝ	2	～ち	2	～んだがね	1
～なくて	1	～て	15	～んだこう	1
～ね	1	～てからで	1	すれば	2
～ねか	1			すんべと	1
～ねかったた	1	いま	86	せ	1
～ねだろおか	1	いま	47	せんからね	1
～ねの	1	～あ	1		
～ねんだ	1	～から	3	ああ(間投詞)	81
こらっして	1	～でも	1		
こんねくて	1	～でわ	3	ほお(方)	75
		～に	3	ほお	15
うん	93	～の	13	～え	4
いく(行く)	87	～のね	1	～えわ	1
いかね	1	～のわ	1	～が	34
～ねかったね	1	～まで	2	～がな	1
～ねけりゃ	1	～までので	1	～さ	1
～ねしね	1	～までのの	1	～です	2
～ねで	2	～までわ	2	～でも	2
～ねなあ	1	～より	3	～でわ	3
いきました	1	～わ	4	～に	3
～ましたた	1	する	85	～まで	1
～やした	1	した	7	～わ	8
～やしたた	1	～たか	1	おれ	72
～やし	1	～たかって	1	おりゃ	4
いく	3	～たかな	1	おれ	41
～ぞ	1	～たから	1	～あ	1
～つて	1	～たっ たから	1	～え	1
～ですから	1	～たっ て	3	～が	1
～と	1	～たな	1	～に	1
～ど	3	～たね	1	～の	2
～の	2	～たの	3	～のの	1
～のに	1	～たら	2	～のも	1
～のにな	1	～たんだ	1	～も	11
～べ	1	～たんでわ	1	～わ	7
～めえな	1	したい	2	～んの	1
～んだ	2	～ちゃ	1		
～んだから	1	～つ たからね	1	とる	69
～んだけんども	1	～つ たんだ	2	とっち	1
いけ	1	～て	27	～て	20
いけば	1	～てえ	1	～てから	3
いった	8	～ても	1	～てからで	1
～たか	1	～ないです	1	～ても	1
～たっ たか	1	～ないですわ	1	～た	7

～たから 1  
 ～たからだね 2  
 ～たこつたら 1  
 ～たつて 3  
 ～たなあ 1  
 ～たの 2  
 ～たら 1  
 ～たんだ 2  
 ～たんだから 1  
 ～と 1  
 とられるんです 1  
 ～んね 2  
 ～んねように 1  
 とりなんしょ 1  
 とると 1  
 ～なんて 1  
 ～わ 1  
 とれ 1  
 とれば 2  
 とろ 1  
 とんねえ(とらない) 1  
 ～ねか 1  
 ～ねくて 2  
 ～ねたつて 1  
 ～ねで 2  
 ～ねものな 1  
 ～ねんだもの 1

やる(する) 69

やっか 1  
 ～から 3  
 ～たか 2  
 ～たけど 1  
 ～たつたんか 1  
 ～たつて 2  
 ～たつても 1  
 ～たの 1  
 ～たのけ 1  
 ～たら 1  
 ～たんだ 2  
 ～たんだがね 1  
 ～たんだから 1  
 ～たんです 7  
 ～たんべ 1  
 ～ちっ 2  
 ～て 20  
 ～てね 1  
 ～ても 1  
 やらっし 1  
 やらないけんど 1  
 やる 2  
 ～から 1  
 ～そおです 1  
 ～の 1  
 ～よ 1  
 ～んだ 1  
 ～んです 1  
 ～んですね 1  
 ～んど 2

やれ 1  
 やれば 2  
 やんねえつて 1  
 ～ねです 2

ね(～くない, ～でな  
 い, ～ない しょう 67  
 ないの類)

ねい 1  
 ねえ 1  
 ～と 1  
 ～な 4  
 ～なあ 2  
 ～の 2  
 ～のい 1  
 ～のお 1  
 ～のかつて 1  
 ～のけ 1  
 ～もの 1  
 ～もんな 1  
 ～わい 1

ねか 8  
 ～が 1  
 ～かい 3  
 ～かつた 1  
 ～かつたからさ 2  
 ～け 2

～けつと 1

～けど 1

～けりゃ 1

～けんど 1

～で 1

～と 1

～な 3

～や 4

～わ 2

～わい 1

～んだ 10

～んだから 1

～んだな 1

～んです 1

くる(来る) 65

きた 1

きた 5

～たでしゅう 1

～たの 1

～たら 4

～たり 1

～たわ 1

～たんだ 1

～たんだから 1

～たんだもの 1

～たんです 1

～たんべ 1

～て 9

～てえ 2

～てたものな 1

～てたんだ 1

～てやす 2

くっか 1

～から 2

～と 1

くらっし 1

～らっしゅ 1

くる 1

～か 1

～から 1

～じゃ 1

～と 1

～にゃ 1

～まで 2

～わい 1

～んだ 2

～んだけつとも 1

～んだけんにょも 1

～んだつて 1

くれば 1

こおや 1

こね 2

～ねけりゃ 1

～ねな 1

～ねもの 1

～ねんだな 1

～や 1

あの(指示代名詞) 60

おら(自分, わたくし) 56

おら 47

～あ 2

～と 1

～も 5

～わ 1

だめ 56

だめだ 33

～だあ 1

～だぜえ 1

～だぞ 1

～だよ 1

～だわ 1

～だわい 2

～だんだか 1

～だんだかんね 1

～だんべ 3

～だんべえ 2

～ですね 1

～ですよ 1

～ど 1

～なんだ 5

～なんです 1

いや(否定) 54

やつ(あいつ) 47

やつ 21

～あ	1	こっち	42	いれる	2
～ああ	1	こっち	17	～ですよ	1
～お	2	～い	1	～の	1
～おな	1	～え	4	～のです	1
～か	2	～が	1	～んです	1
～が	2	～だって	1	いれれば	1
～だ	4	～に	1	いれる	1
～だな	1	～の	8	いれんだから	1
～で	1	～まで	1	～の	1
～です	1	～や	2	～のに	1
～ばかり	1	～わ	5		
～わ	7	～んの	1	いや	39
～わあ	1			どこ	39
～わな	1	あの(間投詞)	41	どこ	9
ここ	46	はいる(入る)	41	～え	20
ここ	10	はいった	1	～えでも	1
～え	11	～たからだな	1	～えなあ	1
～えも	1	～たぞ	1	～お	2
～せ(え)	1	～たった	1	～だね	1
～で	4	～たって	2	～で	1
～でわ	2	～たなんて	1	～でも	1
～に	10	～たの	1	～に	1
～の	2	～たのお	1	～まで	2
～まで	3	～たら	1		
～わ	2	～たんだし	1	みる(見る)	39
ね(無い)	46	～て	14	みた	1
ね	5	～てから	1	～たか	2
～か	1	～てね	1	～たっけが	1
～から	2	はいらねから	2	～たったか	2
～もの	1	～ねんだ	1	～たって	1
～よ	1	はいる	3	～たら	2
ねえ	7	～からな	1	～たんだもの	1
～から	1	～まで	1	～たんだんべ	1
～かんべ	1	～よりも	1	～たんべ	1
～けんども	1	～わい	1	～ち	5
～さ	1	はいんなさい	1	～ちて	1
～す	1	～ね	1	～て	12
～だんべ	1	～ねんか	1	～なかった	1
～と	2	～べ	1	みねよおだから	1
～な	4			～らし	1
～もの	1	いれる(入れる)	40	みると	1
～わ	1	いれた	2	みろ	5
～んだ	2	～たか	1		
ねかった	1	～たかな	1	おらち(自分のうち)	37
～たな	1	～たって	1	おらち	1
ねく	2	～たの	3	～え	1
～て	1	～たのお	1	～じゃ	1
ねんだ	5	～たら	1	～で	8
～んだって	1	～たんです	1	～でも	3
～んだもの	2	～つと	1	～でわ	2
		～て	10	～に	1
		～ても	1	～の	12
はあ	45	～ないよおに	1	～のも	1
		～なかった	1	～も	2
その	44	～ねが	1	～んの	2
その	43	～ねで	1	～んのも	1
～くらいで	1	～ねと	1	～んのわ	2
		～ねんだ	1		

とこ(所)	37	なければ	1	～して	2
とこ	16	なし	1	～で	5
～え	5	～に	1		
～さ	1			よい	33
～じ	1	のむ(飲む)	35	よいから	1
～だ	2	のまないんだから	1	～って	1
～だから	1	～ないんで	1	よかつた	1
～ただだからな	1	～ないんです	1	～たがなあ	1
～に	2	～なくちゃ	2	～たと	1
～まで	1	～ね	1	～たな	1
～わ	6	～ねから	1	～たんだ	2
～ん(所に)	1	～ねんだもの	1	～たんべ	1
		～ねんで	1	～べ	2
～みる(～てみる)	27	のむのさ	1	～べえ	1
み	11	～よおな	1	よかんばい	1
みい	5	～んだけえど	1	～べ	15
みたが	1	のめや	1	～べえ	3
～たって	1	のんだ	1	よく	2
～たら	4	～たね	2		
みっから	1	～だら	4	いる	32
みなんしょ	2	～だんです	1	いたね	1
～ようと	1	～で	14	～たのお	1
～らし	1			～たんです	1
みる	1	もつ(持つ)	35	～たんべ	2
～と	1	もつか	1	いっから	1
みろ	8	～べ	1	～こと	1
		もったか	1	いてね	1
そっち	36	～ち	31	～ても	1
そっち	14	～て	1	～ない	1
～い	6			～なく	1
～え	7	い(良い)	34	～ね	1
～だけつと	1	い	7	～ねな	1
～に	1	～や	3	～ますから	1
～の	3	～だ	1	～やす	1
～わ	2	～んだ	21	いる	2
～んの	2	～んだがね	1	～す	1
		～んです	1	～の	1
ない(無い)	36			～のか	1
ない	4	まだ	34	～のが	1
～からな	1	まだ	31	～よおだて	2
～しな	1	～だし	1	～んか	1
～ですな	1	～だぜ	1	～んです	5
～ですから	1	～ね	1	いれは	2
～な	1			いんべ	1
～んだからな	1	した(下)	33		
～んだけど	1	した	5	とき	32
～んだもん	1	～え	2	とき	14
～んです	4	～えわ	1	～だもの	1
～んですから	1	～が	1	～に	5
なかった	1	～から	2	～にわ	3
～たぞ	1	～さ	3	～の	1
～たね	1	～だんべ	1	～々	1
～たんだ	1	～で	1	～々あ	1
なき	1	～に	3	～わ	6
なく	5	～の	9		
～つ	1	～わ	5	むぎ	31
～て	1			むぎ	18
～ても	1	みんな	33	～が	1
なけり	3	みんな	26	～だの	1

～でしよ お	1	～べえ	1	つくる(作る)	25
～と	1	～めえ	1	つくった	2
～にかい	1	～んかい	1	～たがさ	1
～にい	1	～んだと	1	～たって	1
～にばかり	1	～んだら	2	～たの	2
～ね	1	もってけ	3	～たり	1
～の	2	もってけば	1	～たりね	1
～まで	1	もってった	3	～たんだ	2
～も	1	～たんだ	2	～たんです	1
～より	1	～て	6	～て	5
こと	30	たいへんだ(大いだ)	27	～てね	1
こったぞ	1	たいへんだ	7	つくらねんだ	1
こと	17	～だっ たけっと	1	つくる(連体)	2
～が	1	～だっ たね	1	～ように	1
～だから	1	～だね	3	～んじへ	1
～ですよ	1	～だろう	1	～んです	1
～に	3	～だわい	1	つくねね	1
～も	3	～だわな	1	～のも	1
～わ	3	～だんべ	1		
ことし(今年)	30	～ですうええ	1	わし(わたくし)	25
ことし	7	～ですええ	1	わし	12
～の	2	～ですね	4	～が	3
～も	1	～なんだ	3	～と	1
～や	5	～に	2	～の	5
～より	1			～も	2
～わ	14	ばっば(婆)	27	～わ	1
あと	29	ばっば	16	～わね	1
あと(後, 跡の意2, この	16	～が	2	あつち(あちら)	24
次に, この外にの意14)	1	～と	1	あっち	8
～え	1	～に	3	～え	5
～おお	1	～のだんべ	1	～から	1
～から	2	～も	1	～で	1
～です	1	～わ	2	～に	1
～に	1	～んのだ	1	～にね	1
～わ	6			～の	2
～より	1	ひさこ(人名)	27	～まで	1
こお(このように)	29	ひさこ	17	～も	1
はい	29	～が	1	～え	1
はい	3	～だな	1	～わ	2
～です	2	～と	1		
～ね	1	～に	4	くれる(～てくれる)	24
～んだ	1	～わ	3	くれ	7
はやかったな	1			くれたから	1
～たもん	1	よく(副詞)	27	～や	1
はやく	17	くさ(草)	25	～よ	1
～から	1	くさ	14	くれっから	2
～て	1	～だ	2	くんな	1
もってく(持って行く)	28	～だ	1	～なかった	1
もってかなけりゃ	1	～だんなあ	1	～ねか	6
～れちゃう	1	～なんです	1	～ねかい	1
もってく	3	～に	2	～ねかつたって	2
～か	1	～の	2	～ねけ	1
～かい	1	～ばかりわ	1	やる(～てやる)	24
		～みたいだ	1	やっか	1
		～も	1	～から	2
		ちょおど(副詞)	25	～たら	1
				～たんです	2

～て	1	～たんだぞ	4	～れるけど	1
やらし	1	～たんだもの	1	だした	3
やらしし	1	～たんです	2	～たって	2
やる	2	～たんべ	1	～たのかい	1
～べえ	1	～て	6	～たんだから	1
～わ	1	～ねえ	1	～て	3
やれ	6	～ねえけんども	1	だす(連体)	3
やろ	1	～べと	1	～と	1
やろおと	1			～べえ	1
やんべ	2	はたけ(畑)	23	～ように	1
～べと	1	は たけ	6	～んだって	1
		～え	1	だせねと	1
いる(～ている)	23	～だ	1	だせば	2
いた	3	～で	5		
～たですからね	1	～です	1	あした(明日)	21
～たって	1	～なんです	1	あした	13
～たら	1	～に	1	～だって	1
～たんで	1	～の	5	～と	3
～たんでわ	1	～まで	1	～に	1
いっからね	1	～わ	1	～の	1
いねから	1			～わ	2
～ねけれ	1	もう(思う)	23		
～らんねんです	1	もう	1	おち々(茶)	21
いる	4	～んだ	4		
～から	1	～んだが	1	たべる(食)	1
～かも	1	～んだな	1	たべて	8
～わい	1	もったがな	1	～なんし	8
～んだ	2	～たら	2	～らし	1
～んです	1	～たんだ	1	たべる	1
いれば	1	～て	12	～から	1
				たべんだけだね	1
うえ(上)	23	もん(もの)	23	～で	1
うえ	2	もんか	2		
～が	1	～だ	9	うし(牛)	20
～さ	5	～だか	2	うし	5
～だけ	1	～だから	2	～お	1
～だっぺ	1	～だったのか	1	～が	2
～に	3	～だて	1	～こと	1
～の	7	～だない	1	～だの	1
～のね	1	～たわい	1	～で	1
～わ	1	～で	2	～に	5
～んの	1	～です	1	～の	1
		～な	1	～も	1
うち(家)	23			～や	1
うち	5	あ	22	～わ	1
～え	3				
～だね	1	ええ(返事)	22	ぞお(返事, 肯定	20
～で	2			19, 問1)	
～でえ	1	きょお(今)	22		
～でも	1	きょお	8	かう(買う)	19
～でわ	1	～で	3	かいに	2
～に	2	～の	2	かうの	1
～の	4	～も	1	～のわ	1
～わ	2	～わ	8	かった	2
～んのなんです	1			～たって	1
		しかし	22	～たんだ	3
でる(出る)	23	だす(出す)	22	～たんです	1
でた	5	ださなきや	1	～て	8
～たね	1			くう(食う)	19

くう	2	まけば	2	～だね	2
～と	2			～の	1
～の	1	ゆうべ(夕)	19	～は	2
～のも	1	ゆうべ	14		
～ように	1	～の	1	ううん(間投詞)	17
～わ	1	～も	1	おえる(終える)	17
～んです	1	～わ	3	おえた	2
くえ	1			～たら	2
～て(くえよ)	1	うえる(植える)	18	～たらば	1
～って	2	うえたか	1	～たんだろお	1
くわね	1	～たっ たです	1	～たんですか	1
～ねか	1	～たのけ	1	～っかい	1
～ねで	2	～たんで	1	～っけ	1
～ねでっ	1	～っべと	1	～てからだら	1
～れた	1	～て	3	～ね	1
		～ねの	1	～ねえ	1
なってる	19	～べえ	1	～ねか	2
なってた	3	～べと	1	～ねんだけえど	1
～たんです	1	うえる	2	おえれば	2
なっ てっ かと	1	～もの	1		
～きり	1	～よだな	1	くつ(足にはくくつ)	17
～けど	1	～んです	1	くつ	13
～と	1	うえれば	1	～うなあ	1
なっ てて	2	うえんのに	1	～な	1
～やす	1			～なあ	1
なっ てる	2	つち(土)	18	～わ	1
～な	1	つち	15		
～わ	1	～が	2	できる	17
なっ てんだ	1	～わ	1	できたので	1
～だんべ	1			～たんだか	1
～です	1	ひと(人)	18	～ないんです	1
～ですか	1	ひと	3	～なかった	1
		～が	7	～ねから	1
ふうん	19	～で	1	～ねけっと	1
		～ばっかり	1	～ねんだか	1
まえ(前)	19	～わ	5	～やしたけっ と	1
まえだっ たね	1	～んのだから	1	～やしたよ	1
～でしゅ	1			できる 連体	2
～です	1	ほら(間投詞)	18	できる 終止	1
～に	1	～ゆう (こういうふ	18	～んだい	1
～の	8	うにして)	1	～んです	1
～のですか	1	ゆう	17	～んですよ	1
～のな	1	～んだ	1	～んのかい	1
～までわ	1			～んべって	1
～わ	3	あがる(上がる)	17		
～んのだ	1	あがから	1	むぎまき(麦まき)	17
まく(種をまく)	19	～たの	8	むぎまき	15
まかぬ	1	～たんだ	1	～だわ	1
～ね	1	～てね	2	～なんです	1
～ねければ	1	～て	1		
～ねって	1	あがらっ しゅ	1	もらう	17
～ねものな	1	あがれるか	1	もらいたい	1
～れる	1	あがれん	1	～に	1
～れるように	1	あがんねの	1	～やした	1
まく	5			もらった	2
～と	3	いも(芋)	17	～たけど	1
～のと	1	いも	11	～たの	1
～ように	1	～だ	1	～たのも	1



～たり	1	～あ	1	～の	2
～たんだ	2	～が	1	ざる(一種のかご)	15
～たんです	1	～さ	1	ざる	10
～て	3	～の	1	～え	2
～てね	2	～も	1	～に	1
やま(山)	17	そんな	15	～の	1
やま	1	そんな	8	～ので	1
～え	3	～に	7	つける(付ける)	15
～が	1	～の	1	つけた	1
～さ	1	ひとつ(一つ)	16	～たか	1
～だったの	1	ひとつ	15	～たの	1
～と	1	～に	1	～たのわ	1
～に	2	ゆう(甬)	15	～て	6
～の	5	いいます	1	～ましょ	1
～のように	1	いえ	1	～やしたね	1
～わ	1	いった	1	～ようと	1
わかる	17	～たって	1	つけるのか	1
わかったこと	1	～たら	2	～って	1
～たな	1	～たり	1	なか(中)	15
～たんだけども	1	～ちゃ	1	なか	4
わからねか	1	～て	2	～え	5
わかんなかったか	1	ゆうだけどもね	1	～だ	1
～なかったけつとも	1	～んだね	1	～に	2
～なく	1	～んでしょ	2	～の	3
～ね	5	～んです	1	わりい(悪い)	15
～ねえ	2	～んですよ	1	わり	7
～ねかった	1	おそい(遅い)	15	ありい	4
～ねかったね	1	おそい	2	～って	1
～ねかな	1	～から	2	わりくて	1
ええ(好)	15	～んだから	1	わりのお	1
ええ	7	～んです	1	～のに	1
～かんべ	1	おそえや	1	あける(からにする)	14
～し	1	おそかったね	1	あけた	1
～って	1	～ただけれど	3	～たか	1
～ですな	1	おそく	2	～たかあ	1
～な	2	～まで	2	～たら	1
～にも	1	～わ	1	～って	1
～よ	1	おちる(落ちる)	15	～て	6
～わ	1	おちねかい	1	あけろ	1
おひる(昼)	16	～ねから	1	～ろや	2
おひる	1	～ねで	1	あれする	14
～から	2	～ねもの	1	あれした	1
～だ	2	～ねわ	1	～たから	1
～っから	6	～べ	1	～たら	1
～っからか	1	～べえ	2	～たんです	1
～っからに	1	おちる	1	～っと	1
～に	3	～な	1	～て	3
こんな	16	～ように	2	～てらんね	2
こんな	7	～わ	2	～なくつ	1
～に	6	～んだ	1	～べえ	1
～の	3	こないだ(このまえ)	15	あれすか	1
さといも(里芋)	16	こないだ	12	あれするのが	1
さといも	11	～な	1		

おこす(起す)	14	～だあ	1	～の	1
おこさねかったんだな	1	～だけ	1	～も	1
～ねように	1	～だんべ	1	～わ	2
おこし	1	～と	1		
おこした	3	～も	1	やしら(わたくしたち)	13
～たから	2	～わ	1	やしら	7
～たんです	1			～が	2
～て	4	こおい(こういう)	13	～の	2
おこすに	1	こおい	2	～も	2
		～に	9		
ちよっと	14	～のさ	1	あさ(朝)	12
ちよっと	13	～ん	1	あさ	9
～で	1			～から	1
				～の	2
どお	14	こんだ(今度)	13		
		こんだ	10	あまり(副詞)	12
な・ちやう	14	～の	1	あまり	2
なっちやう	2	～も	1	あんま	1
～からね	2	～わ	1	あんまり	9
なっちやう	4	さあ(間投詞)	13		
～たな	2			いくら	12
～たんですよ	1	じぶん(、分)	13	いくら	4
～て	2	じぶんが	2	～か	2
～てね	4	～で	2	～だ	1
		～と	1	～だった	1
ふる(震る)	14	～の	5	～だったんだ	1
ふったから	1	～わ	3	～でも	1
～て	1			～も	2
ふるかな	1	すこし(少し)	13		
～って	1	すこし	11	いやあ	12
～ような	1	～くらい	1		
～んだ	1	～だぞお	1	うなう(耕す)	12
ふんなかったね	1			うなうんだぞ	1
～なけりや	3	た(田)	13	～んべ	1
～ね	2	た	1	うなえば	1
～まい	2	～あ(田を)	1	うなった	1
		～え	1	～たって	1
やすむ(休む)	14	～さ	2	～たり	2
やすまないね	1	～で	3	～て	3
やすみましょお	1	～に	1	うなわなくちゃ	1
～ますから	1	～の	3	～ねたって	1
～やしたかね	1	～わ	1		
やすむ	2			おもい(重い)	12
～んです	4	だれ	13	おもいから	3
やすんだから	1	だれ	7	～ぞ	1
～じゃったから	1	～が	1	～なあ	1
～だって	1	～だ	2	～わ	4
～だね	1	～だんべ	1	～んだから	1
		～も	2	おもく	2
おおきい	13	ちっと	13	おわる(終る)	12
おおきい	4	ちっと	11	おわった	2
～の	6	～ぐらいの	1	～たあ	1
おおきく	1	～ばかり	1	～たが	1
おおきいだけ	1			～たら	2
～わ	1	はや(もう)	13	～たんべ	1
				おわらないんです	1
おや(親)	13	よしひろ(人名)	13	おわるさ	1
おや	6	よしひろ	9	～とね	1
～だ	1				

～んです 1  
 おわんねから 1  
 かえる(帰る) 12  
 かえったった 1  
 ～たの 1  
 ～て 7  
 ～てから 1  
 かえりたいのか 1  
 かえんべ 1  
 かかる(要する) 12  
 かかった 6  
 ～たか 1  
 かかるものね 1  
 ～わい 2  
 かかんねぞ 1  
 ～め 1  
 かまう 12  
 かまあね 3  
 ～ねど 1  
 ～ねな 1  
 ～ねのお 1  
 かまわない 2  
 ～ね 3  
 ～ねえ 1  
 ごじ(5 時) 12  
 ごじ 1  
 ～だ 3  
 ～に 7  
 ～までに 1  
 しる(知る) 12  
 しらね 2  
 ～ねえ 1  
 ～ねえど 1  
 しんね 6  
 ～ねけも 1  
 ～ねわ 1  
 だいこん 12  
 だいこん 8  
 ～や 1  
 ～わ 3  
 たいひ(肥料) 12  
 たいひ 8  
 ～だけ 1  
 ～だけわ 1  
 ～も 1  
 ～わ 1  
 ちがう 12  
 ちがう 2  
 ～けれど 1  
 ～ね 1  
 ～のか 1

～べと 1  
 ～ものね 1  
 ～わ 1  
 ～んだんべ 1  
 ちがったけど 1  
 ～て 2  
 とおか(1 日) 12  
 とおかから 4  
 ～だものな 1  
 ～で 1  
 ～に 2  
 ～にゃ 1  
 ～の 2  
 ～まで 1  
 とても 12  
 ねえちゃん 12  
 ねえちゃん 8  
 ～の 3  
 ～のお 1  
 はんぶん 12  
 はんぶん 6  
 ～くれ(位) 1  
 ～しか 2  
 ～だ 1  
 ～に 2  
 ひ(日) 12  
 ひか 8  
 ～に 1  
 ～にいい 1  
 ～の 2  
 また 12  
 むかし 12  
 むかし 3  
 ～に 1  
 ～ね 1  
 ～の 2  
 ～わ 5  
 むこお(名詞) 12  
 むこお 1  
 ～え 2  
 ～だ 1  
 ～と 1  
 ～に 5  
 ～の 1  
 ～より 1  
 もつとも(ただし) 12  
 あんちゃん 12  
 あんちゃん 8  
 ～と 1

～わ 2  
 いる(要る) 11  
 いらないわ 2  
 ～なかったからな 1  
 ～ね 4  
 ～ねな 1  
 ～ねわ 1  
 いるか 1  
 ～な 1  
 ええ(間投詞) 11  
 おく(置く) 11  
 おいてって 2  
 ～たの 3  
 ～たんべ 1  
 ～て 4  
 おくか 1  
 きょねん 11  
 きょねん 2  
 ～の 2  
 ～より 3  
 ～わ 4  
 しごと(仕事) 11  
 しごと 3  
 ～が 2  
 ～に 1  
 ～の 3  
 ～わ 2  
 したあ(それじゃ) 11  
 したあ 10  
 ～な 1  
 だから 11  
 だから 10  
 ～さ 1  
 て(手) 11  
 てえ(手お) 2  
 ～が 7  
 ～に 1  
 ～わ 1  
 ほお(間投詞) 11  
 もって(にょって) 11  
 らっかせえ 11  
 らっかせえ 8  
 ～の 1  
 ～わ 2  
 あめ(雨) 10  
 あめ 3  
 ～さえ 1

～で	1	さけ(酒)	10	ひんびょ おかい	4
～に	1	さけ	5	～と	1
～になんと(雨に)	1	～お	1	～に	3
～の	3	～かな	1	～の	2
みつ	10	～だけわ	1	へん(辺)	10
いつまでも	1	～だの	1	～ん	4
～も	9	～わ	1	～で	1
うまい	10	たね(種)	10	～でも	1
うまい	1	たね	4	～でわ	3
～く	1	～え	1	～わ	1
～のか	1	～か	1	ほる(掘る)	10
～んだ	1	～じゃ	1	ほったんです	6
うまく	4	～まで	1	～て	1
こいつ	10	～わ	2	はるか	1
こいつ	9	とし(年齢)	10	～のに	1
～わ	1	とし	7	～んだ	1
こども	10	～だ	1	めし(飯)	10
こども	5	～にゃ	1	もと(前)	10
～が	1	～も	1	もと	3
～だもの	1	どれ	10	～で	1
～の	1	どれ	9	～の	2
～ばっか	1	～だけって	1	～のわ	1
～まで	1	ひんびょおかい	10	～のよおに	1
		(品評会)		～わ	2

## 商 家 の 主 婦

はい	359	～ですわ	2	～です	1
これ	172	～と	2	～ですか	17
これ	99	～ね	8	～ですかね	1
～が	8	～の	27	～ですわ	1
～から	1	～のお	1	～です	1
～しきり	1	～のが	2	～でも	3
～じゃ	5	～ので	1	～とも	2
～だけで	4	～のね	1	～にも	3
～だけですわ	1	～のよ	1	～の	2
～だけですわ	1	～のわ	1		
～だけですわ	1	～もの	6	～ない	144
～だけに	1	～よ	2	ない	15
～だけね	1	～わ	1	～か	3
～で	12	～わね	2	～かい	1
～でしたか	1	～んじゃ	2	～から	1
～でしょ	2	～んじゃあ	3	～けど	2
～ですか	5	～んでしょ	4	～でしょ	2
～ですと	1	～んでしょお	8	～でしょおけど	1
～ですわ	1	～んです	5	～ですか	9
～ですの	1	～んですか	11	～ですわ	3
～ですよ	1	～んですから	1	～ですよ	1
～でわ	2	～んですけど	1	～と	1
～と	2	～んですけどね	1	～なんて	1
～なのかい	1	～んですわ	2	～ね	2
～なんですが	1	～んですよ	4	～の	57
～に	1	～んだ	2	～のけ	1
～ね	3	～んだから	2	～ので	1
～の	1	～んだけど	1	～ものね	1
～も	2	～んだっけな	1	～よ	3
～より	2	～んだね	1	～よおに	1
～わ	11	～んだよ	1	～らしい	1
		～んだよね	2	～んだから	1
いい	164	～んだらおけど	1	～んだって	1
いい	2	～んだわね	1	～んだもの	1
～かな	1			～んだら	1
～かも	1	なに	147	～んだらおか	1
～から	2	なに	49	～んだわ	1
～からね	1	～お	3	～んでしょお	1
～け	1	～か	14	～んでしょおけどね	1
～けど	2	～が	5	～んです	1
～けれどね	1	～かの	1	～んですか	5
～し	1	～も	2	～んですが	1
～じゃあ	3	なにか	2	～んですけどねえ	1
～って	2	～かに	1	～んですけれどね	1
～でしょ	7	～かも	1	～んですわ	1
～でしょお	6	～かもね	1	～ですもの	1
～でしょおか	1	～だか	28	～んですよ	2
～でしょおね	1	～だかね	1	なかつた	1
～です	3	～だっけな	1	～たのよ	1
～ですか	13	～だって	1	～たら	2
～ですから	1	～て	2	～たんですか	1
～ですからなんて	1	～てです	1	なく	5
～ですと	1	～で	1	～ちゃあ	2
～ですわ	4	～でしょお	1	～て	2
～ですよ	3	～でしょおね	1	～ても	2

～とも	1	～と	2	する	99
そお(そのように)	136	～とか	1	した	2
そお	17	～ね	2	～たから	3
～か	2	～の	8	～たでしよ お	1
～かも	2	～のかな	1	～たの	10
～さね	1	～のけ	1	～たら	5
～じゃあ	1	～のですから	1	～たらね	2
～すね(そおです)	1	～のわ	1	～たんだっけな	1
～だ	1	～まい	1	～たんだろお	2
～だね	1	～みたい	1	～たんですか	1
～だねえ	2	～ものね	1	～て	25
～でしよ	1	～よ	2	～な	1
～でしよ お	2	～よおに	2	～ない	1
～でしよ おけど	1	～わ	1	～ないからね	1
～でしよ おね	8	～んだからね	1	～ないって	1
～でしよ おねえ	1	～んです	3	～ないで	1
～です	15	～んですか	2	～ないですよ	1
～ですか	47	～んですけど	1	～ないでね	1
～ですかね	1	あれば	5	～ないでも	1
～ですかねえ	1	あんでしよ お	1	～ないのけ	1
～ですけど	1	～ですか	3	～ないんですよ	1
～です	20	～の	8	～なかったり	1
～です	1	～まい	2	～なかったんですけど	1
～です	1	～めえけど	1	～なくちゃ	2
～でも	1	ござる	115	～なよ	1
～なんでしよ おね	1	ござい	3	～まいと	1
～なんです	2	～ました	46	～ましよ	1
～なんですの	1	～ましたか	1	～ましよ お	1
～なんです	3	～ます	60	～ますか	2
ある	136	～ますか	5	～ますと	1
あった	4	～ますか	1	～ません	1
～たって	1	～ますって	1	～よお	2
～たっても	1	ありがたい	100	しよ おと	2
～たでしよ お	2	ありがたい	1	～えおね	1
～たね	1	ありがとお	99	すっから	1
～たの	3	それ	190	する	4
～たのね	1	そいだけ	1	～から	2
～たみたい	1	それ	40	～って	1
～たら	1	～お	4	～と	4
～て	2	～が	5	～の	1
～てです	2	～くらい	1	～んだろお	1
～ても	2	～こそ	1	～んですか	1
あり	1	～さえ	1	すれば	4
～ました	1	～しか	1	ずんの	1
～ましたか	1	～じゃ	1	ああ(間投詞)	90
～ましたので	1	～じゃあ	2	ええ(返事)	81
～ます	14	～じゃあねえ	6	くる(来る)	78
～ます	1	～じゃあね	1	きた	4
～ます	1	～で	1	～たって	1
～ます	3	～でも	1	～たってよ	1
～ます	1	～でわ	1	～たの	7
～ます	7	～と	6	～たのわ	1
～ません	1	～に	4	～たよ	1
ある	12	～の	1	～たんだもの	1
～だけ	1	～も	3	～たんですけど	1
～って	3	～より	1	～て	7
～でしよ	2	～わ	7		
～でしよ お	4				

～てから 3  
 ～てね 1  
 ～ても 1  
 ～てもね 1  
 ～ました 1  
 ～ましたから 1  
 ～ましたね 2  
 ～ましたよ 2  
 ～ましたよね 1  
 ～ましょおね 1  
 ～ます 2  
 ～ますか 2  
 ～ますかって 1  
 ～ますから 4  
 ～ますからなんて 1  
 ～ますって 1  
 ～ますと 1  
 ～ますよ 1  
 ～ませんね 1  
 くる 1  
 ～から 1  
 ～と 1  
 ～のね 1  
 ～よ 1  
 くんだねえ 1  
 ～でわ 1  
 こいつて 1  
 こない 3  
 ～ないじゃあないの 1  
 ～ないで 1  
 ～ないと 2  
 ～ないね 1  
 ～ないの 1  
 ～ないのね 1  
 ～ないんだもの 1  
 ～ないんでしょお 1  
 ～なかったです ね 1  
 ～なくちゃ 3  
 ～なくちゃあ 1  
 ～なる 72  
 なった 1  
 なった 2  
 ～たでしょお 1  
 ～たの 1  
 ～たよお 1  
 ～たら 1  
 ～たんです ね 1  
 ～て 9  
 ～てから 1  
 ～てましたよ 1  
 ～てます 1  
 ～てますよ 1  
 ～ても 1  
 ～と 1  
 ならない 1  
 なりました 2  
 ～ましたね 2

～ます 5  
 ～ますか 1  
 ～ますからね 1  
 ～ますよ 1  
 なる 2  
 ～から 2  
 ～からね 2  
 ～と 1  
 ～ね 1  
 ～の 2  
 ～のでしお 1  
 ～んだろおか 1  
 ～んでしお 1  
 ～んでしおおね 1  
 ～んです 1  
 ～んですか 6  
 ～んです ね 1  
 ～んですよ 1  
 なれば 1  
 ならない 2  
 ～ないよ 1  
 ～ないんです ね 1  
 ～ね 1  
 ～ねえ 3  
 ～ねえ ない 1  
 ～ねえ ね 1  
 ～ねじゃ 1  
 ～のかね 1

あ 67  
 ～くる(来る) 67  
 きた 13  
 ～たけど 1  
 ～たでしお ね 1  
 ～たの 6  
 ～たよお ね 1  
 ～たら 1  
 ～たんでしお ね 1  
 ～たんです 1  
 ～たんですか 1  
 ～たんですと 1  
 ～たんです ね 1  
 ～て 22  
 ～な 1  
 ～なさい 2  
 ～なさんですか 1  
 くる 1  
 ～か 1  
 ～かな 1  
 ～から 1  
 ～からって 1  
 ～け 1  
 ～つての 1  
 ～でしお ね 1  
 ～の 2  
 くれ ね 1  
 くん 1  
 こなくちゃあ 1

あげる(やる) 64  
 あげた 1  
 ～たと 1  
 ～たら 1  
 ～たんです 2  
 ～たんですか 2  
 ～て 3  
 ～なかったわね 1  
 ～なくちゃ 1  
 ～ました 1  
 ～ましょお 7  
 ～ます 15  
 ～ますか 23  
 ～ますから 1  
 ～ますからね 2  
 ～ます ね 1  
 ～ますよ 1  
 あげる 1

あと 60  
 あと 37  
 ～から 1  
 ～で 5  
 ～なんです 1  
 ～ね 1  
 ～の 1  
 ～わ 14

ない 60  
 ない 14  
 ～かな 1  
 ～から 4  
 ～けど 1  
 ～でしお ね 4  
 ～でしお ね 1  
 ～でしお ね 1  
 ～です 1  
 ～ですよ 1  
 ～と 2  
 ～なって 1  
 ～ね 4  
 ～ねえ 1  
 ～の 8  
 ～のかね 1  
 ～のけ 1  
 ～のね 1  
 ～みたい 1  
 ～や 1  
 ～んだ 1  
 ～んでしお ね 1  
 ～んです 2  
 なかったから 1  
 ～たら 1  
 ～たんです ね 3  
 なくて 1  
 なった ね 1

ほお(方) 57  
 ほお 4

～え	1	いくら	50	～の	1
～お	4	いくら	29	～のですか	1
～が	34	～って	1	～のですよ	2
～だけ	1	～で	5	～のも	1
～で	1	～でした	1	～のわ	3
～でしょ	1	～です	2	～よおに	1
～です	1	～ですか	5		
～ですか	1	～ですかって	1	そお(返事)	46
～ですと	1	～に	4		
～ですわ	1	～の	1	かく(書く)	44
～ですよ	1	～のお	1	かいた	6
～なら	1			～たの	1
～に	1	ゆう(言う)	50	～たのわ	1
～の	1	いいましたよ	1	～たんですよ	1
～も	1	～ますかね	1	～て	19
～わ	2	～ますね	1	かかなくとも	1
		いったなんて	1	～なくとも	1
え(返事)	56	～たね	1	かきました	2
		～たの	1	～ましよ おか	2
わかる	52	～たのに	2	～ます	1
わかった	1	～たら	1	～ますよ	1
～たんだ	1	～たんです	1	かく	1
～たんですが	1	～て	14	～もの	1
～て	1	～ても	1	～より	1
わからない	2	いわないけど	1	～んですか	2
～ないんで	1	～ないてっ	2	かけば	1
～ないんですけど	1	～なくったって	1	～ばね	1
～なく	1	～れ	1	かこつてのにわ	1
わかりますか	1	～れた	1		
わかる	2	～れても	1	～ちよおだい	43
～から	1	～れないよおに	1	ちよおだい	39
～と	1	ゆう	2	～って	2
～でしよ お	1	～から	2	～ね	2
～もの	1	～でしよ おね	1		
～よおに	1	～と	1	ひと	43
～んだけんど	1	～の	2	ひと	7
わかれば	2	～のお	1	～え	1
わかんでしよ お	1	～のわ	1	～が	16
～ない	7	～よおに	1	～だけに	1
～ないから	1	～んですよ	2	～で	1
～ないすね	1	ゆうた	1	～でも	1
～ないね	2	～て	2	～に	2
～ないの	3	ゆわなくったって	1	～と	1
～ないのかな	1			～とわ	1
～ないんだ	1	あの	49	～にも	1
～ないんでしよ お	1	ゆう(言う)(こういうなど)	49	～の	4
か		いったってね	1	～わ	5
～ないんです	1	～たの	2	～わね	1
～ないんですよ	1	～たんでしよ お	1	～んのわ	1
～なかったから	1	～て	1		
～なく	4	～ても	1	ちよっと	42
～ね	1	ゆう	23		
～ねえ	1	～ったって	1	どおも	42
～ねえかな	1	～と	3		
～ねえから	1	～なの	1	いく(行く)	41
～ねえけ	1	～の	2	いかないでしよ お	1
～ねえの	1	～のかしら	1	～なかったんです	1
～ねえでしよ お	1	～のが	3	いきましよ お	1
				～ますから	1



～ますからね	2
いく	1
～と	2
～なんて	2
～のかい	1
～んだね	1
いった	2
～たの	2
～たのかしら	2
～たのかって	1
～たのに	1
～たらね	1
～たんです	2
～て	17
こっち	41
こっち	15
～い	1
～え	3
～から	1
～が	2
～だね	1
～で	7
～でも	2
～ねえ	2
～の	5
～わ	2
その	41
その	39
～くらい	1
～くらいが	1
いま	40
いま	30
～から	1
～だ	1
～の	1
～のわ	1
～まで	3
～までわ	2
～わ	1
きゅうちゃん(人名)	39
きゅうちゃん	23
～が	3
～に	7
～の	2
～のわ	1
～よ	3
どお	38
どお	20
～だか	2
～だかと	1
～です	3
～ですか	8
～ですかね	1
～なの	1

～なんだか	1
～なんですか	1
はあ	37
～くださる	36
ください	28
～って	1
～と	1
～なんて	2
～ね	2
～まし	1
～ませんか	1
いらっしる(あいさつ)	35
いらっしやい	11
～まし	24
はいる	35
はいって	7
～ても	1
～てわ	1
はいらない	1
～ないの	1
～なくてわね	1
はいりたく	1
～ましたから	1
～ます	2
～ますから	4
はいる	1
～よおですから	1
～んでしよ	1
～んです	1
～んですけどね	1
～んですね	1
はいんだら	1
～ない	1
～ないね	1
～ないの	2
～ね	1
～の	1
ふたよちゃん(人名)	35
ふたえちゃん	16
ふたよちゃん	17
～が	1
～よ	1
きょお(今日)	34
きょお	17
～わ	16
～んのわ	1
この	33
この	32
～ぐらいですか	1

どこ	33
どこ	7
～え	7
～か	1
～が	2
～かえ	1
～かで	1
～からか	1
～からの	1
～さ	1
～だか	1
～だっけ	1
～だっけか	1
～って	1
～で	1
～ですか	4
～に	2
もつ(持つ)	32
もって	31
もつんです	1
とる(取る)	31
とって	13
～てね	4
とりに	9
とる	1
～んだら	1
とれない	1
～ないんですよ	1
とんの	1
だす	31
だしたとか	1
～たのね	1
～ただけど	1
～たんですか	1
～て	17
～ながら	1
～に	1
～ました	1
～ましたよ	1
～ますから	1
～ますから	1
だすのには	1
～んですよ	1
だせば	2
あれ	30
あれ	19
～お	2
～が	2
～け	1
～だけ	1
～で	2
～でしよ	1
～ですか	1
あんで	1

とみおさん(人名)	30	～ないって	1	～から	2
とみおさん	27	～ないでしよ お	1	すこし	24
～が	1	～ないですからね	1	すこし	17
～から	1	～ないみたい	1	～っか	1
～わ	1	～ないよ	1	～でも	2
うん(返事)	29	～なかったんですが	1	～ばかり	1
だけど	29	～なければ	1	～わ	3
だけど	25	～ましたから	1	うる(売れる)	23
～ね	2	～ませんか	1	うれたかね	1
～も	2	いる	7	うれっかも	1
きく(聞く)	28	～から	1	うれないでしよ お	1
きいた	1	～って	1	～ないと	1
～たって	1	～でしよ お	1	～ないね	1
～たら	1	いれ	1	～ないよ	1
～て	19	いん	1	～まい	1
きかない	1	じゃ(接続詞)	26	～ますけどね	1
～ないと	2	ちがう	26	～ますよ	1
～なくても	1	ちがいます	1	～ますよ お	1
～なければ	1	～ますね	1	うる	3
きくんだったら	1	～ますよ	2	～から	2
ここ	28	ちがう	9	～でしよ お	1
ここ	15	～けれど	1	～ね	1
～え	2	～でしよ お	1	～ので	1
～だけ	1	～でしよ おが	1	～よ	2
～で	2	～でしよ おね	1	～んじゃあ	1
～ですか	1	～とわ	1	～んで	1
～に	4	～の	1	うれん	1
～にも	1	～のでしよ お	1	かう(買う)	23
～にわ	1	～わね	1	かうんですか	1
～の	1	～んでしよ お	1	かった	1
いれる(入れる)	27	～んですか	1	～たね	1
いれた	1	～んですよ	1	～たの	1
～たって	1	ちがえば	1	～たのわ	1
～たんですか	2	ちがって	1	～たろか	1
いれっから	1	ふうん(間投詞)	26	～たんだから	1
いれて	8	まだ(いまだ)	26	～て	13
～てね	1	まだ	25	かわなくたって	1
～てよ	1	～です	1	～なくちゃあ	1
～ますか	1	～です	1	～なくとも	1
～ませんよ	1	やっぱり	25	ふくしゃ(複写)	23
いれない	1	やっぱり	24	ふくしゃ	6
～ないと	1	～ねえ	1	～え	1
いれる	2	～あげる	24	～お	2
～のなら	1	あげたら	1	～が	4
～のわ	1	～たんだね	1	～かな	1
～んだか	1	～て	7	～から	1
～んだけっとな	1	～ました	1	～で	1
～んでしよ	1	～ましよ おか	2	～に	2
～んですけど	1	～ます	4	～の	1
いる	26	～ますから	2	～のですか	1
いた	2	～ますからって	1	～わ	2
～ない	2	～ますからね	1	～ん	1
～ないし	1	～ますよ	1	もしもし	23
		あげる	2		

だから	22
だから	21
～ね	1
でる	22
でたの	1
～たり	1
～たんですよ	2
～て	7
でる	2
～から	2
～ったって	1
～と	1
～なんてのわね	1
～ね	1
～よおな	1
～んですか	1
でんの	1
は(返事)	22
みる(見る)	22
みたけど	1
～った	1
みて	17
～ないみたい	1
みる	1
～しか	1
～みる	22
みたら	4
～て	7
～てね	1
～てわ	1
～ましたか	1
～ます	1
～ますか	3
～よお	2
みるけ	1
みると	1
いる(要る)	21
いらない	4
～ないか	1
～ないくらいだけど	1
～ないですか	1
～ないね	1
～ないの	2
～ないんですよ	1
～なかった	1
～ねから	1
いります	1
～ますか	1
～ませんか	1
いる	1
～から	1
～んです	1
～んですか	1
～んなら	1

じゃあ(接 脱詞)	21
じゃあ	20
～ね	1
それから	21
それから	19
～と	1
～ね	1
わたし(私)	21
わたし	4
～が	5
～だけ	1
～だって	1
～と	1
～なんかだったら	1
～ね	1
～に	1
～の	2
～も	1
～わ	4
つける(付ける)	20
つけた	3
～て	8
～ましたよ	1
つけないでて	1
つけられませんよ	1
つける	1
～のわ	1
つければ	1
つけんだろ	1
～ですか	1
～の	1
なんまい(何枚)	20
なんまい	8
～くらい	1
～だったの	1
～ですか	2
～に	1
～にも	1
～ほど	6
もお(副詞)	20
～ある	19
ありますよ	1
～ませんね	1
ある	2
～から	1
～の	6
～のが	1
～んです	1
あれば	1
あんの	3
～のよお	1
～まい	1

おかえし	19
おかえし	11
～で	2
～です	2
～ですね	4
おちゃ(お茶)	19
おちゃ	15
～お	3
～でも	1
こお	18
ごはん(御飯)	18
ごはん	11
～ですか	1
～に	3
～ね	1
～わ	2
へえ(返事)	18
いってる(言っている)	17
いってた	4
～たね	1
～たよ	2
～ただけどね	1
～たんです	1
～て	1
～てましたよ	1
～てるの	1
～てるんですか	1
～てるんですよ	2
いってんだもない	1
ゆってんたか	1
いまいさん(人名)	17
いまいさん	7
～が	2
～なんて	1
～の	2
～のだから	1
～のも	1
～のよおに	1
～みたい	1
～わ	1
～いる	17
いた	1
～たけど	1
～ても	1
～ない	1
～ないね	1
～ないの	1
～ないのか	1
～ないよ	1
～なかった	1
～なかったんですよ	1
～ましたよ	1

～まして 1  
～ます 1  
～ませんね 1  
いると 1  
～んですがね 1

そこ(そのところ) 17  
そこ 7

～から 1  
～に 1  
～の 7  
そっから 1

そっち 17  
そっち 7

～え 3  
～で 1  
～に 2  
～の 2  
～も 1  
～わね 1

だめ 17  
だめ 3

～だ 1  
～だね 1  
～でしよ お 1  
～ですな 1  
～ですよ 1  
だめなん 1  
～なんだけどね 1  
～なんだよ 1  
～なんです 1  
だめに 1  
～ね 2  
～ねえ 1  
～よ 1

とき(時) 17  
とき 9

～でした 1  
～に 3  
～にわ 1  
～まで 1  
～わ 2

どれ 17  
どれ 12

～お 1  
～が 1  
～だけ 1  
～ですか 1  
～ね 1

みせ(店) 17  
みせ 6

～え 1  
～えわ 1  
～で 2

～に 4  
～の 2  
～まで 1

みんな 17  
みんな 15

～が 1  
～の 1

やる(する) 17  
やっから 1

～たら 2  
～たんでしよ お 1  
～たんです 1  
～たんですか 1  
～て 2

やる 2  
～から 1

～の 1  
～のけ 1  
～んだい 1  
～やんない 1  
～なけれ 1  
～なさい 1

～いく 16  
いかないんですの 1

～なくちゃあ 1  
いきなさい 1  
いくからね 1  
～なんて 2  
～の 6

～んでしよ おからね 1  
～んですか 1  
いったのに 1  
～たみたい 1

こと 16  
こと 3

～が 1  
～です 2  
～ですと 1  
～ですな 1  
～でも 1  
～なんでしよ お 1  
～に 6

ずいぶん 16

たいへんだ 16  
たいへんだ 1

～だったでしよ 1  
～お 1  
～だったでしよ 1  
～おね 1  
～だね 2  
～でした 1  
～でしたな 1  
～でしよ 1

～でしよ お 1  
～ですな 5  
～な 1  
～ね 1

さむい 15  
さねいから 4

～でしよ 1  
～でしよ お 1  
～ですな 1  
～ですなえ 1  
～ね 1  
～んですよ 1  
さむかったからかも 1  
さむく 3  
～って 1

だれ 15  
だれ 2

～えも 1  
～か 3  
～が 2  
～かに 1  
～ねか 1  
～ですか 1  
～も 4

どおぞ 15

～なっちゃう 15  
なっちゃんいますから 1

なっちゃう 1  
～から 2  
～ね 1  
～の 1  
～んですか 1  
なっちゃん 2  
～たから 2  
～たね 2  
～たんです 1  
よ 1

ひとつ(一つ) 15  
ひとつ 13

～ですか 1  
～と 1

いただく 14  
いただいた 1

～たの 2  
～たので 1  
～て 1

いただきたい 1  
～に 1

～ます 4  
～ますから 2

いただくんですか 1

いちまい(一枚) 14

いちまい	10
～に	1
～ね	2
～のね	1
こちら	14
こちら	4
～お	1
～が	1
～から	2
～だけ	1
～の	3
～も	1
～わ	1
ささきさん(人名)	14
ささきさん	8
～に	2
～ね	1
～も	2
～わ	1
そんな	14
そんな	6
～で	1
～に	7
むこお(向こう)	14
むこお	5
～え	1
～から	1
～で	1
～でも	1
～に	1
～の	4
～もらう	14
もらいましたね	1
もらう	1
～かな	1
～け	1
～と	1
～よおに	1
～よりほか	1
～んだわね	1
もらえば	1
もらった	1
～て	4
よい(良い)	14
よいかな	2
～です	1
よお(よござ)	1
よかったです	1
～たものね	1
～たんで	1
～たんです	1
よく	5

～たって	1
あさ(朝)	13
あさ	9
～が	1
～の	3
いちばん	13
いちばん	12
～だよ	1
うら(裏)	13
うら	2
～え	1
～が	1
～から	1
～に	6
～の	2
おいしい	13
おいしい	3
～です	1
～よ	4
～んでしょ	1
～んです	1
おいしかったです	1
おいしく	2
おはよう	13
さんじゅうえん(30円)	13
さんじゅうえん	4
～だけど	1
～で	2
～です	4
～です	2
だって	13
ほお(間投詞)	13
まえ(前)	13
まえ	3
～からの	2
～に	5
～の	3
もって(持って行く)	13
もってなくて	1
もって	1
～の	1
～んでしょ	1
もってけば	2
もってった	1
～たの	1
～たのかと	1
～たんでしょ	1
～て	3

うち(家)	12
うち	1
～え	1
～だけで	1
～なんか	1
～の	7
～みたいな	1
こんど(今度)	12
こんど	6
～ね	2
～わ	4
じゅうえん(10円)	12
じゅうえん	4
～と	1
～に	1
～の	4
～ので	1
～のない	1
すむ(済む)	12
すみません	7
～ませんけど	3
～ませんで	1
～ませんね	1
ちいさい	12
ちいさい	1
～くらいですか	1
～ですか	1
～の	3
～のが	2
～のですか	1
～のと	2
～のわ	1
とこ(所)	12
とこ	4
～え	1
～から	1
～が	1
～で	2
～に	1
～の	1
～わ	1
どっち	12
どっち	4
～え	1
～か	3
～で	1
～でも	2
～に	1
また	12
もの	12
もの	5

～が 4  
 ～でしよ おね 1  
 ～です 1  
 ～ですから 1  
 ～でも 1  
 ～なら 1  
 もんですね 12

もらう 12  
 もらいたいなんて 1  
 ～ますよ 1  
 もらうの 1  
 もらった 1  
 ～たか 1  
 ～て 7

～やる 12  
 やっか 1  
 ～から 1  
 ～たの 1  
 ～たのよ 1  
 ～たら 1  
 ～たんですけどない 1  
 ～て 1  
 やりましよ お 1  
 ～ますか 1  
 やる 1  
 やれば 1  
 やんですか 1

あした 11  
 あした 8  
 ～で 1  
 ～に 1  
 ～の 1

かける(掛ける) 11  
 かけたんですね 1  
 ～て 1  
 ～てね 1  
 かけなければ 1  
 ～ましよ おか 1  
 ～ましよ おね 1  
 ～ます 1  
 かける 1  
 ～ってえまでも 1  
 ～んですか 2

がせんし(画仙紙) 11  
 がせんし 4  
 ～が 2  
 ～でしよ 1  
 ～とか 1  
 ～みたいなんだ 1  
 ～みたいのね 1  
 ～わ 1

かみ(紙) 11  
 かみ 1

～が 4  
 ～って 1  
 ～っても 1  
 ～ですけどね 1  
 ～ですわ 1  
 ～の 1  
 ～わ 1

ごえん(5 円) 11  
 ごえん 4  
 ～ずつね 1  
 ～です 3  
 ～ですか 1  
 ～の 2

すぐ 11  
 ふん(間投詞) 11

もとちょう(元帳) 11  
 もとちょう お 5  
 ～から 1  
 ～で 1  
 ～に 4

うち(中) 10  
 うち 6  
 ～で 1  
 ～に 3

おおきい 10  
 おおきい 1  
 ～の 1  
 ～のが 1  
 ～のですか 1  
 ～のと 2  
 おおきいのに 1  
 ～のね 1  
 ～のも 1  
 ～んです 1

かたい 10  
 かたい 1  
 ～ぐらいでも 1  
 ～って 2  
 ～ですわ 2  
 ～と 1  
 かたく 3

きよちゃん(人名) 10  
 きよちゃん 8  
 ～が 1  
 ～の 1

～くれる 10  
 くれた 1  
 くれっかい 1  
 ～て 4  
 くれませんか 1

くれる 3  
 さき 10  
 さき 4  
 ～が 3  
 ～だけでも 1  
 ～で 1  
 ～ね 1

しかし 10  
 ～しれる 10  
 しれない 3  
 ～ないね 3  
 ～ね 1  
 ～ません 2  
 しんないね 1

たくさん 10  
 だいじょおぶ 19  
 だいじょおぶ 1  
 ～だ 1  
 ～でしよ お 1  
 ね 1  
 ～です 1  
 ～ですか 1  
 ～ですよ 3  
 ～ね 2

でてる(出ている) 10  
 でてないから 1  
 ～ないね 1  
 ～ますか 1  
 ～ますよ 1  
 でてる 2  
 ～の 2  
 でてんだ 1  
 ～のよ 1

でんびよお(伝票) 19  
 でんびよお 3  
 ～お 1  
 ～だけ 2  
 ～に 1  
 ～も 2  
 ～わ 1

とりかえる 10  
 とりかえたんですか 1  
 ～て 5  
 ～なくちよ 1  
 ～ましよ お 1  
 ～よおかね 1  
 とりかえるよおに 1

にじゅうえん(20円) 10  
 にじゅうえん 4  
 ～け 1

～で	1	～です	1	へ(返事)	10
～です	3	～です	1	まいにち(毎日)	10
～に	1	～です	1	まいにち	8
にじゅうごえん(25円)	10	はやい	10	～の	2
にじゅうごえん	6	はやい	2		
～だった		～だけに	1		
ね	1	はやく	7		

---

## この報告のあらまし



全体のあらましを解説的に述べた。そのために、科学的にはやや厳密を欠く表現と通俗的な説明とをした部分が少なくない。

昭和24年(1949)の秋から冬にかけて、国立国語研究所は統計数理研究所および民俗学研究所と共同で、福島県白河市および附近の農村において言語調査を行った。この調査の目的は、社会生活の合理化をはばむ言語生活上の諸条件を明らかにすることであった。したがって、この調査は言語の構造的分析よりもむしろ言語社会における言語の外的条件に関する調査として計画された。

調査は六つの課題について行ったが、この報告で取り上げたのは、そのうちの二つの課題についてである。

この二つの課題のうちの一つは、一般に、ある地域社会において共通語を話す人をふやすのに障害となっている文化的(アメリカの文化人類学における cultural の意味で、日本語の「文化的」、「社会的」より広い意味で用いる)条件は何であるが、また、共通語がどういう面で話されにくいということについてである。

ここで断っておかなければならないのは、この報告書では「共通語」という術語を、方言と対立し、標準語とは次元を異にする概念として使っていることである。つまり、共通語は、一応全国どこでも通ずることばであり、方言は、全国どこでも通ずるとは言えないことばであると考え、これに対して、標準語は、国として制定される、規範的な言語であると考えたことである。

この報告書で述べたもう一つの課題は、ある個人が一日のうちに、どういうことばを、どのくらい、どのように使っているかということであって、これによって、言語生活に関する諸問題のありかを明らかにしようとした。

第1の課題は要約して「地域社会における方言と共通語」と題したが、この課題について答えるために、次のような計画を立てた。すなわち、一定の調査項目を、なるべく多くの、しかも、なるべくいろいろな人について調べるということである。

一定の調査項目とは、白河市の方言の特徴と個人の文化的条件とであって、これを一定の調査票に盛り込んだ。白河市の方言の特徴として取り上げたのは、音韻に関する5種類の特徴と11の文法的語いである。文化的条件として取り上げたのは、共通語を話すことをはばむ、または、共通語を話すことを進めると考えられる

性、年齢、学歴、職業、階層、居住地域、父母の出身地、本人の生育地、行き来（旅行）、新聞・ラジオの利用度、社会的態度、共通語に対する態度・意識 である。  
このような方言的特徴と文化的条件との関係を調べることによって、共通語を話すことをはばむ、または、共通語を話すことを進める文化的条件が何であるかを探し求めた。

次に、なるべく多くの、しかも、なるべくいろいろな人について調べるのには、統計数理の考えに基いて、白河市民全体をいろいろな点で良く代表するような、いわば一つの「ひながた」を作って、そのひながたによって得られる知識から白河市民全体の様子を推測するという方法を採った。こういう方法を選った理由は、調査に使える時間、費用、調査員の数などに制限があるためと、早く結果を得る（したがって、同様な調査をくり返していっそう確実な知識を得る）ためである。実際には、白河市民のほぼ完全な名簿、すなわち配給台帳をもとにして、約2万人の白河市民（大沼を除く。15歳から69歳までの男女）からまず2,000人を作為を加えないように何人目かごとに抜き、その2,000人をあらかじめわかっている文化的条件——性、年齢、職業、居住地域——によっていくつかの組に分け、それぞれの組から、その組に属する人数の割合にしたがって500人を選んだ。500人というのは、いろいろな制限のもとで、これ以上は調べられないという人数である。

こうして得た500人を、二つの文化的条件、すなわち性、年齢について分類し、これを国勢調査などでわかっている白河市民全体の様子（割合を示す数字）と比べてみると、両者はかなりよく一致する。また、この500人によって白河市全体のかかなり細かいところまで推測できることが調査の結果から証明される。つまり、500人は非常に上手に作られたひながたであることが保証された。しかし、実際の調査にあたってどうしても調べることでできない者が5%出た。これは結果にある片寄りをもたらすわけであるが、この程度の片寄りは大づかみにものを見る立場からは許されて良いと思う。

ところで、調査の結果について述べる前に、白河市および附近の農村がどのような社会的背景および言語的背景のもとにあるかということを考察した。白河市は歴史的に見ると、18世紀の後半にできあがった城下町の規模と性格とが今日まで大した変化も見せずに続いていることが注目される。また、白河市は附近の農村の経済的中心であるが、それはまったく地方的な段階にとどまっている。さらに、白河市

は利害共同圏および交通の点から見て、関東と東北との接合点であると認められる。

附近の村として選ばれた金山村と五箇村とは、互に、社会構造および言語の点で著しい差を示してはいないが、二つの村と白河市との間には言語的にかなり著しい差が認められる。

次に、言語的背景として白河市方言の音韻的特徴を考察すると、次の点が注目された。すなわち、東京などでそれだけで音節を作る「イ」、「エ」が白河市では「イ」でもない、「エ」でもない、別の一つの音であること（たとえば「息」も「駅」も〔èki〕のように発音される）、有声の母音にはさまれる無声の破裂音および破擦音が白河市で有声化していること（たとえば、「箱」が〔haɸo〕のように発音される）、母音にはさまれる有声の破裂音および破擦音が白河市で無声化する傾向のあること（たとえば、「ぶどう」が〔budo:]〕のように発音される）、語頭以外の「リ」という音節が白河市で特殊な硬口蓋の有声摩擦音で現れること（たとえば、「鶏」が、〔niwatoɸi〕のように発音される）、さらに、「ヒ」と「シ」とが混同される傾向がある（たとえば、「ひも」が〔fimo〕のように発音される）。これらの特徴はすべて調査票に盛り込んだ。

ところで、これらの方言の特徴は町の看板とか掲示などの文字言語にも反映している。たとえば、「事務所で用える文書に」、「カギ」（くだものカギ）のような例がかなりに見受けられた。このような資料はできるだけ集めた。

さて、「地域社会における方言と共通語」という題のもとに分析した第1の事からは、共通語を話すことをはばむ、または、共通語を話すことを進める文化的条件は何かということである。この問題をわれわれは「共通語を話す度合を決定する要因は何か」という形で捕えた。

共通語を話す度合というものは、それ自身では、ばく然としてつかみどころのないものように見える。そこで、共通語を話す度合を何によって表わすかという問題が起る。

われわれが計画を立てる際には、共通語を話す度合を表わす指標（index）として三つのものを用意した。第1に、音韻の方言の特徴について共通語の形で答えた数（これを点数で表わすことにした）を指標とすることである。これは、たとえば、糸の絵を見せて、「これは何ですか」と尋ね、それに対する答が〔ito〕であるか〔èto〕であるかを観察した。この場合、前者、つまり、共通語の形で答えれば1点を与え、

後者、つまり、方言の形で答えれば0点を与えるというようにして得られる総点数を共通語を話す度合の指標とするのである。第2の指標は、文法的語いについて共通語の形で答えた数である。これは、第1の場合と事からの性質が異なる上に調べ方が違っている。すなわち、この場合は、「これこれのことばをお使いになりますか」とか「こういうときにはなんとおっしゃいますか」のように質問している。第1の場合は、調べられる者の言語行動を直接観察しているが、第2の場合は、調べられる者の知識を記録している傾向がある。この二つのものの関係は、結果について見ても、二つを一つにまとめることができるほど積極的ではないと認められる。

以上の二つの指標は客観的なものであるが、これに対して、主観的な指標も用意した。これは、調べられる者が調査員との会話においてどの程度の共通語を使うかということ、その調査員自身が主観的に判定したものである。この方法にはどうしても調査員の個人的変動が付きまとう。しかし、その変動はまったくでたらめなものではなく、判定の各段階の区別は調査員全体としてかなり明らかに見られる。こういう点で主観的判定もある程度信頼できるようである。

以上の三つの指標はそれぞれ共通語を話す度合を表わす指標として用いることができる。われわれは実際にこの三つの指標それぞれによって共通語を話す度合を表わし、その度合を決定する要因を探し求めた。しかし、この三つの指標のうち、最も良い指標は、音韻の方言的特徴に関する総点数であると認められるので、細かい分析はすべてこの指標によることにした。

さて、まず、音韻の方言的特徴に関する総点数（これを「音韻の点数」と言うことにする）によって表わされる共通語を話す度合がいかなる要因に最も強く影響されているかということを考えてみた。そのためには統計学で言う「相関関係」の考えを使った。すなわち、白河市民のひながたとして作られた500人を、要因、つまり、文化的条件一つ一つを基準にしていくつかのグループに分け、それぞれのグループの示す音韻の点数の平均点を比較して、その差がもとの白河市民という集団においてもそうであろうと推測されるほどの著しい差（これを「有意差」と言う）であれば、その要因は共通語を話す度合に影響を与えていると考えるのである。

第1に、白河市民のひながた500人を男と女とに分けて、男のグループの音韻の点数（平均点）と女のグループのそれとを比べると、その差は白河市民というものと集団でもそうであろうと推測されるほどの著しさではないと認められる。したが

って、性という要因は強い要因とは考えられない。

以下、各要因について分析すると次のようである。

年齢はやや目だつ要因と認められる。つまり、15歳から34歳までの年齢層と50歳から60歳までの年齢層との間に有意な差が認められ、また、全体を15—34歳、35—49歳、50—69歳という三つのグループに分けると、それらの間に共通語を話す度合の変化がきれいに见られる。

学歴はきわめて著しい要因と認められる。学歴の低いグループの点数が低く、学歴の高いグループの点数が高いという傾向が組織的（systematic）に見られる。

職業については、本人の職業は一応の要因と見られるが、家の職業はたいした要因とは認められない。本人の職業については、給料生活者とその他との間に有意差が見られる。特に、日雇などの労務者と農民との点数は低い。

階層については、それぞれの段階の間に有意差が認められないから、階層は要因としては問題にならない。

居住地域、すなわち現住所については、農業地域が商業地域および住宅地域よりも共通語を話す度合が低いだろうという常識的な予想は今度の調査では証明されなかった。居住地域という要因もさほど強い影響を与えていないと思われる。興味のあるのは、白河市の農業地域と附近の農村との間に、共通語を話す度合に有意な差があることである。

父母の出身地はかなり強い要因と認められる。京浜地方出身の父あるいは母を持つグループの共通語を話す度合が最も高く、西白河郡出身の父あるいは母を持つグループのそれが最も低い。西白河郡出身の父あるいは母を持つグループと白河市出身の父あるいは母を持つグループとの間にも有意な差が見られる。

これは、父についても母についても同じように認められる傾向であるが、さて、父と母との間に差がないかどうか。そこで、京浜地方出身の父を持つグループと同じく京浜地方出身の母を持つグループとの間の差を見ると、その差は有意とは認められないから、父の出身地と母の出身地とは要因の強さについて著しい差がないと考えられる。

しかし、疎開児童・生徒の言語について調べたところ、母の出身地のほうが父の出身地よりも強い影響を与えていることが明らかになった。すなわち、京浜地方から白河市へ直接疎開して4～5年の間白河市に居住している児童・生徒約500人に

ついて、京浜地方のアクセントを保持しているか、白河地方のアクセント（いわゆる「一型アクセント」）に変わってしまったかを、父が京浜地方出身で母が白河市出身のグループと、父が白河市出身で母が京浜地方出身のグループとについて比較すると、前者のほうが後者よりもいっそう白河地方のアクセントに同化していることが認められた。

本人の生育地、すなわち言語形成期におけるおもな居住地も相当強い要因と認められた。京浜地方で生育したグループが共通語を話す度合いが最も高く、西白河郡で生育したグループが最も低く、その差はきわめて著しい。また、京浜地方で生育したグループとそれ以外のグループとの間にも、白河市で生育したグループと西白河郡で生育したグループとの間にも有意な差が認められる。

次に、生育地と言語形成期以後の居住状況とを組み合わせると、白河市で生育し、のち東北地方（白河地方を含む）に 10 か年未満しか居住していないグループと、同じく白河市で生育し、のち東北地方に 10 か年以上居住しているグループとの間には有意な差が見られる。また、西白河郡で言語形成期を過ごし、のち東北地方に 10 か年未満しか居住しないグループと、同じく西白河郡で言語形成期を過ごし、のち東北地方に 10 か年以上居住しているグループとの間にも有意な差が認められる。したがって、言語形成期におけるおもな居住地のほかに、言語形成期以後の居住状況も注目すべき要因の一つであると認められる。

行き来、すなわち昭和 24 年のうちに福島市あるいは宇都宮市より遠くへ行ったことがあるかどうかについては、いろいろなグループの間に全体として著しい差は見られない。すなわち、行き来は要因としてあまり強くないと認められる。ただし一度も福島市あるいは宇都宮市より遠くへ行ったことのないグループと京浜地方へ 4 度以上行ったことのあるグループとの間には有意な差が見られる。

新聞・ラジオの利用度は、今度の調査では、常識的に予想するほど強い要因とは見られないが、新聞を読むグループと新聞を読まないグループとの間にも、ラジオを聞くグループとラジオを聞かないグループとの間にも、それぞれ有意差を認めることができる。さらに、新聞も読みラジオも聞くグループおよび新聞は読んだり読まなかったりであるがラジオは聞くグループと、新聞を読まない（ラジオについてはどうであっても）グループとの間にも有意差が認められる。

社会的態度については、現状に満足しているグループ、無関心なグループおよび

現状に満足していないグループの間に有意な差を認めることができるから、社会的態度という要因も一応の要因と考えられる。

共通語に対する態度・意識についてはいろいろな面から分析してみたが、そのうち注目すべきことは次のとおりである。まず、標準語(共通語)と白河方言とが違っていると感じているグループと、違わないと感じないグループとの間にも、いわゆる「共通語意識」があるグループと、ないグループとの間にも有意な差が見られる。また、七つの場面全部において共通語を使っていると言うグループと七つの場面のうち二つ以下(二つを含む)の場面においてしか共通語を使っていないと言うグループとの間にも有意な差を認めることができる。つまり、白河方言に対する自覚、共通語意識、場面による共通語と方言との使い分け、それぞれ一応の要因と認められる。

さて、以上のいくつかの要因は、あるいは強く、あるいは弱いことが明らかにになったが、ここで、これらの要因のうちどれがいちばん影響を与えているか、つまり、いちばん著しい差をひき起しているのはどの要因かについて見ることにした。そのために、要因それぞれの最高値のグループと最低値のグループとの差を求め、その差を要因ごとに比較してみた。その結果、著しい差を示す要因は、生育・居住環境の要因(父母の出身地、本人の生育地、生育地とその後居住地)と経歴的要因(学歴、職業)とである。つまり、共通語を話す度合に影響を及ぼすいちばん強い要因は生育・居住環境の要因と経歴的要因であると見られるわけである。

次に、強い要因を見つけるために、いくつかの要因を組み合わせで分類したグループを、音韻の点数の平均点と平均点からの散らばりを基準にして比較してみた。この結果、平均点数が高く、しかも平均点からの散らばりの小さい(すなわち、その集団に属する個人個人が互にあまりかけ離れた点を取っていない)グループは、母が京浜地方出身のグループ、京浜地方で生育したグループ、15歳から19歳までの女のグループ、高等専門学校卒業ないし中退のグループである。すなわち、いくつかの要因を組み合わせで分類したグループを比較するという方法で出てきた強い要因は、母の出身地、生育地、年齢、性、学歴である。

以上は音韻の点数と文化的条件との関係を単純な相関の考えに基づいて分析したのであるが、考えてみると、ある一つの要因にはほかの要因がからみあっているのが普通である。たとえば、性という要因には、学歴、職業などの要因がからみあっている。たとえば、女という性によって比較的低い学歴と無職、主婦という職業を予

想することができる。そこで要因をもっと純粋に取り出すために、他の要因を一定にしておいて、基準となる要因のグループの平均点を比較することが必要である。たとえば、高等小学卒業のグループだけを取り出し、それを男と女とに分類して、高等小学卒業の男の平均点数と高等小学卒業の女のそれとを比較して、性という要因がきいているかどうかを調べるわけである。これは偏相関の考えを用いた分析である。

こうして分析した結果、偏相関係数の高いのは、性×年齢、生育地などである。つまり、偏相関の考えに基づく分析によれば、性×年齢、生育地 が強い要因と認められるわけである。

さらに、今度は、二つ以上の要因相互の関係を調べて、共通語を話す度合にどの要因がより強く影響しているかを見てみた。たとえば、性、学歴、職業はそれぞれの程度に共通語を話す度合を決定するのにあづかって力があるかを見るわけである。これは重相関の考えを用いた分析である。

このように重相関の考えに基づいて分析した結果、共通語を話す度合に特にあづかって力があるのは、性×年齢、学歴、新聞・ラジオの利用度、生育地、母の出身地などの要因である。

以上の各種の相関関係による分析を総合して考えると、共通語を話す度合に影響を及ぼす要因としては、性×年齢、父母の出身地、生育地、学歴 などの要因が目される。

さて、偏相関の考えも重相関の考えも、ともに、いくつかの要因から現象を推測するという立場で用いられている。つまり、各要因が共通語を話す度合にどの程度あづかって力があるかということを知って、これこれの要因があれば、そのグループの共通語を話す度合はこの程度であるということを、ある確率をもって言おうとするのである。

今度の結果では、予定した要因のすべてを使ってもなお完全に予測することはできないようである（重相関係数 0.69）。しかし、共通語を話す度合という事がら自身がかなり複雑・微妙なものであることと、はじめての調査であることとを考えると、まず満足すべき結果と言えるようである。

ここに、推測の例をあげよう。55 歳ないし 69 歳の女で、学歴が全然なく、農業をやっており、父も母も西白河郡の出身で、本人もまた西白河郡で育ち、新聞も



読まずラジオを聞くこともなく、どういう場面でも共通語を使っていることがないと言う人があるとすれば、彼女の共通語を話す割合はおそらく相当低い(27点満点で11.5点)と予測される。

また、25歳ないし34歳の男で、大学を卒業した給料生活者で、父も母も京浜地方の出身で、また本人も京浜地方で育ち、新聞も読み、ラジオも聞き、どういう場面でも共通語を話していると言う人があるとすれば、彼の共通語を話す割合はおそらく最高(27点)と予測される。

なお、最後に、共通語を話す割合の高いグループ(音韻の点数の満点のグループ)がどのような要因分布を示すかを調べ、それを全体の要因分布と比較してみた。この分布に差があるならば、その要因が共通語を話す割合になんらかの影響を及ぼしていると考えられるのである。

こういう共通語を話す割合の高いグループの要因分析に基いて調べた結果、父の出身地、母の出身地、生育地、社会的態度などが激しく影響する要因と認められた。これは、前に、相関関係の考えに基いて分析した結果を別の面から補うであろう。

次に、文法的語いについて共通語の形で答えるか、方言の形で答えるかということ(これを「文法の点数」と呼ぶことにする)を指標にして共通語を話す割合を表わし、これと文化的条件との関係を、音韻の点数の場合と同じように分析してみた。

文法的語いに関する調査は、先にも述べたように、言語行動を直接観察するというよりも知識を記録するという傾向がある上に、われわれが用意した11の文法的語いが白河市方言全体の文法的語いをよく代表しているかどうか保証し難いけれども、大づかみな見通しを得るという点で、これも一つの指標として分析してみた。

その結果、各要因によって分けられたグループの最高値と最低値との差を比較すると、経歴的要因と生育・居住環境の要因とが最も著しい差をひき起していることが明らかになった。したがって、音韻の点数の場合と同じように、文法の点数を指標として分析した場合も、経歴的要因と生育・居住環境とが優勢であると認められる。

さて、今度は、主観的判定を指標として共通語を話す割合を表わし、これと文化的条件(要因)との関係を調べてみた。この分析には、比較の都合もあって、「八丈島の言語調査」(国立国語研究所報告 1. 1950)で用いた方法にしたがった。すな

わち、各要因によって分けられたグループを、主観的判定の五つの段階に属する人数の割合を一度に示すような図表によって表わし、この図表を互に比較した。主観的判定の五つの段階とは、1.正しい共通語 2.共通語だがどこことなく違う（えせ共通語）4.共通語がまざる（まざり）4.共通語を話さない（方言）5.共通語に通じないである。

ここで、特に 1+2 の段階の割合を基準に、各要因によって分けられたグループの最高値と最低値との差を比較すると、生育地、学歴、場面による共通語と方言との使い分け、母の出身地、父の出身地 などが著しい差を見せている。つまり、主観的判定を指標として分析した結果は、生育地、学歴、場面による共通語と方言との使い分け、父母の出身地などが強い要因と認められた。この結果は、音韻の点数、文法の点数の場合に得た結果とだいたい一致する。

以上のように、三つの指標のいずれによっても、共通語を話す度合を決定する要因として注目されるものはほぼ一致する。すなわち、学歴、本人の生育地、父母の出身地が最も強い要因と認められる。

では、われわれが予定した要因のほかに、言語能力というものも共通語を話す度合を決定する一つの強い要因と考えられないであろうか。言語能力のすぐれた人は共通語を話すことも達者ではないかと考えられる。

ここでは、言語能力をまず四つの新語——「六三制」、「アルバイト」、「鉄のカーテン」、「コンクール」、——の理解度によって表わすこととし、これと音韻の点数との相関関係を見ると、その関係はそれほど密接ではない（係数 0.4）。したがって、新語の理解度は共通語を話す度合を決定する強い要因とは認められない。ただし、この四つの新語だけではこのようなことを測るにはふじゅうぶんなのかもしれない。

次に、言語能力を聞き・書き・読む能力の程度によって表わし、これと音韻の点数との相関関係を見ると、やはり積極的な関係は見られない（6種の能力のうち5種までが係数 0.4 のあたり）。しかし、この場合の被調査者は、約 500 人のひながたからさらに 100 人を選び出し、そのうちで実際に調査することができた約 60 人である。被調査者がもっと多ければ、もう少しはっきりした結果が得られたかも知れない。

以上により、今度行った調査に関する限りでは、言語能力は共通語を話す度合に

強く影響する要因とは認められない。

さて、次に、新語の理解度と文化的条件との関係を調べて、どの条件が新語の理解度を決定する要因として強いかを明らかにして、共通語を話す度合を決定する要因と比較してみた。その結果、「六三制、アルバイト、鉄のカーテン、コンクール」の四つの新語については、学歴、職業が目だってきており、「カメラ、バッテリー、スタイル・ブック」については、どの要因も相当の差をひき起しているが、特に、学歴、年齢が目立ち、さらに、「DDT、PTA、インフレ」については、学歴がやや目立つ要因として注目される。すなわち、新語の理解度にいちばんきいている要因は、学歴、年齢、職業であると認められる。先に、音韻の点数を指標として分析した結果、共通語を話す度合を決定する要因として特に注目された学歴、本人の生育地、父母の出身地という要因と比較して考えてみるべきである。二つの場合を通じて学歴が強い要因であるが、新語の理解度の場合には、本人の生育地、父母の出身地というような生育・居住環境の要因が特別にはきいていないことが注意される。

われわれが共通語を話す度合を表わすおもな指標として使ったのは音韻の点数である。ところで、この点数がいったい共通語を話す度合の妥当な (valid) 指標であるかどうかを明らかにしておかなければならない。そのために、われわれは特定の個人について一日じゅうつききりで、その言語および言語生活をいっさい記録するという調査 (これを「24時間調査」と呼ぶことにする) を試み、一日じゅうの言語生活における共通語を話す度合と音韻の点数とを比較してみた。その結果、音韻の点数 (満点 27 点) で 21 点ないし 24 点を取る者は一日の言語生活においてほとんど共通語ばかりを使っており (77% ないし 90%)、同じく 16 点を取る者は一日の言語生活においてほとんど共通語を使っていない (20%) ということが言えるようである。

これによって、われわれが指標に使った音韻の点数という数字は調べようとしていた事から、つまり共通語を話す度合というものに対して妥当な目印であることが保証されたと考えられる。

さらに、アクセントの一定の型の区別を保持するかどうかということがどういう要因によって決定されるかということを調べて、一般に共通語を話す度合を決定する要因を見つけるための一つの資料とした。

白河市はアクセントのない、すなわち、アクセントの型の区別をしない地域である。ところが、そういう地域にもアクセントを区別する者がいる。それはどういう者か。つまり、そういう人にアクセントの型を区別させている要因はなにかということ調べたのである。

そこで、要因として、父母の出身地、本人の生育地、本人の全居住経歴の三つを考え、それぞれについて、本人のアクセントのある・なしとの相関関係を見ると、どの要因も同じ程度の強い影響力をもっていることが明らかになった。さらに、特殊なグループ、すなわち、父母ともアクセントのない地域の出身であるにかかわらず本人がアクセントを区別しているグループ、アクセントのない地域に生育したにかかわらずアクセントを区別しているグループ、今までほとんどアクセントのない地域にばかり居住しながらアクセントを区別しているグループ について調べると、7人のうち2人を除いて、上の三つの要因のうち一つの要因で説明されない者は他の二つの要因で説明される。つまり、これらの要因は影響力のある要因と認められる。

次に、上と対照的なグループ（たとえば、父母ともアクセントのある地域の出身であるにかかわらず本人がアクセントを区別しないグループ など）について見ても、9人のうち3人を除いて、一つの要因で説明されない者は他の二つの要因で説明される。すなわち、これらの要因がきいてると認められるのである。つまり、アクセントの型の区別を保持する強い要因は、父母の出身地、本人の生育地、本人の全居住経歴であると見られる。

以上の種種の分析はすべて白河市について行ったものであるが、同じような分析を金山村、五箇村に施してみると、共通語を話す度合は、いつも市と村との間に著しい差を見せている。これは、市に住んでいるということが共通語を話す度合を高める一つの要因になっていることを意味する。さらに、これを分析してみると、生育地が市であるか村であるかによって共通語を話す度合にかなりの差が現れることが明らかになった。すなわち、白河市で育ち、白河市から一度もよそへ出たことのない者と、今は白河市に住んでいるが、育ったのは白河市の附近の村である者とを比較すると、前者のほうが共通語を話す度合が高いと認められる。また、白河市に育ち、のち他の土地に住み、現在また白河市に住んでいる者と、金山村あるいは五箇村に育ち、のち他の土地に住み、現在また金山村あるいは五箇村に住んでいる。

者とを比較しても、明らかに前者のほうが共通語を話す度合が高いと認められる。

以上、各方面からの分析によって、共通語を話す度合を決定する要因として注目されるのは、

1. 学歴
2. 父母の出身地
3. 本人の生育地

であると認められる。

それでは、これらの要因に、しかも、これらの要因だけに社会政策を施すことによって共通語を話す度合を高めることができるであろうか。われわれの分析では、上の三つの要因を含めた 10 以上の要因によっても共通語を話す度合を決定しきれないことがわかっている。さらに、たとえば学歴というものが単なる学校の程度というものではないことを注意しなければならない。学歴の高い者は新聞を読み、ラジオを聞いており、京浜地方へ行き来することが多く、職業としても給料生活者が多い。つまり、学歴が新聞・ラジオの利用度、行き来（旅行）、職業などと密接な関係にあることを知るのである。

こう考えると、共通語を話す度合を高めるには、学歴を高めること、父母の出身地、本人の生育地それぞれの地域社会全体の共通語を話す度合を高めることとともに、ラジオを普及し、京浜地方と行き来する機会を多くすることなども必要な処置と考えられる。

さらに、市と村との間に違いのあること、同じ農民でも市に住んでいる者と村に住んでいる者との間に違いがあることなどを考え合わせると、共通語を話す度合を決定する要因は一つ一つの要因ではなく、いくつかの要因が寄り集まったものではないかと思われる。要因もこのように東になればかなり強力になると思われる。

さて、こういう要因の東は地域社会そのものの社会的要求を形成していると考えられる。ある地域社会では方言を使っているうちに肩身の狭い思いをしない。むしろ、方言を使わないと、他の成員と正常な社会的関係を結ぶことができないことさえある。また、ある地域社会ではどうしても共通語を話さずにはいられないということがある。地域社会の社会的要求が強いのである。

このように考えてくると、共通語を話す度合を決定する要因は、けっきょく、共通語を話させるようにする地域社会そのものの社会的要求という総合的なものに求

めなければならないということになる。

したがって、白河市民の共通語を話す度合は、白河市が城下町から近代都市へ成長し、地方的な（local）商工業が全国的な規模のものに発展する、すなわち、中央と密接な連携のもとに発展するならばおのずから高まるであろう。

以上によって、「地域社会における方言と共通語」という題のもとに分析した第1の事がらについて一応の結論を得たわけであるが、ついで、第2の事がら、共通語がどういう面で話されにくいかということについて述べることにする。われわれは、これを「共通語を話す度合の高まる過程と共通語を話すようになる過程」という形で捕えた。

まず、共通語を話す度合の高まるのはどのような場面からかという問題である。家庭、近所の人、在の人（白河市で）あるいは白河の人（五箇村、金山村で）、仕事仲間、買いつけの店、郵便局や役場、知らない人や旅行者などという場面において共通語を使うか方言を使うかについて質問した結果を分析すると、知らない人や旅行者などの場面および郵便局や役場の場面では、全体の場面を通じて方言を使うことの多い者でもやはり共通語を使っているが、家庭の場面では、全体の場面を通じて方言を使うことの少ない者でも方言を使っていることが明らかである。これは、つまり、共通語を話す度合の高まるのは、知らない人や旅行者などの場面から始まり、家庭の場面が最も遅れるということを意味すると考えられる。また、一方、知らない人や旅行者などの場面および郵便局や役場の場面では家庭の場面に比べて共通語を話す要求が強いということを示していると考えることができる。

以上のことを調べるのには、「しかじかの場面で標準語（共通語）を使いますか、方言を使いますか」のように質問して、それに対してどのように反省したかについて分析したものである。ところで、この反省（答）が実際の言語行動をどのくらい反映しているかということが問題になる。つまり、たとえば、知らない人や旅行者などの場面では共通語を使いますと言いながら、実際には同じ場面で方言を使っていることがないかどうか。また、その逆の場合があるかどうかである。

われわれはこれを知るために、面接の最後に、「〇〇さんのお宅はどちらでしょうか」とか「駅へ行くにはどう行ったらいいでしょうか」とか聞いて、被調査者にとって知らない人や旅行者である調査員に対して、どういうことばで答えるかを調べた。いま、反省の結果と観察の結果とが矛盾するグループについて、文化的条件

ごとに両者の関係を調べてみると、それはかなり複雑であって、細かく見るといろいろな問題があるが、まず一応の関係があると認められる。ということは、先に述べた共通語を話す度合の高まる過程は実際の言語行動についても一応認められるということである。

次に、共通語を話す度合の高まるのはどのような集団からかという問題がある。いま、共通語を話す度合を決定する要因として注目される 学歴、父母の出身地、本人の生育地の三つをいろいろに組み合わせたグループを作って、音韻の平均点数と平均点からの散らばりとの関係において比較すると、共通語を話す度合の高まるのはいわゆる「ズーズー弁」(ここでは、イとエとを混同し、母音にはさまれる無声破裂音および摩擦音の有声化の現象などの現れる地域と定義した)でない地域で生育したグループからであって、これに比べて西白河郡(これは「ズーズー弁」の地域に属する)で生育したグループはかなり遅れると見なされる。

さて、次に問題となるのは、共通語を話すようになるのはどのような言語構造的特徴からかということである。すなわち、われわれが調べた音韻に関する五つの特徴のうち、どの特徴が最も共通語になっており、どの特徴が最も共通語になっていないかということである。

これを調べるのには、音韻の総点数と各特徴の点数(一つの特徴を調べるのに数個の刺激語を用意した)との構造的関係を明らかにすれば良い。われわれの調べた結果では、次のように言うことができる。共通語を話すようになるのには、言語構造的に、まず、無声化の現象がなくなり、ヒとシとの混同が消え、ついで、特殊な有声摩擦音が失われ、続いて有声化の現象が跡をたち、それがほとんど全部消えたところで、イとエとの混同がなくなってくる。つまり、無声化、ヒとシとの混同は早く共通語へ移っていくが、イとエとの混同は最も大きな抵抗になっていることがわかるのである。

最後に、新語の普及度を基準に、共通語が話されるようになる過程の一面を明らかにしようと試みた。すなわち、六三制、アルバイト、鉄のカーテン、コンクール、の4語について調べた結果は、コンクールが最もよく普及しており(78%)、鉄のカーテンが最も普及していない(33%)。特にコンクールの普及度は驚くべきほどで、他の語については全体の4%ないし18%の者しか理解していない、工員などの労務者が、コンクールについては59%の者が理解している。おそらく、このこと

ばは、まずラジオ（「のど自慢」など）からこの土地の若い層へはいったのであろう。その後、実際にコンクールがたびたび開かれて、これほど普及したものと想像される。

さて、以上「地域社会における方言と共通語」という題目のもとに述べたことについて反省するならば、まず、今度の調査では心理的な面の調査が欠けている。（さいわい、同じ目的の調査を昭和 25 年鶴岡市で行った際にはそういう方面に関するものとして、プロジェクト・メソッドの一つであるロールシャッハ・テストおよび暗示性テストを実施することができた。）次に、今後の調査で大切なことは、どういう場面で共通語を使い、どういう場面では使わないかということを詳しく研究することである。さらに、最も必要なことは、調査員個人の間の変動をなるべく小さくすることである。このためには、少数のすぐれたエキスパートが互に調整しながら調査に当るようにしなければならない。

なお、共通語を話す度合を決定する要因については、八丈島の調査（八丈島の言語調査」国立国語研究所報告 1. 1950）がある意味の試み調査（pre-test）となつて、今度の調査でやや明らかになったかと思われるが、共通語を話す度合の高くなる過程と共通語を話すようになる過程とについては、なお今後の調査に期待すべきである。

この報告書の第 2 の課題は、ある個人が 1 日のうちに、どういうことばを、どのくらい、どのように使っているかということであつて、これによって、言語生活に関する諸問題のありかを明らかにしようとした。

この調査（24 時間調査）は、先に述べたように、特定の個人を一日じゅうつききつてその言語および言語生活いっさいを記録するという方法で行われた。われわれが調査し、また分析の対象にすることのできたのは、白河市に住む農民、商家の主婦、美容院主の 3 人である。

まず、一日にどのくらい話すかと言うと、話題を単位にすると、3 人とも約 700 話題であり、文を単位にするとだいたい 2,600~3,000 文であり、文節（したがって自立語）を単位にすると、8,500~10,000 文節（したがって、自立語が 8,500~10,000 語）である。これらは一日の延べの数であるが、一日の異語（自立語）の数を見ると、農民 2,324、商家の主婦 2,138 となっている。このことは美容院主につ



いては集計しなかった。

一日の生活でどんなことばをよく使うか。使用度数の高い語は、農民、商家の主婦を通じて、具体的・実質的な意味を持つ名詞ではなくて、「あれ、これ、それ；この；そお」のような指示的なことば、「はい；ありがとう」のような返事やあいさつのことば、さらに、「ある、ございます、～ない〔補助用言〕、いい」などの基本的な用言などである。

いま、使用度数が 50 以上の語について農民と商家の主婦とを比較すると、どちらかが 50 回以上使っているにもかかわらず、一方が 10 回も使わない語がある。これらは、よく調べてみると、職業上必要であるため、あるいは方言か共通語かの違いのため、または男女の別によって区別されるためであると説明することができる。

一日のうちにどのくらい読み書きするか。3 人とも、読み・書きに費す時間はきわめて少なく、せいぜい 10 分を越えない程度と認められる。

この記録を材料にして話しことばの文の長さを分析してみると、3 人とも 3 ないし 4 文節が平均である。新聞用語の 18.8 文節、放送用語の 12 ないし 20 文節と比較してかなり短いことが明らかである。

今度の調査で得た結果は、次回の同じような調査によっていっそう確かなものに行うことができる。また、同じ白河市で数年後ふたたび調査するならば、言語変化に関する興味ある結果を得ることができよう。

# 索引

- 1 この索引は、「この報告のあらまし」を除いた本文を理解するのに必要と思われる項目を五十音順に並べたものである。結果の記述に特に注意を払って項目を選んだ。
- 2 数字はページ数を示し、ゴシック体のものは、特にその項目の定義などがのっていることを示している。

アクセント 26, 82, 85, 234—40

アクセント調査 127, 131

行き来（よそ行き） 3, 66—7, 74—5,  
113, 247, 251

行き来と共通語を話す度合 6, 91—3,  
94, 139, 141—2, 153—4, 156—66,  
188, 243—4

行き来と新語の理解度 218—9

一型アクセント（白河式アクセント、アクセントなし） 26

イとエとの混同 26, 82—3, 86—7, 108,  
110, 131, 225, 263—7, 269—72,  
274—5

音韻 4, 262

音韻的特徴 15, 22, 23, 82—8

音韻に関する指標 22—3

音韻の点数 28, 42, 91—6, 99, 100,  
107—66, 167, 169, 171, 193, 194,  
202, 203—5, 205, 224, 240—7,

261

回帰型 270

回帰関係 45, 269

回帰〔直〕線 45, 157

階層 28, 113

階層と共通語を話す度合 122—3, 153  
—4, 169—70, 185—6, 244

階層と新語の理解度 216—7

書き取り（漢字の）195, 202, 203—4

書く言語生活 302—4

確率 33, 41, 112

学歴 112, 113, 247—8, 261—2, 274

学歴と共通語を話す度合 118—9, 153  
—5, 156—66, 168—9, 184, 192—  
3, 247, 249—50

学歴と新語の理解度 206—8, 212—4,  
223

重ね抜き〔法〕 3, 31—2, 39

カメラの類 208

観察的調査 14, 22

観察的方法 12—4

聞き取り（音声言語の） 195, 202,  
203

客観性（objectivity） 24, 107

客観的反應 91, 98, 99—100, 101

共通語 2, 6—8, 15, 251—2

共通語意識 28, 113, 193, 256—9, 259  
—61, 275

共通語意識と共通語を話す度合 104,  
105, 106, 149—50, 153—4, 179—  
80, 182, 191

共通語を話す度合 3, 9, 15, 22, 43,  
91—203, 280

共通語行動 223—34

共通語と方言との使い分け 3, 28, 105  
—6, 113

共通語と方言との使い分け、と共通語を  
話す度合 150—1, 153—4, 156—  
66, 180, 191—3, 220, 223

共通語に対する態度 3, 113, 193, 275

共通語に対する態度と共通語を話す度合  
106, 151—2, 153—4, 180, 182,  
245

共通語に対する態度と新語の理解度  
222

共通語の使用 113, 259—61

共通語の使用と共通語を話す度合 105,  
148—9, 153—4, 177—9, 245

共通語の使用と新語の理解度 221—2

居住環境の要因 113, 153—5, 182,  
193, 275

居住経歴 31, 44, 174—5, 235—9.  
274

居住年数 173—4, 235—40

計画的・調査〔方法〕 13—4

形態音素 307

経歴的要因 113, 122, 153—5, 182,  
193, 275

言語意識 28

言語形成期 113, 135—9, 243, 245—  
7

言語形成期におけるおもな居住地 生育  
地を見よ

言語経歴 居住経歴を見よ

言語構造・上の〔的〕特徴 3, 262—72

言語〔地域〕社会（speech-community）  
5, 12

言語生活 2, 280

言語生活の24時間調査 24時間調査を見  
よ

言語的特徴 22

言語的背景 4, 82—90

言語能力 3, 193—205

言語能力と共通語を話す度合 193—205

現住所 31, 37, 47, 113

現住所と共通語を話す度合 123—4,

153—4, 156—66, 170, 186—7  
現住所と新語の理解度 216

語い 6, 262, 263—7

語い素 (glosseme) 10

語いの特徴 89—90, 110

交通 61—7, 72, 75, 80—1, 248

コード 24, 25

効率 (administrability) 25

個人語 (idiolect) 13

ことば (ラング)、6, 12

子どもの将来の言語 共通語に対する態度を見よ

コミュニケーション 2, 4, 113, 153—4, 182, 193, 218, 268, 275

在宅率 45—6

産業 67—71, 73—4, 79, 80, 80—1

サンプリング 12, 28—48

刺激語 23, 24

指示語 289

自然的観察 12

自然的要因 113, 117—8, 153—4, 182, 193, 275

実験的観察 12

社会政策 8, 248—9

社会的環境の要因 113, 182, 193, 275

社会的態度 3, 25, 113, 193, 275

社会的態度と共通語を話す度合 145, 147, 153—4, 157—66, 176, 182, 189, 244

社会的態度と新語の理解度 219—20

尺度解析〔法〕(cornell technique) 253, 263, 267, 239

集合調査 3, 25, 194—205

重相関 112, 157—62, 163, 164

主観的判定 15, 22, 25, 28, 94, 94—6, 97—106, 107, 112, 182—93, 225, 259, 275, 276

主観的判定と共通語を話す度合 157—66, 222—3, 245

職業 31, 37, 45, 47, 112, 113, 247, 248, 231, 285, 300—1

職業と共通語を話す度合 6, 119—22, 124, 153—4, 156—66, 169, 185, 242, 250—1, 259

職業と新語の理解度 206—7, 214—6, 223, 273

白河のことばと共通語との比較 113

白河のことばと共通語との比較、と共通語を話す度合 104—5, 148—9, 177—80

白河のことばと共通語との比較、と新語の理解度 221—2

白河のことばに対する価値づけ 113

白河のことばに対する価値づけと共通語を話す度合 104, 147—8, 176—7

白河のことばに対する自覚 113  
 白河のことばに対する自覚と共通語を話す度合 104, 147—8, 153—4, 176—7  
 白河のことばに対する自覚と新語の理解 220—1  
 自立語 284, 285, 307  
 事例研究 (case study) 276, 280  
 新語の普及度 272—3  
 新語の理解度〔点数〕 3, 26, 44, 194, 205—23, 272—3  
 新聞 3, 302—4  
 新聞の利用度 113  
 新聞の利用度と共通語を話す度合 141—2, 144—6, 153—4, 156—66, 175, 188—9, 243  
 新聞の利用度と新語の理解度 217—8, 223  
 信頼性 (reliability) 23, 107, 203, 277  
 信頼性の検定 28, 94, 96—7, 112  
 信頼性の検定と共通語を話す度合 157—66  
 数量化 15, 157, 158—9  
 性 28, 31, 33, 37, 43, 47—8, 111—2, 113, 300—1  
 生育環境の要因 113, 153—5, 182,

193, 275  
 生育地 113, 234—40, 247, 248—9, 261—2, 274  
 生育地と共通語を話す度合 135—6, 153—5, 156—66, 173—4, 187—8, 192—3, 243, 245—7  
 生育地とその後居住地 113  
 生育地とその後居住地、と共通語を話す度合 136—40, 153—5, 174—5  
 性と共通語を話す度合 114—5, 116—8, 153—4, 156—66, 167, 183, 240—1, 258  
 性と新語の理解度 208, 210—1  
 全国共通語 共通語を見よ  
 相対精度 44, 153  
 層別 31—7  
 層別抽出法 33, 39, 42  
 層別の効果 39—42, 43—5  
 疎開児童・生徒の言語 4, 127, 131—2  
 第1次サンプル 31—7, 39—42  
 第2次サンプル 37—42  
 妥当性 (validity) 10, 22, 94—7, 98, 107, 112—3, 203, 276, 280  
 試し調査 (pre-test) 11, 14, 24, 277  
 単純相関 156, 163  
 談話生活 3, 280

地域社会(community) 4, 6—7, 10,  
11, 13, 250—1, 274—6

地域的環境の要因 113, 182, 193, 275

地域と共通語を話す度合 240—1

チェビシェフの定理 100, 165

調査員 2, 10, 23—4, 29, 30

調査員の変動 97—104, 276—7

調査語 4, 23, 276

調査対象(universe) 28, 29, 30, 36

調査票 4, 10, 11, 12, 14, 15—28,  
29, 30, 167, 193, 251, 273, 276,  
280

調査票(言語能力の) 195—201

調査不能者 44—5, 46—8

追及 30

適応性(adequacy) 23

適合度の検定 164—6, 239

電報 3, 195, 202, 203

等間隔抽出(systematic sampling)

36, 37

東京・語[の言語(ことば)・方言]

6—7, 82—6, 88

統計数理的方法 14

特殊社会(association) 6

二重相関表 127

24時間調査(言語生活の〜) 3—4, 12,

22, 224—34, 276, 297, 280—308

年齢 28, 31, 33, 37, 43, 44, 47—

8, 113, 139, 151

年齢と共通語を話す度合 115—8, 153

—4, 156—66, 167—8, 174—5, 183

—4, 241—2, 242, 249—50, 258

年齢と新語の理解度 206—8, 211—2,

223, 273

パーソナリティ 275

配給台帳 物資〜を見よ

場面 3, 4, 7, 9—10, 10, 22, 23, 25,

28, 83, 84, 88, 156, 225, 225—

34, 247, 253—61, 274, 276, 280

場面による共通語と方言との使い分け

共通語と方言との使い分けを見よ

判定 主観的判定を見よ

非ブーズー弁地域 262, 274

ヒトシとの混同 26, 86, 110, 263—7,

274

標準語 7—8

標準語(共通語) 261

標準語教育 8, 249

広がり(range) 101, 153, 155, 163,

182, 192—3, 223

副詞 289

物資配給台帳 25, 31, 36, 42

部分集団 111, 177

父母の出身地 113, 166, 235—9, 247,  
248—9, 261—2, 274

父母の出身地と共通語を話す度合 124  
—35, 153—5, 156—66, 170—3,  
187, 193, 242—3

文 284, 305—6

文化的条件 3, 8, 9, 10, 14, 23, 25,  
44

文法 4, 262,

文法的機能 307—8

文法的特徴 23, 28, 89

文法の点数 91—4, 99, 100, 107, 112,  
167—82, 193

平均家族人数 36

偏相関 112, 162—4

方言 2, 6—7, 10, 15, 25, 300—1

方言的特徴 2, 11, 14, 27, 42

母集団 (population) 29, 30, 31—7

補助動詞 307

無声化 27, 84—5, 87—8, 88, 110,  
263—7, 274

無声化母音 83

名詞 239

面接 3, 4, 15, 29, 156

文字言語 82, 86—8

ものさし 15, 23

有声化 27, 83—4, 87, 88, 110, 263  
—7, 268, 269—72

行き来 イの項を見よ

要因分析 167, 245

要因分布 164

よそ行き 行き来を見よ

読み取り (文字言語の) 195, 202, 204

ラジオの利用度 113

ラジオの利用度と共通語を話す度合  
141, 143—6, 153—4, 156—66,  
175, 188—9, 243

ラジオの利用度と新語の理解 217—8

ローマ字 3, 155, 202, 203

話題 282, 284

adequacy 適応性

administrability 効率

association 特殊社会

case study 事例研究

community 地域社会

cornell technique 尺度解析〔法〕 110

DDT の類 208

slosseme 語い素

idiolect 個人語

K-数値 183, 184, 185, 186, 188

K-図表 182—93

language ことば 12

L字型 289

mass media 243, 251

objectivity 客観性

population 母集団 36

pre-test 試し調査

reliability 信頼性

sample サンプル

scale analysis 尺度解析〔法〕 22, 110

—1

speech-community 言語〔地域〕社会

12

systematic sampling 等間隔抽出

trade area 経済圏

trial and error method 13

universe 調査対象

validity 妥当性

Yates の  $Z^2$  検定 236

Z変換 93

$Z^2$  検定 37, 164—5

ji の音 27, 85—6, 110, 263—7, 269

—72



国立国語研究所報告 2

言語生活の実態

——白河市および附近の農村における——

1951年4月25日印刷  
1951年4月30日発行

¥ 300.00

著 者 国立国語研究所

発行者 株式会社 秀英出版

代表者 有光次郎

印刷者 株式会社 東京印刷所

発行所 株式会社 秀英出版

東京都中央区銀座 7 の 4

電話 口座 東京 119739

国立国語研究所刊行書

国立国語研究所報告

1. 八丈島の言語調査 A 5 判 430 頁  
290 円 35 円
2. 言語生活の実態 A 5 判 362 頁  
300 円 35 円  
—白河市および附近の農村における—
3. 現代語の助詞・助動詞 A 5 判 304 頁  
260 円 35 円  
—用法と実例—

国立国語研究所資料

1. 国語関係刊行書目 A 5 判 65 頁  
45 円 6 円  
—昭和十七年より昭和二十四年まで—

国立国語研究所年報

1. 昭和24年度国立国語研究所年報 A 5 判 230 頁  
200 円 35 円

東京都中央区銀座七丁目四

発行所

株式会社 秀英出版

電話 銀座(57) 6825番  
振替 東京 119739 番

# LANGUAGE SURVEY IN SIRAKAWA CITY AND NEIGHBORING VILLAGES

## CONTENTS

Foreword and Remarks

Introductory

Part I Dialect and Common Japanese in a Speech-community

- 1 Problems of Common Japanese
- 2 Plan of Survey
- 3 Social and Linguistic Backgrounds of Sirakawa City and Neighboring Villages
- 4 Factors Determining the Degree of Speaking Common Japanese
- 5 Process of Shift from Dialect to Common Japanese
- 6 Conclusion

Part II Language Behavior of an Individual during One Day

- 1 Problems and Method of '24 Hours Survey'
- 2 Linguistic Amount in a Day
- 3 Frequent Forms
- 4 Time Used for Reading and Writing
- 5 Sentence Length of Spoken Language
- 6 Tables of Frequent Words in Frequency Order

Summary

Index

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
YOTUYA, SINZYUKU, TOKYO

1951